

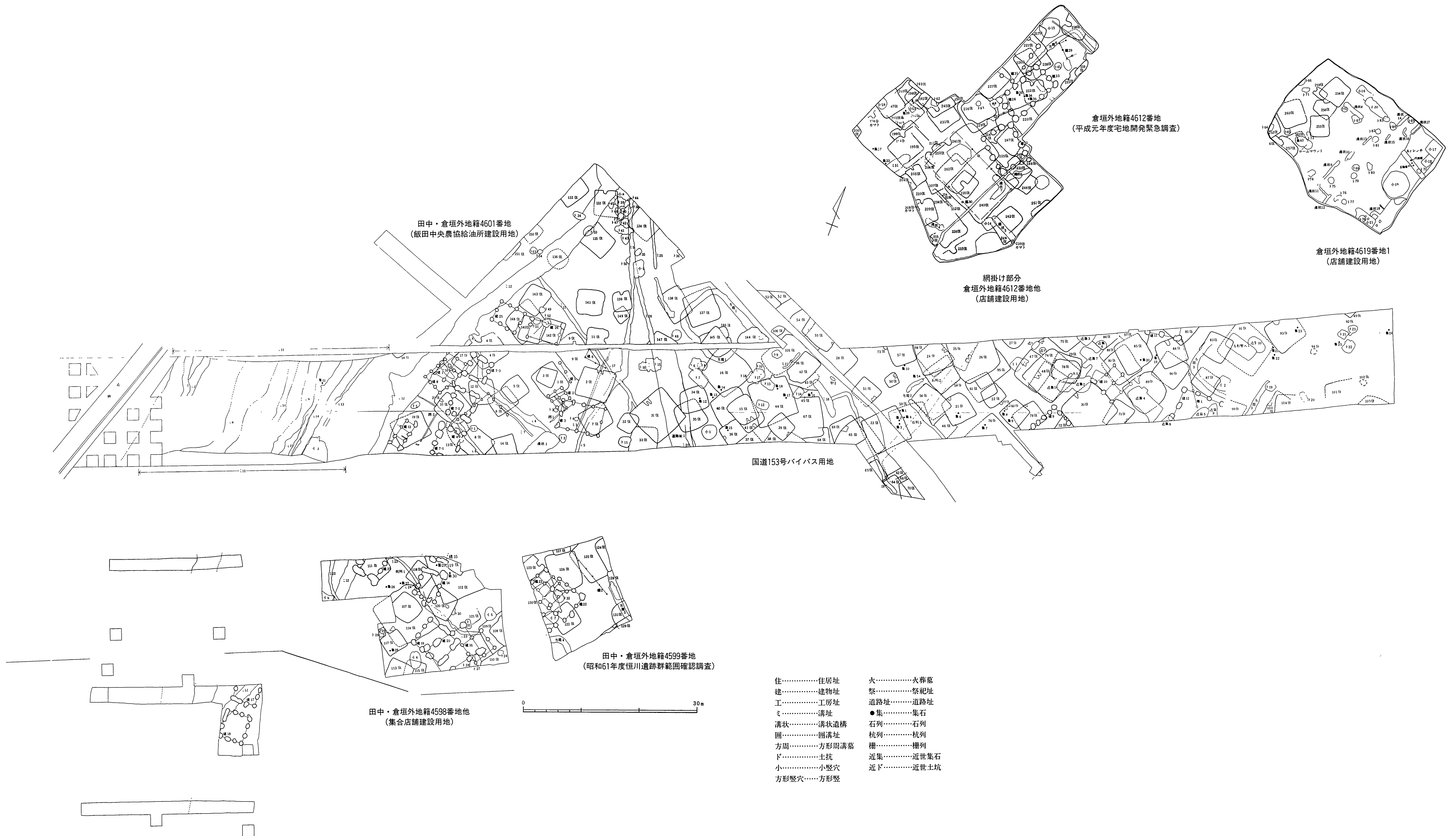
恒川遺跡
田中・倉垣外地籍

店舗・住宅建設に先立つ
埋蔵文化財緊急調査報告書

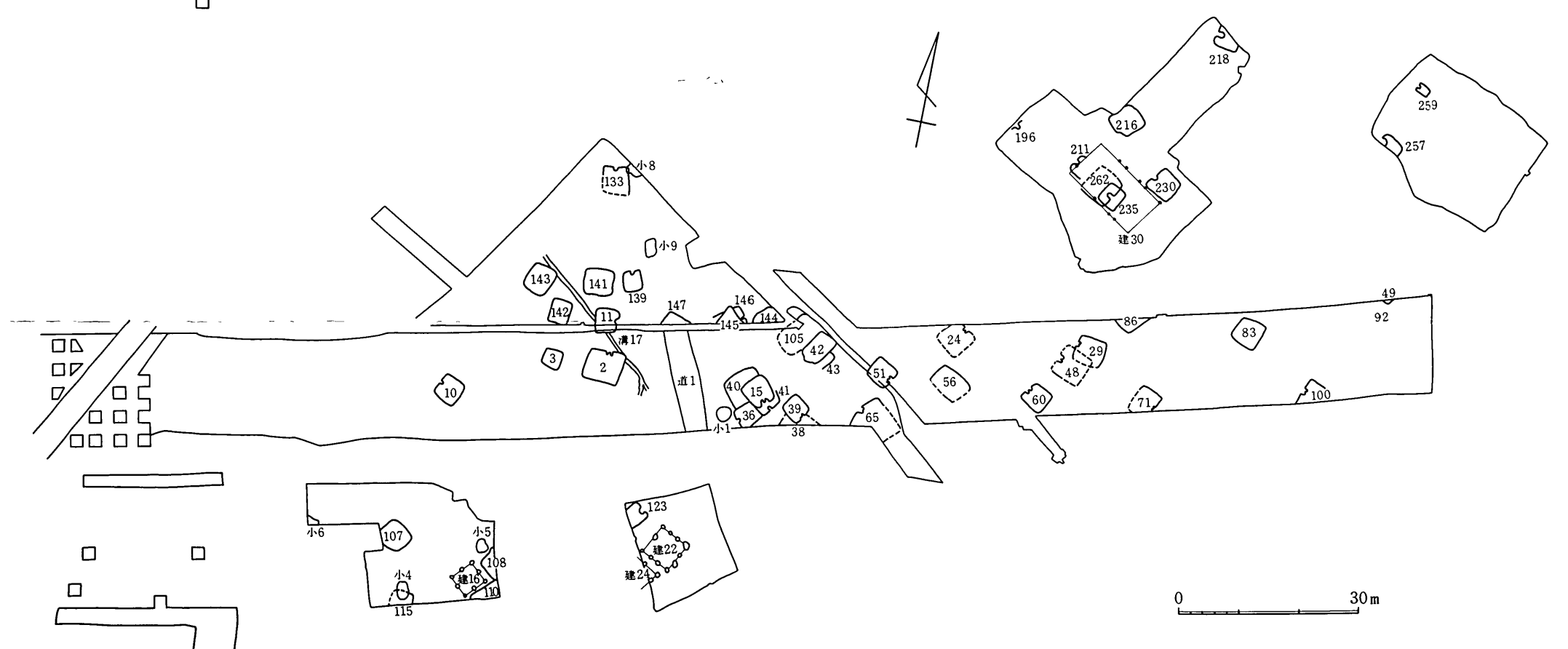
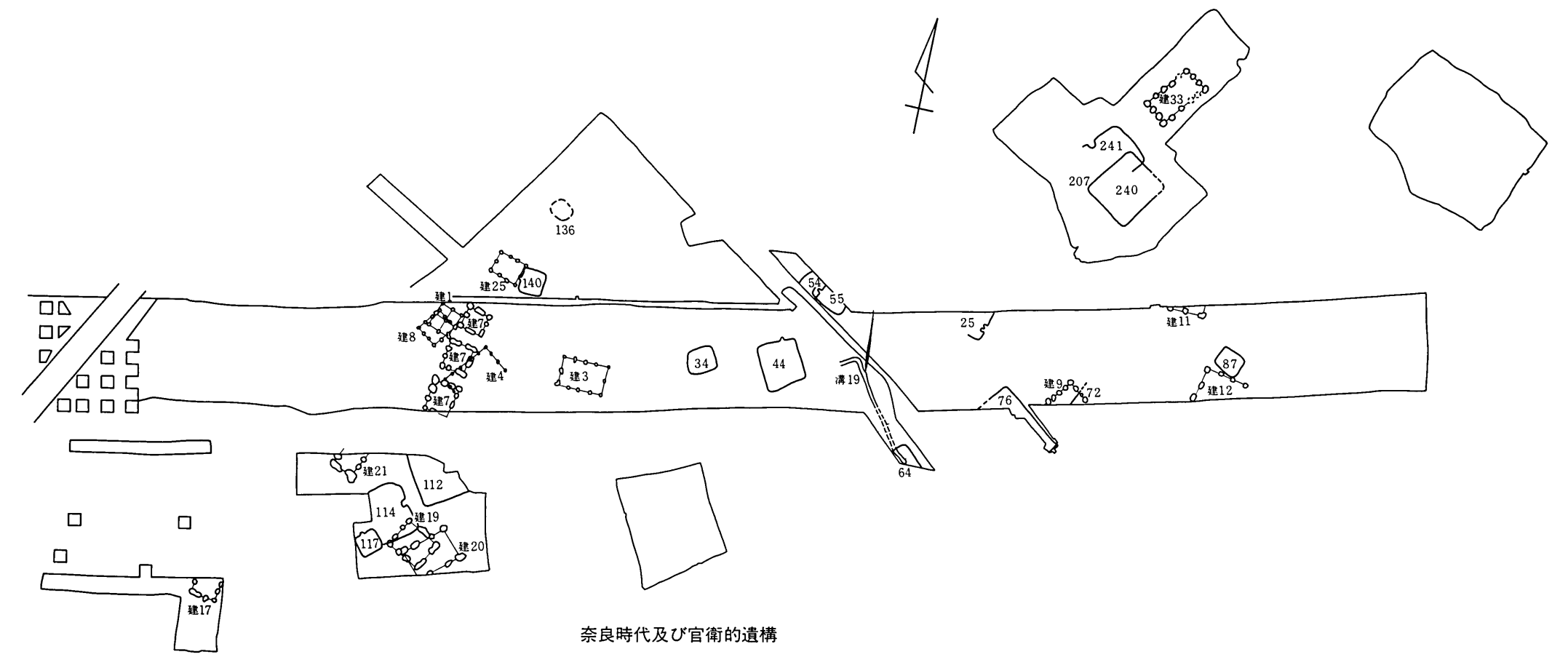
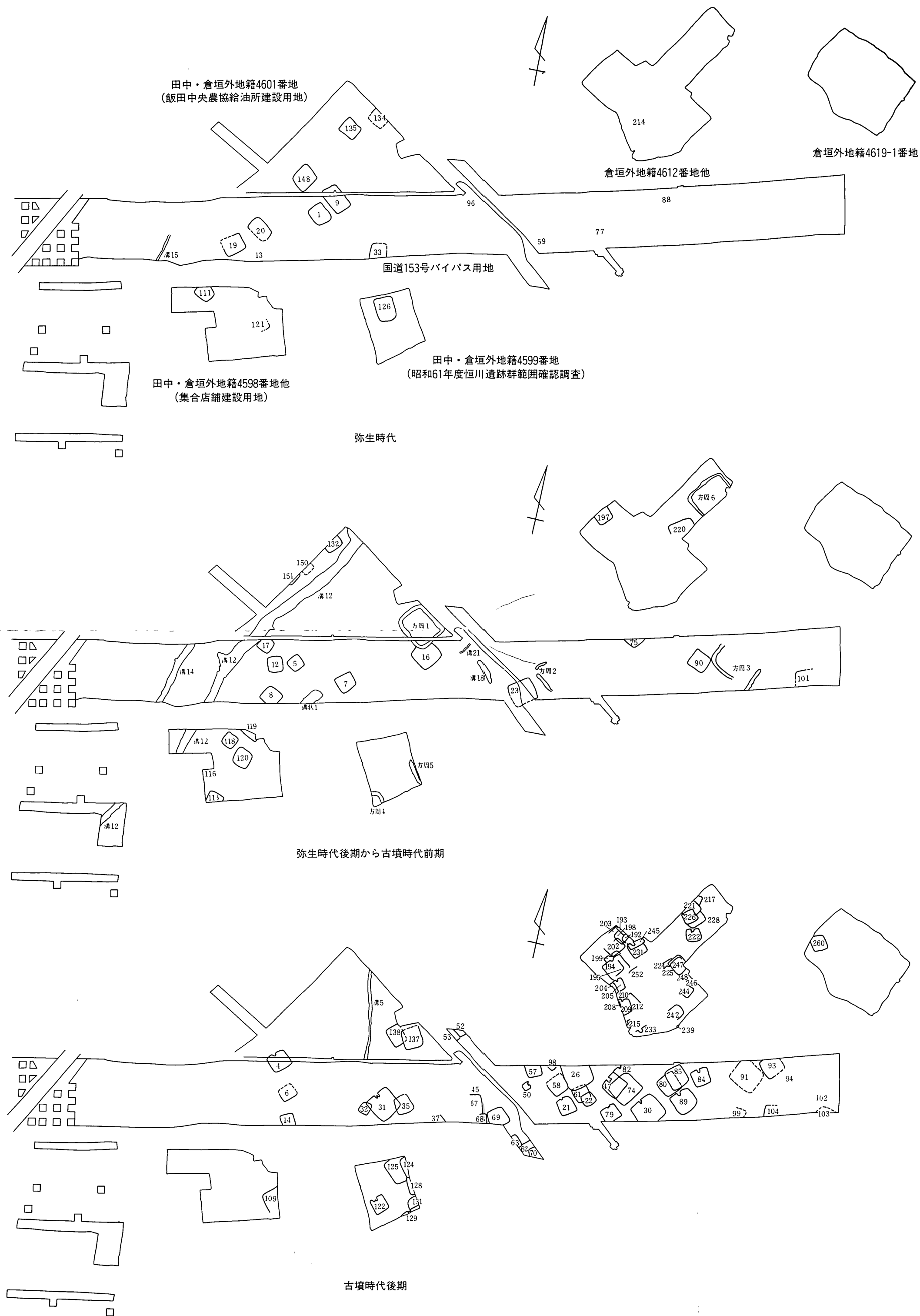
平成3年3月

長野県飯田市教育委員会

付図1 恒川遺跡 田中・倉垣外地籍遺構全体図



付図2 恒川遺跡 田中・倉垣外地籍遺構変遷図



- 数字のみ……住居址
- 建……建物址
- 溝……溝址
- 溝状……溝状遺構
- 方周……方形周溝墓
- 小……小竪穴
- 道……道路址

恒川遺跡 田中・倉垣外地籍

店舗・住宅建設に先立つ
埋蔵文化財緊急調査報告書

平成3年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市座光寺地区は飯田市街地の北部、天竜川右岸に位置し、北側は高森町、南側は上郷町、東側は喬木村に接し、行政区画は飯田市の飛び地となっています。温暖な気候に恵まれた快適な生活環境の地域で、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を遺している地域のひとつです。人々が活動した痕跡は縄文時代草創期以来その各所に刻まれており、縄文時代中期以降大規模な集落が多数営まれています。また、高岡1号古墳をはじめとする多数の古墳は、市内の竜丘・松尾地区に次いでいます。奈良時代には古代の役所である伊那郡衙が置かれたと推定されるなど、古来交通の要衝に位置していたといえます。

一般国道153号座光寺バイパス建設に先立ち実施された発掘調査では、古代伊那郡衙の存在を示唆する建物の跡や硯等といった遺構・遺物がたくさん見つかりました。そこで飯田市教育委員会では昭和57年度から重要遺跡範囲確認調査を継続して実施しており、また開発に伴う緊急調査の結果、現在までに官衙の中心部分が具体的地点をあげて推定される段階に至っています。

一方、近年飯田市街地における開発は飽和状態に達しており、周辺地区の道路環境の整備が進みつつある状況と相まって、市街地周辺へ企業や住宅が拡散しつつあります。この座光寺地区においてもバイパスが開通して以来沿線への店舗・事業所等の進出が相次いでおり、この度の開発もこうした傾向の一環にあります。飯伊地区の経済活動の振興を考えますとこうした開発も是認すべきといえ、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも次善の策ではありますがやむを得ないものといえます。調査の結果は本報告のとおりであり、これまでバイパス周辺で積み重ねられてきた調査結果に重要な知見を提供してくれたわけであります。すなわち、古代伊那郡衙の姿がより鮮明に描き出されたともいえましょう。地域の歴史解明が進むとともに、古代日本史の復元の一助となるものと確信いたします。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った細井 武・正木忠人の両氏ならびに地元の皆様、長期に亘って現地作業・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成3年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例 言

1. 本書は飯田市座光寺4612番地ほかの店舗及び同4619-1番地の店舗建設に伴う埋蔵文化財包蔵地恒川遺跡倉垣外地籍の発掘調査報告書である。
2. 本書は前述の緊急発掘調査報告書であるが、平成元年度に実施した宅地開発緊急調査箇所の飯田市座光寺4612番地と互いに接した位置にあり、その調査結果等も合わせて掲載した。
3. 調査は開発主体者である飯田市座光寺4612番地細井 武ならびに同4654番地正木忠人の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
4. 調査は、平成元年10月12日～11月15日、11月17日～12月20日、平成2年3月7日～12日に座光寺4612番地ほかの店舗・住宅部分の発掘調査を、平成2年2月3日～3月6日に同4619-1番地の店舗部分の発掘調査を実施した。続いて平成2年度末まで整理作業及び報告書作成作業を行った。
5. 発掘調査及び整理作業においては一貫して遺跡略号KURを用い、4612番地ほかの店舗・住宅部分は略号に続けて4612を付し、4619-1番地の店舗部分は同様にKUR4619-1とした。
6. 今次調査地点は一般国道153号座光寺バイパス路線内の田中・倉垣外地籍調査地点及びその周辺での緊急調査地点と近接しており、連続する遺構番号を付した。
7. 本報告書の記載については、記載順は住居跡を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
8. 本書は、馬場保之が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行った。
9. 本書に掲載された図面類の整理は馬場が、遺物実測は澁谷恵美子・馬場が、写真撮影は馬場があたった。なお同作業実施にあたり佐々木嘉和・佐合英治・吉川 豊が補佐した。
11. 本書の編集は馬場が行い、小林が総括した。
本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で、節理面は斜線、ロー状光沢は網掛けで示した。
13. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序

例言

目次

I 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
1) 倉垣外地籍4612他（店舗建設用地）	2
2) 倉垣外地籍4612（平成元年度宅地開発緊急調査）	2
3) 倉垣外地籍4619-1（店舗建設用地）	2
3. 調査組織	2
II 遺跡の環境	5
1. 自然環境	5
2. 歴史環境	5
III 調査結果	8
1. 倉垣外地籍4612他（店舗建設用地及び平成元年度宅地開発緊急調査地）	8
(1) 竪穴住居址	8
1) 弥生時代中期	8
① 214号住居址	8
2) 古墳時代前期	9
① 197号住居址 ② 220号住居址	
3) 古墳時代後期	12
① 192号住居址 ② 193号住居址 ③ 194号住居址 ④ 195号住居址	
⑤ 198号住居址 ⑥ 199号住居址 ⑦ 202号住居址 ⑧ 203号住居址	
⑨ 204号住居址 ⑩ 205号住居址 ⑪ 208号住居址 ⑫ 209号住居址	
⑬ 210号住居址 ⑭ 212号住居址 ⑮ 215号住居址 ⑯ 217号住居址	
⑰ 221号住居址 ⑱ 222号住居址 ⑲ 224号住居址 ⑳ 225号住居址	
㉑ 226号住居址 ㉒ 228号住居址 ㉓ 231号住居址 ㉔ 233号住居址	
㉕ 239号住居址 ㉖ 242号住居址 ㉗ 244号住居址 ㉘ 245号住居址	
㉙ 246号住居址 ㉚ 247号住居址 ㉛ 248号住居址 ㉜ 252号住居址	
4) 奈良・平安時代前期	33
① 207号住居址 ② 240号住居址 ③ 241号住居址	

5)	平安時代後期	35
①	196号住居址	
②	211号住居址	
③	216号住居址	
④	218号住居址	
⑤	230号住居址	
⑥	235号住居址	
⑦	262号住居址	
6)	不明	41
①	200号住居址	
②	201号住居址	
③	206号住居址	
④	219号住居址	
⑤	223号住居址	
⑥	227号住居址	
⑦	229号住居址	
⑧	234号住居址	
⑨	238号住居址	
⑩	249号住居址	
⑪	250号住居址	
⑫	251号住居址	
(2)	掘立柱建物址	47
①	掘立柱建物址28	
②	掘立柱建物址29	
③	掘立柱建物址30	
④	掘立柱建物址31	
⑤	掘立柱建物址32	
⑥	掘立柱建物址33	
(3)	土坑	53
①	土坑59	
②	土坑60	
③	土坑61	
④	土坑62	
⑤	土坑63	
(4)	小竪穴	54
①	小竪穴13	
②	小竪穴14	
③	小竪穴15	
(5)	方形周溝墓	55
①	方形周溝墓6	
(6)	溝址	57
①	溝址31	
(7)	溝状址	58
①	溝状址4	
②	溝状址5	
③	溝状址6	
④	溝状址7	
(8)	集石	60
①	集石33	
②	集石34	
③	集石35	
④	集石36	
⑤	集石37	
⑥	集石38・39	
(9)	井戸	61
①	井戸1	
(10)	その他	62
①	柱穴	
②	遺構外出土遺物	
2.	倉垣外地籍4619-1 (店舗建設用地)	69
(1)	竪穴住居址	69
1)	古墳時代後期	69
①	260号住居址	

2) 平安時代	69
① 257号住居址 ② 259号住居址	
3) 不明	72
① 253号住居址 ② 254号住居址 ③ 255号住居址 ④ 256号住居址	
⑤ 258号住居址 ⑥ 261号住居址	
(2) 土坑	75
① 土坑64 ② 土坑65 ③ 土坑66 ④ 土坑67 ⑤ 土坑68	
⑥ 土坑69 ⑦ 土坑70 ⑧ 土坑71 ⑨ 土坑72 ⑩ 土坑73	
⑪ 土坑74 ⑫ 土坑75 ⑬ 土坑76 ⑭ 土坑77 ⑮ 土坑78	
⑯ 土坑79 ⑰ 土坑80 ⑱ 土坑81 ⑲ 土坑82 ⑳ 土坑83	
㉑ 土坑84	
(3) 小竪穴	82
① 小竪穴16 ② 小竪穴17 ③ 小竪穴18 ④ 小竪穴19	
⑤ 小竪穴20 ⑥ 小竪穴21	
(4) 溝状址	84
① 溝状址 8 ② 溝状址 9～15・17 ③ 溝状址16 ④ 溝状址18	
(5) 集石	86
① 集石40	
(6) その他	87
① Aトレンチ	
② 柱穴	
③ 遺構外出土遺物	
IV まとめ	93

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2 調査位置および周辺地図	6
挿図 3 KUR4612 212・214(床)・215・234・238号住居址	8
挿図 4 KUR4612 193・197・198・201(床)・202・203号住居址	9
挿図 5 KUR4612 220号住居址	10
挿図 6 KUR4612 192・231・245・250号住居址	11
挿図 7 KUR4612 194・195・199号住居址	13

挿図 8	K U R 4612	204～207・210号住居址	16
挿図 9	K U R 4612	208・209号住居址	18
挿図10	K U R 4612	217・221・226・228号住居址	20
挿図11	K U R 4612	222号住居址	22
挿図12	K U R 4612	224・225・247号住居址	24
挿図13	K U R 4612	233号住居址	26
挿図14	K U R 4612	239・242・249号住居址	27
挿図15	K U R 4612	230・244・246・248号住居址	29
挿図16	K U R 4612	246号住居址カマド	30
挿図17	K U R 4612	248号住居址カマド	31
挿図18	K U R 4612	211・241・252号住居址	32
挿図19	K U R 4612	240号住居址	34
挿図20	K U R 4612	241号住居址	35
挿図21	K U R 4612	196・200号住居址、周辺柱穴平面図	36
挿図22	K U R 4612	211号住居址カマド	37
挿図23	K U R 4612	216・229号住居址	38
挿図24	K U R 4612	218号住居址	39
挿図25	K U R 4612	235号住居址	40
挿図26	K U R 4612	262号住居址	42
挿図27	K U R 4612	219・223号住居址	43
挿図28	K U R 4612	227号住居址	45
挿図29	K U R 4612	251号住居址	47
挿図30	K U R 4612	掘立柱建物址28	48
挿図31	K U R 4612	掘立柱建物址29	48
挿図32	K U R 4612	掘立柱建物址30	49
挿図33	K U R 4612	掘立柱建物址31	50
挿図34	K U R 4612	掘立柱建物址32	51
挿図35	K U R 4612	掘立柱建物址33	52
挿図36	K U R 4612	土坑59～63	53
挿図37	K U R 4612	小竪穴13～15	55
挿図38	K U R 4612	方形周溝墓 6	56
挿図39	K U R 4612	方形周溝墓 6 主体部	57
挿図40	K U R 4612	溝址31	58
挿図41	K U R 4612	溝状址 4～7	59

挿図42	KUR4612	集石33～39	60
挿図43	KUR4612	井戸1	62
挿図44	KUR4612	周辺柱穴平面図	63
挿図45	KUR4619-1	260号住居址	69
挿図46	KUR4619-1	256・257・261号住居址	70
挿図47	KUR4619-1	259号住居址	71
挿図48	KUR4619-1	253号住居址	72
挿図49	KUR4619-1	254号住居址	73
挿図50	KUR4619-1	255号住居址	74
挿図51	KUR4619-1	258号住居址	74
挿図52	KUR4619-1	土坑64～69・71～73	76
挿図53	KUR4619-1	土坑70、周辺柱穴平面図	78
挿図54	KUR4619-1	土坑74～84	80
挿図55	KUR4619-1	小竪穴16～21	83
挿図56	KUR4619-1	溝状址8～14	85
挿図57	KUR4619-1	溝状址15～18	86
挿図58	KUR4619-1	集石40	86
挿図59	KUR4619-1	周辺柱穴平面図(1)	88
挿図60	KUR4619-1	周辺柱穴平面図(2)	89
挿図61	KUR4619-1	周辺柱穴平面図(3)	90

付 図 目 次

- 付図1 恒川遺跡田中・倉垣外地籍遺構全体図
 付図2 恒川遺跡田中・倉垣外地籍遺構変遷図

図 版 目 次

第1図	KUR4612	214・197・220・192・193号住居址出土遺物	99
第2図	KUR4612	194号住居址出土遺物	100
第3図	KUR4612	195・199・204号住居址出土遺物	101
第4図	KUR4612	205・208・210・221号住居址出土遺物	102

第5図	KUR4612	222・225号住居址出土遺物	103
第6図	KUR4612	225・226・228号住居址出土遺物	104
第7図	KUR4612	231・233・242・252号住居址出土遺物	105
第8図	KUR4612	207・240号住居址出土遺物	106
第9図	KUR4612	240号住居址出土遺物	107
第10図	KUR4612	241・196号住居址出土遺物	108
第11図	KUR4612	196・211号住居址出土遺物	109
第12図	KUR4612	211号住居址出土遺物	110
第13図	KUR4612	216号住居址出土遺物	111
第14図	KUR4612	216号住居址出土遺物	112
第15図	KUR4612	218号住居址出土遺物	113
第16図	KUR4612	218・230号住居址出土遺物	114
第17図	KUR4612	235号住居址出土遺物	115
第18図	KUR4612	262号住居址出土遺物	116
第19図	KUR4612	262・206号住居址出土遺物	117
第20図	KUR4612	219・223・227・229号住居址出土遺物	118
第21図	KUR4612	229・238・249号住居址出土遺物	119
第22図	KUR4612	土坑58・61・63、小竪穴15出土遺物	120
第23図	KUR4612	方形周溝墓6、溝址31、溝状址5・6、集石33・34出土遺物	121
第24図	KUR4612	集石36・39、井戸1、遺構外出土遺物	122
第25図	KUR4612	遺構外出土土器(1)	123
第26図	KUR4612	遺構外出土土器(2)	124
第27図	KUR4612	遺構外出土土器(3)	125
第28図	KUR4612	遺構外出土土器(4)	126
第29図	KUR4612	遺構外出土土器(5)	127
第30図	KUR4612	遺構外出土土器(6)	128
第31図	KUR4612	遺構外出土土器(7)	129
第32図	KUR4612	遺構外出土土器(8)	130
第33図	KUR4612	遺構外出土土器・土製品	131
第34図	KUR4612	遺構外出土石器(1)	132
第35図	KUR4612	遺構外出土石器(2)	133
第36図	KUR4612	遺構外出土石器(3)	134
第37図	KUR4612	遺構外出土石器(4)	135
第38図	KUR4612	遺構外出土石器(5)	136

第39図	K U R 4612	遺構外・205号住居址出土遺物	137
第40図	K U R 4612	土製品・石製品	138
第41図	K U R 4612	石製品	139
第42図	K U R 4612	金属製品	140
第43図	K U R 4619-1	260・257号住居址出土土器	141
第44図	K U R 4619-1	257・259号住居址出土土器	142
第45図	K U R 4619-1	253～256号住居址、小竪穴17・18出土遺物	143
第46図	K U R 4619-1	Aトレンチ出土遺物	144
第47図	K U R 4619-1	遺構外出土土器	145
第48図	K U R 4619-1	遺構外出土土器・石器	146
第49図	K U R 4619-1	遺構外出土石器	147

写真図版目次

図版1	K U R 4612	遺構検出状況	151
図版2	K U R 4612	遺構検出状況	152
図版3	K U R 4612	214号住居址、同遺物出土状態、197号住居址	153
図版4	K U R 4612	193号住居址、同遺物出土状態	154
図版5	K U R 4612	194・195号住居址、194号住居址カマド、198号住居址	155
図版6	K U R 4612	205号住居址遺物出土状態、221号住居址、222号住居址	156
図版7	K U R 4612	225号住居址、226号住居址	157
図版8	K U R 4612	231号住居址、239号住居址カマド、242号住居址	158
図版9	K U R 4612	241号住居址カマド、211号住居址カマド、216・229号住居址	159
図版10	K U R 4612	218号住居址、230号住居址・溝状址6、227号住居址	160
図版11	K U R 4612	238号住居址、掘立柱建物址28、同29	161
図版12	K U R 4612	掘立柱建物址33、土坑59、同61	162
図版13	K U R 4612	小竪穴15、方形周溝墓6、溝状址7	163
図版14	K U R 4612	集石35、同39	164
図版15	K U R 4619-1	調査前風景、遺構検出状況	165
図版16	K U R 4619-1	260号住居址遺物出土状態、257号住居址カマド、同遺物出土状態	166
図版17	K U R 4619-1	259号住居址、同カマド、同遺物出土状態	167
図版18	K U R 4619-1	253号住居址・土坑64、254号住居址、255号住居址	168

図版19	K U R 4619-1	258号住居址、土坑68、同69	169
図版20	K U R 4619-1	小竪穴17・18、同20	170
図版21	K U R 4619-1	小竪穴21、溝状址14・16・17	171
図版22	K U R 4612	214・197・194・199号住居址出土遺物	172
図版23	K U R 4612	204・205・208・222号住居址出土遺物	173
図版24	K U R 4612	225・228・231・233号住居址出土遺物	174
図版25	K U R 4612	207・240号住居址出土遺物	175
図版26	K U R 4612	241・196・211号住居址出土遺物	176
図版27	K U R 4612	216・218・235号住居址出土遺物	177
図版28	K U R 4612	262・223号住居址出土遺物	178
図版29	K U R 4612	227・229号住居址、溝状址5、集石34出土遺物	179
図版30	K U R 4612	遺構外出土遺物	180
図版31	K U R 4612	遺構外出土遺物	181
図版32	K U R 4612	遺構外出土遺物	182
図版33	K U R 4612	遺構外出土遺物	183
図版34	K U R 4612	遺構外出土遺物	184
図版35	K U R 4612	遺構外出土遺物	185
図版36	K U R 4612	遺構外出土遺物	186
図版37	K U R 4612	遺構外出土遺物	187
図版38	K U R 4612	遺構外出土遺物	188
図版39	K U R 4612	遺構外出土遺物	189
図版40	K U R 4619-1	260・257号住居址出土遺物	190
図版41	K U R 4619-1	259・253～255号住居址出土遺物	191
図版42	K U R 4619-1	土坑66・68・69、小竪穴21、溝状址8、Aトレンチ出土遺物	192
図版43	K U R 4619-1	遺構外出土遺物	193
図版44	K U R 4619-1	遺構外出土遺物	194
図版45	K U R 4619-1	遺構外出土遺物	195
図版46	K U R 4612	重機作業風景	196
図版47	K U R 4612	調査風景	197
図版48	K U R 4619-1	重機作業風景、調査風景	198

I 経 過

1. 調査に至るまでの経過

昭和52（1977）年以来、一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査が実施され、多数の官衙的遺構・遺物が確認された。当該遺跡は従前より古代「伊那郡衙」と推定されており、調査結果は強くこれを裏づけるものであった。そこで飯田市教育委員会では昭和57（1982）年度以来国・県の補助を得て恒川遺跡群の範囲確認調査を継続実施しており、郡衙址の位置・規模・構成・変遷等諸問題を解決すべく成果を積み重ねている。

また昭和59（1984）年12月バイパス開通以来、それまでわずかに宅地化されつつあったバイパス周辺一帯は急速に諸開発が進展し、店舗等が相次いで出店している。今次の店舗建設もこうした時流に沿ったものであり、複雑化・高度化する今日の経済・社会情勢の中で開発はやむを得ないものといえる。しかし、前述のように古代官衙址に関連する可能性が高く、範囲確認調査を継続している遺跡であり、その保護について、開発主体者と飯田市教育委員会・長野県教育委員会の三者で協議を行なった。その結果、当該の開発計画はやむを得ないものと判断され、次善の策として発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

また、店舗建設に関連して地権者細井 武の住宅建設が行なわれることになり、保護協議の結果、この部分についても国・県の補助を得て事前に発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

1) 倉垣外地籍4612他（店舗建設用地）

関係者による諸協議を受け、委託者細井 武と受託者飯田市長田中秀典との間で発掘調査に関する委託契約を締結し、これに基づいて10月12日発掘調査に着手した。

発掘調査対象は建物建設部分とし、重機により表土を除去した。座光寺バイパス路線調査時の調査区と対応させるため、バイパス幅杭（境界杭）を基準としてグリッドを設定した。続いて作業員を入れて遺構検出作業を行ない、順次検出遺構を掘り下げて精査した。弥生時代中期から平安時代にかけての諸遺構が多数重複しており、遺構検出は困難を極めた。そして写真撮影・測量調査ののちカマドの断ち割り調査を行ない、11月15日現地調査を修了した。

引き続き、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・注記・接合・復元等整理作業および報告書作成を平成2年度末まで行なった。

2) 倉垣外地籍4612 (平成元年度宅地開発緊急調査)

諸協議に基づき、自宅の取り壊し終了を待って、平成元年11月17日現地調査に着手した。調査区は、これに先立って調査された倉垣外地籍4612他の店舗建設用地と一致させて設定した。重機により表土を除去し、続いて作業員を入れて遺構検出作業を行なった。その結果、竪穴住居址・掘立柱建物址・方形周溝墓等の遺構が確認された。これらについて精査、引き続いて写真撮影・測量調査・カマド断ち割り調査を実施し、12月20日現地調査を終了した。

また自宅建設に際して既存の庭木の移転がなされる計画であったが、庭木の移植が調査期間内で実施できず、平成2年3月7日から12日にかけて当該部分のみについての現地調査を実施した。

現地調査に引き続き、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類および出土遺物等の整理作業を行なうとともに、概要報告書の作成作業を行なった。

3) 倉垣外地籍4619-1 (店舗建設用地)

関係者による諸協議を受け、受託者正木忠人と委託者飯田市長田中秀典との間で発掘調査に関する委託契約を締結し、これに基づいて2月3日発掘調査に着手した。

発掘調査対象は建物建設部分とし、重機により表土を除去した。倉垣外地籍4612他の店舗建設用地と同様、座光寺バイパス路線調査時の調査区と対応させるため、バイパス幅杭(境界杭)を基準としてグリッドを設定した。表土除去後作業員を入れて遺構検出作業を行ない、順次検出遺構を掘り下げて精査した。主に調査範囲の西側に古墳時代後期から平安時代にかけての諸遺構が検出され、これより東側の広い範囲で地山に礫が混じるため遺構の平面形・重複関係等が不明瞭であり、遺構検出は困難を極めた。また、調査範囲東側隅は比較的新しい時期の造成を受けていることがトレンチ調査の結果判明し、地山付近から蹄脚硯・五輪塔等が出土したため、地山まで掘り下げを行なった。引き続き写真撮影・測量調査のちカマドの断ち割り調査を行ない、3月6日現地調査を終了した。

その後、平成2年度末まで飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・注記・接合・復元等整理作業および報告書作成を行なった。

3. 調査組織

1) 調査団

調査担当者 小林正春・馬場保之

調査員 佐々木嘉和・佐合英治・吉川 豊・功力 司・澁谷恵美子

現場作業員 渥美 力・渥美静子・市瀬長年・今村勝子・今村春一・片桐卓治・北村重実
木下喜代恵・木下当一・坂下やすゑ・佐々木啓・佐々木智子・沢柳敬介
高木義治・高橋寛治・高橋収二郎・豊橋宇一・中平隆雄・樋本宣子
福沢トシ子・藤本幸吉・古田八重子・細井光代・細田七郎・正木実重子
正木睦子・松下直市・松下真幸・松島卓夫・三石久雄・向田一雄・森 章
山田三保子・吉川正実

整理事業員 池田幸子・伊原恵子・大蔵祥子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代
唐沢さかえ・川上みはる・木下早苗・木下玲子・櫛原勝子・小池千津子
小平不二子・小林千枝・斉藤徳子・佐々木真奈美・渋谷千恵子・田中恵子
筒井千恵子・丹羽由美・萩原弘枝・林勢紀子・原沢あゆみ・樋本宣子
平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代
松本恭子・三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森 信子・森藤美和子
吉川悦子・吉川紀美子・吉沢まつ美・若林志満子

2) 指導

文化庁

奈良国立文化財研究所

長野県教育委員会文化課

3) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦 (社会教育課長)

中井洋一 (社会教育課文化係長)

小林正春 (社会教育課文化係)

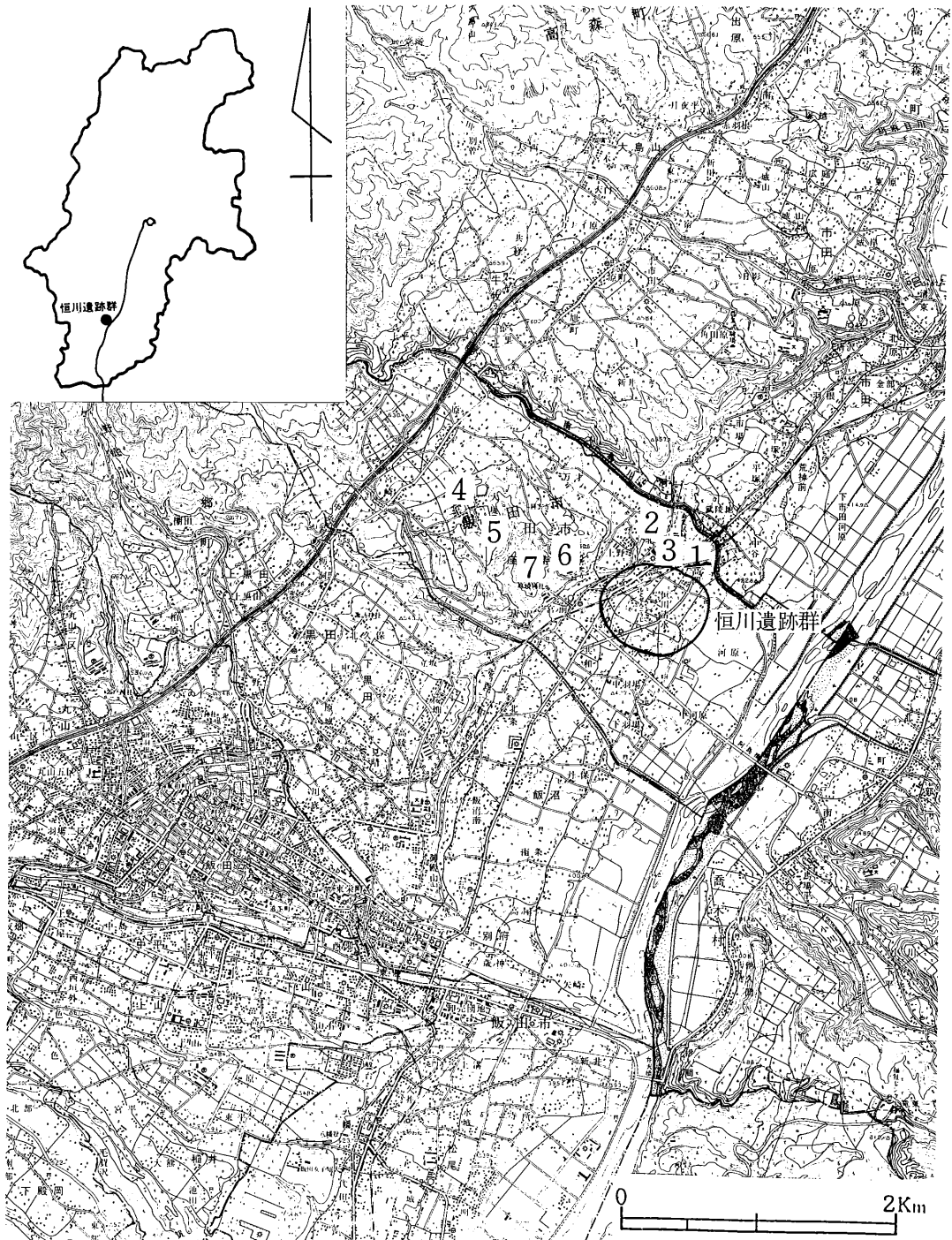
吉川 豊 (社会教育課文化係)

馬場保之 (社会教育課文化係)

土屋敏美 (社会教育課文化係、平成元年度)

功力 司 (社会教育課文化係、平成元年度)

篠田 恵 (社会教育課文化係、平成2年度)



1. 新井原第12号古墳 2. 畦地第1号古墳 3. 高岡第1号古墳
 4. 座光寺原遺跡 5. 中島遺跡 6. 北本城跡 7. 南本城跡

挿図1 調査遺跡 および周辺遺跡位置図

Ⅱ 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東 4 km にあり、南西を下伊那郡上郷町、北東を同高森町、東南は天竜川を挟んで同喬木村と接しており、行政区画上は飯田市の飛地となっている。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。座光寺地区の場合、断層運動でつくられた段丘で大きく上段と下段に分けられる。上段は中央アルプスの山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。下段は数段の小段丘からなり、恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合、北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し、南側は比較的段丘面がよく残る等複雑な微地形を呈する。遺跡群の北側は南大島川の旧河道、南側は田中・倉垣外地籍南側の湿地帯で画されている。

倉垣外地籍は遺跡群の南側にあたり、今次調査地点は小段丘上段に位置する。調査地点のすぐ東側は小段丘と扇状地の接点にあたる「恒川清水」に至る。地域の生活用水として利用されていたが、座光寺バイパス建設以降冬期枯渇するようになってしまった。「恒川清水」の南側には湿地帯が広がり、またその南西側は比高差 3～5 m で田中・倉垣外地籍を東南部と南西部に区切る小段丘がある。小段丘崖下には点々と湧水がある。

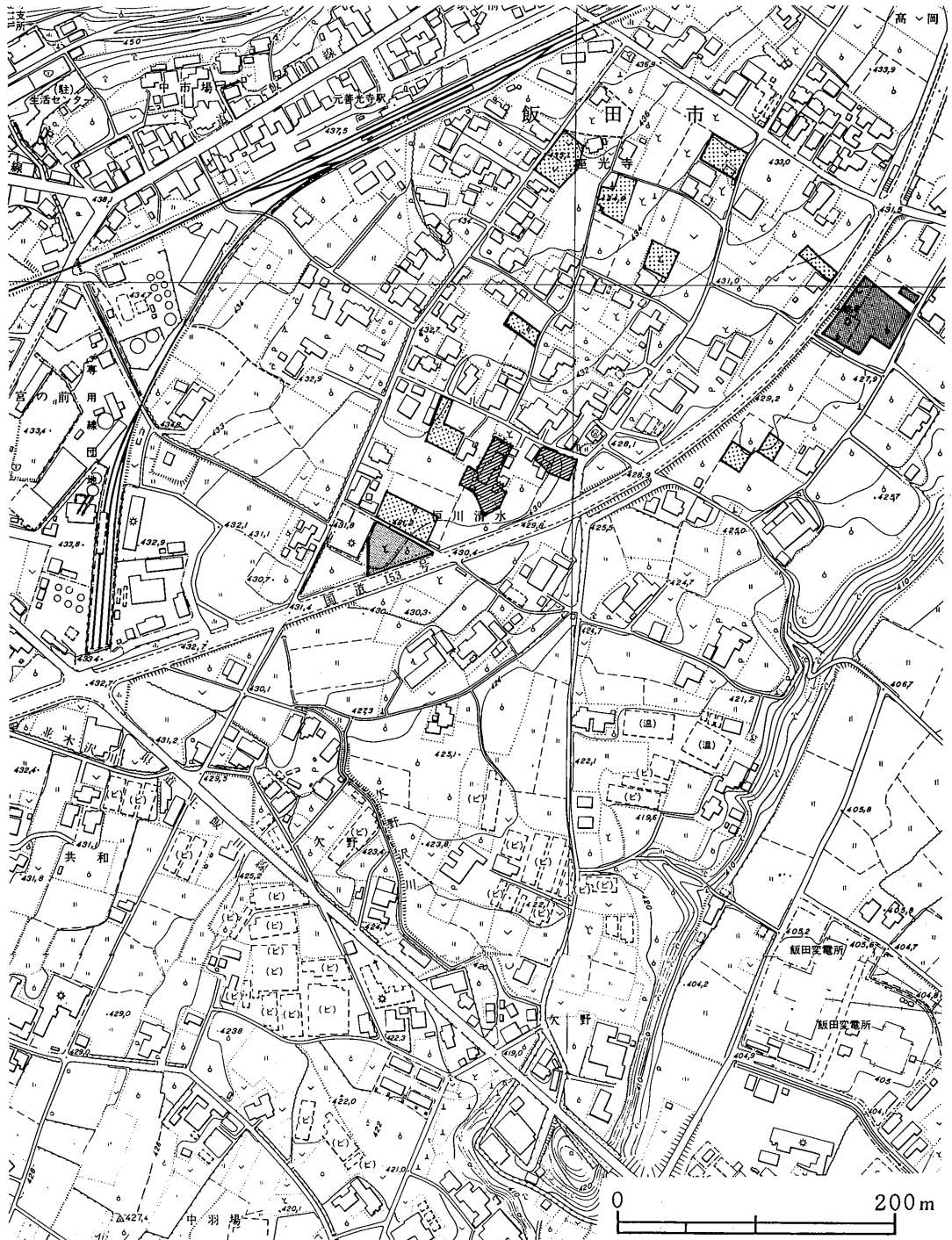
調査地点の南西側は「恒川清水」から始まる小段丘が緩やかに曲ってきて終息し、凹地となって湿地帯を形成する。湿地帯は田中・倉垣外地籍の西側に広がり、つい先頃まで瓦粘土が採取されていた。

以上のように、田中・倉垣外地籍は比較的乾燥した台地上にあり、周囲に湧水と生産基盤の湿地帯を控えた、住居を構えるに好条件の場所といえる。

2. 歴史環境

座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は旧石器時代末までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。

上段は縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、とくに山裾部にかけては縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍蔵の調査で知られた大門原遺跡等がある。東面した緩傾斜の扇状地扇央部分に



今次調査地点
 範囲確認調査地点
 緊急調査地点

挿図2 調査位置 および周辺地図

あたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の遺跡が分布する。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達背景と考えられる。昭和37（1962）年、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事に採土のため調査された後期前半の座光寺原遺跡、昭和50（1975）年農業構造改善事業に伴ない道路部分が調査された後期終末期の中島遺跡等該期の典型的な集落があるといえる。段丘崖上部には北本城古墳をはじめとする古墳および中世の山城2つがある。後者は小河川に開析された複雑な地形を生かしている。

下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎占拠した地点を若干異にしている。縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地に立地する。中期を除く他時期は遺物が中心で集落の実態は明確でないが、資料が十分でない各期にあって比較的良好な資料を提示している。中期は座光寺バイパス路線内の新屋敷遺跡で後葉の大規模な集落の一部が調査されている。弥生時代中期から古墳時代前期にかけては弥生時代後期に一時的に拡大するものの基本的に扇状地上に位置し、古墳時代後期から平安時代の集落は扇状地および南側の段丘面に拡大する。一方、古墳の分布は該期集落の外縁の、高岡第1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および遺跡群東側の段丘崖上にみられる。これまで調査された古墳は新井原第12号古墳（大正11年）・畦地第1号古墳（同12年）等ごく小敷で、現在までに調査されずに消滅した古墳は数多くに上る。

今次調査地点周辺では、昭和51（1976）年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鈴・和同開珎銀錢等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている。そして、昭和57（1982）年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追究されてきた。その結果、なお郡衙の中心部は不明であるものの具体的地点をあげて推定される段階に至り、同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。またバイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍、新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある。今次調査地点は推定中心部南隣に位置しており、郡衙内でこの一帯がどのような役割を果たしたか、より鮮明にされることが期待された地点である。

Ⅲ 調査結果

1. 倉垣外地籍4612他 店舗建設用地及び平成元年度宅地開発緊急調査地

(1) 竪穴住居址

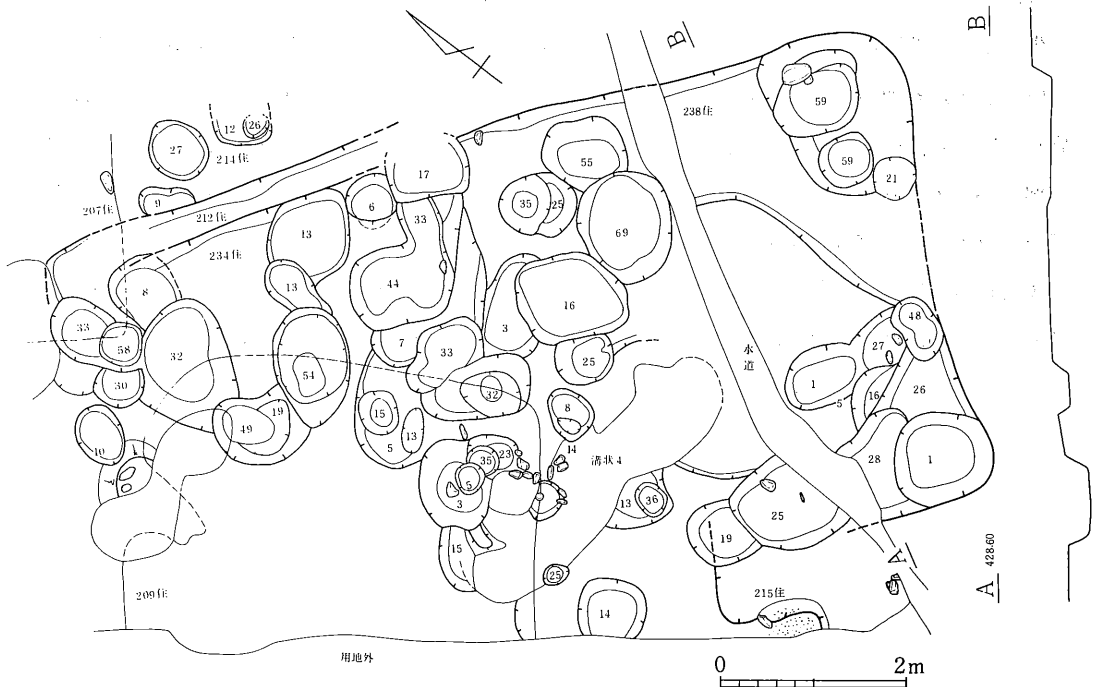
1) 弥生時代中期

① 214号住居址 (挿図3、第1図1)

調査区南西側に検出した。表土剥ぎの際削平されて、床面の一部と遺物を検出したにとどまり、平面形・規模等詳細は一切不明である。

出土遺物は弥生土器鉢(第1図1)のみである。内外面丁寧にヘラミガキされ朱彩が施される。口縁に4個の突起が付され、底部の器面荒れが著しい。

出土遺物から弥生時代中期の竪穴住居址と考えられる。



挿図3 KUR4612 212・214(床) 215・234・238号住居址

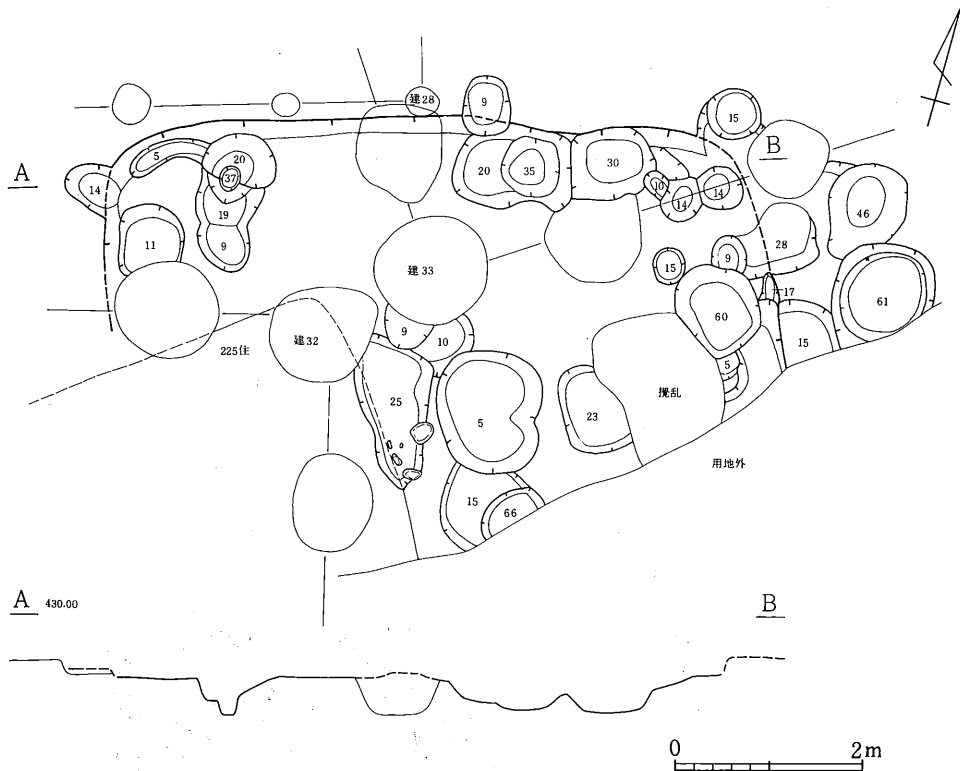
2) 古墳時代前期

① 197号住居址 (挿図4、第1図2~5)

調査区西側に検出された。203号住居址を切り、202号住居址・土坑59に切られる。調査区外にかかり、北西側約1/4は未調査である。隅丸方形を呈する竪穴住居址で東西4.3m、主軸方向は



挿図4 KUR4612 193・197・198・201(床)・202・203号住居址



挿図5 KUR4612 220号住居址

N48.1° Wを示す。中央付近で硬い床面が検出された。壁の立ち上がりの状態はゆるやかである。東・南壁下に周溝が掘り込まれるが、幅・深さとも一定しない。埋土暗褐色土である。支柱穴は径約30cmの不整形円形を呈し、深さ16、21cmを測る。

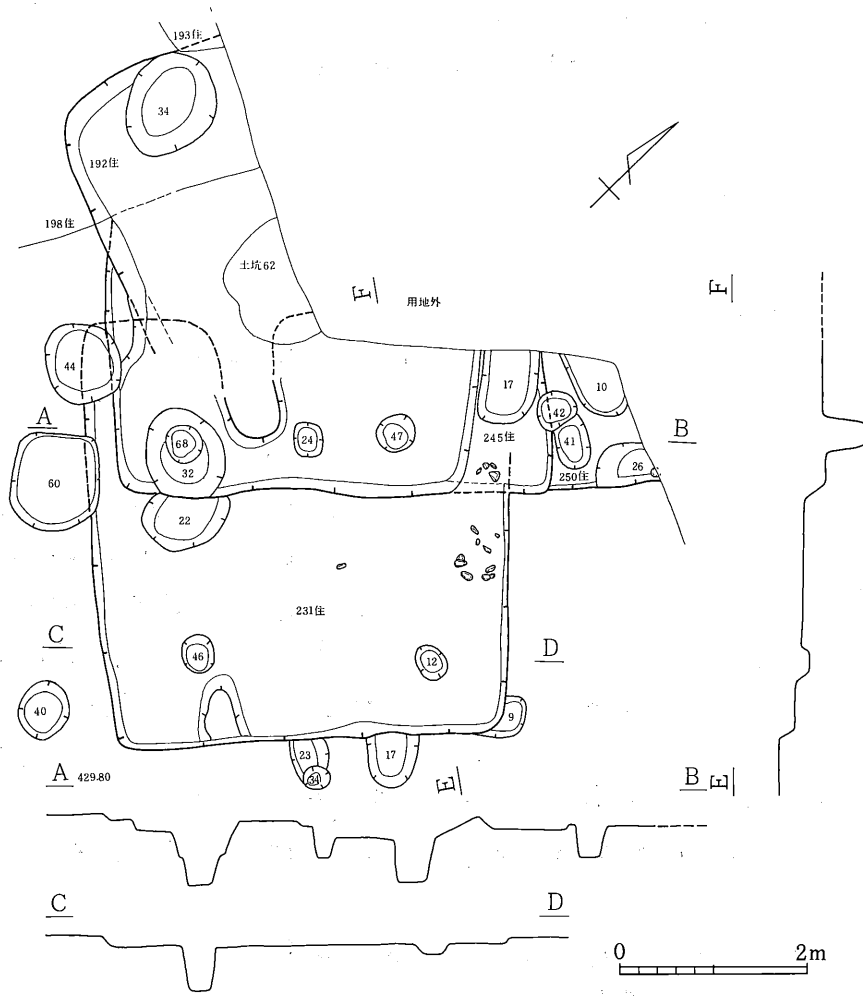
出土遺物は古墳時代前期の土師器壺・台付甕・高坏等があり、出土量は少ない。他に、弥生時代中期後半の壺・甕、古墳時代後期の土師甕・坏・高坏・鉢、須恵器蓋等が混入出土した。

出土遺物および重複関係等から本址の所属時期は古墳時代前期と思われる。

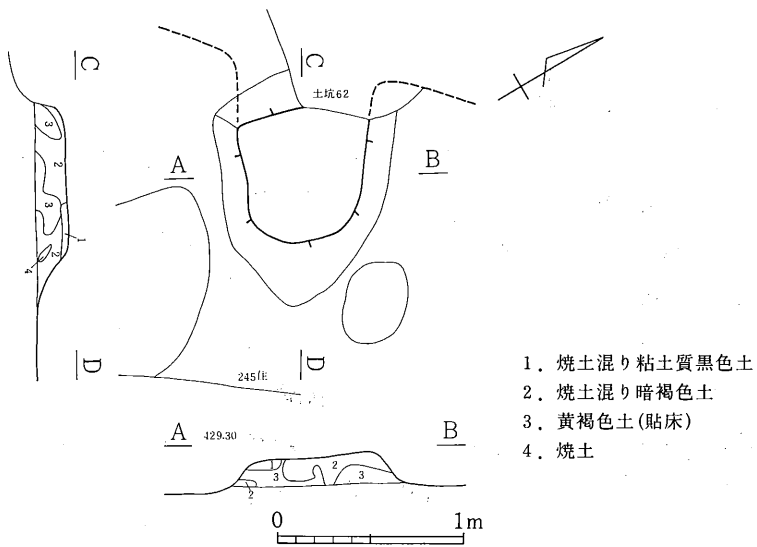
② 220号住居址 (挿図5、第1図6～13、第40図)

調査区中央やや北東寄りに検出した。224・225号住居址・掘立柱建物址32・33・36に切られる。北壁および西壁の一部を確認したのみで、規模等詳細は不明であるが、隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われる。北壁の方向はN74.7° Eを示す。壁高は約20cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。床面は全体的に軟弱である。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏等があり、出土量はやや多い。土師器甕は刷毛目調整が施



231住カマド



1. 焼土混り粘土質黒色土
2. 焼土混り暗褐色土
3. 黄褐色土(貼床)
4. 焼土

挿図6 KUR4612 192・231・245・250号住居址

される。弥生時代中期から中世にかけての遺物がかなり混入出土した。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代前期と思われる。

3) 古墳時代後期

① 192号住居址 (挿図6、第1図14~16)

調査区西側に検出された。193・198号住居址を切り、231・245・250号住居址・土坑62に切られる。方形を呈する竪穴住居址と思われるが、調査区外にかかる部分が多く、かつ重複遺構が多いため規模等不明な点が多い。西壁はN67.8°W方向に延びる。本址の壁高は23~29cmを測り、壁の遺存状態は不良であるものの、やや急な立ち上がりを示す。本址に付属する施設は不明である。

出土遺物は土師器壺・甕・坏、須恵器壺・甕・蓋・坏等であり、図示できるものはほとんどない。出土量は少ない。土師器壺は胴下半から底部にかけて遺存し、古墳時代前期の遺物である。甕は長胴形を呈し外面ヘラケズリの施されるものの他、平安時代のカキメが施される甕が混入する。内外面丁寧なヘラミガキが施されたものはあるいは甗の可能性もある。坏には内面黒色処理されるものがある。須恵器甕には、外面平行叩き後クシナデ・内面同心円叩き後ナデ消しされるもの(第1図14・15)、外面格子叩き・内面同心円叩きされ内外褐色を呈するもの(16)がある。蓋は稜をもつものの他、つまみを有するものがある。他に弥生時代中期と考えられる壺片、灰釉陶器碗が混入出土した。

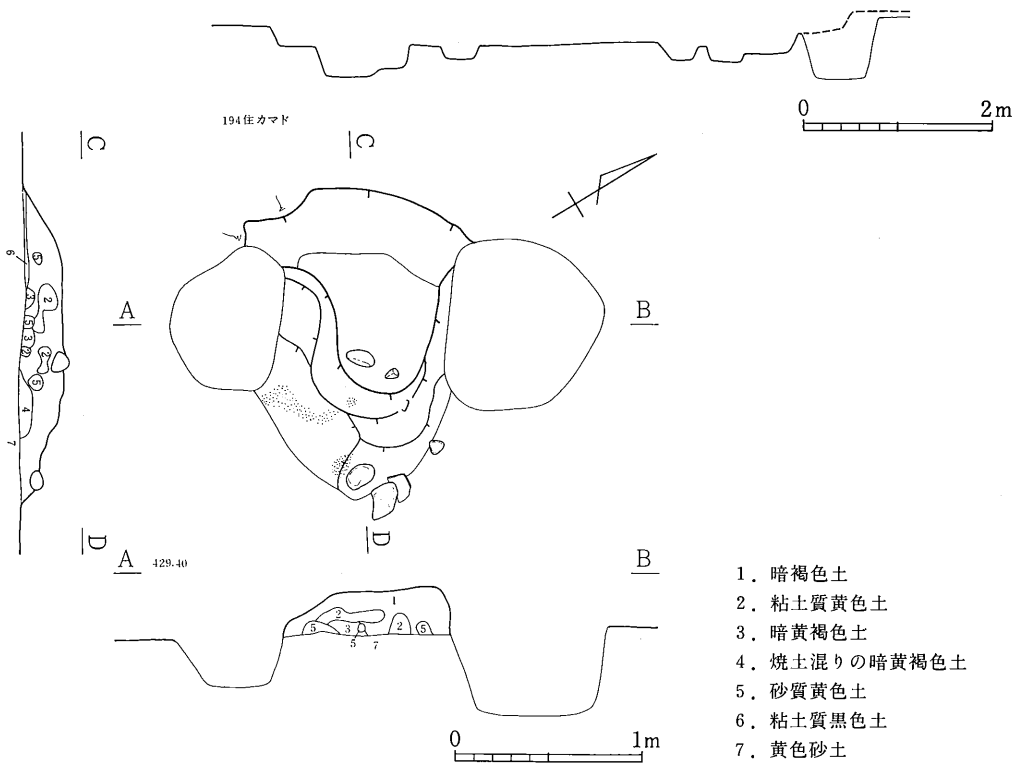
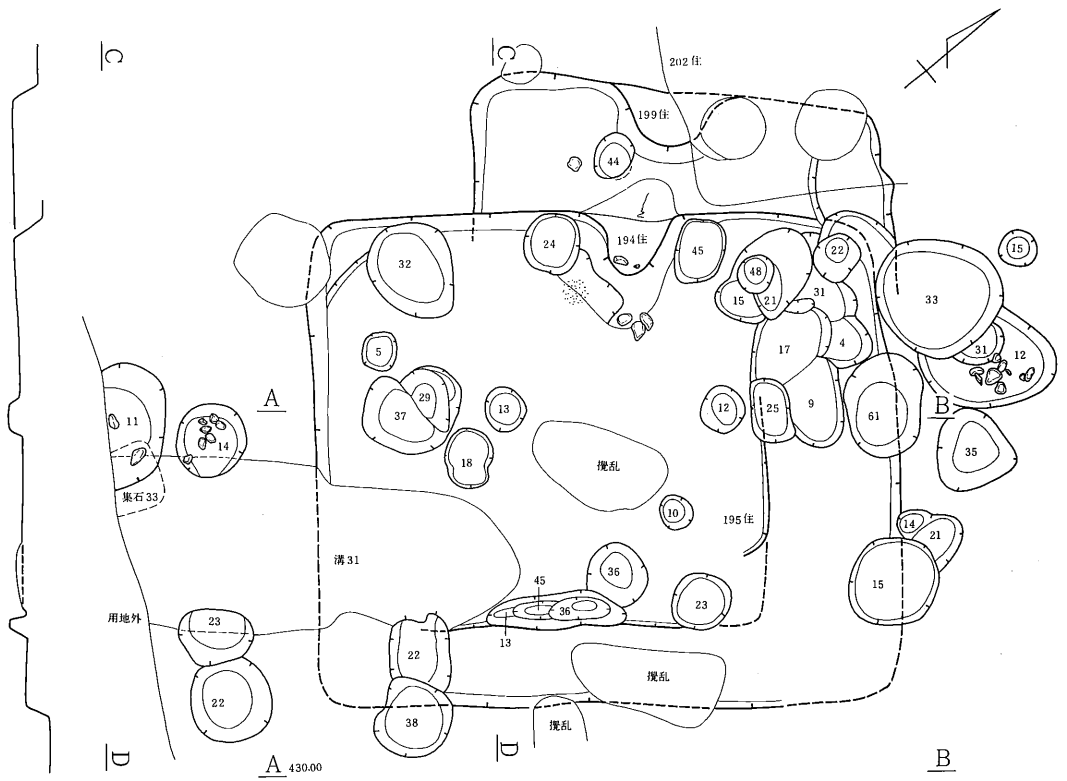
平安時代の遺物がわずかに混入するものの、主体は古墳時代後期であり、重複関係と合わせ考えると、所属時期も古墳時代後期に求められよう。

② 193号住居址 (挿図4、第1図17~19)

調査区西側に検出した。198・203号住居址を切り、192号住居址に切られる。調査区外に大半がかかる。不整形を呈する竪穴住居址で、南東壁は長さ3.0m、方向はN66.6°Wを示す。壁高は21~26cmで急な立ち上がりを示すが、203号住居址と重複する部分は良好な状態で検出できなかった。西隅の柱穴上部より土師器長胴の甕が混入出土している。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器蓋・坏等があり、出土量は少ない。土師器甕(第1図17)は頸部の屈曲が急で、胴部球形を呈すると思われる。内外面にハケナデ・ヘラミガキ調整される。他に頸部に暗文風ヘラミガキが施されるもの、外面カキメ調整されるものがある。

出土遺物・重複関係等から、本址の時期は古墳時代後期後半に比定される。



挿図7 KUR4612 194・195・199号住居址

③ 194号住居址（挿図7、第2・40図）

調査区西側に検出された。195・199号住居址、溝址31を切る。東・南隅を除く壁を検出し、6.0×5.2mの方形を呈する竪穴住居址であると思われる。北東壁方向はN52.9°Wを示す。195号住居址上に貼り床されており、やや軟弱である。床面中央付近に焼土・炭が検出された。壁高は15～30cmを測り、緩やかな立ち上がりを示す。北西壁はほぼ中央にカマドが構築されたと考えられるが、遺存状態は不良で、わずかに粘土・焼土が確認されたのみである。粘土カマドの可能性が考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・甑、須恵器甕・蓋・坏・高坏・甕・器台、砥石等があり、出土量は多い。土師器甕（第2図1～3）は小型で胴上部に最大径をもち、内面にハケナデが施される。また甕底部片（4）はハラケズリ後ヘラナデされる。坏（7・8）は内面黒色処理される。甑（10）は内外面丁寧なヘラミガキが施され、単孔で、孔の径が大きい。須恵器器台は透かしがあり、内外の器面が荒れる。砥石（14）は砂岩製で、据置型である。他に弥生時代中期・古墳時代前期・中世等の遺物が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

④ 195号住居址（挿図7、第1～6図、第40図）

調査区西側で検出された。199号住居址・溝址31を切り、194号住居址に切られる。4.6×4.4mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN53.9°Wを示す。上面に194号住居址の貼り床が確認された。壁高は194号住居址床面から3～8cmを測る。周溝は南東壁中央直下に部分的に掘り込まれており、幅35cmを測るが、深さ13～45cmと一定せず、底面の状態は凹凸がある。床面は中央を中心に硬く締まっている。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢・甑、須恵器甕・蓋・坏・器台・長頸瓶等があり、出土量はやや少ない。土師器甕は底部ヘラケズリ整形される。高坏坏部は内面黒色処理され、外面に稜を有する。鉢は大形のボウル状を呈し、口縁部が外反する、他に弥生時代中期および古墳時代前期の遺物が少量混入出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

⑤ 198号住居址（挿図4）

調査区西側に検出された。193・203号住居址を切り、192・202号住居址、小竪穴13に切られる。重複関係等のため規模等詳細は不明である。床面は全体的に軟弱である。193号住居址床面の上位に炭・焼土が多く認められ、北西壁の中央からややはずれるものの、本址のカマドの痕跡とも考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・坏等であり、出土量は僅少である。土師器坏は口縁が外半し、内面黒色処理される。遺物の大半は古墳時代後期のものであるが、弥生時代中期壺片、平安時代の土師器甕片が混入出土する。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期の住居址を思われる。

⑥ 199号住居址（挿図7、第3図7～10、第41図）

調査区西側に検出した。194・195・202号住居址に切られる。北東・南西方向4.2mの方形を呈すると考えられる竪穴住居址であるが、重複遺構のため詳細は不明である。壁高は16～33cmを測り、壁の検出された部分では立ち上がりはやや緩やかである。床面は硬く締まる。北西壁ほぼ中央付近にカマドが構築されたと考えられ、焼土・炭が認められた。遺存状態が悪く、カマドの形状は不明である。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢、須恵器壺・甕・蓋坏等があり、出土量は少ない。土師器坏は口縁部が外反し、内面に稜を持つ。小型のもの、内面黒色処理されるもの等ある。鉢（第3図8）は平底で内外面ヘラミガキが施される。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

⑦ 202号住居址（挿図4）

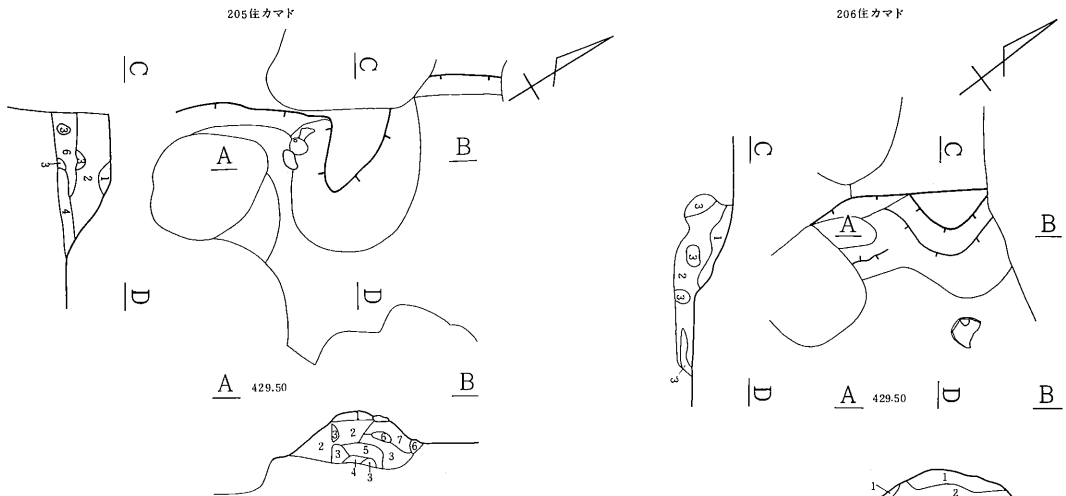
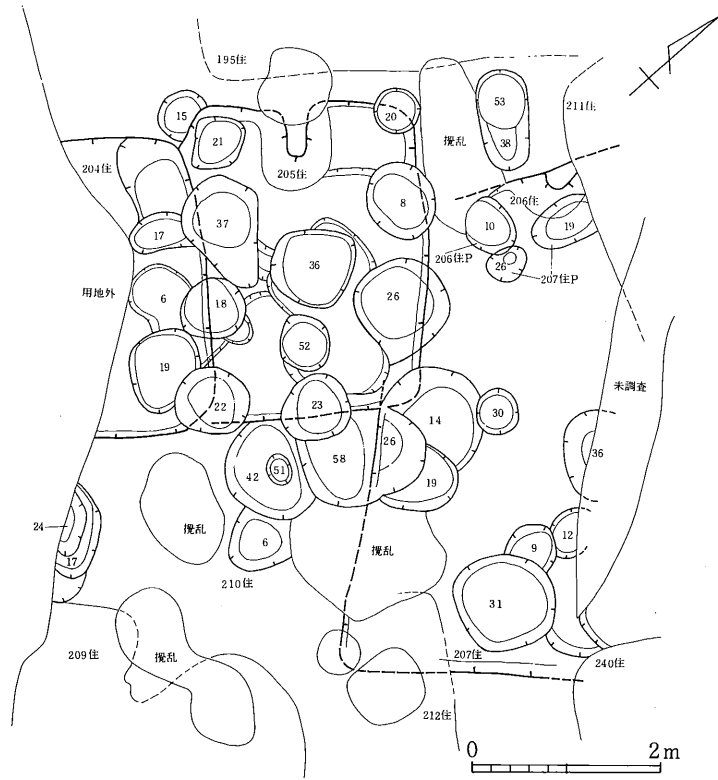
調査区西側、193・197・198・203号住居址を切り、201号住居址・小竪穴13に切られて検出された。南東・南西壁の一部を検出したのみで、重複遺構のため、平面形・規模等の詳細は不明である。南西壁直下には、柱穴・攪乱が集中するため不鮮明であるが、周溝状の掘り込みがある。中央の床面が遺存する部分は硬く締まる。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・甑、須恵器甕・蓋・坏等であり、出土量は僅少である。土師器高坏は外面に不明瞭な稜があり、放射状のヘラミガキ痕が認められる。須恵器蓋は焼成不良の軟質なものである。

詳細時期は不明であるが、重複関係・出土遺物等から古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。

⑧ 203号住居址（挿図4）

調査区西側で検出した。193・197・198・202号住居址に切られる。方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、東西壁の一部が遺存しており、西壁の方向はN28°Eを示す。床面は遺存状態が悪く、全体的に軟弱である。壁はやや急な立ち上りを示し、壁高は15cmを測る。東西壁に平行する2本の幅約20cmの溝が、中央部にほぼ等間隔に掘り込まれる。



1. 暗褐色土
2. 焼土、炭混り暗褐色土
3. 黄褐色土
4. 焼土、炭混り暗黄褐色土
5. 炭混り黒褐色土
6. 黒色土
7. 暗黄褐色土

1. 明褐色土
2. 暗褐色土
3. 黄色砂質土混り暗褐色土

挿図8 KUR4612 204~207・210号住居址

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・蓋坏等であり、出土量は僅少である。土師器甕は胴部下半がヘラケズリされる。坏は外面に稜があり、内面黒色処理される。須恵器甕は外面に格子叩きが施される。他に弥生土器壺・灰釉陶器碗が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。

⑨ 204号住居址（挿図8、第3図11～13）

調査区南西側に検出した。205・210号住居址を切る。南西半が調査区外にかかる。南東・北西方向3.1mを測り、隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址である。壁高35cmを測り、全体的にやや緩やかに立ち上がる。床面は柱穴が多く掘り込まれているため硬い部分が検出されなかった。調査範囲際ほぼ中央床面に少量の焼土が検出された。カマドは北西壁ほぼ中央に位置し、大半が調査区外にかかる。

出土遺物は土師器甕・坏・甑、須恵器蓋・坏、砥石等があり、出土量は僅少である。土師器甕（第3図11）は長胴形を呈し内外ヘラミガキが施される。坏は暗文風のヘラミガキが施されるもの、内面に稜をもつ小型のもの、外面に稜をもつもの等ある。砥石（13）は当擦型の小型のものである。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期と考えられるが、詳細は不明である。

⑩ 205号住居址（挿図8、第4図1・2、第39図10・11、第41図）

調査区南西側に検出した。207・210号住居址を切り、204号住居址に切られる。また、206号住居址と重複する。3.3×2.7mの長方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、主軸方向はN46.8°Wを示す。重複諸遺構のため床面は遺存状態が悪いが、残存部分では硬い面が検出された。壁はやや急な立ち上がりを示し、壁高は約20cmを測る。北西壁中央にカマドが構築されており、粘土カマドと考えられる。カマド内より須恵器甕が出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋坏・高坏・甕、土・石製紡錘車等であり、出土量はやや少ない。土師器坏は内面黒色処理されるものがある。須恵器甕は内外面平行叩きが施されるもの、外面に平行叩きないし格子叩きが施されるものがある。甕（第4図2）は口縁部を欠損するが、口が大きく開く器形で、口縁直下に細かい波状文が施文される。紡錘車は10が土製、11が石製である。

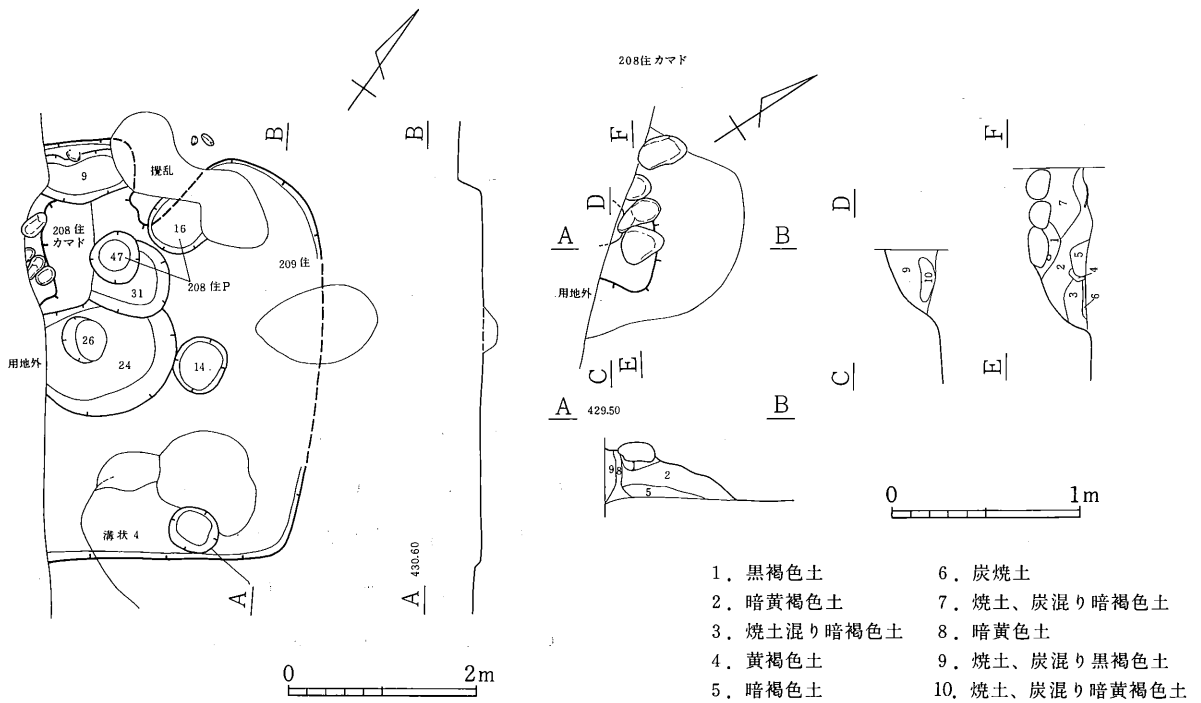
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期後半の竪穴住居址である。

① 208号住居址 (挿図9、第4図3～6)

調査区南西側に検出された。209号住居址上部に検出されたカマドのみの住居址である。カマドの約半分が調査区外にかかる。袖石と考えられる径20～30cmの扁平な河原礫が横倒しになっており、破却された可能性がある。焼土が厚く発達しており、相当長期間使用されたと考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕等があり、出土量は僅少である。土師器坏は内面黒色処理されるもの(第4図3)、外面に不明瞭な稜をもつものがある。須恵器甕は外面平行叩き内面同心円叩きの施されるもの(5)等がある。

出土遺物から古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。



挿図9 208・209号住居址

② 209号住居址 (挿図9)

調査区南西側に検出された。約半分が調査区外にかかる。210号住居址を切り、208号住居址に切られる。不整隅丸方形を呈する竪穴住居址で、南東・北西方向は4.4mを測り、北東壁はN32.3°Wを示す。壁高は26cmを測り、急に立ち上がる。床面は重複する柱穴等のため遺存状態は不良であり、残った部分は軟弱である。208号住居址カマド北東にわずかに焼土が検出されており、柱穴および攪乱にカマドが壊された可能性もある。焼けた花崗岩が出土した。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋坏等があり、出土量は少ない。土師器甕は小型で内面ヘラナデ外面ヘラミガキが施される。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に属するものと思われる。

⑬ 210号住居址（挿図8、第4図7～9）

調査区南西側に検出した。204～209号住居址に切られる。床面が遺存するのみで、重複遺構のため平面形・規模等詳細は一切不明である。床面は全体的にやや軟弱である。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢・甗、須恵器甕等があり、出土量は少ない。土師器甕は外面縦位のヘラケズリが施される。坏（第4図7）は暗文風のヘラミガキが施され、外面はヘラケズリ後ヘラナデされる。須恵器甕（8）は外面平行叩き内面同心円叩きが施され、内面はナデ消しされる。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期と思われる。

⑭ 212号住居址（挿図3）

調査区南西側に検出した。214・234号住居址を切り、207号住居址と重複する。北壁の一部および北西隅を確認したのみで、規模等詳細は不明であるが、方形を呈する竪穴住居址と思われる。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕等があり、出土量は僅少である。土師器甕は頸部の立ち上がり小さく、内面ハケナデ・口縁部横ナデが施される。坏は内面黒色処理される。

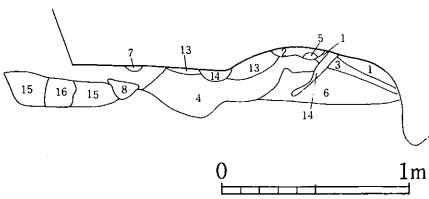
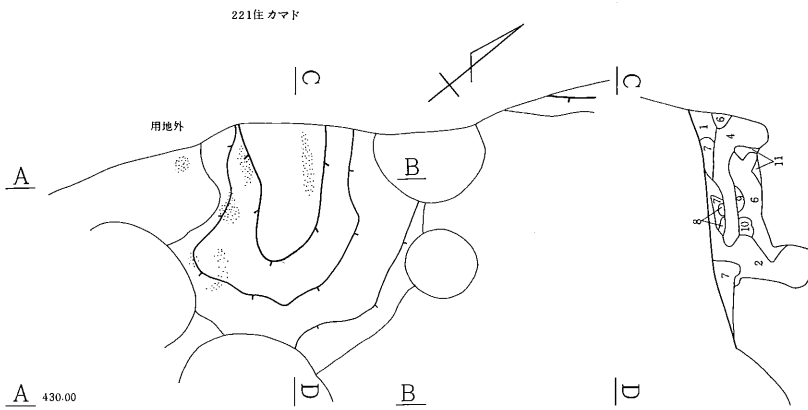
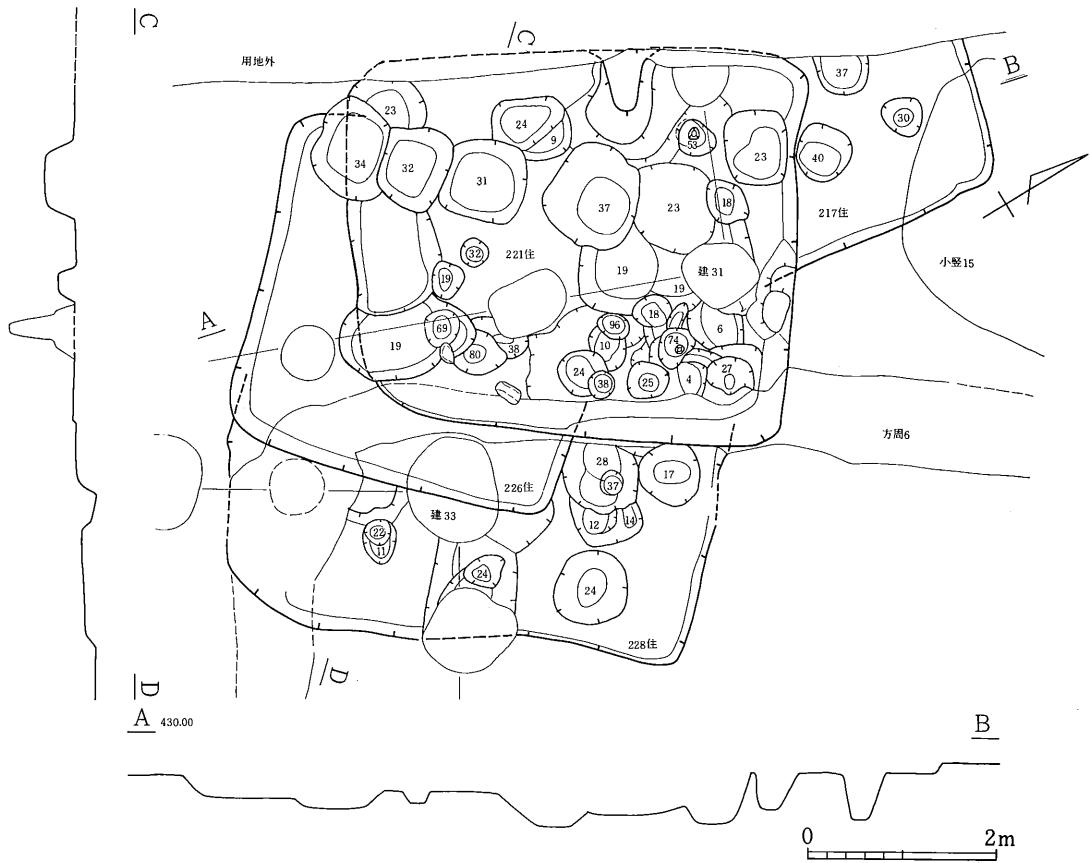
出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期と思われる。

⑮ 215号住居址（挿図3）

調査区南側に検出された。238号住居址と重複し、また半分以上が調査区外にかかり、本址の詳細を把握していない。調査範囲際にカマドの残骸と考えられる部分があり、竪穴住居址と判断した。

出土遺物は土師器甕・坏・鉢、須恵器甕等があり、出土量は少ない。土師器甕は内面上部ハケナデ外面ヘラナデが施されるもの、外面縦位のハラミガキの施されるもの等がある。坏は内面黒色処理される。鉢は口縁部が小さく外反し、胴部中央に最大径をもつ。

出土遺物から古墳時代後期後半に比定される。



- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 黄色砂質土混り黒色土 | 9. 炭混り黒色土 |
| 2. 黒色土(焼土含む) | 10. 黄色土 |
| 3. 黄色砂質土 | 11. 黒色土 |
| 4. 黒褐色砂質土 | 12. 暗褐色土 |
| 5. 灰 | 13. 黒色土混り焼土 |
| 6. 黒色土混り黄色砂土 | 14. 黒色土(攪乱) |
| 7. 焼土混り黒色土 | 15. 黄色砂土混り青褐色土 |
| 8. 焼土 | 16. 黒色土混り黄色粘土質土 |

挿図10 KUR4612 217・221・226・228号住居址

⑯ 217号住居址 (挿図10)

調査区北側で検出された。221号住居址を切り、小竪穴15に切られる。221号住居址上部に貼り床が検出された。大部分が調査区外にかかり、また重複関係のため詳細は不明であるが、方形を呈する竪穴住居址と考えられる。北壁の方向はN85.2°Wを示す。床面は硬く締まる。上部が大きく削平され壁の立ち上がりの状態は不明であるが、壁高は12cmを測る。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・坏等であり、出土量は僅少である。

出土遺物・重複関係等から、古墳時代後期と考えられる竪穴住居址である。

⑰ 221号住居址 (挿図10、第4図10~15)

調査区北側に検出した。方形周溝墓6を切り、217号住居址に切られる。また226・228号住居址と重複する。北西壁が調査区外にかかるが、4.7×推定4.0mの不整隅丸方形を呈する竪穴住居址である。壁高は約30cmを測り、立ち上がりはやや緩やかである。床面は重複して掘り込まれた柱穴のため、良好に遺存する部分はない。北西壁中央やや北寄りに焼土が検出され、この部分にカマドが構築されたと思われたが、精査の結果、硬く締まった焼土が左側に検出され、ほぼ北西壁中央に位置することが判明した。遺存状態は悪いが、袖石及びその抜き取り痕が確認されないことから粘土カマドであると思われる。焼土がやや厚くしかも締まって検出されたことから相当使用されたものと考えられる。

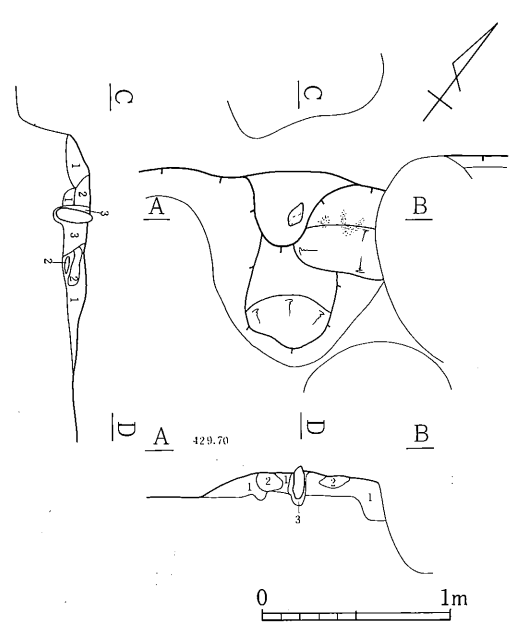
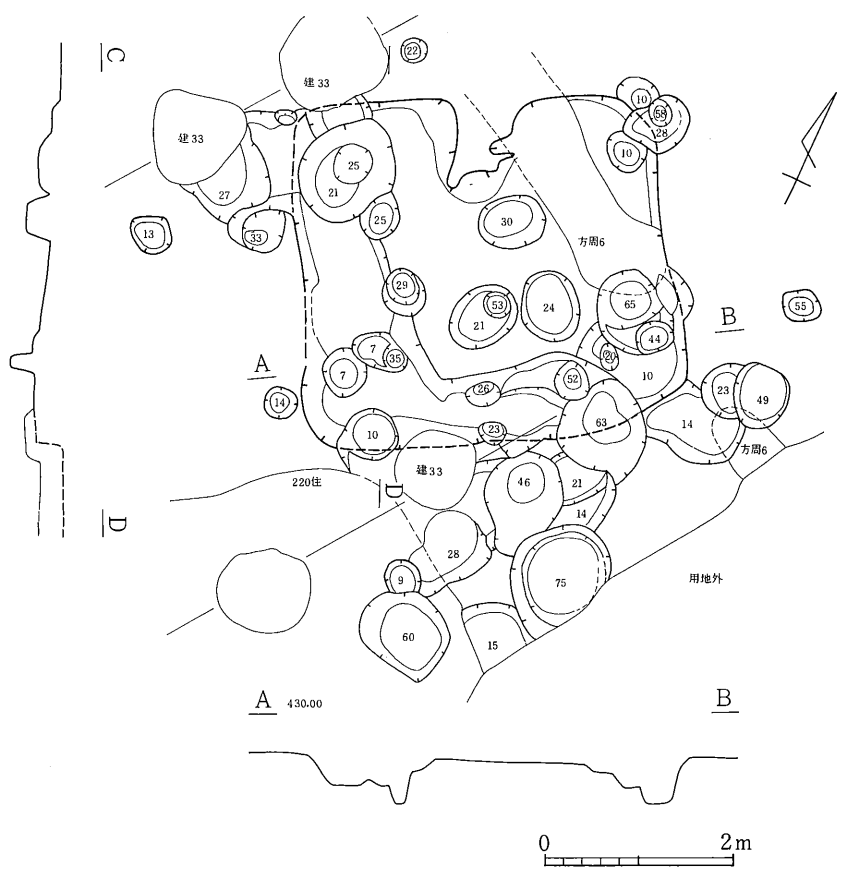
出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏・鉢、須恵器甕・蓋・坏・器台等があり、出土量はやや少ない。土師器坏は口縁が外折し、内面黒色処理される。高坏(第4図13)はやや小型で坏部身深であり、外面に稜をもつ。須恵器器台(15)は波状文が施され、透かし穴をもつ。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期の遺構と考えられる。

⑱ 222号住居址 (挿図11、第5図1~8)

調査区北側やや中央寄りで検出された。方形周溝墓6を切り、掘立柱建物址33・集石35に切られる。3.8×3.6mの隅丸方形を呈する竪穴住居址であり、主軸方向はN24.8°Wを示す。南壁・西壁の一部は重複する遺構のため確認できなかった。壁高は8~12cmを測り、北壁・東壁は急な立ち上がりを示す。中央部分で硬く締まった床面が検出されたが、南壁・西壁下にやや幅広の周溝状の掘り込みがなされる。幅70~90cm、深さ3~21cmを測る。遺存状態が不良であるものの、北壁ほぼ中央にカマドが構築されている。中央やや壁寄りに検出された石は支脚と思われる。袖石の据えられた痕跡はなく、粘土カマドの可能性はある。焼土はあまり発達していない。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・坏等があり、出土量は少ない。土師器甕(第5図1)は胴中央に最大径があり、外面はヘラミガキが施される。内面に靫痕および接合痕



- 1. 暗褐色土
- 2. 焼土混り暗黄褐色土
- 3. 黒色土

挿図11 K U R 4612 222号住居址

が認められる。坏は内面黒色処理されるもの（6）、暗文が施されるものがある。他に古墳時代前期・平安時代後期の遺物が混入出土する。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に属する竪穴住居址である。

⑲ 224号住居址（挿図12）

調査区中央で検出された。220号住居址を切り、225・241・247号住居址に切られる。また掘立柱建物址32と重複する。重複遺構のため、平面形・規模等一切の詳細は不明である。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋坏等があり、出土量は僅少である。土師器坏は内面黒色処理されるものがある。須恵器蓋坏は坏身が浅い。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に属するものと思われるが、詳細は不明である。

⑳ 225号住居址（挿図12、第5図9～第6図8）

調査区中央で検出された。220・224・247号住居址を切り、230・240・241号住居址に切られる。また掘立柱建物址32と重複する。247号住居址上部に貼り床が検出された。床面・焼土が検出されたのみで、重複遺構のため、平面形・規模等の詳細は不明である。247号住居址南西側の床面は硬く締まる。241号住居址脇に検出された焼土はあまり発達していないが、カマドの可能性もある。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏・鉢、須恵器甕・蓋・坏・高坏・甗、砥石、鞆羽口等があり、出土量は多い。土師器高坏（第5図16）は須恵器模倣の長脚で透かしをもつもの、鞆羽口に転用されたもの（第6図1）がある。鉢（2）は口縁がわずかに外反し、最大径を測る。内面暗文風のヘラミガキ、底部ヘラケズリが施される。

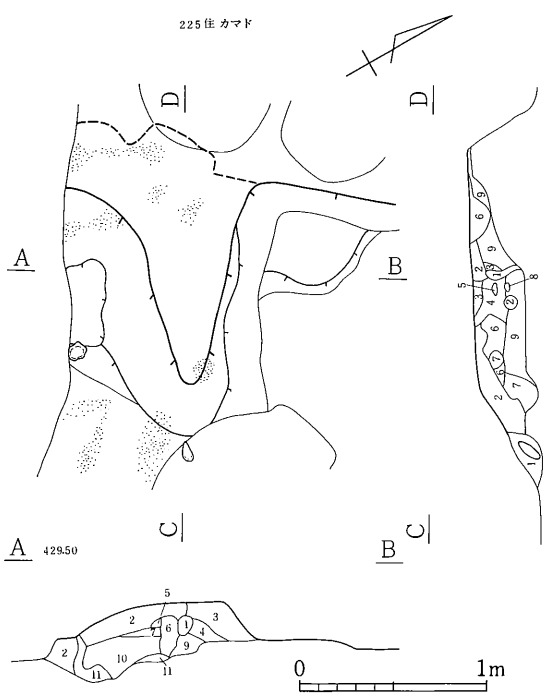
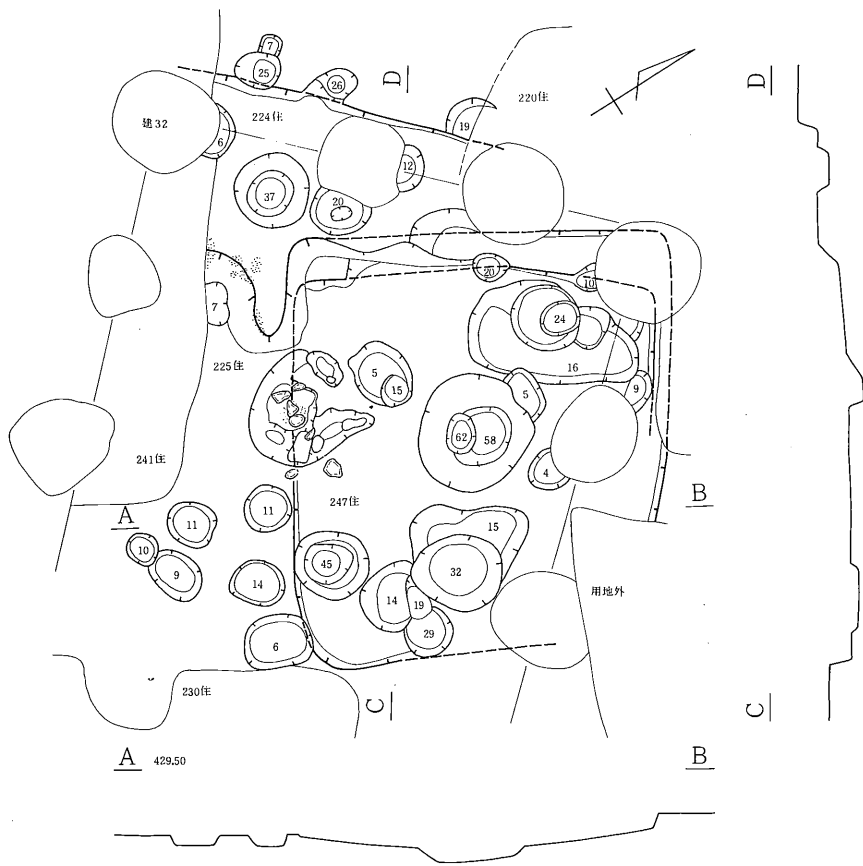
出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期である。

㉑ 226号住居址（挿図10、第6図9～11）

調査区北側に検出された。方形周溝墓6を切り、また、221・228号住居址と重複する。3.6×3.6mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、南西壁の方向はN46.7°Wを示す。重複遺構のため、床面が良好に遺存している部分はなく、床面の状態は不明である。壁高は約15cmを測り、緩やかな立ち上がりを示す。支柱穴はじめ付属施設の詳細は不明である。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・坏等があり、出土量は少ない。土師器坏・高坏は内面黒色処理されるものがある。他に弥生時代中期・古墳時代前期・平安時代の遺物が混入出土した。

出土遺物の大半が古墳時代後期のものであり、同時期の竪穴住居址と考えられる。



1. 黒色土
2. 暗褐色土(焼土含む)
3. 暗褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 暗褐色土混り焼土
7. 焼土混り暗褐色土
8. 黄色粘土
9. 黄色土混り暗褐色土
10. 焼土黄色土混り暗褐色土
11. 焼土混り黄色砂土

挿図12 KUR4612 224・225・247号住居址

㉒ 228号住居址（挿図10、第6図12～16）

調査区北側で検出された。方形周溝墓6を切り、また、221・226号住居址と重複する。隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、南西・北東方向は5.0mを測り、南東壁はN31.7°Eを示す。壁高は5～12cmを測り、東側は急に立ち上がるのに対し、南側は緩やかな立ち上がりである。重複する諸遺構のため付属施設等の詳細は不明である。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・坏・器台等があり、出土量は少ない。土師器坏は内面ヘラミガキ外面ハラケズリが施されるもの（第6図14）、内面黒色処理されるものがある。須恵器器台（16）は波状文が施文される。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に属するものと思われるが、詳細は不明である。

㉓ 231号住居址（挿図6、第7図1～5、第40図9、第41図）

調査区西側で検出された。192・245号住居址を切り、250号住居址に切られる。方形を呈する竪穴住居址で、規模は(4.5)×4.3m、主軸方向はN77.6°Wを示す。245号住居址との重複部分はやや軟弱な床面であるが、南東半は硬い部分が良好に遺存する。壁高は5～12cmと検出面から床面までが浅く、壁の立ち上がりの状態は不明である。南東壁側の2本の支柱穴が確認され、うち東側の柱穴は12cmと浅いが、径約40cmの円形を呈する掘り方である。南東壁やや南側に土手状の高まりがある。北西壁中央やや西寄り245号住居址上部にカマドが構築されていたと考えられる。カマドの遺存状態は悪く、構造等不明で焼土が遺存するのみである。他に北東壁際ほぼ中央に硬砂岩の棒状自然礫が集中出土し、東隅から滑石製の有孔円板が出土した。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏、須恵器壺・甕・蓋、有孔円板、不明土製品等があり、出土量はやや少ない。土師器壺は胴上半で内外灰褐色を呈する。甕（第7図1）は胴中央に最大径があり、頸部の立ち上がりが小さい。外面に黒斑が認められる。2は内面黒色を呈する。高坏は坏部下半に稜をもつもの、内面黒色処理されるものがある。坏は口縁部がわずかに外反し、内黒である。土製品（3）は分銅形を呈しており、分銅と考えられる。他に縄文時代中期深鉢、弥生時代中・後期の壺・甕片、古墳時代前期の土師器甕片、白磁の碗等が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期の住居址と考えられるが、詳細時期は不明である。

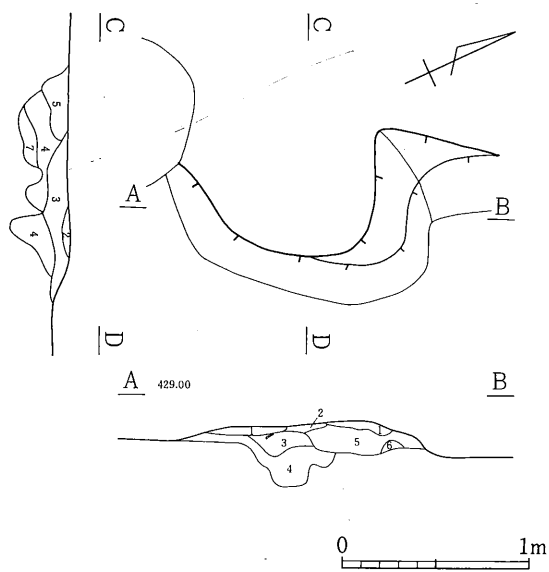
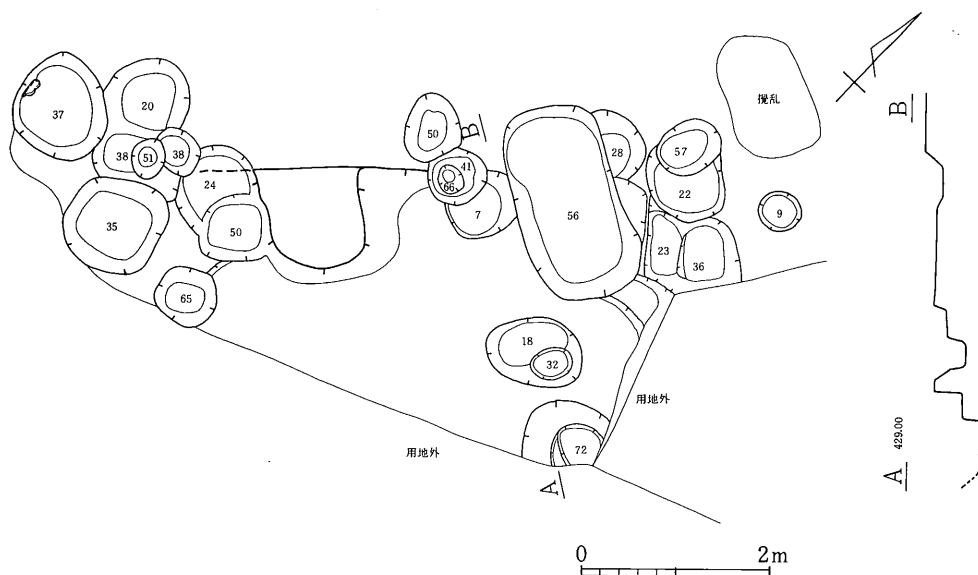
㉔ 233号住居址（挿図13、第7図6～10、第40図7）

調査区南隅に検出された。大部分が調査区外にかかり、また重複する柱穴のため、平面形・規模等詳細は不明である。西壁にカマドが構築されたと考えられ、精査の結果、袖石の抜き取り痕が検出されたことから石芯粘土カマドであると考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢、須恵器壺・甕・蓋坏・甗・平瓶、石製模造品等であり、

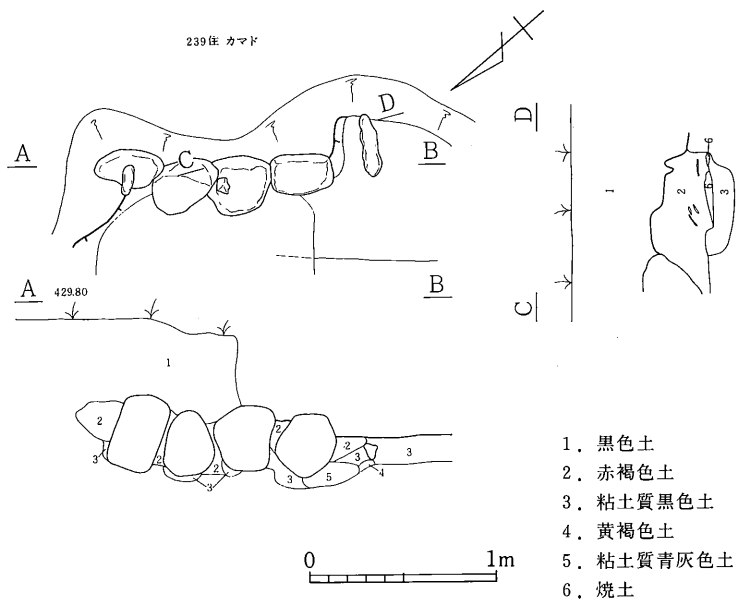
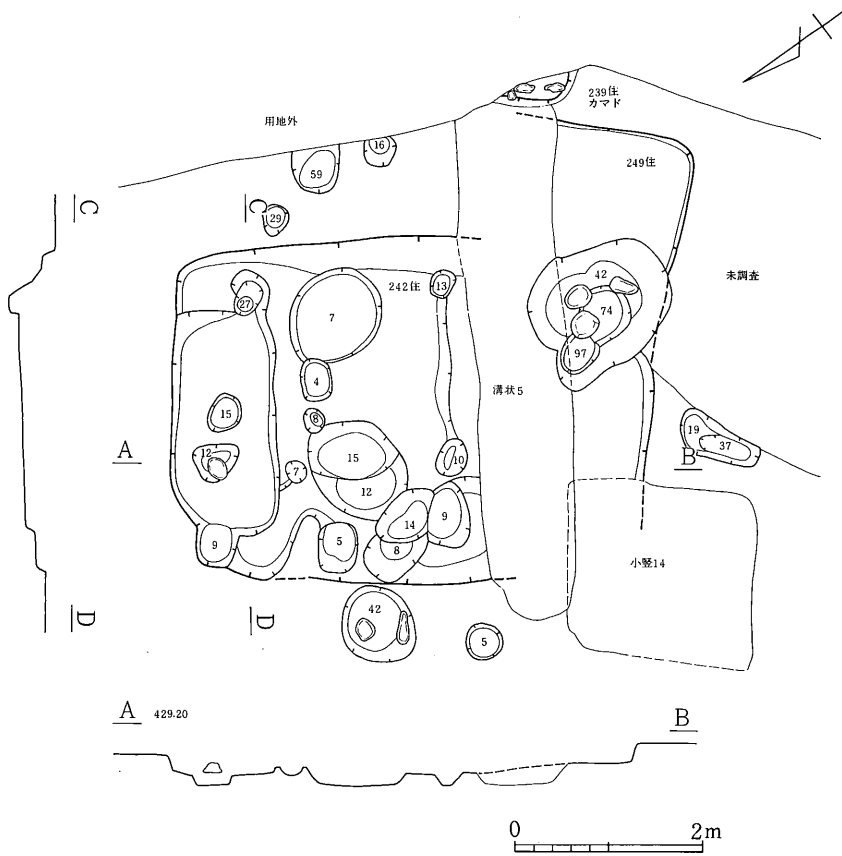
出土量は少ない。土師器環は内面黒色処理されるもの、暗文風ヘラミガキの施されるもの、外面に稜をもつものがある。高坏は内面黒色処理され、坏部外面に稜をもつ。

出土遺物から本址の時期は古墳時代後期に比定される。



1. 焼土
2. 焼土混り黒褐色土
3. 焼土混り暗黄褐色砂質土
4. 暗黄色砂質土
5. 焼土混り暗黄色砂質土
6. 黄褐色砂質土
7. 焼土、黄色土混り黒褐色砂質土

挿図13 KUR 4612 233号住居址



挿図14 KUR4612 239・242・249号住居址

②⑤ 239号住居址（挿図14）

調査区南東隅で検出された。242・249号住居址、溝状址5と重複する。調査区際にカマドを検出したのみであり、平面形・規模等詳細は不明である。カマドは右袖を調査したにすぎないが、30～40cmのやや扁平な礫4個を立て並べてあり、石芯粘土カマドである。カマドの南西がわが焚き口と思われ、この付近に焼土が検出された。溝状址5南東側が本址の周溝の一部である可能性もある。

出土遺物は土師器甕・高坏等があり、出土量は僅少である。土師器甕は長胴で胴中央に最大径があり、口縁の外反は小さい。高坏は脚部内面に接合痕が認められる。

出土遺物等から古墳時代後期に属する竪穴住居址と考えられる。

②⑥ 242号住居址（挿図14、第7図11～13）

調査区南東寄りに検出した。239・249号住居址・溝状址5と重複する。隅丸長方形を呈する竪穴住居址である。溝状址5南東側が239号住居址周溝とすると、北西側は本址に伴う可能性があり、規模は4.2×3.6mとなる。南東・北西方向はN54.3°Wである。北東壁は急に立ち上がるのに対し、南東・北西壁はやや緩やかに立ち上がる。床面は平坦でなく、硬い部分は検出されなかった。北西壁ほぼ中央付近に焼土がわずかに認められることから、柱穴が多数重複するものの、この位置にカマドが構築された可能性もある。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏・鉢・甗、須恵器壺・甕・蓋坏等があり、出土量はやや少ない。土師器坏は口縁がわずかに外折するもの、内面黒色処理されるもの等ある。鉢は内面ハケナデが施されるが、外面は器面荒れが著しい。甗はいずれも単孔である。須恵器甕（第7図13）は頸部に波状文が施される。他に縄文時代中期・弥生時代中期・古墳時代前期・平安時代前期の遺物が混入出土した。

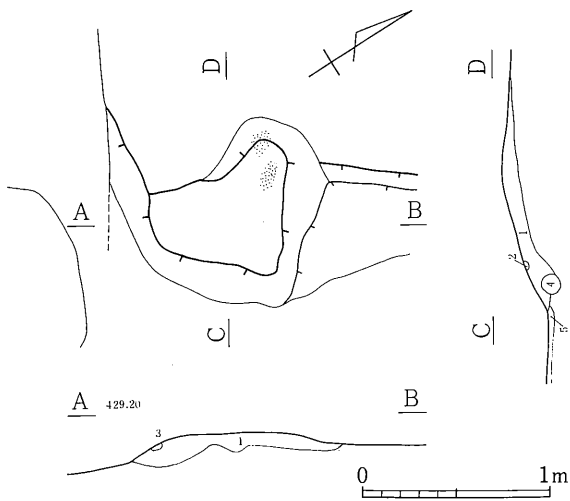
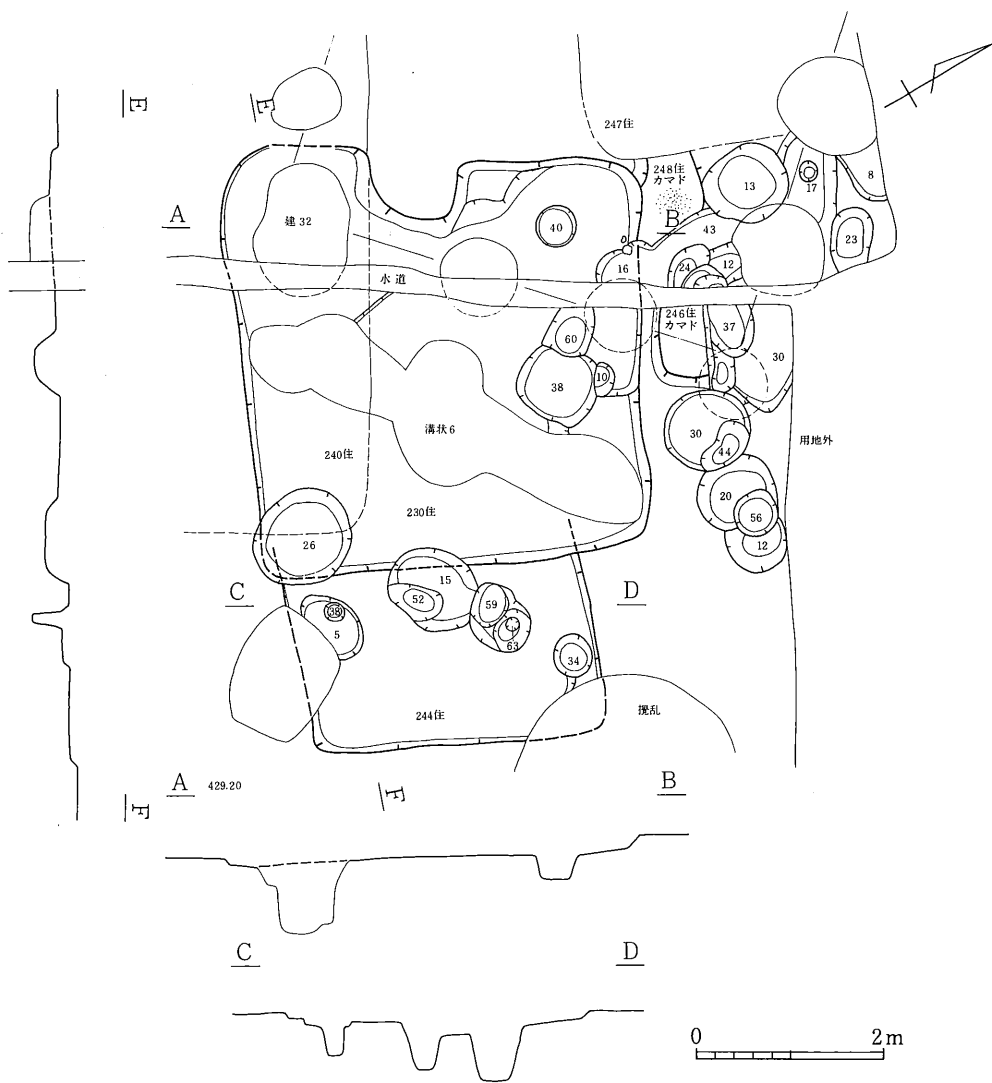
出土遺物等から本址の所属時期は古墳時代後期と思われる。

②⑦ 244号住居址（挿図15）

調査区中央やや東側で検出された。230号住居址に切られる。また北東隅および南西壁が攪乱により壊される。方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、南西・北東方向は3.1m、N21.3°Eを測る。検出面から床面まで浅く、壁の立ち上がりの状態は不明である。床面は硬い部分は検出されなかった。重複関係のため、付属施設等の詳細は不明である。

出土遺物は土師器甕、須恵器壺・坏等であり、出土量は僅少である。

本址の所属時期は出土遺物等から古墳時代後期と考えられる。



1. 黄色土混り暗褐色土
2. 黄色粘土
3. 焼土
4. 黒色土(攪乱)
5. 貼床(黒色土混り黄色土)

挿図15 KUR4612 230・244・246・248号住居址

㊸ 245号住居址 (挿図6)

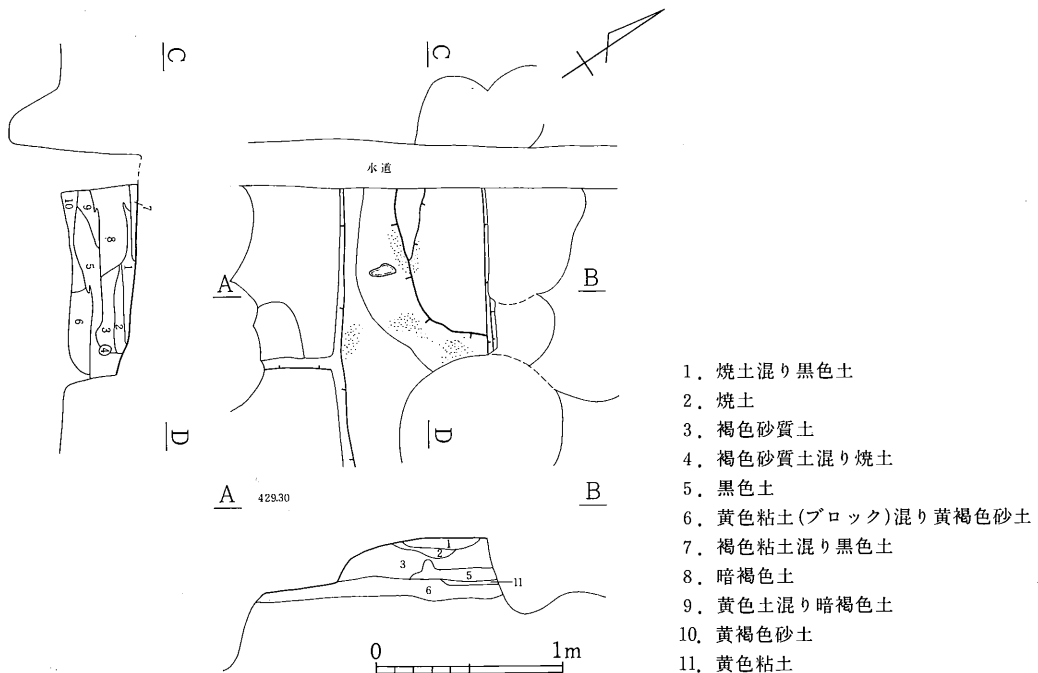
調査区西側に検出された。192号住居址を切り、231・250号住居址、土坑62に切られる。不整形を呈する竪穴住居址で、重複遺構と一部調査区外にかかるため、不明な点が多い。東西方向は4.0mを測り、南西壁の方向はN46.8°Wを示す。埋土は黄土混暗褐色土の一層であり、床面は全体的に軟弱である。壁高は14~19cmを測り、やや急な立ち上がりを示す。主柱穴は東隅の1本を検出したのみで、他の3本のうち1本は調査区外にかかり、2本は他の遺構との重複で不明である。南西壁ほぼ中央に階段状の張り出しをもつ。

出土遺物はほとんどなく詳細時期は不明であるが、重複関係等から古墳時代後期の住居址と考えられる。

㊹ 246号住居址 (挿図15・16)

調査区中央やや東側で検出された。248号住居址を切り、230号住居址に切られる。また掘立柱建物址32と重複する。カマドが検出されたのみで、平面形・規模等詳細は不明である。床面は230号住居址床面とほぼ同レベルまで下がる。カマドは焼土がやや厚く発達している。構造は不明であるが、粘土カマドであると思われる。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器蓋等があり、出土量は僅少である。土師器甕は口縁に最大径



挿図16 K U R 4612 246号住居址カマド

がある。坏は内面黒色処理される。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期の遺構と考えられる。

③〇 247号住居址 (挿図12)

調査区中央に検出した。220・224・248号住居址を切り、225号住居址に切られる。また掘立柱建物址32と重複する。隅丸方形を呈する竪穴住居址であり、重複遺構のため、不明な点が多いが規模は推定4.0×3.8mを測る。床面は軟弱である。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢、須恵器甕・蓋等があり、出土量は僅少である。土師器坏は内面黒色処理される。鉢は外面下半ヘラケズリ整形後ヘラミガキが施される。

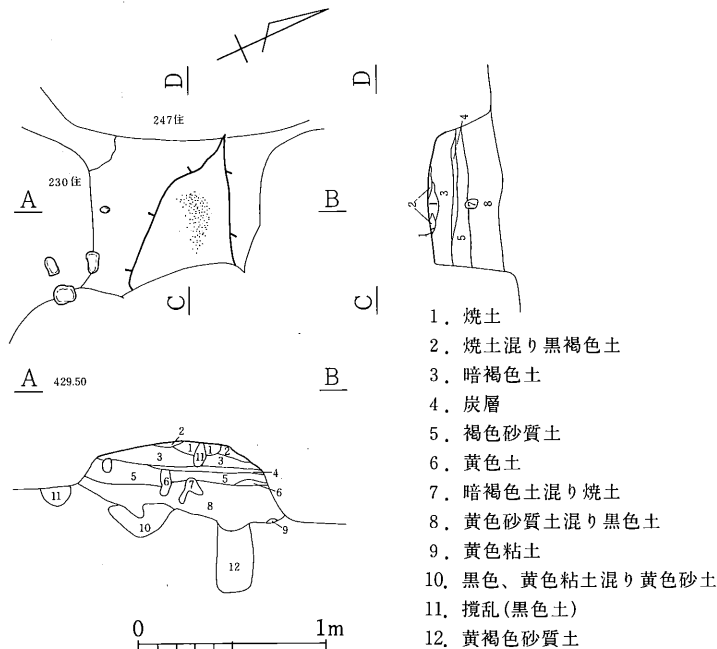
出土遺物・重複遺構等から古墳時代後期に位置づくと考えられる。

③① 248号住居址 (挿図15・17)

調査区中央やや東側で検出された。230・246・247号住居址に切られ、また掘立柱建物址32と重複する。カマドが検出されたのみで、平面形・規模等詳細は不明である。あるいはカマド北東の調査区際に検出された緩やかな落ち込みが、壁の一部である可能性がある。カマドは焼土・炭層がやや厚く発達している。袖石があり、石芯粘土カマドである。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕等があり、出土量は僅少である。土師器甕は内面ハケナデが施されるものがある。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。



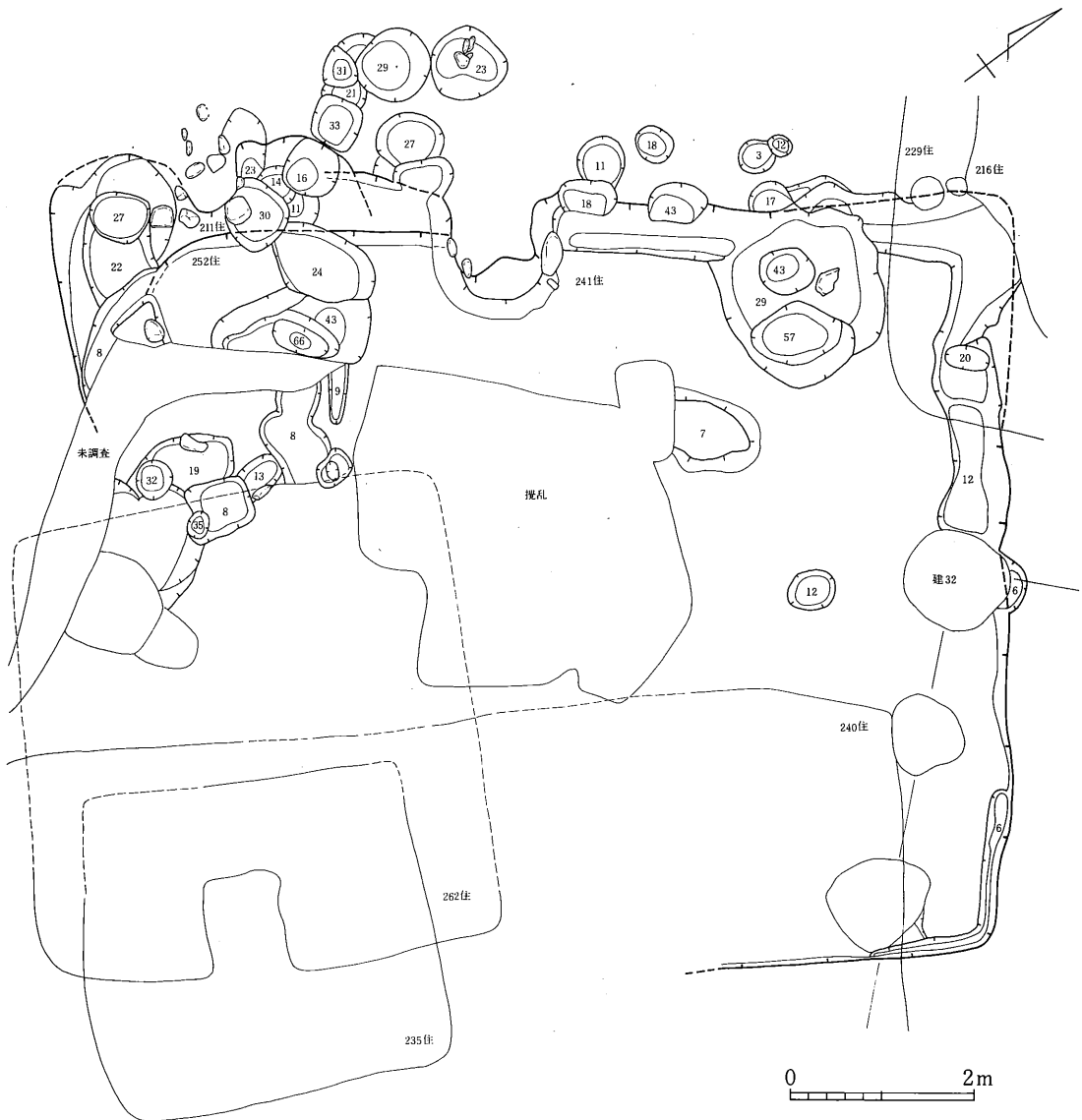
挿図17 KUR4612 248号住居址カマド

③ 252号住居址 (挿図19、第7図14・15)

調査区中央で検出された。241号住居址南西側で壁の一部を確認したにとどまり、平面形・規模等詳細は不明である。211・241号住居址に切られる。本址上部に241号住居址の貼床が検出され、新旧関係はこれによる。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏・鉢、須恵器甕・甗等があり、出土量は僅少である。土師器高坏は内面黒色処理される。他に弥生時代後期・古墳時代前期の遺物が混入出土する。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に属する竪穴住居址である。



挿図18 KUR4612 211・241・252号住居址

4) 奈良・平安時代前期

① 207号住居址 (挿図8、第8図1～10)

調査区南西側に検出した。214号住居址を切り、206・211号住居址に切られる。また205・210号住居址と重複する。重複関係のため平面形・規模等詳細は不明である。壁高は良好に遺存する南東壁で28mを測り、立ち上がりは急である。床面は硬い床面が中央部で検出された。この部分で床面直上および埋土上部に径10～20cm程度の円礫が出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・把手付盃、須恵器甕・蓋坏・砥石等があり、出土量はやや少ない。土師器把手付盃(第8図3)は内外面ヘラミガキが施され、内面黒色処理される。須恵器甕は外面平行叩き内面ナデ消しされるもの、外面格子叩き内面同心円叩きが施されるものがある。坏は高台付で内外灰黒色を呈する。砥石(9・10)は砂岩製の当擦型のものである。

出土遺物・重複関係等から奈良時代の遺構と考えられる。

② 240号住居址 (挿図18、第8図11～第9図)

調査区中央南東側に検出された。230・235・262号住居址に切られ、241号住居址・溝状址7と重複する。一部植栽部分にかかり、調査結果に若干の不整合がある。9.8×8.5mのほぼ方形を呈し、南東・北西方向はN58°Wを示す。床面は全体的に軟弱である。壁の立ち上がりはやや緩やかである。規模が他の遺構と隔絶することを考えると、複数遺構の重複する可能性もあながち否定できない。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・坏等があり、出土量はやや少ない。須恵器蓋は内面に窯印がある。坏(第9図16～18)は高台付で、小型のものもある。

出土遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

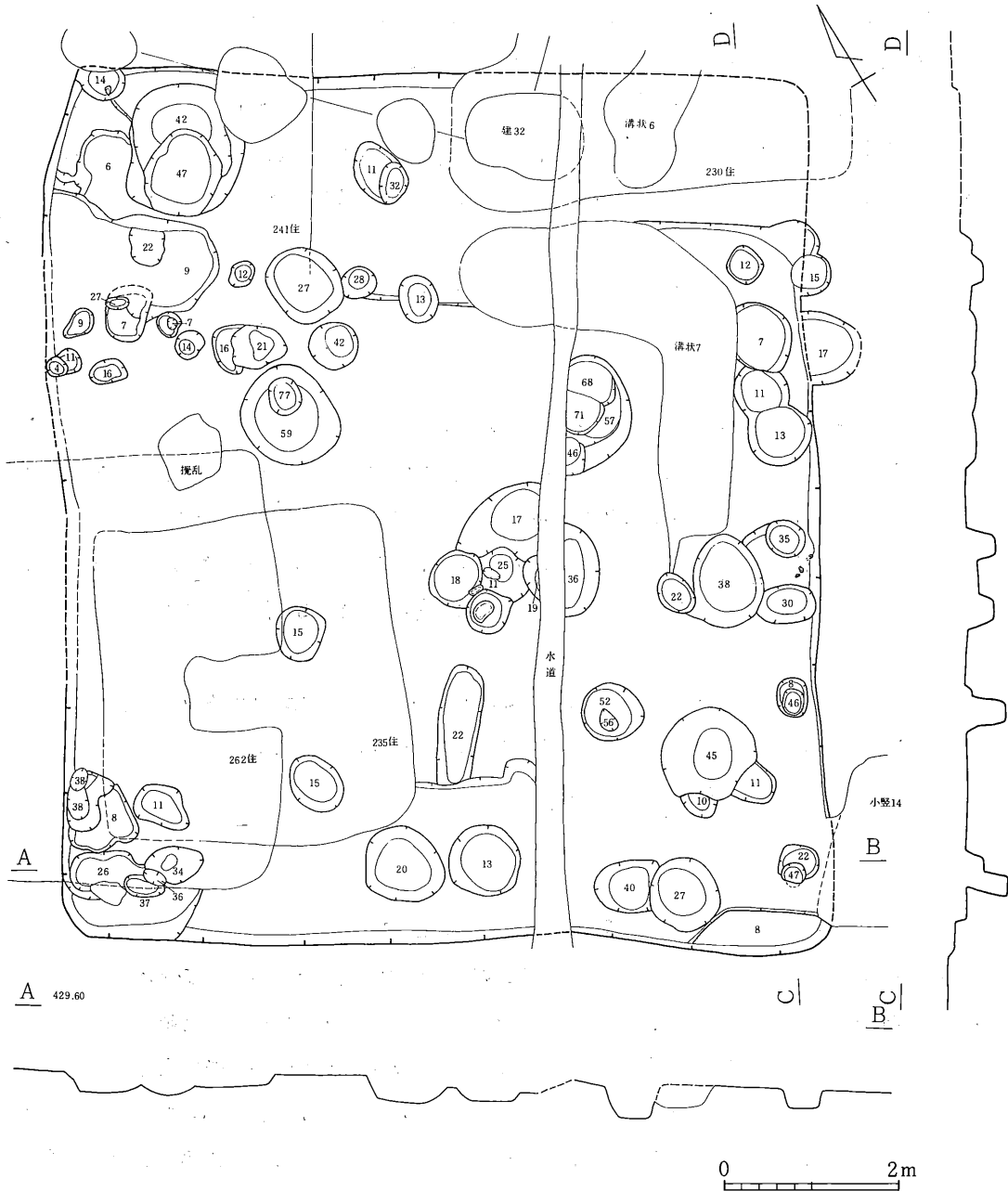
③ 241号住居址 (挿図19、第10図1～9、第42図3)

調査区ほぼ中央に検出された。224・225・252号住居址を切り、211・216・235・262号住居址、掘立柱建物址30に切られる。また229・240号住居址と重複する。やや横長の長方形を呈すると考えられる竪穴住居址であり、重複関係および植栽部分での追加調査のため不明な点も多いが、南東・北西方向8.2mを測り、北東壁の方向はN50.3°Wを示す。252号住居址上の貼り床部分を含めて硬く締まった床面が検出された。壁高は35～44cmを測り、良好に遺存する北西壁では急な立ち上りを示す。北西・北東壁直下には40～60cm、深さ12～24cmの周溝が掘り込まれている。北西壁にカマドが構築されているが、その位置については明確ではない。袖石二対の石芯粘土カマドと考えられるが、遺存状態は良好ではない。袖石を含めカマドは本址の規模に相応する大きなも

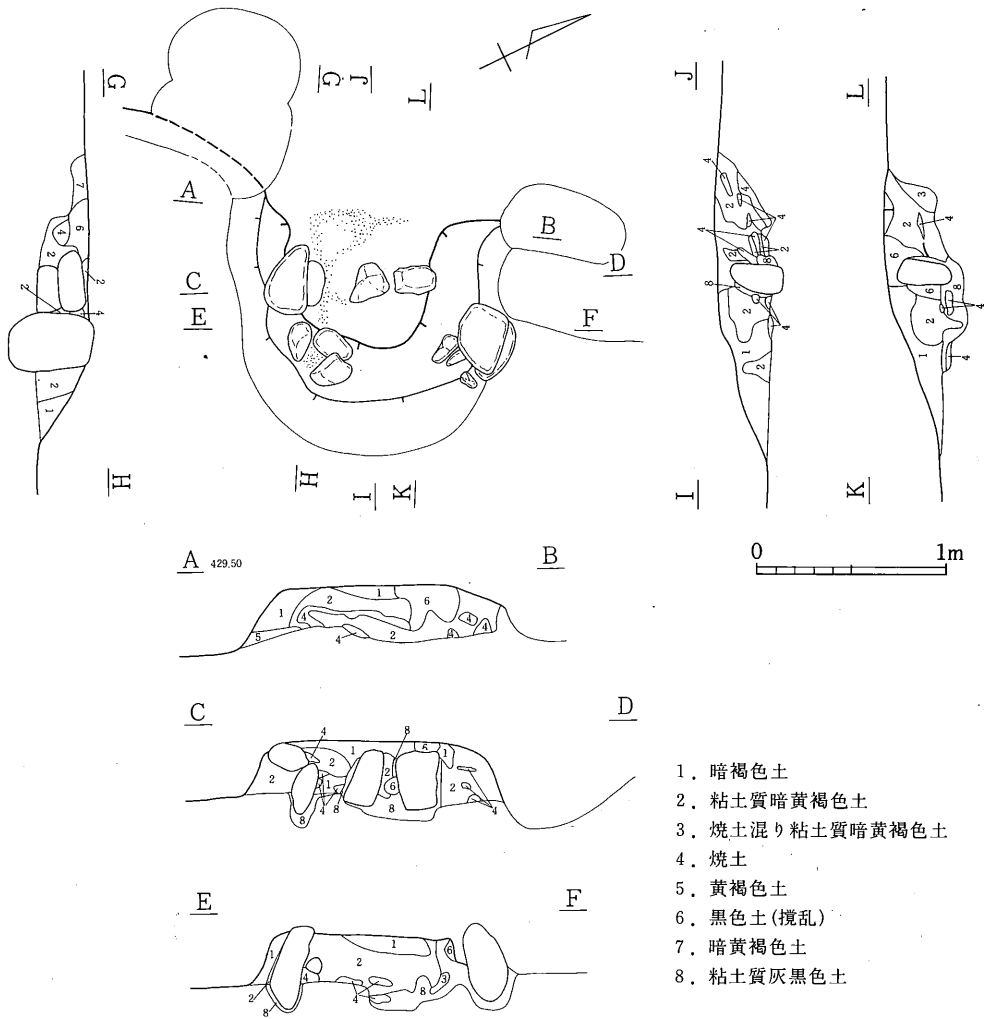
ので、前面第1列の袖石は40cmを超える扁平礫が使用される。また焼土の発達が顕著である。カマド右側に焼土が多く認められた。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器壺・甕・蓋・坏、鉄鎌等があり、出土量はやや少ない。土師器甕は長胴形を呈する。須恵器坏（第10図6）は高台をもち、身が浅く口縁が開く。

出土遺物・重複関係等から奈良時代の竪穴住居址と考えられる。



挿図19 KUR4612 240号住居址



挿図20 KUR4612 241号住居址カマド

5) 平安時代後期

① 196号住居址 (挿図21、第10図10～第11図4)

調査区西側に検出された。197号住居址を切る。上部を削平し平面形・規模等詳細は不明であり、わずかにカマドの確認により住居址と判断された。カマド前面に硬い床面が部分的にある。カマドは3対の袖石と支脚に円礫を用いており、石芯粘土カマドであると考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏、灰釉陶器碗・皿、砥石等があり、出土量は僅少である。坏は土師器・須恵器ともに回転糸切りされる。前者には焼け歪みのあるもの(第10図10)、内面黒色処理されるものがある。後者には口縁が外反するもの、小型で身の浅いものがあり、二次焼成された個体が多い。砥石(第11図4)は砂岩製で、据置型である。

出土遺物から平安時代後期に比定される。

② 211号住居址 (挿図19・22、第11図5～第12図)

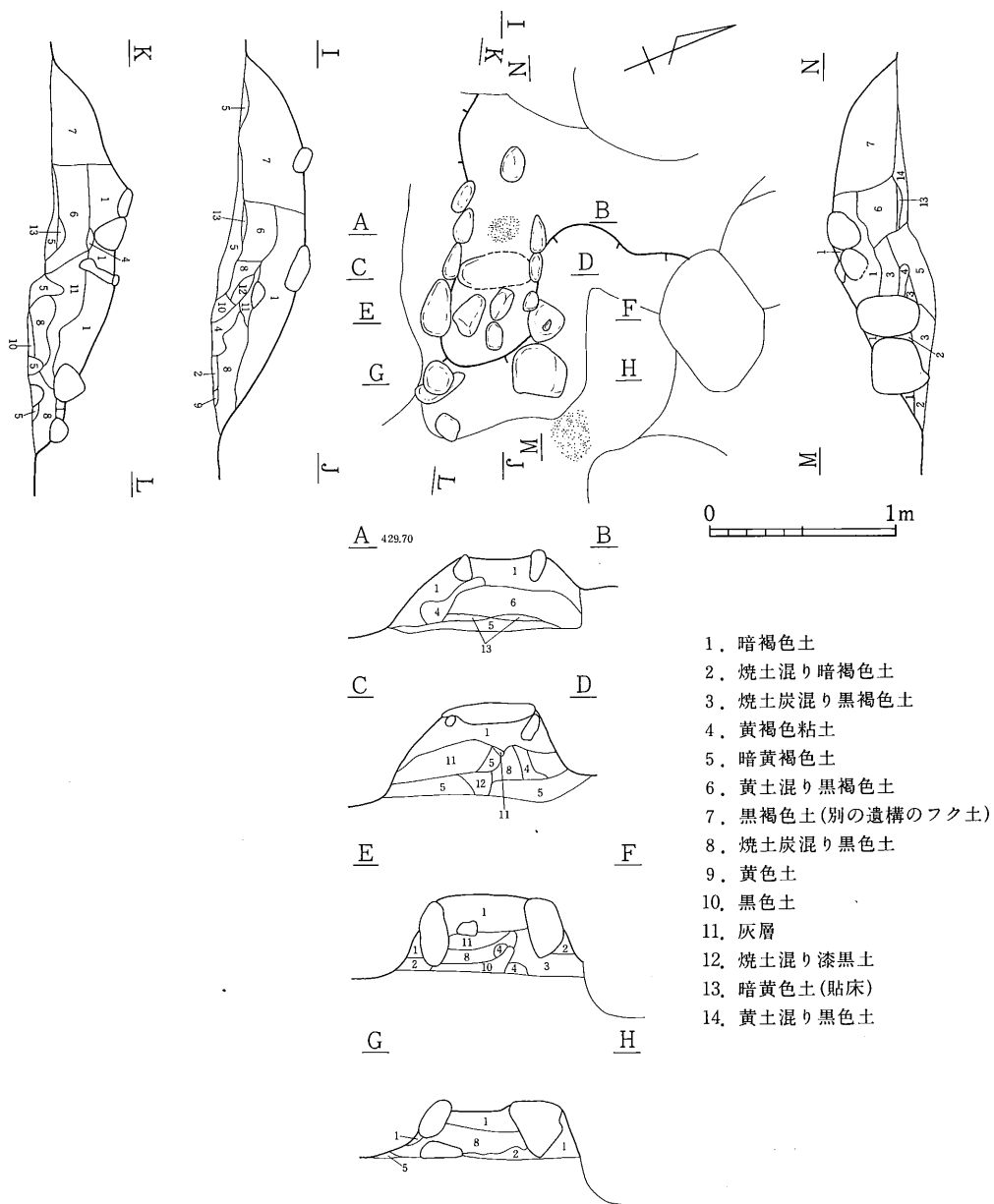
調査区南西側に検出した。206・207・241・252号住居址を切る。隅丸方形を呈する竪穴住居址と考えられるが、東側は植栽部分にかかり、十分に調査できなかった。規模は南西・北東方向推定3.4mを測り、南西壁の方向はN65°Wを示す。壁高は33cmを測り、立ち上がりは急である。床面は重複する柱穴等のためほとんど遺存していない。北西壁ほぼ中央にカマドが構築されており、良好な状態で遺存する。袖石は30cm程度の大きな礫を用いており、両側とも直立していない。煙道部の両側にもやや小振りの河原礫が立て並べられている。カマド本体と煙道部の境界部分に偏平な礫が渡し置かれる。焼土の発達は顕著でないが、灰層が煙道部を中心に厚く認められた。



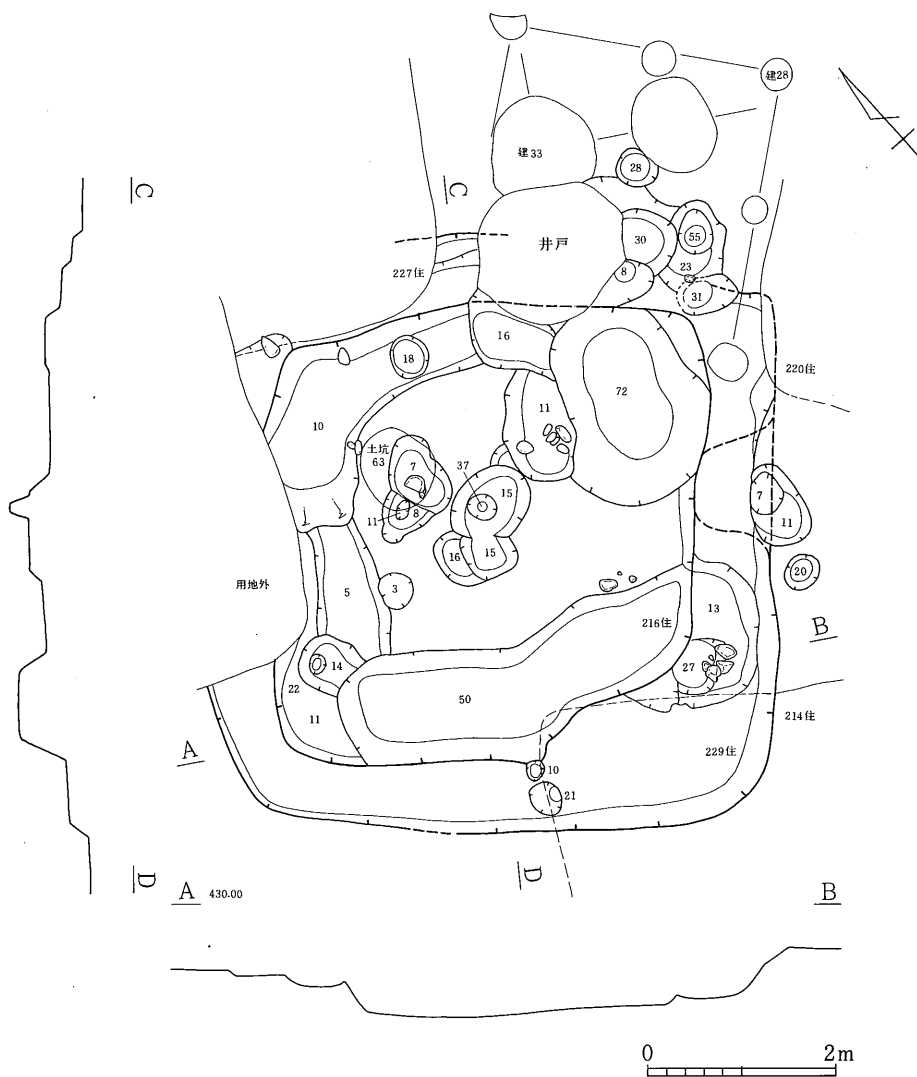
挿図21 KUR4612 196・200号住居址、周辺柱穴平面図

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏等があり、出土量は少ない。土師器甕は外面カキメが施されるもの、底部回転糸切りされるものがある。土師器坏は内面黒色処理されるもの、底部回転糸切りされるもの、高台のつくものがある。須恵器坏は底部回転糸切りされるもの（第11図9・10）、高台のつくもの（7）がある。

出土遺物・重複関係等から平安時代の遺構と考えられる。



挿図22 KUR4612 211号住居址カマド



挿図23 KUR4612 216・229号住居址

③ 216号住居址 (挿図23、第13・14図、第42図8)

調査区ほぼ中央に検出された。229・241号住居址を切り、土坑63・井戸1に切られる。隅丸不整方形を呈する竪穴住居址であり、規模4.7×4.4m、北東壁の方向N46.4°Wを測る。非常に硬く締まった床面が中央に検出され、南東壁を除く壁下に約60~100cmの幅広な周溝が巡らされている。壁高は229号住居址床面から17cmを測り、急な立ち上りを示す。カマドその他施設の状況は不明である。

出土遺物は土師器甕・坏・鉢、須恵器壺・甕・蓋・坏、灰釉陶器碗・皿、銅製帯金具等があり、出土量は多い。土師器甕は長胴型を呈し、カキメが施される。坏は内黒のもの、高台の付くもの、

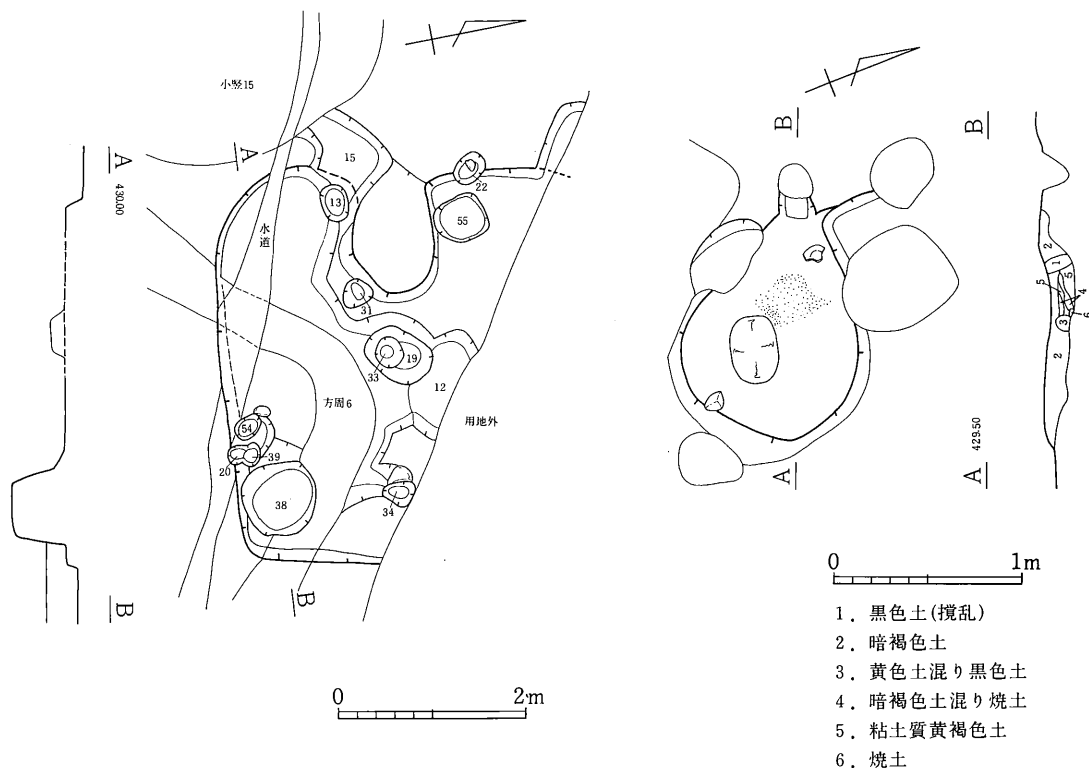
回転糸切りされるものがある。鉢は外面ハラケズリされ、底部は回転糸切りされる。須恵器坏に焼成不良の軟質なものが多い。また灰釉陶器の出土量が多い。

出土遺物・重複関係等から平安時代後期の竪穴住居址と考えられる。

④ 218号住居址 (挿図24、第15図～第16図9)

調査区北端に検出した。方形周溝墓6を切り、約半分が調査区外にかかる。不整隅丸方形を呈する竪穴住居址で、東西方向は規模4.1m、主軸方向はN79.8°Wを示す。床面の遺存状態は重複遺構のためあまり良好でない。また壁際がだらだらと掘り凹む。確認面から床面までが浅いため、壁の立ち上がりの状態は不明である。西壁ほぼ中央にカマドと思われる焼土がある。遺存状態は不良でカマドの形状は不明であるが、袖石が検出されず抜き取り痕もないことから粘土カマドであると思われる。カマド上部より灰釉陶器皿が出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・鉢、須恵器甕・蓋・坏、灰釉陶器碗・皿等があり、出土量はやや少ない。土師器甕(第15図1・2)は口径が大きく頸部の立ち上がりの小さい長胴形を呈し、細か



挿図24 KUR4612 218号住居址

いカキメ調整が施される。坏は底部回転糸切りされ、中に内面黒色処理されるものがある。

出土遺物等から本址の所属時期は平安時代後期である。

⑤ 230号住居址 (挿図15、第16図10~12)

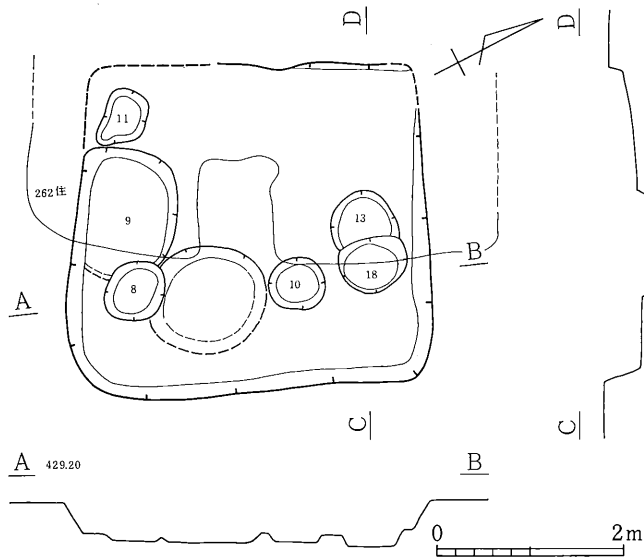
調査区中央やや東側で検出した。240・243・244・246~248号住居址を切り、溝状址6に切られる。また、掘立柱建物址32と重複する。4.4×4.1mの不整隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN64.1°Wを示す。床面の遺存部分は少なく、全体的にやや軟弱である。壁高は5~15cmで、北西壁はだらだらと立ち上がる。北西壁中央やや西寄りに焼土が少量検出され、北西壁の北西側にも焼土が広く分布する。カマドの可能性も考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏・鉢、須恵器壺・甕・蓋・坏、鞆羽口等であり、出土量はやや少ない。土師器甕は外面縦位のカキメが施され、内面ハケナデされるもの、底部に木葉痕をもつもの等ある。須恵器坏は底部回転糸切りされ、軟質な焼き上がりのものである。

出土遺物・重複関係等から、平安時代の竪穴住居址である。

⑥ 235号住居址 (挿図25、第17図)

調査区中央やや南側に検出した。240号住居址を切り、262号住居址に切られる。3.9×3.3mの不整方形を呈する竪穴住居址で北壁の方向はN116.7°Wを示す。壁高は14~38cmを測り、やや急な立ち上がりを示す。床面は全体的に軟弱である。中央やや西側上部に262号住居址カマドが検出さ



挿図25 K U R 4612 235号住居址

れた。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏等であり、出土量は少ない。土師器甕は胴中央に最大径をもつ長胴形を呈し、カキメが施される。須恵器坏は回転糸切りされる。

出土遺物・重複関係等から平安時代後期の竪穴住居址と考えられる。

⑦ 262号住居址（挿図26、第18図～第19図12）

調査区中央南東寄りに検出した。235・240号住居址を切る。方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、規模は5.0×4.9m、主軸方向はN118.5°Eである。南東壁は良好に遺存するが、他の部分は植栽移植に際して壊されたり、重複遺構のため一部を調査したにとどまる。壁高は12～16cmを測り、やや急に立ち上がる。床面は平坦で、西半は硬く締まる。東半は235・240号住居址上に貼り床される。南東壁中央ほぼ南寄りにカマドが構築されており、粘土カマドであると考えられる。炭・焼土層が厚く発達しており、相当使用されたことを物語る。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏・鉢、灰釉陶器碗等があり、出土量が多い。土師器甕は長胴形を呈し、カキメ調整が施される。須恵器坏は底部回転糸切りされる。他に古墳時代から平安時代前期の遺物が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は平安時代後期と思われる。

6) 不明

① 200号住居址（挿図21）

調査区西側で検出された。大部分が調査区外にかかり、平面形・規模・付属施設等の詳細は不明である。壁高は37cmを測り、急な立ち上がりを示す。床面は硬い部分は検出されなかった。

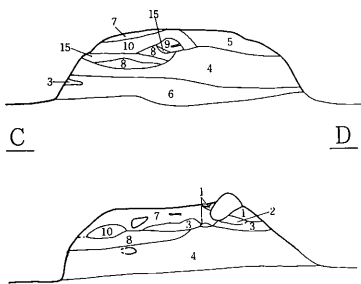
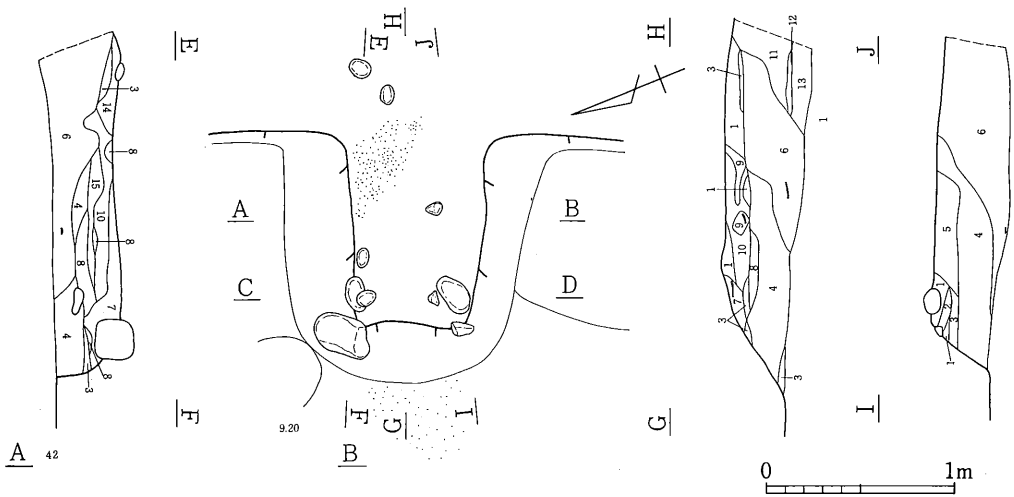
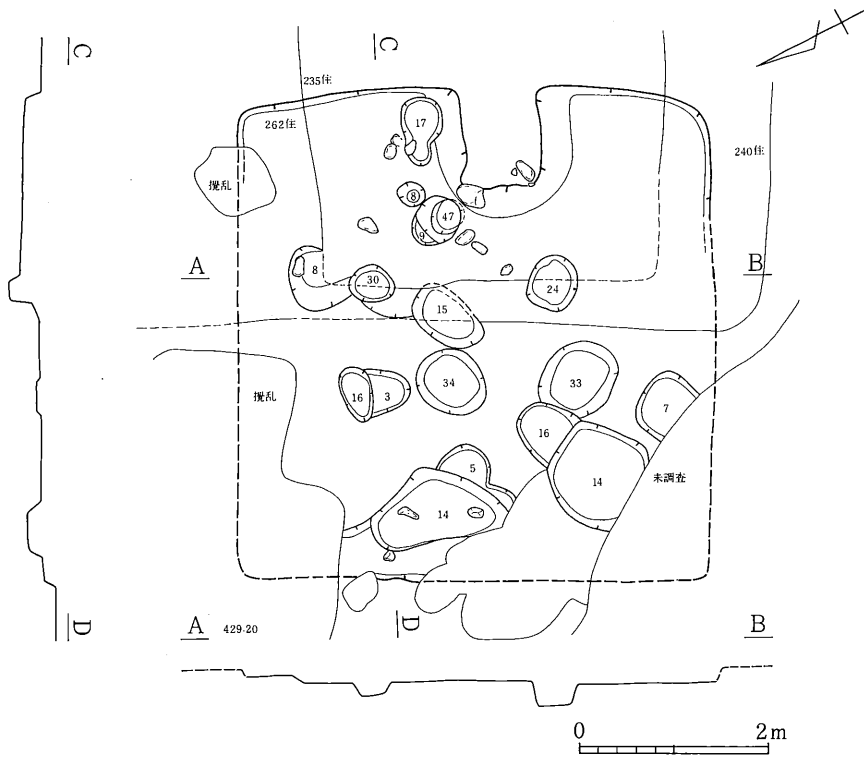
出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕等があり、出土量は僅少である。土師器甕はカキメ調整が施される。坏は内面黒色処理される。高坏脚部は透かし孔がある。

時期不明である。

② 201号住居址（挿図4）

調査区西側、202号住居址上部に検出された。硬い貼り床が部分的に確認されたのみで、上部が削平されており、平面形・規模等詳細は不明である。

出土遺物はなく時期不明である。



- | | |
|----------------------|----------------|
| 1. 黄褐砂質土(粘土) | 8. 焼土 |
| 2. 焼土混り黄褐色砂質土 | 9. 焼土・灰 |
| 3. 炭層 | 10. 焼土混り褐色土 |
| 4. 暗褐色度(235住フク土) | 11. 黒褐色土 |
| 5. 暗黄褐色土 | 12. 貼床(黄褐色土) |
| 6. 黄土混り暗褐色土(235住フク土) | 13. 黄土混り黒褐色土 |
| 7. 褐色土 | 14. 暗褐色土(煙道埋土) |

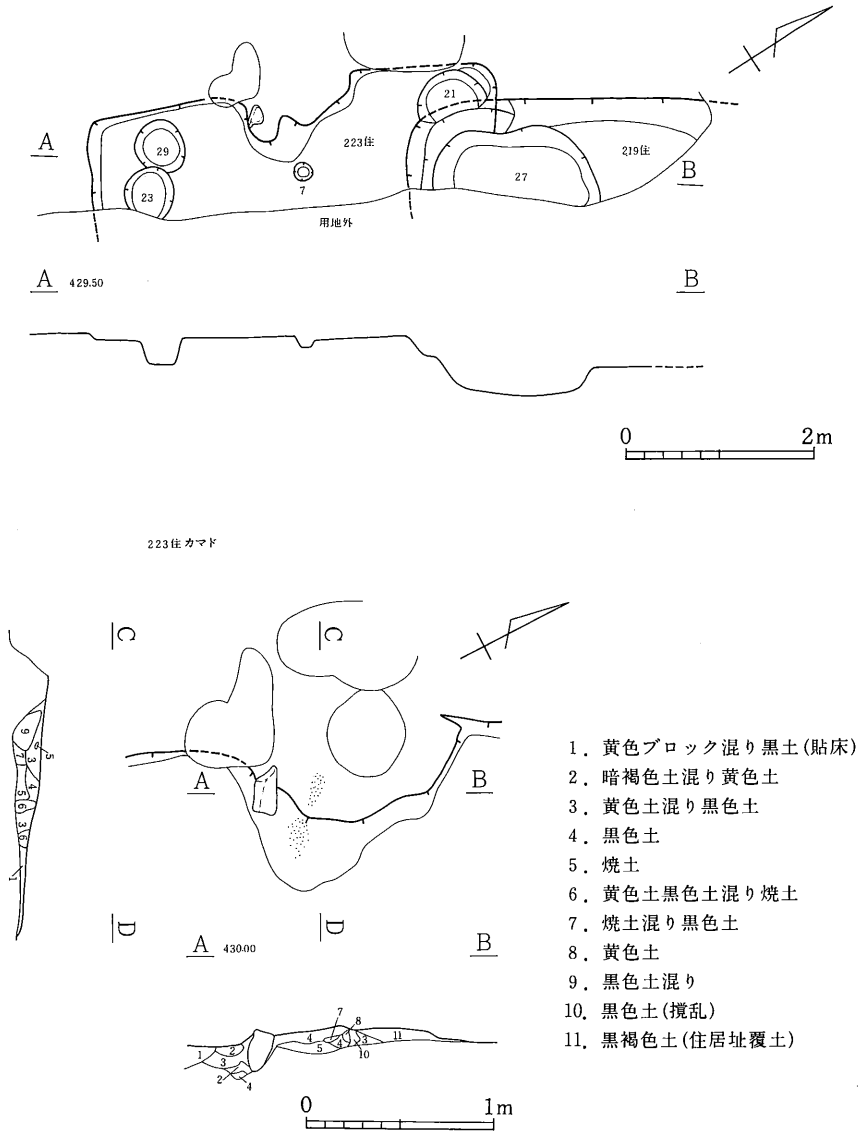
挿図26 K U R 4612 262号住居址

③ 206号住居址 (挿図8、第19図13)

調査区南西側で検出された。207号住居址を切り、211号住居址に切られる。カマドおよび207号住居址上部に貼り床が検出された。カマドは焼土がわずかにあるのみで、遺存状態は悪い。

出土遺物は弥生時代中期壺片、土師器甕、須恵器高台坏等ごく僅少である。

重複関係等から古墳時代後期以降と考えられるが、時期不明である。



挿図27 K U R 4612 219・223号住居址

④ 219号住居址（挿図27、第20図1・2）

調査区北側に検出した。223号住居址を切る。大部分が調査区外にかかり、平面形・規模・付属施設その他の詳細は不明である。壁高は32cmを測り、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。床面はやや硬い。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏・鉢・甑、須恵器甕・長頸瓶等があり、出土量は少ない。土師器坏は赤褐色を呈し、暗文が施される。他に縄文時代中期・弥生時代中期・中世の遺物が出土した。

時期不明であるが、古墳時代後期から奈良時代の間位置づく可能性がある。

⑤ 223号住居址（挿図27、第20図3～8、第41図）

調査区北側に検出された。219号住居址に切られ、西側の一部を検出したのみで、大部分は調査区外にかかる。方形を呈すると考えられる竪穴住居址であり、南北方向4.4mを測り、主軸方向は推定N66.8°Wを示す。調査部分では硬く締まった床面が検出された。壁高は7～10cmと浅く、立ち上がりの状態は不明である。西壁中央にカマドが構築されており、左袖袖石が残ることから石芯粘土カマドと考えられるが、遺存状態は良好ではない。燃焼部に硬く締まった焼土が検出された。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢、須恵器壺・甕・坏・甕等の他、弥生時代中期の壺・甕片があり、出土量はごく少ない。

時期は不明である。

⑥ 227号住居址（挿図28、第20図9～11）

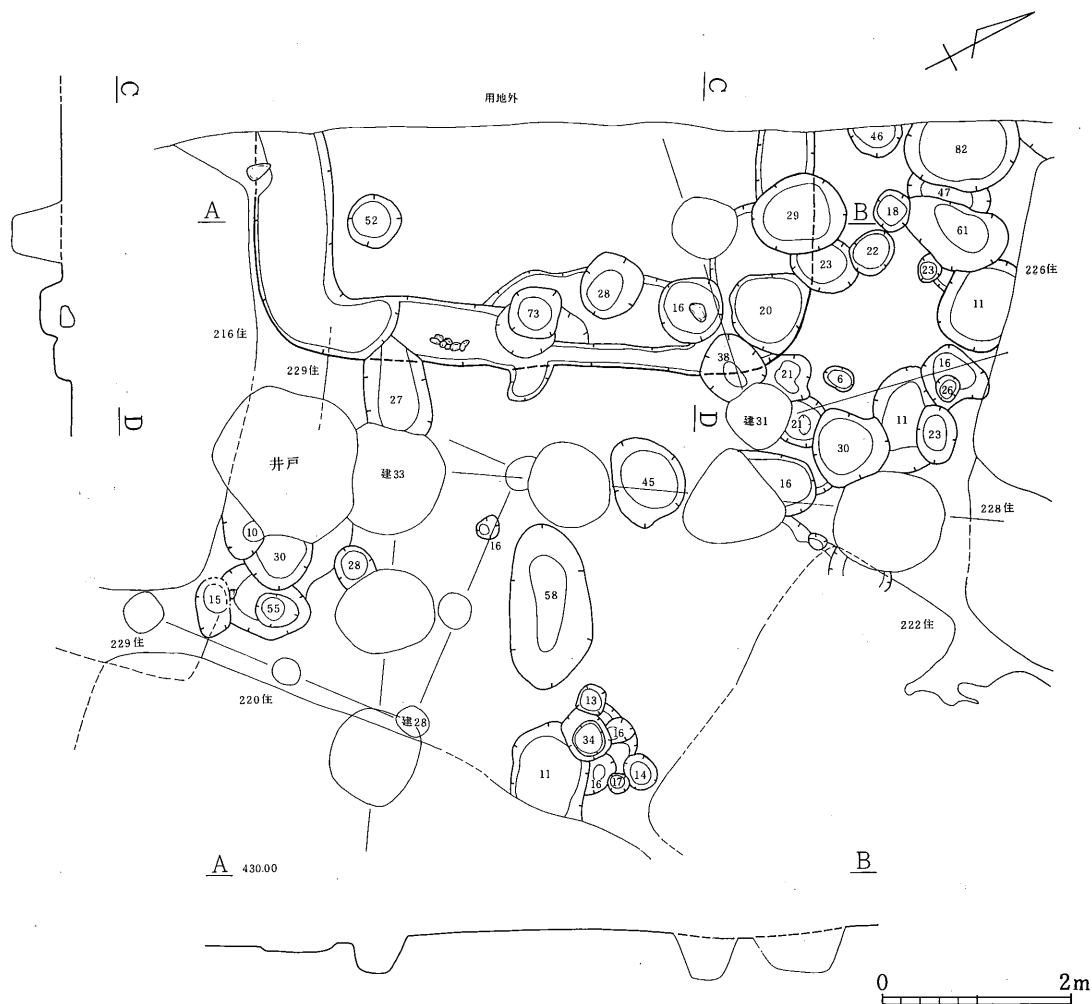
調査区中央北側に検出された。229号住居址と重複し、また半分以上が調査区外にかかり、本址の詳細を把握していない。隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、南西・北東方向5.9m、南東壁の方向はN32.0°Wを示す。中央部分の床面は非常に硬く締まる。検出面から床面までは浅く、壁の立ち上がりの状態は不明であるが、良好に残る南東壁で壁高10cmを測る。壁直下に60～100cmと幅広の周溝が巡る。周溝内に長さ20cm程度の硬砂岩の棒状自然礫が集積する。

出土遺物は土師器甕・坏・鉢、須恵器壺・甕・蓋・坏等があり、出土量は少ない。

古墳時代前期から平安時代前期にかけての遺物が混在しており、時期不明である。

⑦ 229号住居址（挿図23、第20図12～第21図3）

調査区中央で検出した。220号住居址を切り、216号住居址・井戸1に切られる。また、227・241



挿図28 KUR4612 227号住居址

号住居址、掘立柱建物址28と重複し、一部調査区外にかかる。6.4×6.0mの不整隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN133.5°Eを示す。重複諸遺構のため床面は遺存状態が悪い。壁はやや緩やかな立ち上がりを示し、壁高は約20cmを測る。南東壁中央にカマドが構築されているが、上部が削平されて遺存状態は不良である。焼土はそれほど発達していない。袖石6個が検出され、石芯粘土カマドである。

出土遺物は土師器壺・甕・坏・高坏・甑、須恵器壺・甕・蓋坏等であり、出土量は僅少である。土師器坏は内面黒色処理され、底部回転糸切りされるものが多い。

古墳時代から平安時代までの遺物が混在しており、時期不明である。

⑧ 234号住居址（挿図3）

調査区南西側で検出された。212号住居址に切られ、238号住居址と重複する。北壁の一部を確認したにとどまり、平面形・規模等一切の詳細は不明である。北壁の方向は238号住居址と一致しており、両者の間には何らかの関係があるものと考えられる。

出土遺物はほとんどなく、時期不明である。

⑨ 238号住居址（挿図3、第21図4～7）

調査区南側に検出された。215・234号住居址と重複する。隅丸方形を呈する竪穴住居址で南北方向5.1mを測り、北壁の方向はN52.9°Wを示す。東側半分は比較的良好に遺存しており、幅広い周溝が壁下を巡り、南東・北東隅には柱穴が掘り込まれる。床面は中央部分でも比較的軟弱である。

出土遺物は弥生土器壺・甕、土師器甕・坏・高坏・台付甕・甑、須恵器甕・坏・高坏、砥石等弥生時代から奈良時代にかけての遺物が混在している。

本址の所属時期は不明である。

⑩ 249号住居址（挿図14、第21図8・9）

調査区南東隅に検出された。239・242号住居址、小竪穴14、溝状址5と重複する。隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址であるが、重複遺構のため規模等の詳細は不明である。床面は平坦でやや硬い。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏、陶器摺鉢等であり、出土量は僅少である。土師器甕は刷毛目調整が施される。坏は内面黒色処理されるものがある。坏は坏部外面に稜がある。

本址の時期は不明である。

⑪ 250号住居址（挿図6）

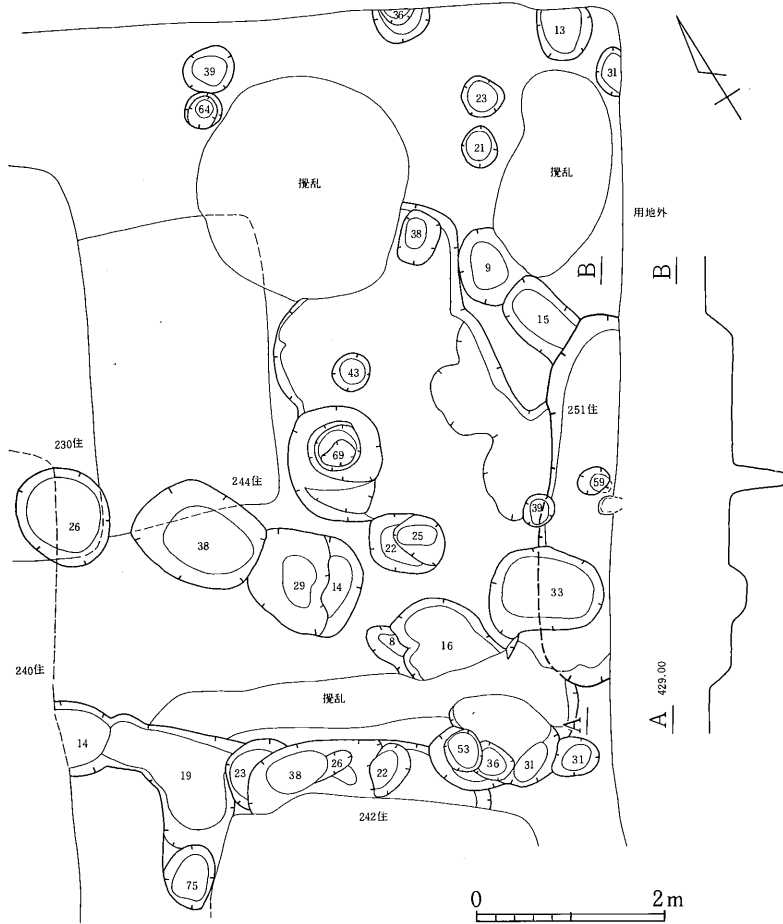
調査区西側で検出した。192・231・245号住居址を切る。南東壁の一部を検出したのみで、大部分が検査区外にかかる。壁高は5cm程度で、壁の立ち上がりの状態は不明である。床面は暗褐色土でやや締まっていた。新旧関係は231・245号住居址上部から本址の貼り床を検出したことによる。

検出面が低い場合出土遺物はほとんどなく、時期不明である。

⑫ 251号住居址 (挿図29)

調査区東側際に検出された。大部分は調査区外にかかる。隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址であり、南北方向は4.4m、西壁の方向はN32.8° Eを測る。床面は全体的に軟弱である。壁高は20~28cmを測り、やや緩やかに立ち上がる。ごく一部を調査したにすぎず、詳細は不明である。

出土遺物は土師器壺等ごく僅かであり、所属時期は不明である。



挿図29 K U R 4612 251号住居址

(2) 掘立柱建物址

①掘立柱建物址28 (挿図30)

調査区中央やや北側で検出した。216・229号住居址、掘立柱建物址33と重複する。南西北東方向2間、南東北西方向2間を検出したのみであるが、南東北西方向は227号住居址床面上に組み合わせる柱穴が検出されないことから、2間であると思われる。柱間は1.4~1.5mを測る。柱穴は径25~40cm、深さ14~31cmと小形であり、形態・規模等から中世の建物址と考えられる。

② 掘立柱建物址29 (挿図31)

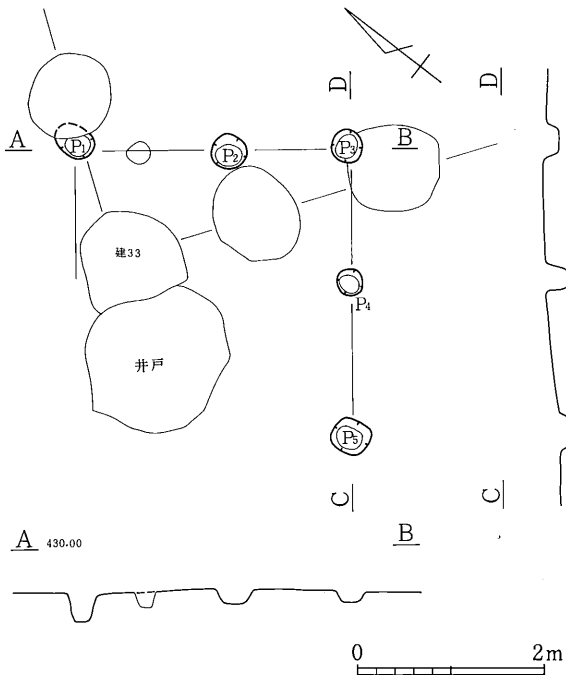
調査区北側で検出した。218号住居址、方形周溝墓6と重複する。南東北西方向2間、南西北東方向1間を検出したのみであり、南西北東方向はさらに東側に延びるものと思われる。柱間は南東北西方向1.2・1.5m、南西北東方向は1.0mを測る。柱穴は径15~30cmの不整円形を呈し、深さも10~17cmと小形であり、形態・規模等から掘立柱建物址28と同様、中世の建物址と考えられる。

③ 掘立柱建物址30 (挿図32)

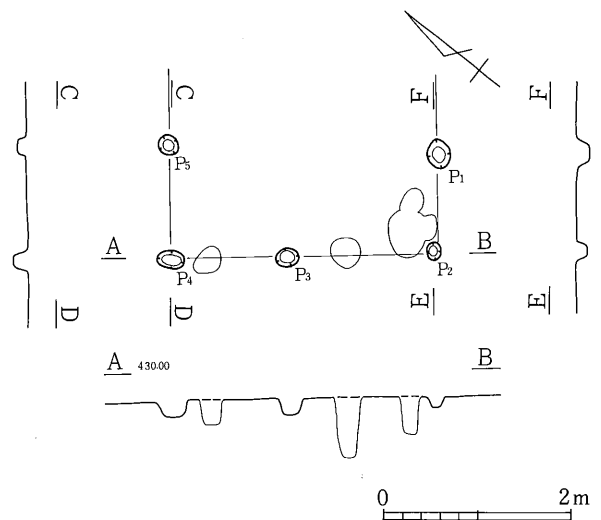
調査区中央で検出した。211・235・240・241・252・262号住居址と重複する。径40cm程度の扁平な大形礫が240号住居址北東壁寄り4個並んでおり、同じレベルで大きさも揃う240号住居址南西壁寄りの礫等が組み合う建物址と考えた。桁行8間、梁行3間を数えるが、北西側が211号住居址カマド脇まで延びないとすると、桁行方向はさらに減じるかもしれない。桁行の方向軸はN 60.5° Wを示す。柱間は桁行方向約1.4m、梁行方向約2.4mを測る。礎石をもつ等の点から平安時代前期に位置づく可能性がある。

④ 掘立柱建物31 (挿図33)

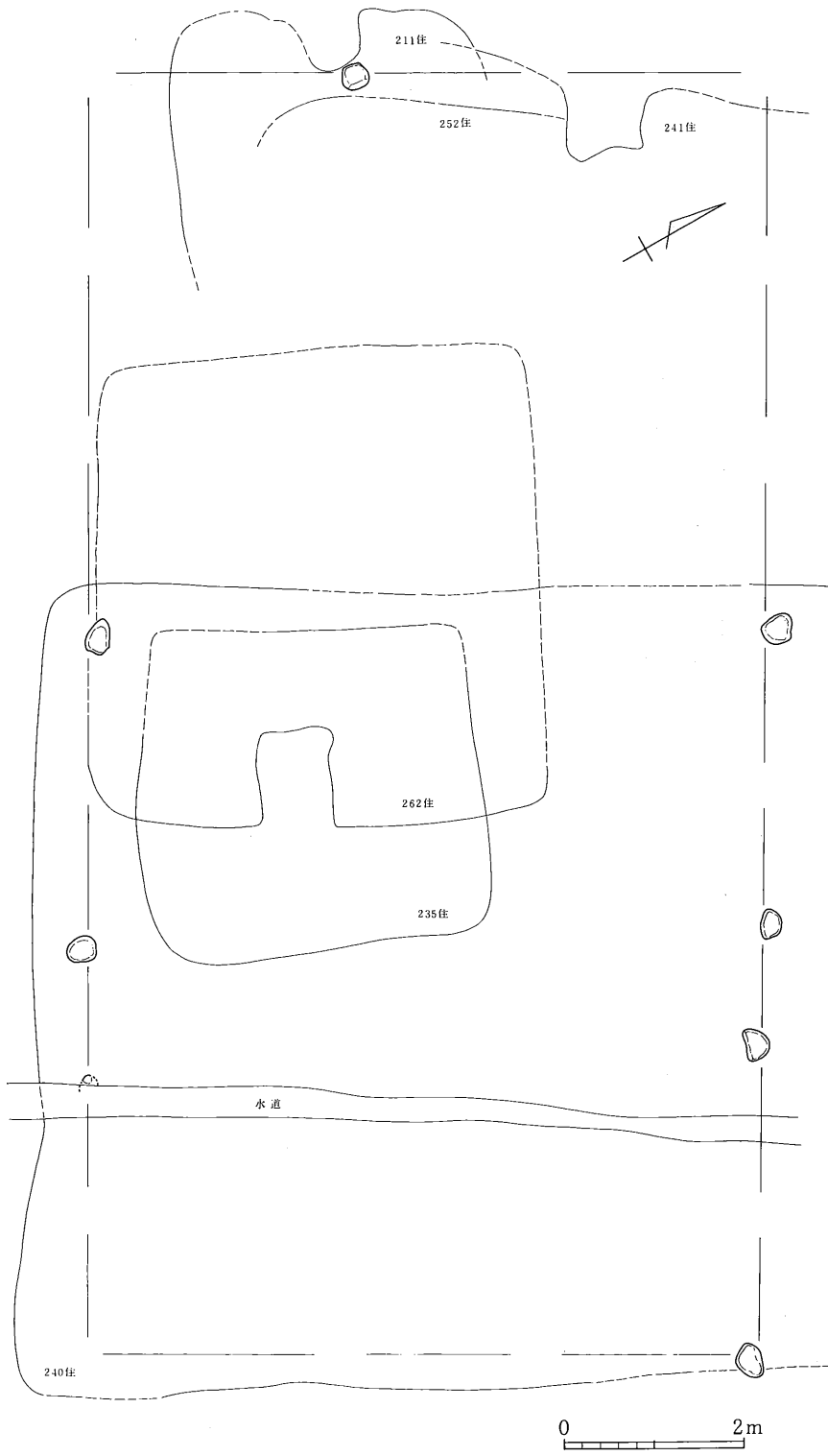
調査区北側で検出した。217・221・226・227号住居址と重複する。南西北東方向は3間である



挿図30 K U R 4612 掘立柱建物址28



挿図31 K U R 4612 掘立柱建物址29



挿図32 K U R 4612 掘立柱建物址30

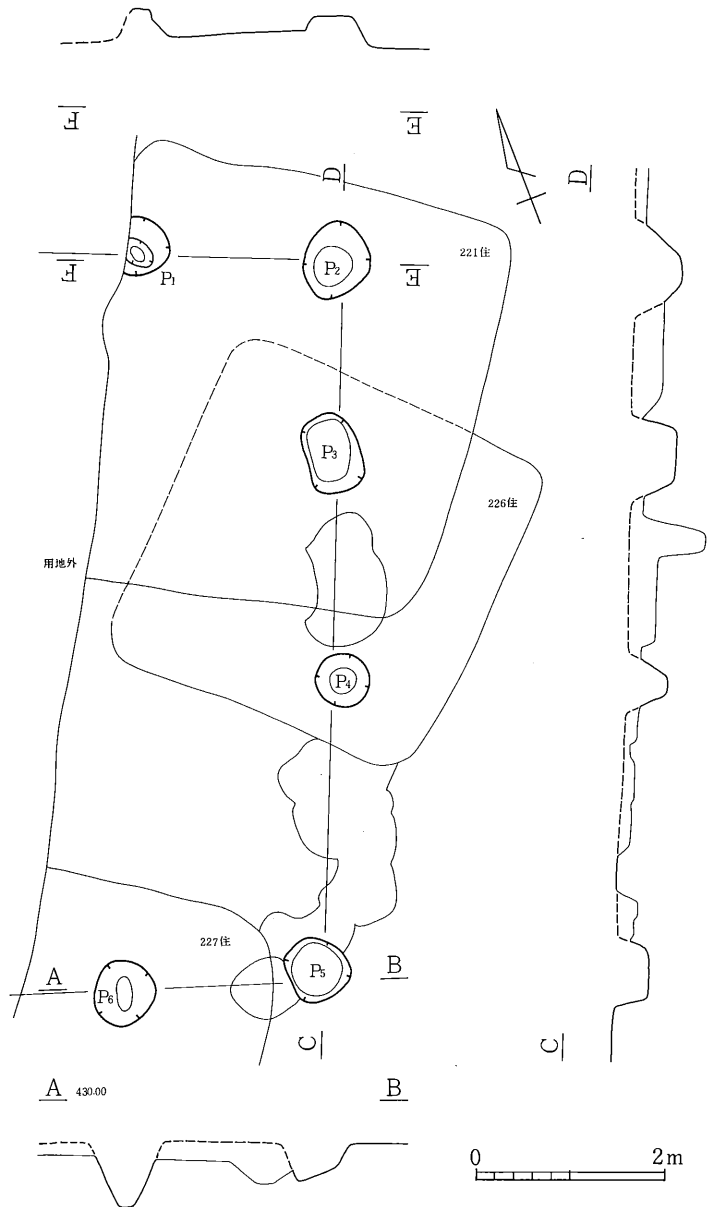
が、南東北西方向は調査区外にかかり1間を検出したのみである。南西北東方向は $N23^{\circ}E$ を示す。柱間は2.2mであるが、南西北東方向の南端はやや広い。柱穴は径60~80cmの不整円形を呈するものが多い。重複遺構との関係から古墳時代後期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。

⑤ 掘立柱建物址32
(挿図34)

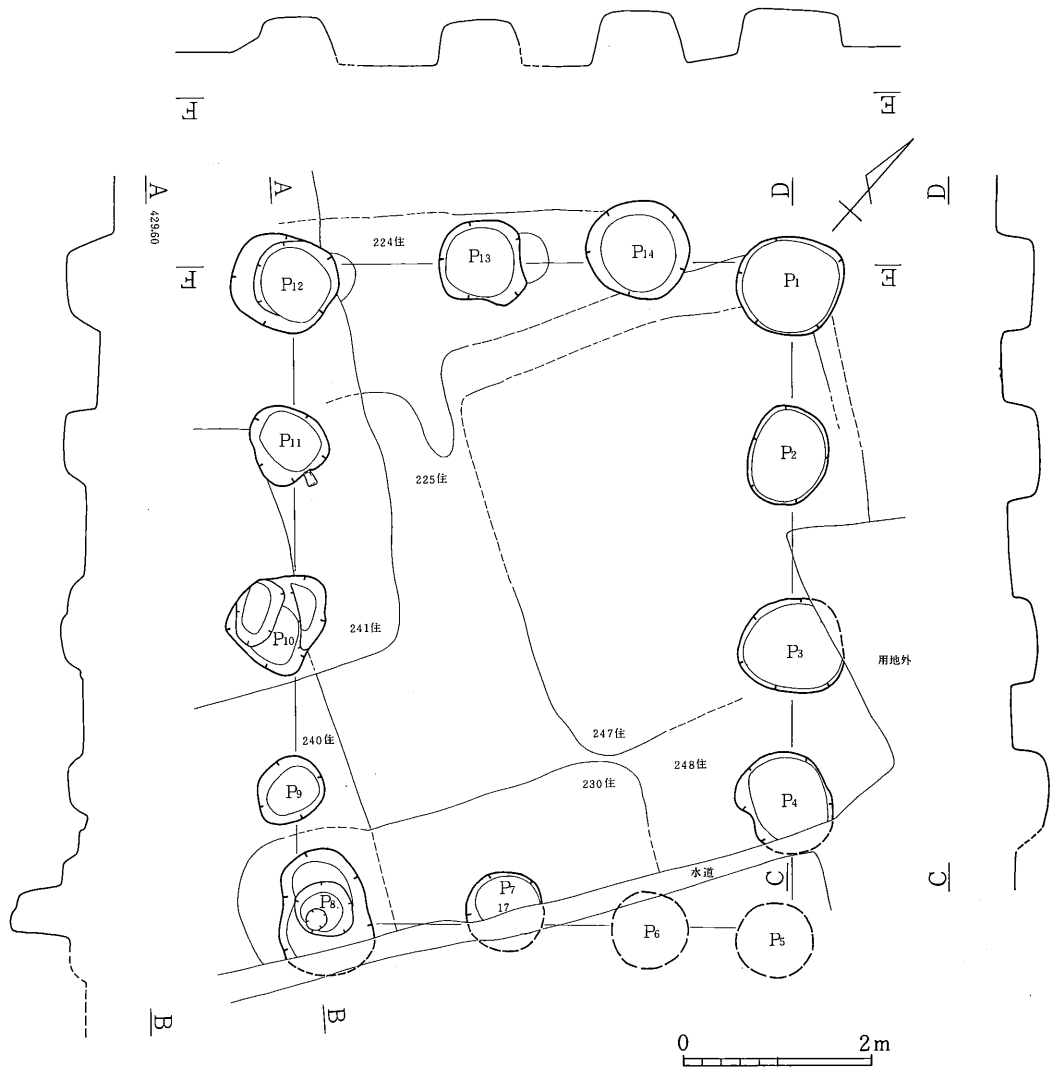
調査区中央で検出した。220・224・225・230・240・241・247・248号住居址と重複する。桁行4間、梁行方向とも約1.8mを測る。柱穴は径約1.0mと大形であり、主として不整円形を呈する。柱穴の底部レベルはほぼ揃う。時期は不明である。

⑥ 掘立柱建物址33
(挿図35)

調査区中央やや北側で検出した。220・222・228号住居址、掘立柱建物址28と重複する。桁行5間、梁行3間、 $9.5 \times 5.4m$ の側柱のみの建物址で、桁行方向は $N33.6^{\circ}E$ を示す。南東辺の柱穴が3本未検出であることからすれば、梁行はさらに南東側の調査区外に延びるかも知れない。

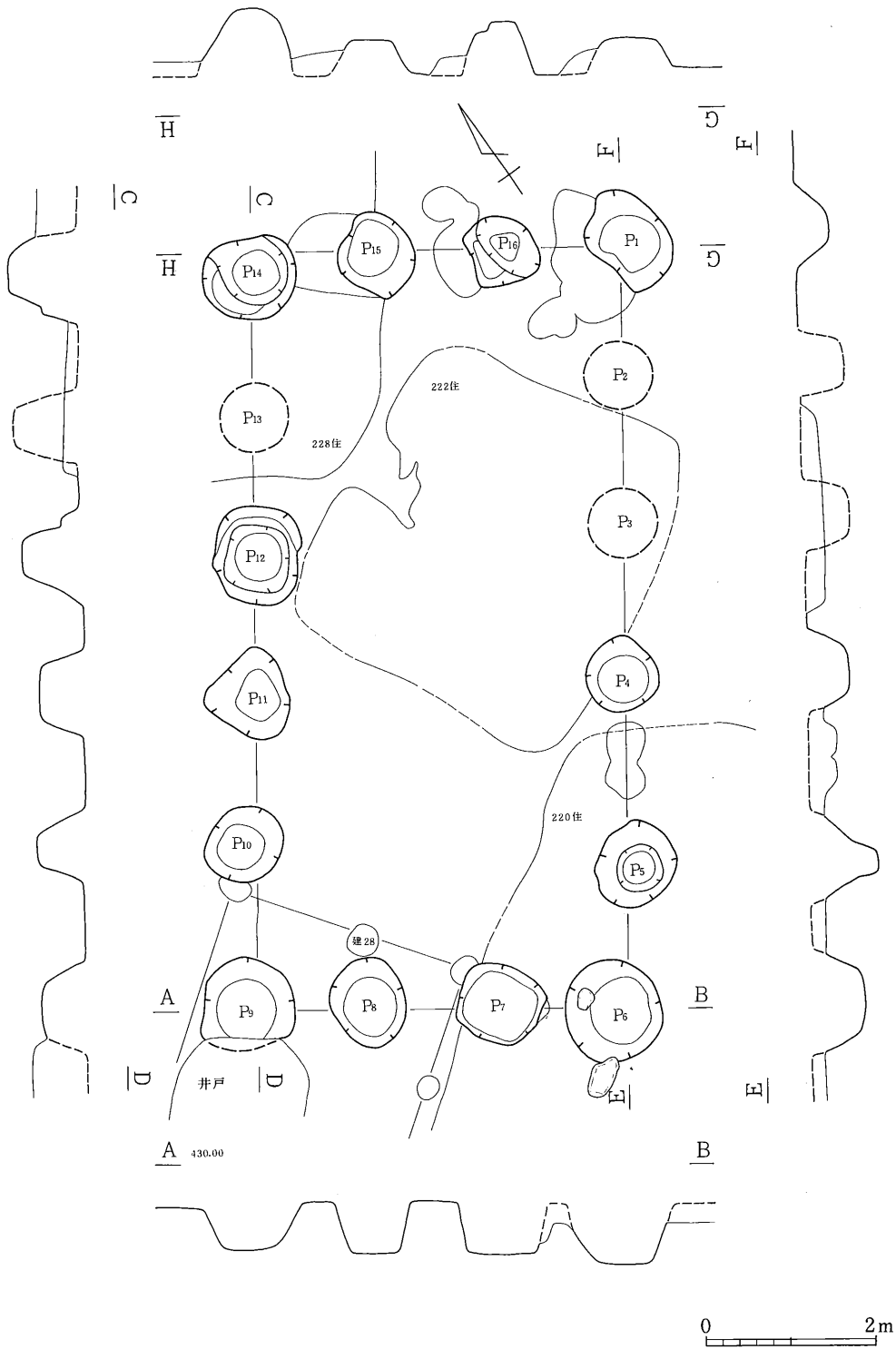


挿図33 K U R 4612 掘立柱建物址31



挿図34 K U R 4612 掘立柱建物址32

柱間は桁行方向は1.8m、梁行方向は1.4mを測る。柱穴は径0.8～1.2mと大形であり、平面形は不整形を呈する。柱穴の底部レベルはややばらつきがある。詳細時期は不明であるが、規模・棟方向等から一般国道153号バイパス路線内で調査された奈良時代の建物址と類似する点があり、該期に位置づく可能性がある。



挿図35 KUR4612 掘立柱建物址33

(3) 土坑

① 土坑59 (挿図36)

調査区西端、一部調査区外にかかって検出された。197号住居址を切る。長楕円形を呈すると思われる、調査区際に焼土が検出された。底面は平坦で壁の立ち上がりはやや緩やかである。

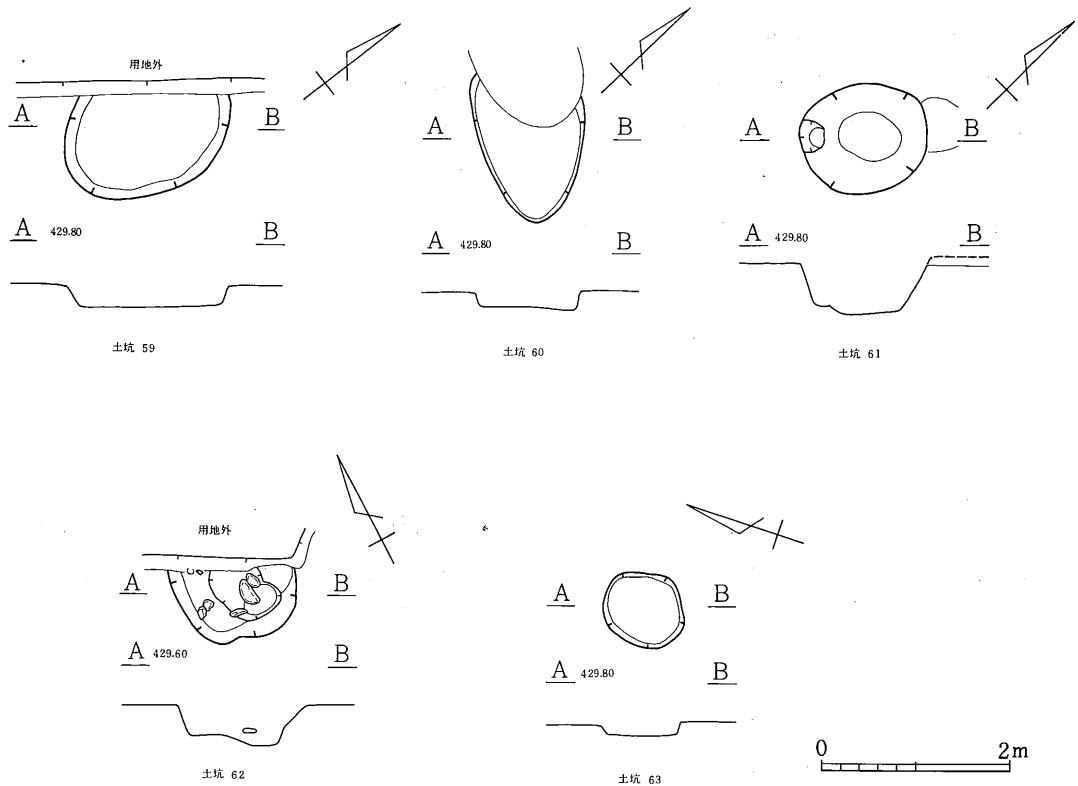
出土遺物は楕円波状文の施文された弥生時代後期甕、古墳時代前・後期の土師器甕で、後二者が多く、量比は半々である。このうち古墳時代前期の遺物は197号住居址からの混入と考えられる。

出土遺物・重複関係等から、本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

② 土坑60 (挿図36)

調査区西側、202号住居址を切って検出された。不整形を呈し、北東側を一部攪乱に壊される。底面は平坦で、壁は急に立ち上げる。出土遺物は土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・坏等で、大半が重複する202号住居址からの混入と考えられる。

本址の所属時期は不明である。



挿図36 KUR4612 土坑59~63

③ 土坑61 (挿図36、第22図1～6、第41図)

調査区北側やや東寄りで検出された。135×115cmの不整円形を呈し、小柱穴が重複する。深さ53cmで、断面摺鉢状を呈する。出土遺物は縄文時代中期片、波状文等の施文された弥生時代中期壺、古墳時代前期の土師器甕、古墳時代後期の土師器甕・坏・高坏等僅少である。本址の所属時期は不明である。

④ 土坑62 (挿図36)

調査区西側一部調査区外にかかって検出された。192号住居址と重複する。不整形を呈する土坑で、複数遺構の重複の可能性も考えられる。深さ36cmを測り、底面平坦で壁はやや急に立ち上る。埋土黒色土である。出土遺物は弥生時代壺、古墳時代前期の土師器台付甕、古墳時代後期の土師器甕・坏および平安時代後期の土師器甕・須恵器坏・灰釉陶器碗が出土した。古墳時代後期について平安時代後期の遺物が多い。このうち古墳時代後期の遺物は192号住居址からの混入と考えられ、本址の所属時期は平安時代後期に比定される。

⑤ 土坑63 (挿図36、第22図7)

調査区中央やや北側に検出された。216号住居址を切る。85×75cmの不整円形を呈し、深さ約10cmを測る。坑内に焼土が多量に検出された。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。出土遺物は216号住居址から混入したと考えられる土師器甕・坏、須恵器坏等で、出土量は少ない。重複関係および焼土が多量に入ることから、中世の火葬墓と考えられる。

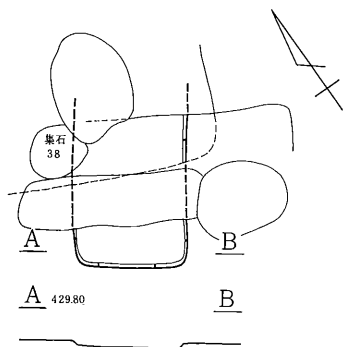
(4) 小竪穴

①小竪穴13 (挿図37)

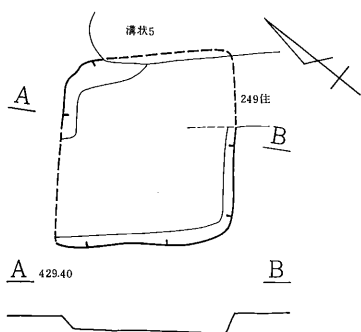
調査区西側で検出された。201・202号住居址を切る。不整長方形を呈すると考えられ、短辺の規模は110cmを測る。底面は平坦でやや硬い。浅いため壁の立ち上がりの状態は不明である。出土遺物はなく、時期・性格等は不明である。

② 小竪穴14 (挿図37)

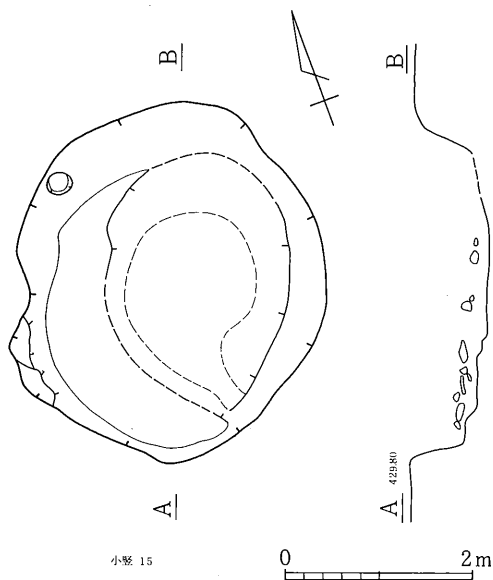
調査区南東側で検出された。240・249号住居址、溝状址5と重複する。1.9×1.8mの方形を呈すると考えられ、深さは12～22cmを測る。底面は平らであるが、南東側が低くなる。壁の立ち上が



小竪 13



小竪 14



小竪 15

りの状態はやや緩やかである。出土遺物は縄文時代中期土器片、土師器甕・坏・高坏、須恵器小片、摺鉢等僅少であり、詳細時期および性格等は不明である。

③ 小竪穴15 (挿図37、第22図8～11)

調査区北側で検出された。217号住居址を切る。3.8×3.3mの不整楕円形を呈する。深さ50～75cmを測り、壁はやや急な立ち上りを示す。埋土は大きく上・下層に分かれ、上層は厚く、暗褐色土に黄色土ブロックが混じる。底部より約20cm上位の層間には径10～30cm程度の円礫がほぼ全面に分布し、ほぼ同一レベルをとる。下層は黄褐色砂質土である。底部は平坦でなく、東半は一段深くなる。出土遺物は弥生時代壺、土師器甕、須恵器甕・蓋・坏・器台、中・近世の陶磁器等があり、近世以降と考えられる。

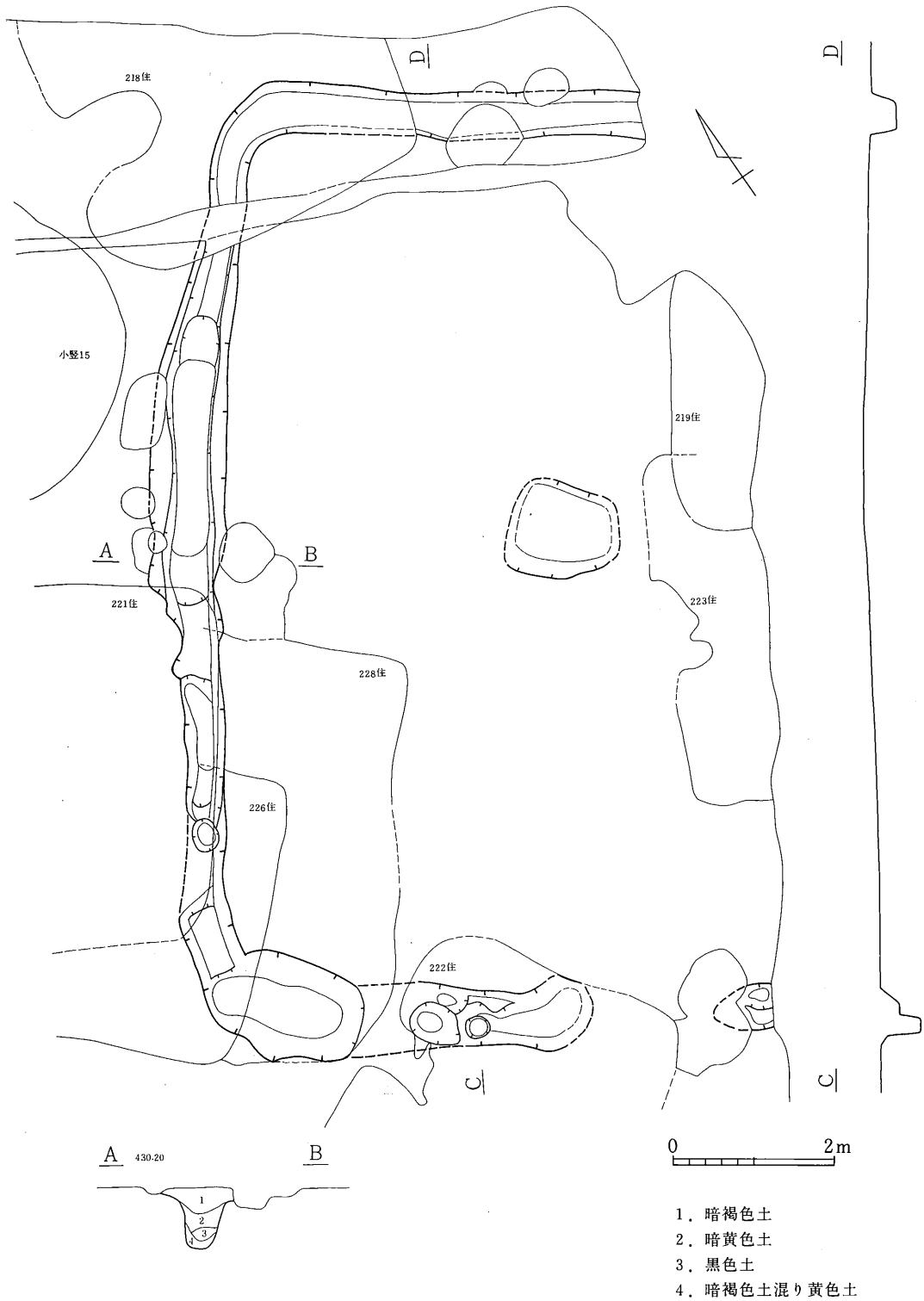
(5) 方形周溝墓

① 方形周溝墓 6

(挿図38・39、第23図1～21)

調査区北側に検出された。218・219・221～223・226号住居址、掘立柱建物址29・33、土坑61に切られる。また東側半分は調査区外にかかり、未調査である。南北方向は11.6m、N22.7°Wを測る。規模がやや多きいのに比して周溝は幅が狭く、60～90cmを測り、深さは最深部で72cmである。

挿図37 KUR4612 小竪穴13～15

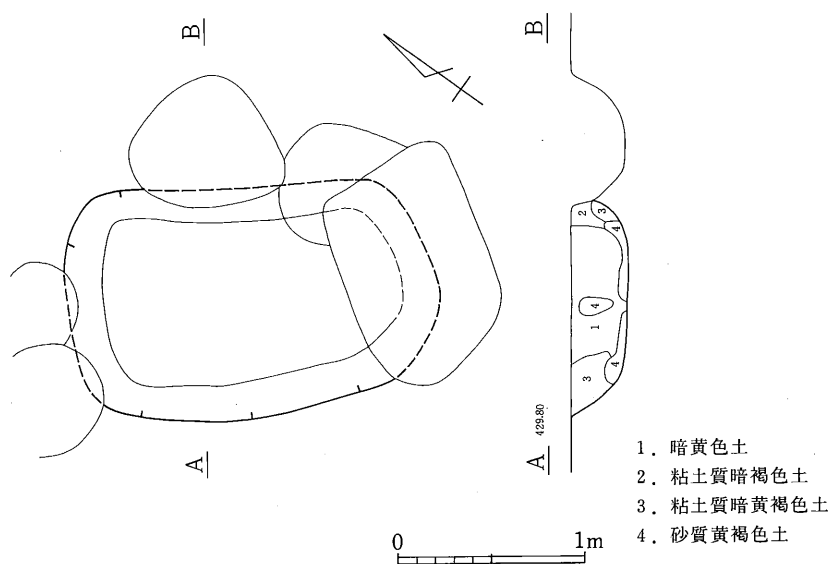


挿図38 K U R 4612 方形周溝墓 6

底部では幅30～40cmで、断面U字形を呈する。主体部は重複する柱穴のために遺存状態は悪いが、不整隅丸長方形を呈すると考えられる。推定2.0×1.4m、深さ30cmを測り、掘り込みの状態は緩やかである。

出土遺物は弥生土器壺・甕・高坏等があり、出土量は少ない。中期後半の遺物として、横線文+竊描短線文・櫛描羽状文・櫛描連続山形文+櫛描短線文・櫛描横線文+列点文等の施される壺、刷毛目調整後櫛描波状文および櫛描鋸歯文の施文される甕等がある。後期前半の遺物は櫛描コンパス文・櫛描波状文+1/4弧文等の施文される壺、細かい櫛描波状文に斜走短線文が組み合う甕等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半から後期前半の遺構と考えられるが、周辺から中期後半の遺物が多く出土していることからすれば、むしろ後期前半まで下と思われる。

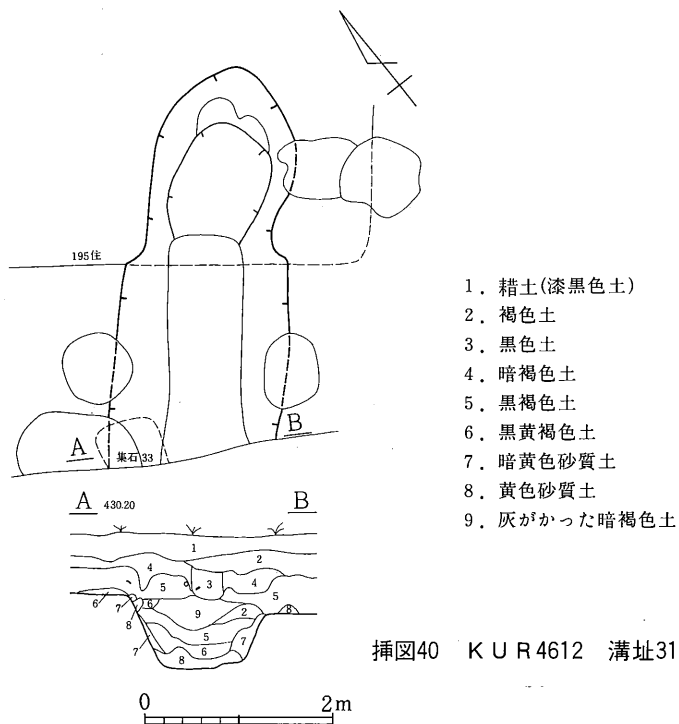


挿図39 KUR 4612 方形周溝墓 6 主体部

(6) 溝址

① 溝址31 (挿図40、第23図22～28)

調査区西端で検出された。194・195号住居址、集石33に切られる。長さ4.0m、幅1.5～1.8mで西側は調査区外にかかる。深さ60～80cmを測り、底部はほぼ平坦でやや急に壁が立ち上がる。出土遺物は弥生時代中・後期壺・甕、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕等があり、出土量は少ない。土師器甕片が多く、次いで弥生時代中期後半の遺物が多い。調査時には直線的な溝しか確認できなかったが、埋土の状況および出土遺物等から弥生時代中期ないし後期の方形周溝墓の可能性が有る。



挿図40 K U R 4612 溝址31

(7) 溝状址

① 溝状址4 (挿図41)

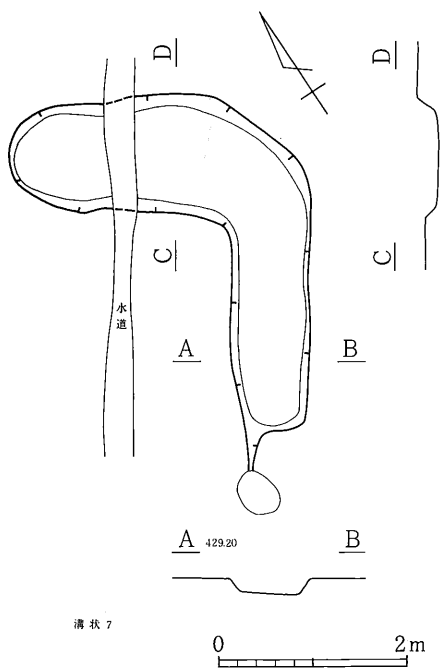
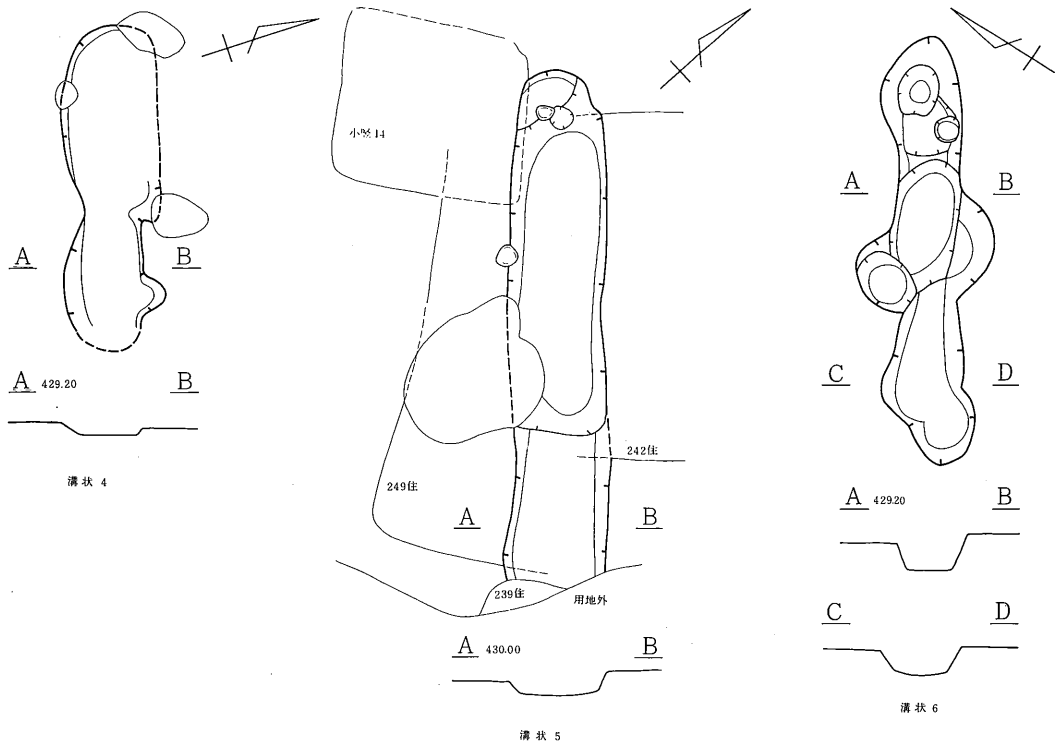
調査区南西側で検出された。209・238号住居址と重複する。長さ約3.4m、幅60～100cmで、長軸方向はN79.4°Wを示す。だらだらと掘り込まれ、平面形もやや歪みがある。出土遺物は土師器甕・坏・高坏等があり、出土量は少ない。時期・性格等の詳細は不明である。

② 溝状址5 (挿図41、第23図29・30)

調査区南東端で検出された。239号住居址に切られ、242・249号住居址と確認された延長5.4m、幅1.0mで、ほぼ直線状を呈する。深さ18～22cmを測り、長軸方向はN46.4°Wを示す。北西側が一段深くなることから、重複する239・242号住居址に関連した施設である可能性もある。出土遺物は土師器甕・坏・鉢、須恵器蓋坏等があり、出土量は僅少である。土師器甕は長胴形を呈する。鉢(第23図30)は内外面へラミガキが施され、内面黒色処理される。古墳時代後期の遺物が多いが、重複遺構からの混入も考えられ、時期・性格等の詳細は不明である。

③ 溝状址6 (挿図41)

調査区中央やや東側で検出された。230号住居址と重複する。長さ4.6m、幅は0.6～1.4mとばらつきがあり、底面の状態も凹凸があることから、複数の柱穴の連続も考えられる。出土遺物は土師器甕・坏等いずれも小破片であり、出土量は僅少である。時期不明である。



④ 溝状址7 (挿図41)

調査区中央やや東側で検出された。240号住居址と重複する。延長5.2m、幅0.8~1.25mで、鉤形を呈する。屈曲の南西側は幅が狭い。深さ16~20cmで、底部はほぼ平坦である。出土遺物は縄文時代中期土器片、土師器甕・坏、須恵器片等いずれも小破片であり、出土量は僅少である。形態等から他遺構に付属する施設である可能性も否定できない。本址の時期は不明である。

挿図41 KUR4612 溝状址4~7

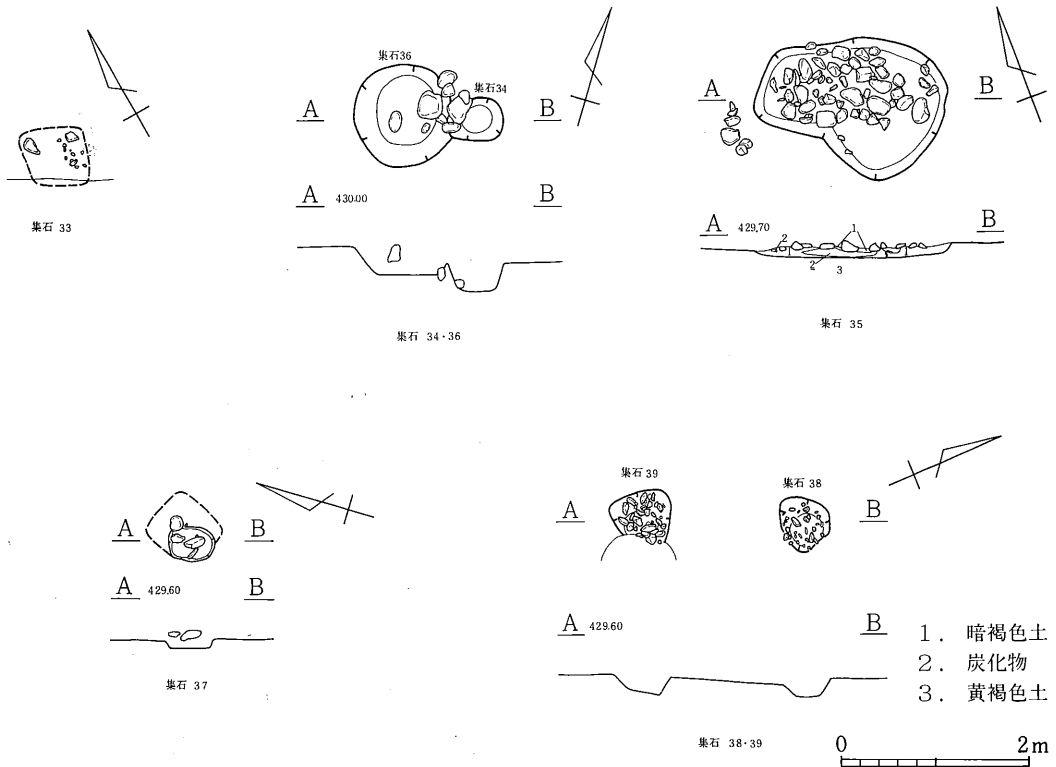
(8) 集石

① 集石33 (挿図42、第23図33)

調査区西端に検出した。溝址31を切る。60×60cm四方に細かな礫が集中して検出された。内部に土器小破片等がかなり混入する。形態・規模等集石37と類似する。出土遺物は弥生土器壺・甕小片、土師器甕・坏、須恵器甕等で時期は弥生時代から平安時代におよんでいる。本址の時期・性格等は不明である。

② 集石34 (挿図42、第23図34~37)

調査区北側やや中央寄りに検出した。集石35・36の間に位置し、これらより下位で検出された。10~30cm程度の礫が集中する。出土遺物は土師器甕、須恵器蓋・坏等で、出土量は少ない。土師器甕(第23図34)は小型で内外面底部までカキメがほどこされ、内面は器面荒れが著しい。底部に木葉痕をとどめる。須恵器坏は身深で高台がつくもの(36)、底部回転糸切りされるもの(37)がある。完形の割合が高い。本址の時期は平安時代と考えられる。



挿図42 KUR4612 集石33~39

③ 集石35 (挿図42)

調査区北側やや中央寄りに検出した。222号住居址・集石34を切る。180×80cmの範囲に10～30cmの礫が集中して検出された。これと重複して200×140cmの掘り方があり、内部に焼土がわずかであるが検出された。礫は火を受け割れたものが多い。また礫の下位に多量の炭化物があり、形態等から中世の火葬墓であると考えられる。

④ 集石36 (挿図42、第24図1)

調査区北側やや中央寄りに検出した。集石34を切る。集石35からやや離れて、ほぼ同じレベルで検出された。礫の大きさは10×20cmで、集石34・35とほぼ揃う。出土遺物は須恵器甕・蓋、灰釉陶器碗等いずれも小破片で、出土量は僅少である。時期は重複関係等から平安時代以降であるが、詳細時期・性格等は不明である。

⑤ 集石37 (挿図42)

調査区西端に検出した。約60×60cm四方に細かな礫が集中して検出されたが、細かい礫はほとんど取りはずしてしまった。内部に土器小破片等がかなり混入する。形態・規模等集石33と類似する。出土遺物はいずれも小破片で、時期不明である。

⑥ 集石38・39 (挿図42、第24図2～4)

調査区西側に検出した。201・202号住居址を切る。約50×50cmの不整円形の範囲に細かな礫が集中して検出された。掘り方内部にも細礫がぎっしり詰まっており、瓦片等が出土した。新しい時期の攪乱である。

(9) 井戸

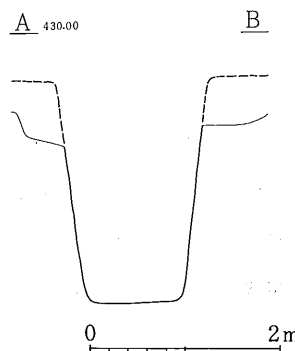
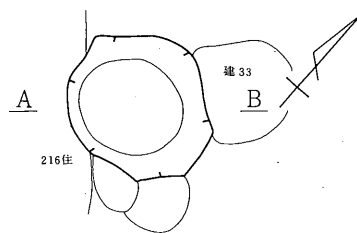
① 井戸1 (挿図43、第24図5～8)

調査区中央やや北側で検出された。216・229号住居址、掘立柱建物址33を切る。1.5×1.4mの不整円形を呈し、深さ約2.4mを測る。底部で径90cm程度であり、壁は垂直よりやや傾斜をもつ。現地表よりの深さは3mを超え、調査区に隣接して北側に順に2.5・3・4間の3本の井戸が近代以降掘られていることから竪井戸であると判断した。出土遺物は弥生土器壺片、土師器甕・坏・台付甕、須恵器甕・坏・鉢、灰釉陶器碗・皿、中世陶器片等であり、出土量は僅少である。遺物は重複遺構からの混入と考えられ、近代以降に開鑿されたものと思われる。

(10) その他

① 柱穴 (挿図44他)

調査区のほぼ全面にわたって径20~50cm程度の柱穴が分布する。これらの具体的な機能は不明であるが、他遺構との重複を考慮すると建物址を構成するものも存在すると考えられる。規模の小さいものの大半は中世以降に比定されよう。



挿図43 KUR4612 井戸1

② 遺構外出土遺物

A 土器

a 縄文時代

早期の遺物は1点出土したのみで、大部分が中期から晩期にかけてのものである。

a) 早期

第24図9は市松押型文が施文される小破片であり、胎土精良である。薄手の焼成良好な土器である。立野式土器に比定される。

b) 中期

第24図12・16~19は隆帯貼付後沈線で両端をなぞり人体文ないし楕形文が描かれ、無文部に沈線が充填される。隆帯上に刻みが施されるものがある。13~15は口縁部ないし体部上半の破片で隆線が付される。20・23は唐草文系土器の小破片である。25・26はRL縄文が横位施文される。27は細かい条線文の施文後沈線で腕骨文が描かれる。中期後半の土器が主体である。

c) 後期

該期の遺物は比較的少量である。第24図29は鉢形土器の口縁部破片で、口縁外縁に横位に研磨により隆帯状の文様が作り出される。30は細かい縄文施文後、沈線で渦文が描かれる。32は内外面縦位の丁寧なナデが施され、灰褐色を呈する。

d) 晩期

第24図33・34は丁寧なミガキが施され、34は口縁外縁に押圧がなされる。35~37は貝殻腹縁により条痕が施文される。晩期終末に比定される。

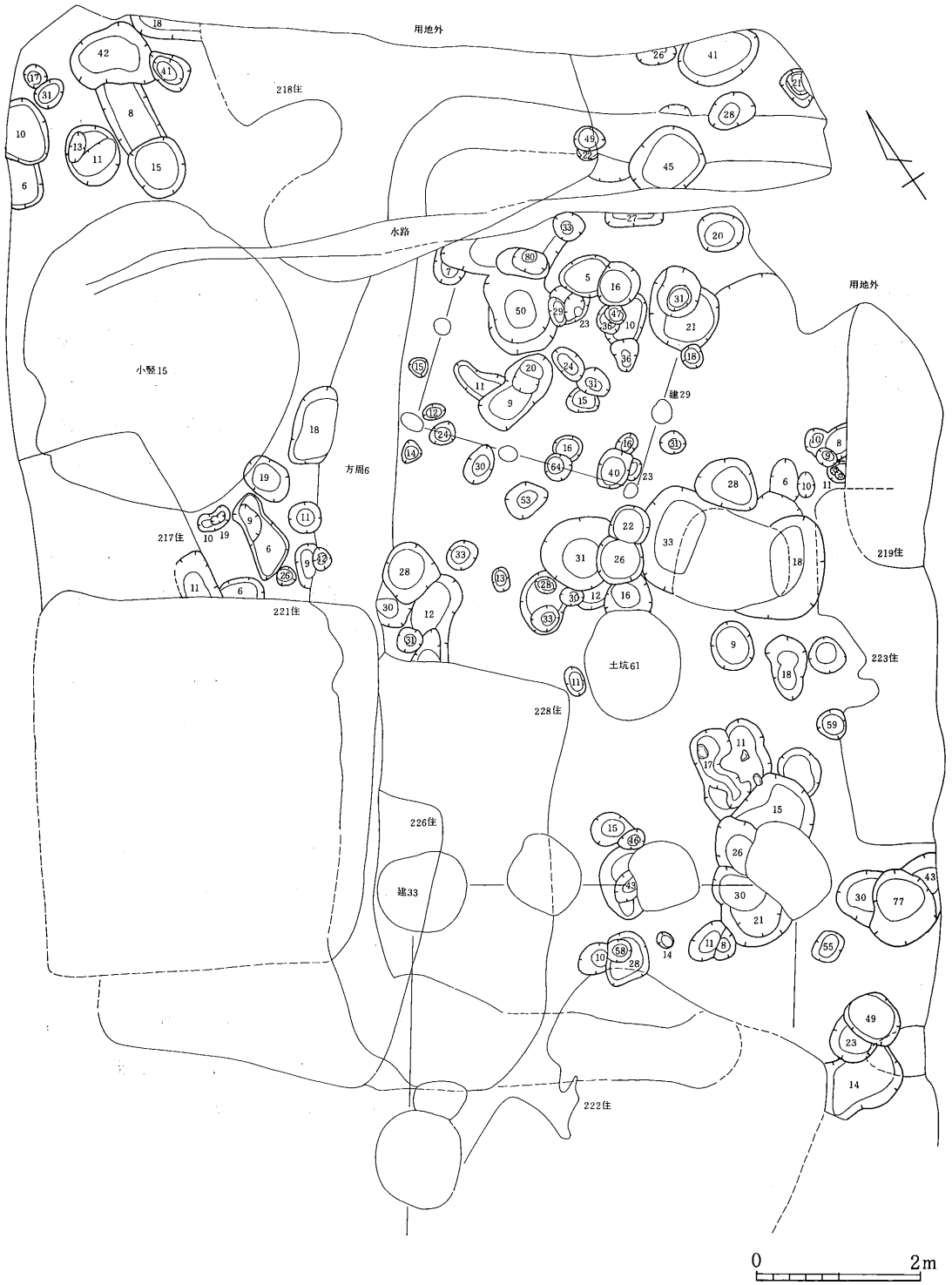


插图44 KUR 4612 周边柱穴平面图

b 弥生時代

今次調査で出土した弥生土器は、中期後半から後期後半にかけてのものであり、中期後半が主体を占める。中期の住居址が214号住居址のように掘り込みが浅く、床面が比較的高い位置にあること、また他時期の重複が著しいことからすれば、該期の住居址の遺構が214号住居址の他にもあった可能性が高い。

a) 中期

該期の遺物は壺（第25図1～18）、甕（19～32）がほとんどで、大半が小破片である。

壺は櫛描横線文+篋描列点文（11・13・14）、櫛描波状文+刺突文、櫛描波状文、櫛描横線文、縄文等が施文されるものの他、篋描連続山形文の内部を篋描斜線文や円形浮文で充填するもの、篋描連続山形文の内部を櫛描の短線文で充填するもの（7）等がある。12は篋描連続山形文の内部を櫛描の短線文や円形浮文で充填する。18は櫛描横線文に振り幅の小さい櫛描波状文が組み合わされる。

甕は口縁に篋描の刻目文や縄文が施文されるものが多い。櫛描羽状条線文が施文されるもの（19・33）、櫛描斜走条線文が施文されるもの（20・21・32）、櫛描簾状文（23・24）、櫛描簾状文+櫛描波状文（26）、櫛描波状文+櫛描羽状条線文（27）等がある。

第26図13～21に一括した底部破片には、該期のものが少なからずあると思われる。布目痕をとどめるもの（13・14・16）、木葉痕をとどめるもの（15・17・18）等あり、壺が多い。

b) 後期

中期と同様、壺（第26図1～5）・甕（6～12）が主体的で、他には少量の高坏がある。

壺はいずれも小破片で、振り幅の大きい波状文に櫛描横線文が組み合うもの、1/4円弧文が施文されるものがある。口縁折立部は明瞭なもの（2）とはっきりしないもの（1・3）がある。また折立部の施文は刺突文および篋描施突文がある。

6は内面横位・外面縦位の丁寧なミガキ調整が施される甕で、器高は39.1cmを測る。振り幅の大きい波状文の下に斜走短線が施文される。斜走短線下部から胴部中央にかけてやや器面が荒れる。内面黒ないし黒褐色、外面褐色を呈する。12は頸部に刷毛目調整が施される。

c 古墳時代前期（第27図）

古墳時代後期・平安時代に次いで該期の遺物が多い。土師器壺・甕・台付甕・高坏等が出土している。1は器高に比して大きな口頸がほぼ直立し、胴部中央やや上に最大径がある。内面は上部に横位ヘラミガキ、下部に横位ヘラナデが施されるのに対し、外面は上部縦位ヘラミガキ・下部横位ヘラミガキが施される。胎土に石英や細かい金雲母を含む。広口甕（3）は口縁の立ち上

がりは小さく、胴部下半が貼る。外面刷毛目調整が施される。甕に施される刷毛目にはやや粗いもの(11)、細かいもの(10・11・13)がある。14は口縁がS字状に屈曲するいわゆるS字状口縁台付甕である。17は胴部以上に比して台部が小さく、台部内外面に刷毛目調整が施される。高坏(22~24)は脚部に透かし穴がある。

d 古墳時代後期

平安時代の遺物とともに遺構外出土遺物の主体を占める。土師器壺・甕・坏・高坏・鉢・甗・ミニチュア土器、須恵器甕・蓋・坏・高坏等がある。

土師器壺(第28図1)は口縁部横ナデ・以下ハケナデが施され、その方向は外面縦位、内面横位で底部付近は放射状である。また内面底部付近には指押さえの痕跡をとどめる。外面胴上半に黒斑がある。1・6・8・9は内面ないし外面に顕著に接合痕をとどめる。甕(2)は口縁部横ナデ・以下ナデが施される。4・8は胎土に細かい金雲母を含む。坏は平底で器壁が外反するもの(第29図5・6)、口縁部がほぼ直立するもの(10・11)、内湾するもの(9・12)等があり、内面黒色処理されるものがある。高坏は脚部端が急に開くもの(16・18)が多い。17は胎土・調整・焼成等良好な土器で、透かし穴が開けられる等の点で須恵器模倣のものであると考えられる。内外面褐色を呈する。鉢(21)は内外面ヘラナデされる。23は底部ヘラケズリ整形される。甗(第30図1)は口縁部横ナデ・以下縦位のハラミガキが施される。内外面橙褐色を呈し、内面には靱痕が看取される。

須恵器甕は頸部に櫛描波状文が施されるものが多い。13は底部付近まで格子叩きが施される。蓋(18)は焼成不良でやや軟質である。内外面灰色を呈する。坏(19)は口径に比して器高が大きい。鉢(20)は底部ヘラケズリ整形される。高坏(第31図1・2)は胎土精良な薄手のもので、透かしの下に低い凸帯が巡る。

e 奈良・平安時代

該期の出土遺物には土師器甕・坏・片口、須恵器壺・坏・硯、二彩陶器、灰釉陶器、青磁等がある。このうち奈良時代~平安時代前期の遺物は少量で、大半は平安時代後期のものである。

土師器甕(第31図5)は長胴形を呈し、外面は縦位のカキメが底部まで、また内面は横位のヘラナデが施される。粘土紐の凹凸が顕著で内面に接合痕をとどめる。口縁部破片では頸部の立ち上がりは小さい(6~9)。10は底部までカキメが施される。11は底部回転糸切り後ハケナデされる。坏(12・13)はいずれもロクロ右回転であり、内外面橙褐色を呈する。身が浅く、皿に近い。17は内面黒色処理され、胎土に粗大な石英を含む。片口(第32図1)は内外面ロクロナデされ、玉縁である。内面は黒色処理されており、外面は暗褐色~黒褐色を呈する。他に、図示でき

なかったものの、火舎の小破片2点がある。

須恵器坏は高台の付くもの(3~7)、底部回転糸切りされるもの(8・13~21)等ある。3は胎土緻密で焼成は堅緻である。14は外面に火襷がつき、内外面灰白色を呈するやや軟質なものである。15は外面下半に墨書される。円面硯(第33図6)は内外面ロクロナデされ、陸のみへラケズリが施される。陸と海とは明瞭に区別されていない。台上部に凸帯が1帯巡らされているが、透脚の数は不明である。粗大な石英を胎土に含み、内外面青灰色を呈する焼成良好なものである。四耳壺片(12)は肩部に凸帯が付され、平行叩きが施される。肩部に灰が被る。

二彩陶器(7・8)はいずれも小破片3片であり器形は不明であるが、皿ないし薬壺蓋と考えられる。緑釉と黄釉の二種類の釉薬が施釉される。灰釉陶器は碗が多く、わずかに皿がある。碗(9)は釉薬がやや薄緑がかり、高台内部はロクロケズリされる。青磁碗(11)は花文が毛肉彫りされており、高麗産と思われる。他の緑釉陶器碗片等がある。

f 中世

該期の遺物は少ないが、大平鉢、天目茶碗等ある。大平鉢(13)は内外面ロクロナデされ、内外とも灰~灰黒色を呈する。外面および底部に灰が被る。

B 石器

今次調査で出土した石器類は縄文時代中期から平安時代までわたっており、詳細時期不明なものが多いことから形態に基づいて記述する。

打製石斧は大形のをいわゆる「石鋏」、小型のを「打製石斧」と呼び分けがなされるが、大きさで区分できないものがあり、ここでは一括した。第34図1は自然面を大きく残し、両側縁に潰しが加えられる。3は刃部側に自然面を残し、残りの部分は大きな剝離で整形される。4・6・8は分厚い石器で両側縁に潰しが加えられる。7は長方形の器体が作出される。1~7は硬砂岩を素材とする。8~第35図4は長幅比の比較的大きなやや小振りなものであり、素材は硬砂岩・緑色岩が相い半ばする。刃部から側縁にかけて摩滅が認められるもの(第34図9・第35図1・2・4)が多い。大きさ・形状にばらつきがみられる。

横刃型石器(5・6)は比較的自然面を大きく残し、刃部がやや分厚い。5は硬砂岩、6は緑色片岩を素材とする。縄文時代ないし弥生時代に比定される。

抉入打製石庖丁(7・8)はいずれも硬砂岩を素材としており、剝離によって自然面を残らず取り去っている。7は刃部にロー状光沢が認められる。弥生時代後期から古墳時代前期に属すると考えられる。

横刃型石庖丁（9～第37図3）は硬砂岩を素材とし、長楕円形・舟形等を呈するものが多い。自然面を大きく残すものが多いが、主に背部調整を施すもの（第36図5・13・第37図1）、大きな背部調整および小さな刃部調整を施すもの（第35図14・15・第36図6）、自然面をほとんど残さないもの等がある。なかに縄文時代の横刃型石器と区別できないものがあるが、大部分が弥生時代後期から古墳時代前期に属すると考えられる。

第37図4～9はやや大きめの硬砂岩剥片の四囲に細かい調整が施される。方形ないし不整形を呈する。

有肩扇状形石器（第37図10～12）はいずれも自然面を大きく残す。主に両側縁の抉りのみの横長のもの（10）、刃部に調整を加えて突出した刃部を作り出すもの（11）、基部および側縁に調整が施されるもの（12）があり、形状にバラエティーがある。硬砂岩素材である。弥生時代から古墳時代前期にかけての時期に比定される。

13は硬砂岩製の長方形を呈する楔状の石器で、片側の側縁は潰し、反対側の側縁は折り取り後細かい調整が施される。14～第38図1は小形縦長の石器で、14・16は擦痕が認められる。

石錘（第38図4・5）は扁平な小形礫の両端に抉りを入れた礫石錘で、礫砂岩素材である。

打製石鏃（第39図2～4）はいずれも黒曜石製であり、無茎凹基鏃（2・4）および側縁に段をもついわゆる「飛行機鏃」（3）がある。断定はできないが縄文時代の遺物と考えられ、とくに後者は縄文時代晩期に比定される。

第39図5～8は磨製石鏃、第38図3は剝離調整された磨製石鏃の素材剥片であり、他にも多数の未製品が出土している。大半がこの素材剥片の剝離調整段階の破損品であり、製品の占める割合は非常に低い。弥生時代のもので、大半が中期に属するものと考えられる。

第38図6・7は磨製石庖丁で、6はほぼ全面に研磨がおよぶ。6は粘板岩、7は珪質岩製である。弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと考えられる。

玉斧（第39図9）は全面丁寧に研磨が施され、両側縁は擦り切りされる。

砥石（第38図8～10）は小形の当擦型で、砂岩ないしホルンヘルス化した砂岩製の荒砥である。

11～15は棒状の硬砂岩を素材とした敲打器で、長軸の一端ないし両端に敲打痕・剝離痕をとどめる。中形のもの（11・12・14）とやや大形のもの（13・15）がある。

第39図1は粗い花崗岩製で、挽き臼と考えられる。

C 土製品

土錘（第33図16・第40図10）、鞆羽口（第33図15）、土製勾玉（第40図8）がある。土錘（第33図16）は直径4.5cm、長さ7.5cmで、約1/2が遺存する。直径1.2cmの孔をもつ筒状を呈し、胎土に

石英を含む。第40図10は紡錘形を呈するもので、用途は不明であるが孔が貫通することから土錘と考えられる。鞆羽口（第33図15）は皮革側が鞆本体側に比して著しく広がる。石英を多量に含む。他にほぼ円筒状のものがある。土製勾玉は表面が丁寧に研磨されており、破損した断面観察の結果土製の焼き上げたものであることが判明した。

D 石製品

石製紡錘車（第40図1・2）、石製模造品（3～6）が出土した。第40図2は火を受けて赤変する。第40図1は滑石製で、下面は鋸歯状の区画が彫り込まれ、外側部分に斜格子状の文様が充填される。肩部も同じく斜格子状の文様が施文される。有孔円盤は1～2個穿孔される。4・5は滑石製である。

E 玉類（第40・41図）

他遺構からの混入遺物を含め遺構外から多数の管玉・白玉・土玉が出土した。白玉が大半で、いずれも滑石製である。

F 金属製品（第42図）

鉄鏃・刀子・鉄鎌・鉄釘および不明鉄製品が出土した。鉄鏃（1）は茎の一部を欠き、錆化がやや進んでいる。刃部は凸レンズ状に膨らんでおり、鏑の確認はできない。茎断面は方形を呈する。やや古手の鉄鏃と考えられる。刀子（2）は茎と考えられ、錆化が著しく進んでいる。鉄鎌（4）はほぼ全体が遺存しており、錆化が進んでいる。

2. 倉垣外地籍4619-1 (店舗建設用地)

(1) 竪穴住居址

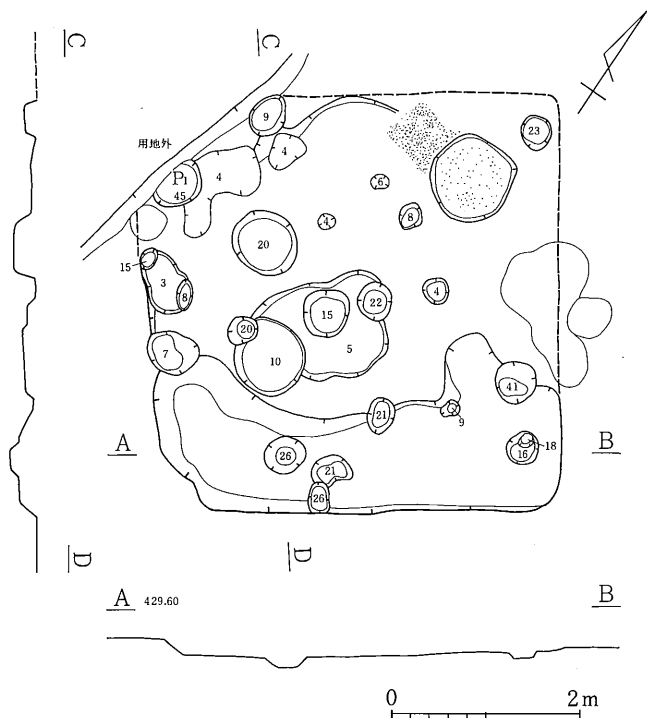
1) 古墳時代後期

①260号住居址 (挿図45、第43図1～5)

調査区西側で検出された。土坑65と重複する。西隅は調査区外にかかる。南東・南西壁を確認したのみで、他の部分は削平したため遺存しない。このため、平面形・規模等不明であるが、南東壁下の周溝状の部分からすれば、約4.2m四方の方形を呈する住居址と考えられる。床面はやや凹凸があり、地山の礫がむき出しになる。周溝状の部分は幅約100cmを測り、だらだらと掘りくぼむ。北東側はやや浅い。本址北側には焼土・炭が多量に分布する。北西壁中央よりややずれるが、この位置にカマドが構築された可能性がある。調査範囲際の深さ45cmを測る柱穴より土師器坏・鉢、須恵器蓋坏が完形で出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・鉢、須恵器甕・蓋坏等があり、出土量は僅少である。土師器坏(第43図1)は口縁部やや内側に立ち上がる。内面ヘラナデ・外面ヘラケズリ後ナデが施される。鉢(2)は内面に粘土紐の凹凸をとどめる。内面黒色処理され、暗文がある。外面上半は横位のヘラミガキ、下半はヘラケズリが施される。須恵器坏(4)は口縁端面がくぼむ。

出土遺物等から古墳時代後期に位置づく竪穴住居址である。



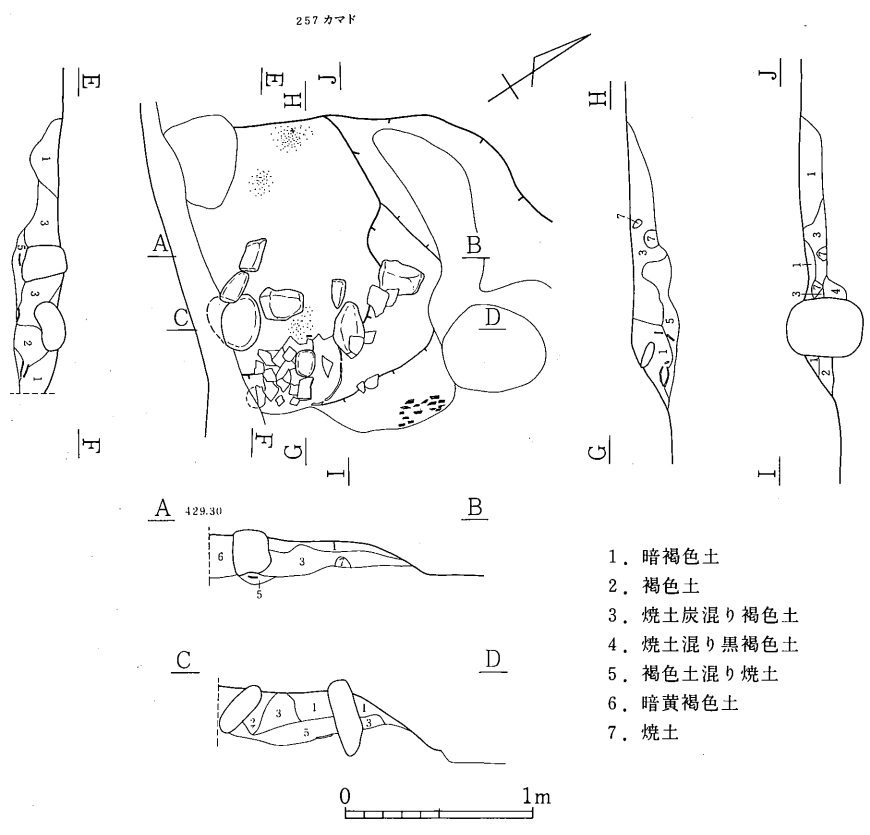
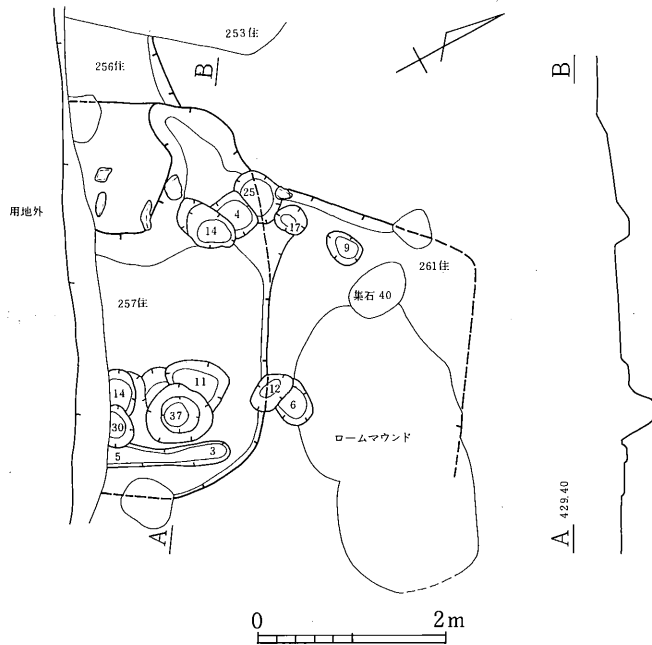
挿図45 K U R 4619-1 260号住居址

2) 平安時代

①257号住居址

(挿図46、第43図6～第44図3)

調査区西側で検出された。256・261号住居址を切る。調査区外にかかり、約1/2を調査したにとどまる。南東側は削平され壁は確認できなかった。隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、南東・北西方向の規模は4.1m、主軸方向はN61.3°Wを示す。壁の遺存状態は悪く、立ち上がりの状態は不明である。床



挿図46 KUR4619-1 256・257・261号住居址

面はほぼ中央付近に硬い部分が検出されたが、凹凸があり地山の礫が露出する。南東壁下やや離れて幅15~20cmの浅い周溝が掘り込まれている。北西壁ほぼ中央付近にカマドが構築されている。カマドは左側に1個、右袖に2個の袖石が検出され、石芯粘土カマドであると考えられる。焼土が厚く認められ、相当期間使用されたことが考えられる。カマド右側前面に多量の炭が出土した。

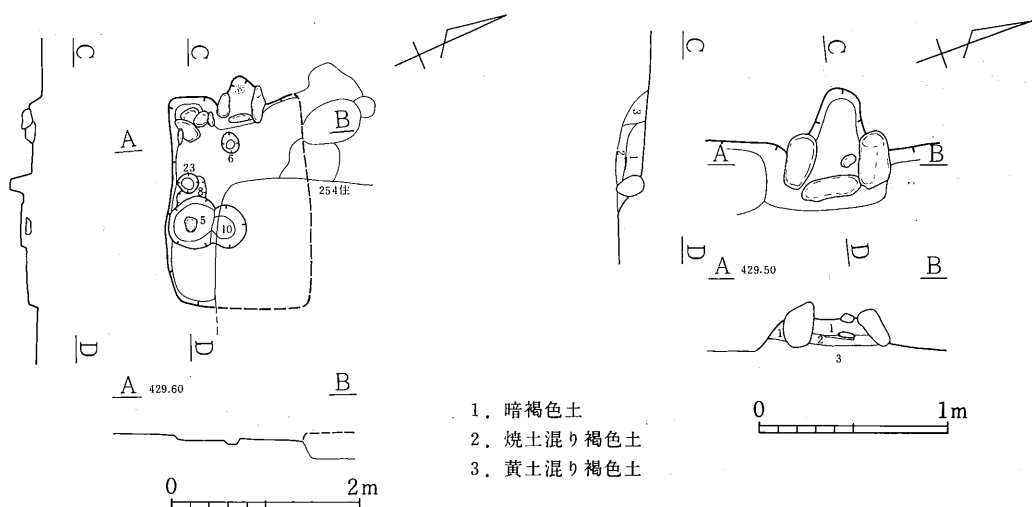
出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏等があり、出土量は少ない。土師器甕は長胴形を呈し、カキメ調整が施されるもの（第43図6）や内外面ヘラナデが施されるもの（7）がある。坏は土師器・須恵器ともに回転糸切りされ、前者には内面黒色処理されるものがある。

出土遺物から平安時代後期に比定される。

②259号住居址（挿図47、第44図4~8）

調査区北西側で検出された。254号住居址に切られる。東壁の一部と北壁は重複遺構のため遺存しないが、おおむね推定の破線の位置にくるものと思われる。長方形を呈する竪穴住居址で、2.2×(1.6)mと非常に小規模である。主軸方向はN66.4°Wを示す。壁高は4~12cmを測り、南東隅は不明瞭なもの、立ち上がりの状態はやや急である。床面は良好な黄色土の貼り床がなされる。西壁ほぼ中央にカマドが構築されており、袖石一対・天井石を備えた石芯粘土カマドである。南壁際から須恵器坏、カマド両側から土師器甕が出土した。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏・長頸瓶等があり、出土量は僅少である。土師器甕（第44図4）は長胴形を呈し、口径より胴中央に最大径がある。他に底部に木葉痕をとどめ、内面ハケナデ・外面ヘラナデが施されるもの等ある。須恵器坏（8）が外面に墨書され、やや軟質で



挿図47 K U R 4619-1 259号住居址

ある。

規模が極端に小さく特異であり、出土遺物も土師器甕・須恵器坏1個体前後と限られる。出土遺物・重複関係等から平安時代後期に位置づく。

3) 不明

①253号住居址 (挿図48、第45図1～7)

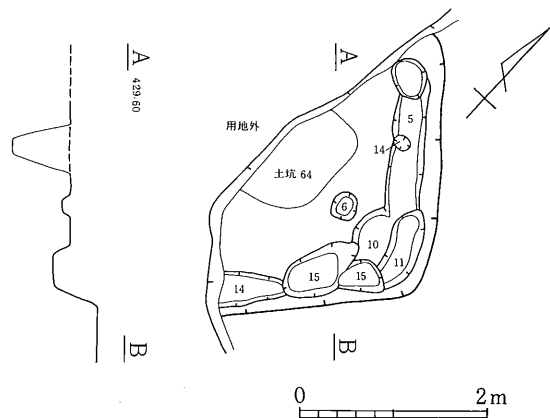
調査区西側で検出された。256号住居址を切り、土坑64に切られる。方形を呈すると考えられる竪穴住居址であるが、大半が調査区外にかかり約1/4を調査したにとどまる。このため規模・付属施設等の詳細は不明である。床面はやや硬く締まる。壁は急な立ち上がりを示し、壁高は28cmを測る。壁直下に幅20～40cmの周溝が掘り込まれる。深さは一定しない。北東隅は良好な状態で検出できなかった。

出土遺物は土師器甕・坏・台付甕、須恵器甕・坏・長頸瓶等であり、出土量は少ない。土師器甕は刷毛目調整が施されるもの(第45図1～4)、縦位にヘラケズリされるもの等ある。坏は暗文が施されるもの、底部回転糸切りされるものがある。須恵器甕は外面格子叩き・内面同心円叩きが施される。

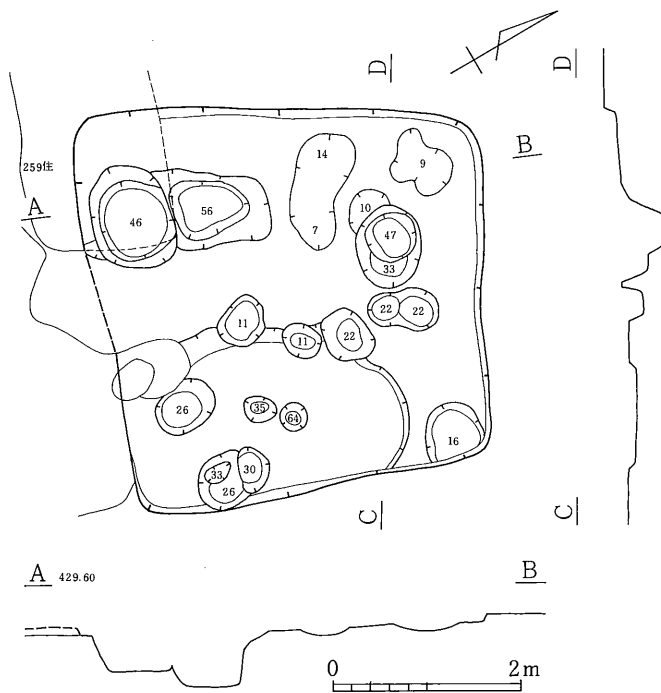
古墳時代前期から平安時代までの遺物が混入しており、本址の所属時期は不明である。

②254号住居址 (挿図49、第45図8～14)

調査区北西側で検出された。259号住居址を切る。不整形を呈し、南東・南西・北西・北東壁の長さはそれぞれ3.6m・4.1m・4.2m・3.4mを測る。南東・北西方向はN64.5°Wを示す。埋土は暗褐色土の一層である。床面は礫混じりの黄色土に達し、凹凸が著しい。壁高は約10cmを測り、床面まで浅いため、立ち上がりの状態は不明である。南西壁ほぼ中央から本址中央に向かってスロープ状の部分があり、それを取り巻いて小柱穴が掘り込まれている。スロープ状の部分は床面と同様礫混じりの黄色土であり、本址掘り込み後に設けられたものではない。中央付近床面上より「寛永通宝」が出土した。



挿図48 K U R 4619-1 253号住居址



挿図49 K U R 4619-1 254号住居址

③255号住居址 (挿図50、第45図15)

調査区北西側で検出された。258号住居址と重複する。他の遺構との重複のためプランは不明瞭であるが、3.6×3.2mの不整隅丸方形を呈すると思われ、南北方向はN16.7°Wを示す。北西隅は近年に積まれたと思われる石垣に壊されていた。床面は凹凸が著しい。壁はだらだらと立ち上がる。南壁ほぼ中央に炭がわずかに検出された。

出土遺物は土師器甕、須恵器蓋、陶器仏飯器・摺鉢、磁器皿・飯茶碗・盃・徳利、砥石等があり、出土量は僅少である。

本址の所属時期は不明である。

④256号住居址 (挿図46、第45図16)

調査区西側で検出された。253・257号住居址に切られる。また大部分が調査区外にかかり、北東壁の一部を検出したのみで、平面形・規模等一切の詳細は不明である。壁高は4～12cmを測り、壁の立ち上がりはやや緩やかである。床面は平坦であるが、基盤の礫がむき出しになる。断面での確認でも貼り床はなく、床面はやや軟弱である。257号住居址側がやや落ち込む。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器壺・甕・坏、轆羽口等があり、出土量は僅少である。土師器坏は内面黒色処理される。須恵器四耳壺(第45図14)は肩部に凸帯が張付される。轆羽口は径が大きい。
古墳時代後期と近世の遺物が混在しており、時期不明であるが、重複関係から後者の可能性が指摘できる。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕等があり、出土量は僅少である。

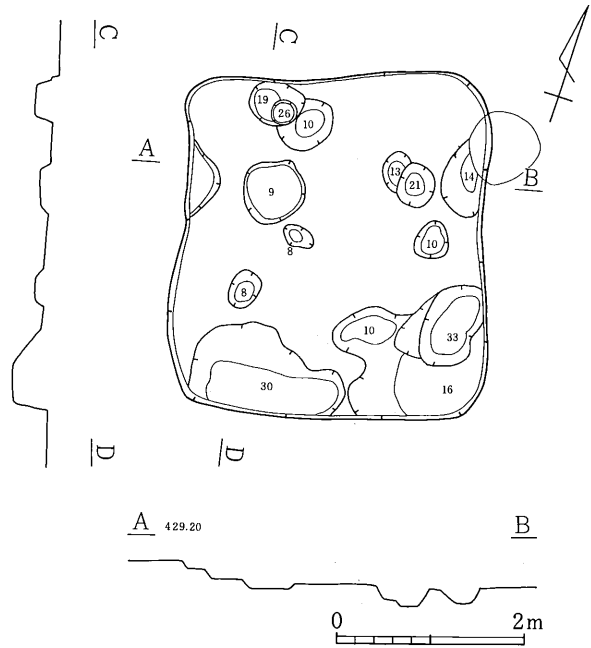
本址の所属時期は不明である。

⑤258号住居址 (挿図51)

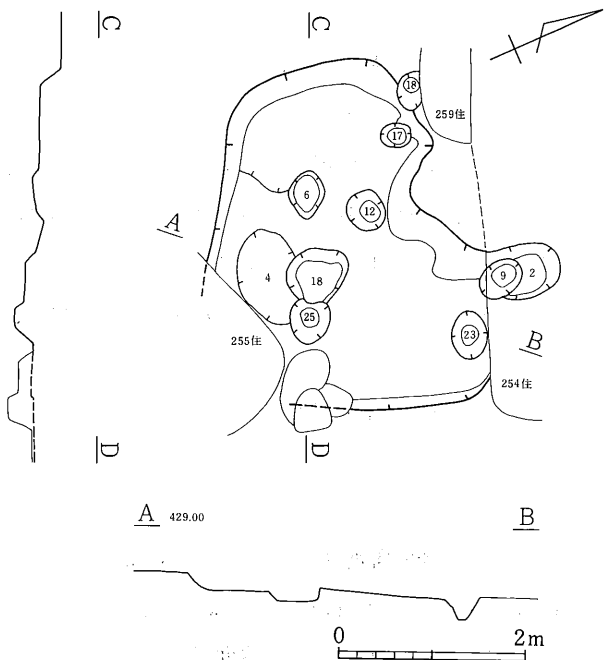
調査区北西側で検出された。254・255号住居址と重複する。重複遺構のため平面形・規模等不明な点がある。遺存する部分是不整形を呈し、南東・北西方向の規模は3.7mを測る。形態等から、住居址であるか疑問が残る。床面は地山の礫がむき出しになり、凹凸がある。壁はだらだらと掘りくぼむ。北西壁や西隅寄りに焼土が検出された。

出土遺物は弥生土器壺・甕片、土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏、近世以降の陶磁器片等があり、出土量は少ない。土師器甕には刷毛目調整が施されるものがある。

弥生時代から平安時代までの遺物が混入しており、時期不明である。



挿図50 K U R 4619-1 255号住居址



挿図51 K U R 4619-1 258号住居址

⑥261号住居址（挿図46）

調査区西側で検出された。257号住居址・集石40に切られる。北西壁および床面の一部を検出したのみで、平面形・規模等詳細は不明である。集石40南東側にロームマウンドが確認され、この部分は床面がやや軟弱である。北西壁下では硬く締まり、地山の礫が露出する。壁の立ち上がりの状態はやや緩やかである。

出土遺物は土師器甕小片4片のみであり、時期不明である。

（2）土坑

① 土坑64（挿図52）

調査区西端一部調査区外にかかって検出された。253号住居址を切る。約1/2を調査したのみで、平面形・規模等不明である。埋土黒褐色土である。壁の立ち上がりは南西側がやや緩やかで、北東側は急である。

本址の所属時期は不明である。

② 土坑65（挿図52）

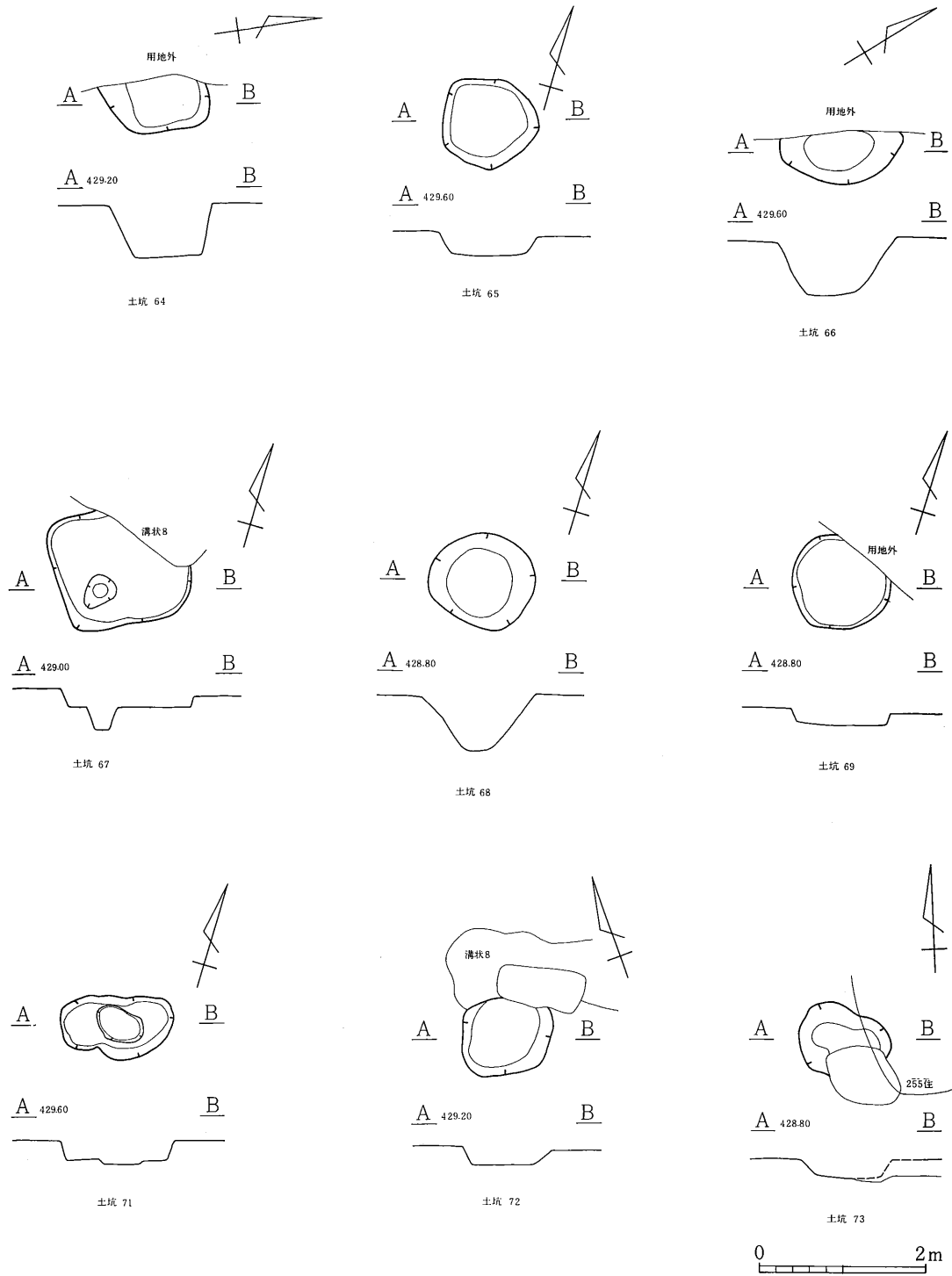
調査区西側、260号住居址と重複して検出された。不整形を呈し、115×110cm、深さ30cmを測る。だらだらと掘りくぼむが、底面は平坦である。出土遺物は土師器甕、須恵器甕片等で、本址の所属時期は不明である。

③ 土坑66（挿図52）

調査区北西側調査区際で検出された。調査区外に約1/2がかかり平面形等不明であるが、長辺は145cmを測る。深さ69cmで、北東側はやや緩やかに立ち上がる。底部から炭・焼土が検出された。出土遺物は弥生時代壺、古墳時代後期の土師器甕・坏・高坏等僅少である。土師器坏・高坏は内面黒色処理される。本址の所属時期は古墳時代後期と思われる。

④ 土坑67（挿図52）

調査区北側で検出された。溝状址8に切られる。不整形を呈する土坑で、（160）×140cm、深さ24cmを測る。南東隅はやや丸みが強く、複数遺構の重複の可能性も考えられる。底面はやや平坦で硬くない。壁はやや急に立ち上る。埋土暗褐色土である。西壁際に20cm程度の礫が10個程入る。出土遺物は陶磁器小破片である。出土遺物等から近世末以降の遺構と考えられる。



挿圖52 K U R 4619-1 土坑64~69・71~70

⑤ 土坑68 (挿図52)

調査区中央で検出された。120×110cmの不整円形を呈し、深さ65cmを測る。坑内に焼土が多量に検出された。底面は平坦で、壁はだらだらと立つ。埋土暗褐色土で、径20cm程度の礫が多数入る。黒色ガラス化した溶滓、礫に付着して鉄片等が出土した。出土遺物は陶器摺鉢、磁器碗・徳利等少量である。出土遺物から本址の時期は近世末以降であり、果たした機能は判然としないが、西側に隣接してたたき状の部分が広がることから、あるいは該期の住宅に付属した排水施設の可能性も考えられる。

⑥ 土坑69 (挿図52)

調査区北東端一部調査区外にかかって検出された。約115cmの不整円形を呈すると思われる。浅い皿状を呈し、壁はやや急な立ち上がりを示す。埋土黒褐色土である。底面は基盤の礫がむき出しになる。出土遺物は須恵器甕、陶器鍋等であり、近世末以降の遺物が多い。出土遺物等から本址の所属時期もほぼこの時期と考えられる。

⑦ 土坑70 (挿図53)

調査区東側、Aトレンチに検出された。埋め立てられた礫混り層上部に、多量の炭・骨片が集中して検出された。平面形等不明である。礫混り層を10cm程掘り込み、埋土褐色土である。多量の炭・骨片が遺存することから火葬墓と考えられ、中世の遺構であると思われる。

⑧ 土坑71 (挿図52)

調査区西側、259号住居址と土坑66の中間で検出された。不整形を呈し、135×70cm、深さ22cmを測る。壁は急に立ち上がる。底部中央は一段くぼむ。埋土暗褐色土である。出土遺物はなく、本址の所属時期は不明である。

⑨ 土坑72 (挿図52)

調査区北西側で検出された。溝状址8に切られる。不整形を呈する土坑で、105×70cm、深さ23cmを測る。南側はやや緩やかに立ち上がる。底部は平坦である。

本址の所属時期は不明である。



挿図53 KUR4619-1 土坑70 周辺柱穴平面図

⑩ 土坑73 (挿図52)

調査区西側で検出された。255号住居址と重複する。105×80cmの不整形を呈し、深さ17cmを測る。底面は東側が低くなり、壁はだらだらと立ち上がる。埋土暗褐色土である。

本址の時期や機能は不明である。

① 土坑74 (挿図54)

調査区南西端で検出された。重複する柱穴のため平面形・規模等不明であるが、不整形を呈すると思われる。底部はやや凹凸があり、壁の立ち上がりはやや緩やかである。

本址の所属時間は不明である。

② 土坑75 (挿図54)

調査区西側、溝状址9と接近して検出された。不整楕円形を呈し、110×95cm、深さ18cmを測る。東側壁はだらだらと立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

本址の所属時期は不明である。

③ 土坑76 (挿図54)

調査区南側調査区際、溝状址12に隣接して検出された。不整形を呈し、145×80cm、深さ21cmを測る。底部は西側が高く、なだらかに東側に落ちる。本址の所属時期は不明である。

④ 土坑77 (挿図54)

調査区南側、土坑76の東側で検出された。不整円形を呈する土坑で、90×80cm、深さ27cmを測る。東側は緩やかな立ち上りを示し、底部は凹凸がある。出土遺物はなく、本址の所属時期・性格は不明である。

⑤ 土坑78 (挿図54)

調査区南東側端、小竪穴21を切って検出された。一部調査区外にかかるが、不整楕円形を呈し、125×105cm、深さ5cmを測る。底面は平坦であるが、やや軟弱である。本址上では小竪穴21の貼り床状部分が確認されなかったことで、新旧関係が判断された。しかし、東壁にかかる扁平な礫と小竪穴21が組み合うことも考えられ、とすると本址も近接した時期が考えられる。出土遺物は陶磁器類小破片であり、周辺に分布する溝状址等諸遺構と同様、近世末以降の時期が考えられる。

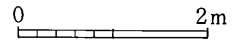
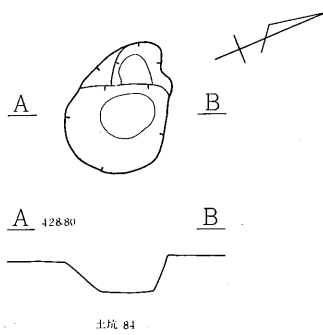
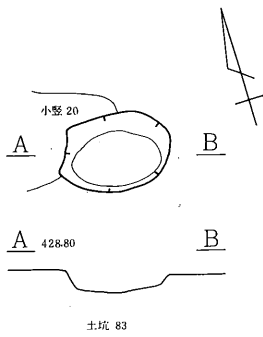
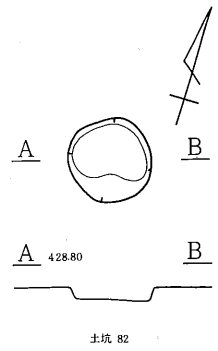
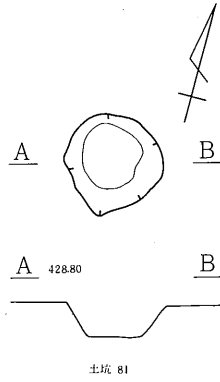
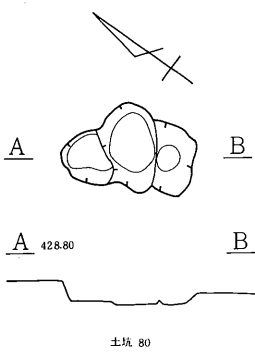
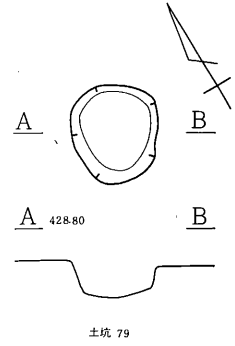
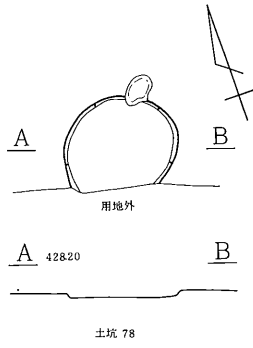
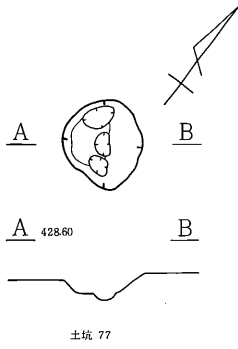
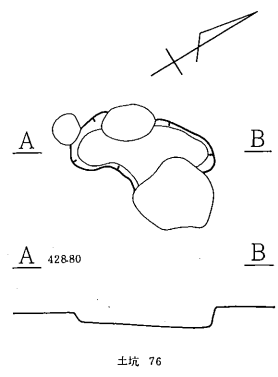
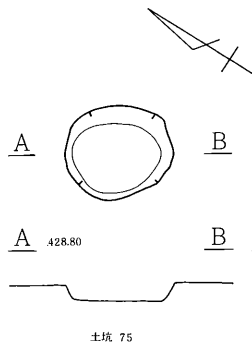
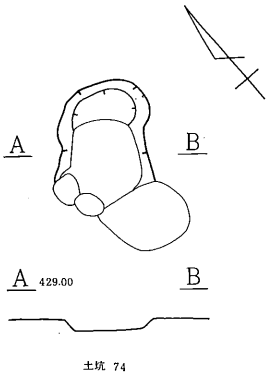


插图53 KUR4619-1 土坑74~84

⑯ 土坑79 (挿図54)

調査区中央やや南寄り、土坑68に近接して検出された。100×90cmの不整形を呈し、深さ40cmを測る。西側はやや緩やかな立ち上がりを示す。底部は中央付近が一番低い。出土遺物はなく、本址の所属時期等は不明である。

⑰ 土坑80 (挿図54)

調査区中央で検出された。不整形を呈し、複数遺構の重複も考えられるが、底部のレベルがほぼ揃うため、一括した。140×100cm、深さ25cmを測る。壁の立ち上がりの状態は北側を除き、緩やかである。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

⑱ 土坑81 (挿図54)

調査区中央、溝状址13と隣接して検出された。不整形円形を呈し、105×100cm、深さ36cmを測る。壁は南側では緩やかに立ち上がる。底部はほぼ平坦であり、地山礫がむき出しになる。埋土中に炭が少量含まれる。出土遺物は僅かであり、本址の所属時期等は不明である。

⑲ 土坑82 (挿図54)

調査区北側中央寄りで検出された。土坑81・83の間に位置する。不整形円形を呈する土坑で、85×85cm、深さ15cmを測る。南側は緩やかに立ち上がる。底部は平らであるが、やや東側が低い。出土遺物はなく、本址の所属時期は不明である。

⑳ 土坑83 (挿図54)

調査区北側で検出された。小竪穴20と重複する。120×80cmの不整形楕円形を呈し、深さ20cmを測る。底面は中央が低く、壁は南西側に比べて北東側がだらだらと立ち上がる。出土遺物はほとんどなく、本址の時期は不明である。

㉑ 土坑84 (挿図54)

調査区北東側、溝状址14・15の間で検出された。140×110cmの不整形を呈し、深さ38cmを測る。内部は北側が一段高く、壁は全体的に緩やかに立ち上がる。出土遺物はほとんどなく、本址の時期は不明である。

(3) 小竪穴

① 小竪穴16 (挿図55)

調査区北側、小竪穴20と重複して検出された。3.1×2.0mの不整形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土黄土・礫混暗褐色土である。浅い掘り込みで、壁はだらだらとする。底部は平坦である。出土遺物は少なく、近世末以降の遺構と考えられる。

② 小竪穴17 (挿図55、第45図17)

調査区北東側、小竪穴18を切って検出された。2.4×2.4mの不整形を呈し、深さ約35cmを測る。北東隅は攪乱が及ぶ。壁はほぼ垂直に立つ。底面は割合平坦で、埋め立てた黒褐色土を掘り込んでいる。径10~12cm程度の礫ががらがら入る。出土遺物はやや多く、陶磁器類が出土している。他の小竪穴と同様、近世末以降の遺構と考えられる。

③ 小竪穴18 (挿図55、第45図18)

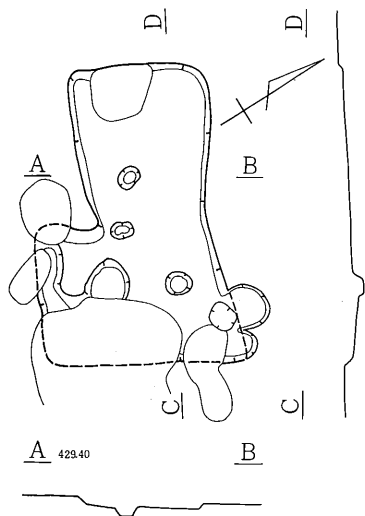
調査区北東側、小竪穴17に切られて検出された。(2.0)×1.3mの不整形を呈し、深さ20~25cmを測る。壁はほぼ垂直に立つ。底部レベルは小竪穴17とほぼ揃い割合平坦で、埋め立てた黒褐色土を掘り込んでいる。やはり小竪穴17と同様、径10~20cm程度の礫ががらがら入る。出土遺物は少なく、小竪穴17と同時期近世末以降の遺構と考えられる。

④ 小竪穴19 (挿図55)

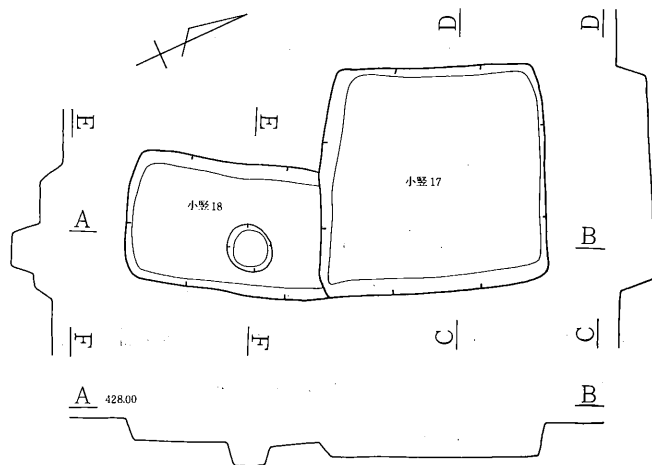
調査区東側、埋め立てられた部分で検出された。4.6×4.2mの不整形を呈し、深さ約90cmを測る。埋土上層は褐色砂、下層は黒褐色砂で、レンズ状に堆積している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸があり、中央付近が低い。底面では柱穴らしいものは認められない。出土遺物はわずかに土師器片があるが、流れ込みによるものと考えられ本址に伴うものはない。埋め立てられた部分に掘り込まれていることからそれ程古いとは考え難く、他の小竪穴と同時期の近世末以降の遺構の可能性はある。

⑤ 小竪穴20 (挿図55)

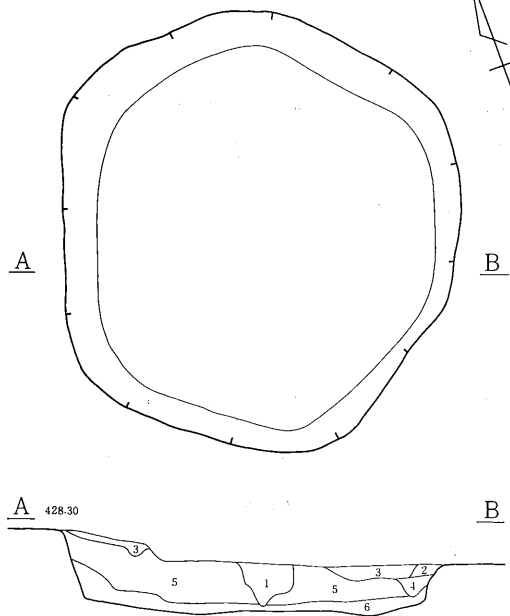
調査区北側、小竪穴16と重複して検出された。4.9×1.5mの不整形を呈し、深さ約1mを測る。埋土は西側では小円礫および暗褐色土が多く大円礫が混じる。東側は大小円礫がほとんど土はあまり混じらない。壁は東側端を除いて、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。出土遺物



小竪 16

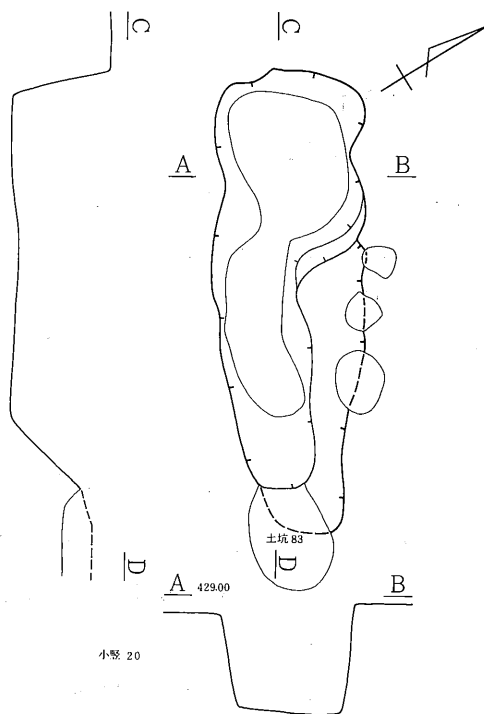


小竪 17-18

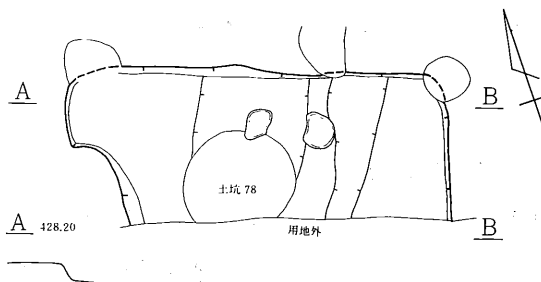


小竪 19

1. 暗褐色砂質土
2. 暗黄褐色砂質土
3. 黑褐色砂質土
4. 暗褐色砂質土
5. 褐色砂土
6. 黑褐色砂土



小竪 20



小竪 21

挿図55 K U R 4619-1 小竪穴16~21

は多量の陶磁器類等であり、西側に集中する。また上層が圧倒的で中位以下には少ない。中位からは鉄片および板ガラスが出土した。本址はその特異な形状から竪ム口と考えられ、出土遺物等から近代の遺構である。

⑥ 小竪穴21 (挿図55)

調査区南東側、土坑78と重複し、溝状址18と接して検出された。約1/2が調査区外にかかり、東西方向は4.0mを測る。壁の立ち上がりは不明瞭である。硬い黄褐色土の貼り床が全面に検出された。この上部には扁平な礫があり、溝状址等の存在を考慮すると、近世末以降の遺構に関連するものと考えられる。

(4) 溝状址

① 溝状址8 (挿図56)

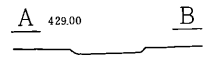
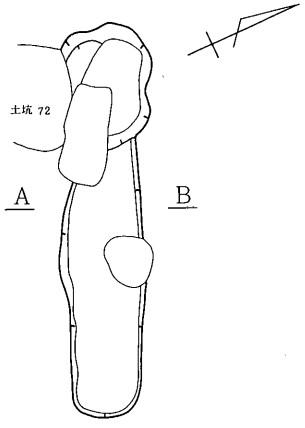
調査区北側、土坑67・72と重複して検出された。4.0×0.85mのほぼ直線状を呈し、だらだらと掘りくぼむ。底面は中央付近では平坦であるが、両端は低くくぼむ。西側は別遺構の可能性があり。出土遺物の大半は東側から出土した。蓋・碗・徳利・燈明皿・鍋・片口・摺鉢・十能等陶磁器類がある。十能は尾林焼である。出土遺物等から近代の遺構と考えられる。

② 溝状址9～15・17 (挿図56・57)

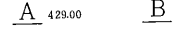
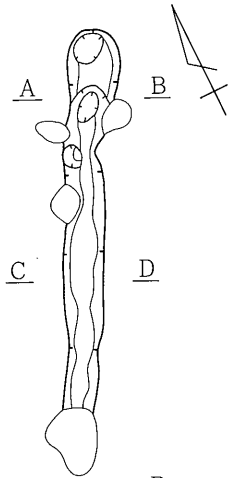
調査区東半中央寄りで検出された。溝状址9・10・12～15はほぼ方向を揃え、溝状址11はこれらと直交方向をとる。直線状の遺構で幅はおおむね20～50cm、断面U字形を呈し、埋土褐色土といった共通性がみられる。深さは一定せず、底面の凹凸が激しい。出土遺物はほとんどなく、時期・性格等不明であるが、溝状址9付近にたたき状の部分がみられることから、おそらく近代の建物址に付属した施設と考えられる。

③ 溝状址16 (挿図57)

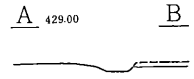
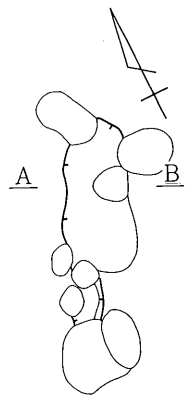
調査区北東側で検出された。鉤形を呈する遺構であるが、直角ではない。溝状址9～15・17とは形態・埋土・方向等共通性が指摘できる。幅は一定せず、両端はやや広い。底面はほぼ平坦である。出土遺物はなく、時期・性格等不明であるが、溝状址9～15・17と同様、おそらく近代の建物址に付属した施設と考えられる。



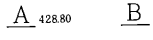
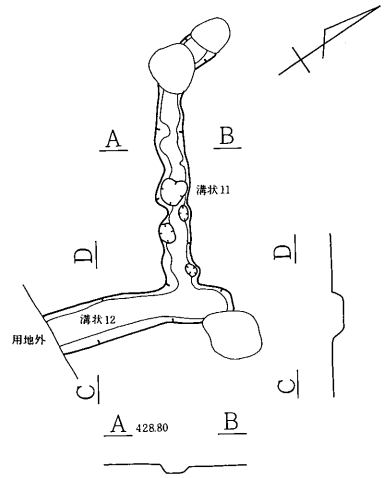
溝状址 8



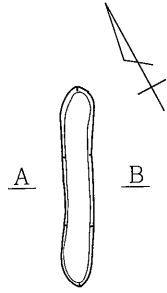
溝状址 9



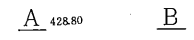
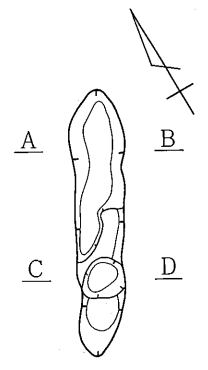
溝状址 10



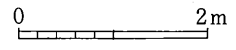
溝状址 11-12



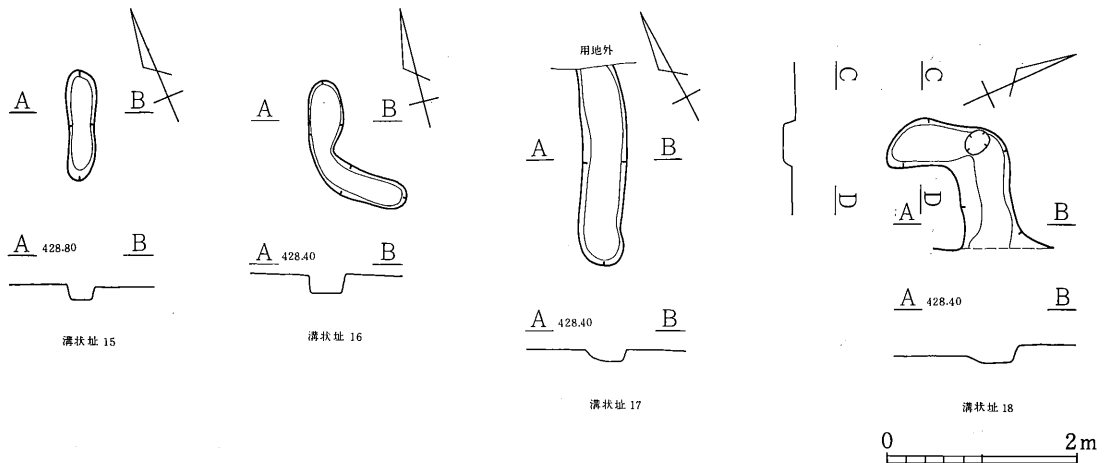
溝状址 13



溝状址 14



挿図56 KUR4619-1 溝状址 8~14



挿図57 K U R 4619-1 溝状址15~18

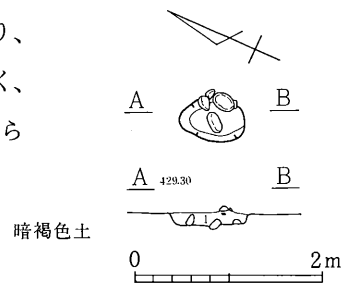
④ 溝状址18 (挿図57)

調査区南東側、小竪穴21と接して検出された。鉤形を呈する遺構である、幅45~50cm、深さ12~18cmを測る。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。本址の北側に石垣状部分があること、東・南側に扁平な礫がやはり鉤形に並ぶこと、小竪穴21に貼り床状の部分があること等から、おそらく近代の建物址に付属した施設で、具体的には入口付近に位置すると考えられる。

(5) 集石

① 集石40 (挿図58)

調査区西側、261号住居址を切って検出された。60×55cmの不整形を呈する掘り方に、20~30cmの礫が集中する。深さ14cmを測り、礫の底部レベルはほぼ揃う。埋土暗褐色土である。出土遺物はなく、本址の時期等は不明であるが、形態からあるいは集石墓とも考えられる。



挿図58 K U R 4619-1 集石40

(6) その他

① Aトレンチ (挿図53、第46図)

調査区北東側、埋め立てられた部分の土層堆積・底面の状態を確認するために設定した。上部は暗褐色土に礫が混じり、下位ほど礫が多くなる。下層は暗黄褐色土で基盤の礫層に至る。堆積層の状態は底面の傾斜にほぼ沿っている。底面はトレンチ北西端で急激に落ち込み、南東側の大部分はやや傾斜しながらもほぼ平坦な状態である。出土遺物は上層・下層とも中世の陶器類画中心で、両者の間にはほとんど時期差は見出だせない。上層・下層から各1点五輪塔が出土しており、このうち上層のものは立位で、下層のものはやや寝た状態で出土した。こうした状況からほぼ中世に埋め立てられたものと考えられる。

出土遺物は縄文土器、土師器甕、須恵器甕・硯、灰釉陶器碗、陶器壺・甕、五輪塔等であり、出土量は少ない。縄文土器は中期の把手小片である。土師器甕は底部に木葉痕をとどめる。須恵器硯(第46図6)は肩部で、海と脚の一部分である。透かしと脚がほぼ同じ大きさで、硯部と台部の境に凸帯が巡らされる。陶器壺(7)は外面に黒釉が施釉される。五輪塔はいずれも花崗岩製の、風・空輪の一石造りである。8は空輪頂部を欠損し、風・空輪の境に5mm幅のくびれがある。風輪下端は太柄が造り出しされる。寸法は風輪下端径0.28尺・上端径0.46尺・高0.31尺、空輪下端0.45尺・最大径0.47尺・高0.39尺(頂部欠失の状態)を測る。9は空輪頂部の突出がそれほど明瞭でない。風輪下端はやはり太柄が造り出しされる。寸法は風輪下端径0.26尺・上端径0.40尺・高0.23尺、空輪下端0.39尺・最大径0.41尺・高0.33尺を測り、8よりもやや小振りである。どちらもそれほど風化作用が及んでいない。

② 柱穴 (挿図53・59～61)

調査区のほぼ全面にわたって、径20～50cm程の柱穴がたくさん検出されている。大部分が建物址を構成するものと考えられるが、規則性等見い出せず、詳細は不明である。これらのうち、南半の比較的規模の小さな柱穴は溝状址、石積み状部分やたたき面等が付近に存在することから近世末以降の遺構に関連したものである可能性もある。

③ 遺構外出遺物 (第47～49図)

A 土器

a 縄文時代中期 (第47図1～14)

1は半截竹管による施文が施される、平出第Ⅲ類aである。2～4は沈線ならびに角押文で文様が描かれる。6は口縁部付近の破片で、貼付文が施される。7～10は隆帯および沈線で区画文が描かれ、内部を縦位ないし斜位の沈線で充填される。13・14はRL縄文が縦位施文される。中



插图59 KUR4619-1 周边柱穴平面图 (1)



插图60 KUR4619-1 周边柱穴平面图 (2)

期後半の遺物が大半を占める。

b 弥生時代中期 (第47図15～19)

該期の出土遺物は僅少であり、いずれも壺の小破片である。櫛描横線文、櫛描波状文、列点文、櫛描簾状文等が組み合わされて施文される。

c 古墳時代前期 (第47図20・21)

土師器壺・甕・高坏等が出土している。甕(20)は器面がやや荒れているものの、やや右下がり斜めの刷毛目調整が看取される。台付甕(21)は外面および台部内面に刷毛目調整され、内外橙褐色を呈する。

d 古墳時代後期 (第47図22～第48図12)

土師器甕・坏・高坏・鉢、須恵器壺・甕・坏等が出土している。土師器鉢(第47図23)は内面ヘラミガキ・口縁部横ナデが施され、内面にわずかに接合痕が残る。胎土に多量の細かい石英を含む。須恵器甕は口縁部の立ち上がりの小さいもの(24)、大きいもの(25～27)がある。胴部は内面同心円叩き・外面平行叩きが施されるものが多く、内面はナデ消されているものがある。第48図2・3・7は外面叩きの上にカキメが施される。9は底部付近でヘラケズリされる。

e 平安時代 (第48図13・14)

該期の遺物は少量であり、土師器甕・坏、須恵器甕・坏等が出土している。土師器甕はカキメが施される。須恵器坏(13)は底部回転糸切りされ、灰褐色を呈する。14は四耳壺の肩部と考えられ、凸帯が付される。

f 中世

15は陶器甕片で、叩きが施される。

B 石器

詳細時期等不明であり、形態等に基づいて記述する。

16・17は緑色片岩製の打製石器で、17は刃部および基部に摩滅が認められる。

18は硬砂岩素材の有肩扇状形石器で、基部の一部を欠損する。基部および抉り部の調整が主で自然面を大きく残す。弥生時代中期～古墳時代前期の時期の石器である。

第19図1・2は不定形な形状で、1は花崗岩素材でほぼ全体に剝離がおよぶ。

3・4はともに緑色岩製で、ほぼ全面に敲打が施され器体が整えられる。3は基部側を欠損す

る。刃部は細かい調整剝離をとどめるものの、刃部付近両面に擦痕が認められ、太型蛤刃石斧の未製品と考えられる。弥生時代中期に比定される。

敲打器（5～8）は上ないし下端に作業痕と思われる敲打痕および剝離痕が認められる。5・7は上下端の作業痕は顕著でないが、棒状の形態をとることから敲打器に含めた。5は緑色岩、6・8は砂岩、7は硬砂岩素材である。

Ⅳ．まとめ

一般国道153号座光寺バイパス建設に先立ち、緊急発掘調査が着手されたのは昭和51年度のこと
で、以来15年が経過した。大型掘立柱建物址群をはじめ、和同開珎銀錢・鉄鈴・硯といった官衙
の遺構・遺物が多数検出され、古代伊那郡衙に光があてられた。そして昭和57年度からは飯田市
教育委員会の直営事業として恒川遺跡群範囲確認調査が実施され、官衙址の中心部把握が進めら
れてきた。また、バイパス開通に伴い周辺地域の諸開発が急速に進行し、これに伴う緊急調査が
行われた結果、郡衙の存在を裏付ける数多くの調査事実が積み重ねられてきた。こうしたなかで、
文化庁・奈良国立文化財研究所・長野県教育委員会の指導が行われ、具体的に地点をあげて官衙
の中心部分推定がなされると同時に、これまで調査された遺構の分布状況等から周辺調査地点の
果たした機能が推定される段階に至っている。

飯田・下伊那地方古代における政治・社会・経済その他数多くの諸問題を解明する上で、この
遺跡がもつ内容が重要な役割を果たすことはいまさら言うまでもないであろう。このような遺跡
をできる限り現状で残すことが我々の責務であるが、急速に進展するバイパス周辺の諸開発がも
たらす経済効果や地域住民の福利厚生も一面では是認すべき状況であり、開発に先立って完全な
記録保存を図ることはやむを得ないことといえる。とはいえ、無秩序な開発は避けるべきであり、
こうした点からもこれまで行われてきた発掘調査の総合的な検討が待たれるところである。今次
調査の結果もこうした総合化の過程で様々な事実を提示することと考えられるが、現状では十分
深められておらず、時代ごとの遺構変遷を概観するなかで、若干の問題を指摘して総括としたい
(付図2)。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されておらず、早期および中期から晩期にかけての遺構外出土遺物が若
干得られている。このうち早期の資料はこれまで断片的にしか得られておらず、なお不明と言わ
ざるを得ない。中期になると、バイパス路線内では倉垣外地籍の東端でやや密度の高い分布状況
で得られており、該期遺構の存在する可能性が既に指摘されている。今次両調査地点はこの部分
に接しており、連続した遺物の分布状態を示すと言える。遺構の存在そのものは重複する他時代
の遺構が密な状態であることもあって確認できなかったものの、周辺に該期遺構が分布する可能
性が追認された。後期から晩期についても、早期と同様、これまで断片的な資料しか得られてお
らず、詳細は不明である。

(2) 弥生時代

弥生時代中期に属する遺構は1軒のみでそれも床面を確認したにとどまるが、これについても

他時代の遺構より高いレベルで検出されており、遺物がKUR4612調査区のほぼ全体から出土していることを併せ考えると該期遺構が他にも存在したと考えられる。田中・倉垣外地籍他調査地点では該期の遺構がほぼ全面に分布しており、本台地上に大規模な集落が営まれたといえる。

続く後期の遺構は方形周溝墓6に限られており、これまで指摘されてきたように、KUR4612調査区周辺が墓域として機能していたことを裏づけるものといえる。田中・倉垣外地籍では5・7・8・12・17・113・116・118～120・132・150・151号住居址といった住居址が該期に属しており、飯田中央農協給油所用地中央でこれより西側の居住空間と東側の墓域とに分けることができよう。墓域が水を得るのに絶好の場所といえる恒川清水に寄った側に形成され、地籍西側に広がる低湿地に面して居住空間が広がることは、この集落の主要な生産基盤が西側低湿地および段丘崖下にあったことを示唆する。

(3) 古墳時代

古墳時代前期は検出遺構が少ない。しかし、遺物は弥生時代中期と同様、調査区全体から出土しており、確認した他にも該期の遺構が存在した可能性が考えられる。昭和63年度実施された隣接地点での範囲確認調査の結果、弥生時代後期末～古墳時代前期の住居址が3軒確認されており、またバイパス路線内でも台地東端まで遺物の分布が捉えられ、竪穴住居址が台地の東半部分全体に分布している。今次調査地点の住居址もこの一部であると考えられる。これまでバイパス路線の調査結果からは古墳時代前期のなかでも、その前半と後半とでは集落の位置がずれており、主体的な生活の場が恒川清水周辺から倉垣外地籍上段へ移動していることが指摘されている（小平1991）。前期前半の集落を恒川清水周辺に限定することは、範囲確認調査の結果からすればやや危険ともいえるが、集落の移動・拡大がこの時期にあったことは事実であろう。

後期になると、KUR4612調査区では住居址が密に分布しており、集落は田中・倉垣外地籍ばかりでなく遺跡群全体に拡大する。この集落規模の飛躍的増大は、本遺跡群が飯田・下伊那の中核的な集落として重要な役割を果たすようになったことを如実に示している。この時期本遺跡群の北側に分布している高岡1号古墳をはじめとする多数の古墳が築造されることは、それを支えた大規模な集落の存在とこれに見合った生産力の向上を指摘できる。該期の住居址から普遍的に鉄製農・工具類が出土することから、こうした生産手段の普及が本遺跡群の重要性を高めたといえる。

(4) 奈良時代

該期に属する遺構は竪穴住居址および大型掘立柱建物址であり、また官衙的遺物としては二彩陶器・円面硯がある。204・241号住居址は2軒とも規模が大きく、バイパス路線内で調査されたやはり大型の76号住居址とほぼ方向を揃える。また、大型の掘立柱建物址33の梁行方向ともほぼ方向を揃える等、郡衙のなかで重要な役割を果たした地点と考えられる。しかし、官衙的遺物ば

かりでなく日常使用の土器類も比較的多いことや、大型とはいえ竪穴住居址があり、しかも大型掘立柱建物址とも近接することから、官衙の中心部分とは考え難く、官人層の居住域すなわち「館」の存在を示唆するともいえる。また、昭和63年度実施された範囲確認調査地点における奈良時代から平安時代前期にかけての遺構の不在は官衙域内の空白部である可能性を高めたといえる。いずれにせよ、これまで調査された諸遺構・遺物を詳細に検討していく過程で、今次調査地点の果たした機能も次第に明らかにされてくるものと考ええる。

(5) 平安時代

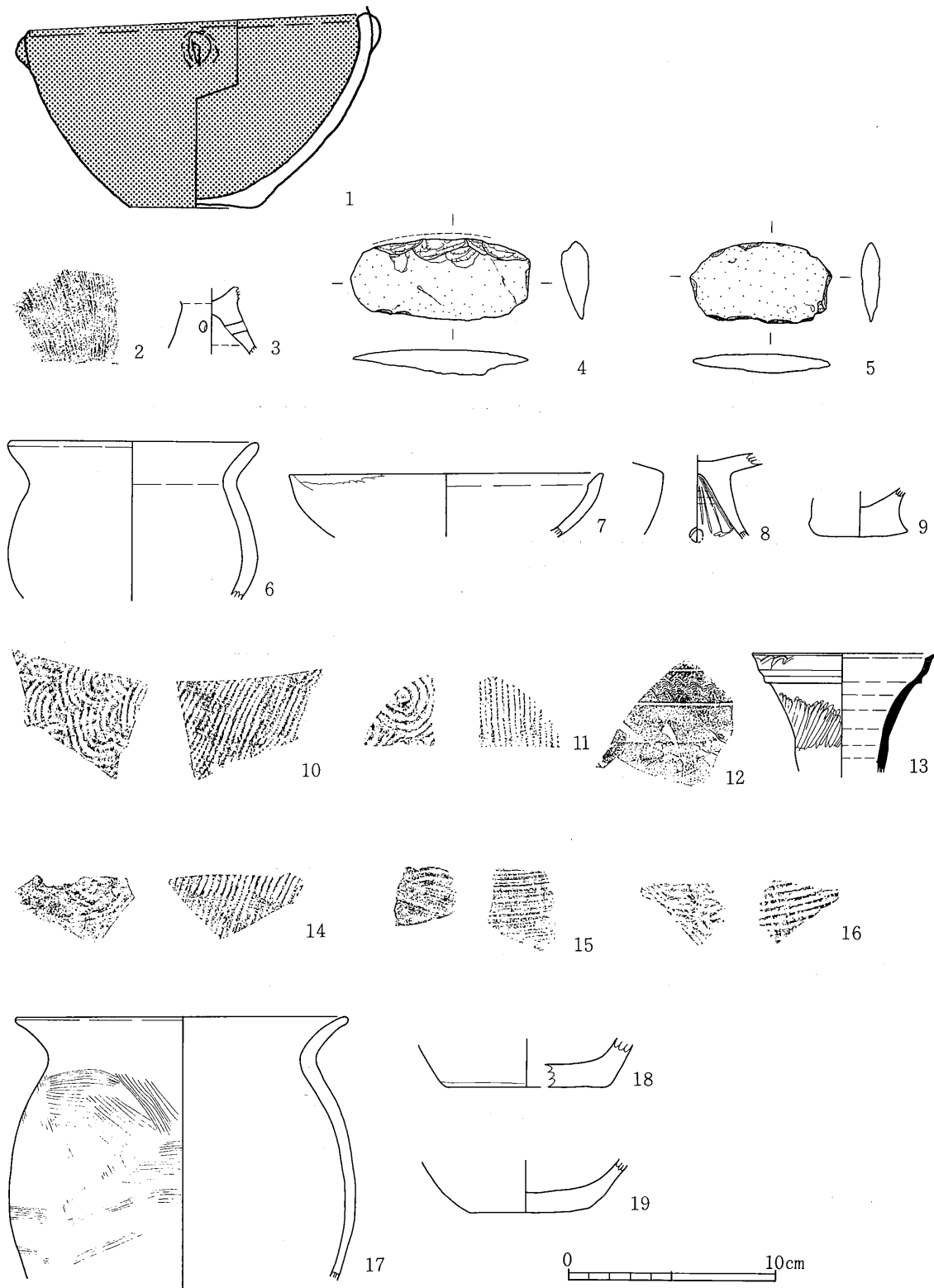
平安時代は郡衙が機能していたと考えられる前半とそれ以降とは、当然のことながら遺跡の様相は大きな相違をみせる。前半は礎石を伴う大規模な掘立柱建物址30があり、奈良時代の竪穴住居址・掘立柱建物址と方向を揃える等、官衙の継続した姿を読み取ることができる。後半になると竪穴住居址が40軒以上に増加し、台地上全体に集落が広がる。こうした傾向は遺跡群全体でも看取され、時期差等考慮するとほぼ一定の間隔をおいて住居址が配置されたといえる。しかし、田中・倉垣外地籍と他地籍との際立った対照をみせるのは竪穴住居址の規模と出土遺物である。すなわち、前者では規模が小さく緑釉陶器等の遺物を保有するものが多いのに対し、後者では比較的規模の大きな住居址が相当数あるものの傑出した遺物は少ない。古墳時代後期にみられた遺跡群全体での斉一性はすでにここではみられなくなっており、こうした変質が奈良時代から平安時代前期にかけて田中・倉垣外地籍と他地籍とが郡衙内で果たした機能の相違に根ざしたものであることは想像に難くない。これまでのところ今次調査地点周辺は前代に引き続き官人たちの居住域であった可能性がある。続く平安時代後期以降中世にかけての遺跡の具体的な姿は、これまで得られている資料が少ないことからなお不明と言わざるを得ない。

以上、時代順を追って概観してきた。最近、恒川遺跡群ばかりでなく、同一段丘面上の周辺遺跡でも奈良～平安時代の遺構・遺物が調査されてきている。下伊那郡上郷町堂垣外遺跡では奈良時代・平安時代前期の竪穴住居址のほか二彩陶器・金銅装帯金具等が出土しているのをはじめ、以前調査された同高森町中谷遺跡でも奈良時代の土器が多数出土していることが明らかになっている。古代伊那郡衙推定地が恒川遺跡群内にあることを変わりないにしても、同一段丘面上の周辺遺跡の状態が次第に明らかにされることにより、古代を通じて恒川遺跡群がどのような役割を果たしたか鮮明に浮かび上がってくるといえる。また、今後早急にこれまで恒川遺跡群全体で積み重ねられた調査成果を詳細に検討することが求められているわけで、こうしたなかで古代伊那郡衙の実態と今次調査地点がいかなる機能を果たしたか明らかにされるといえる。

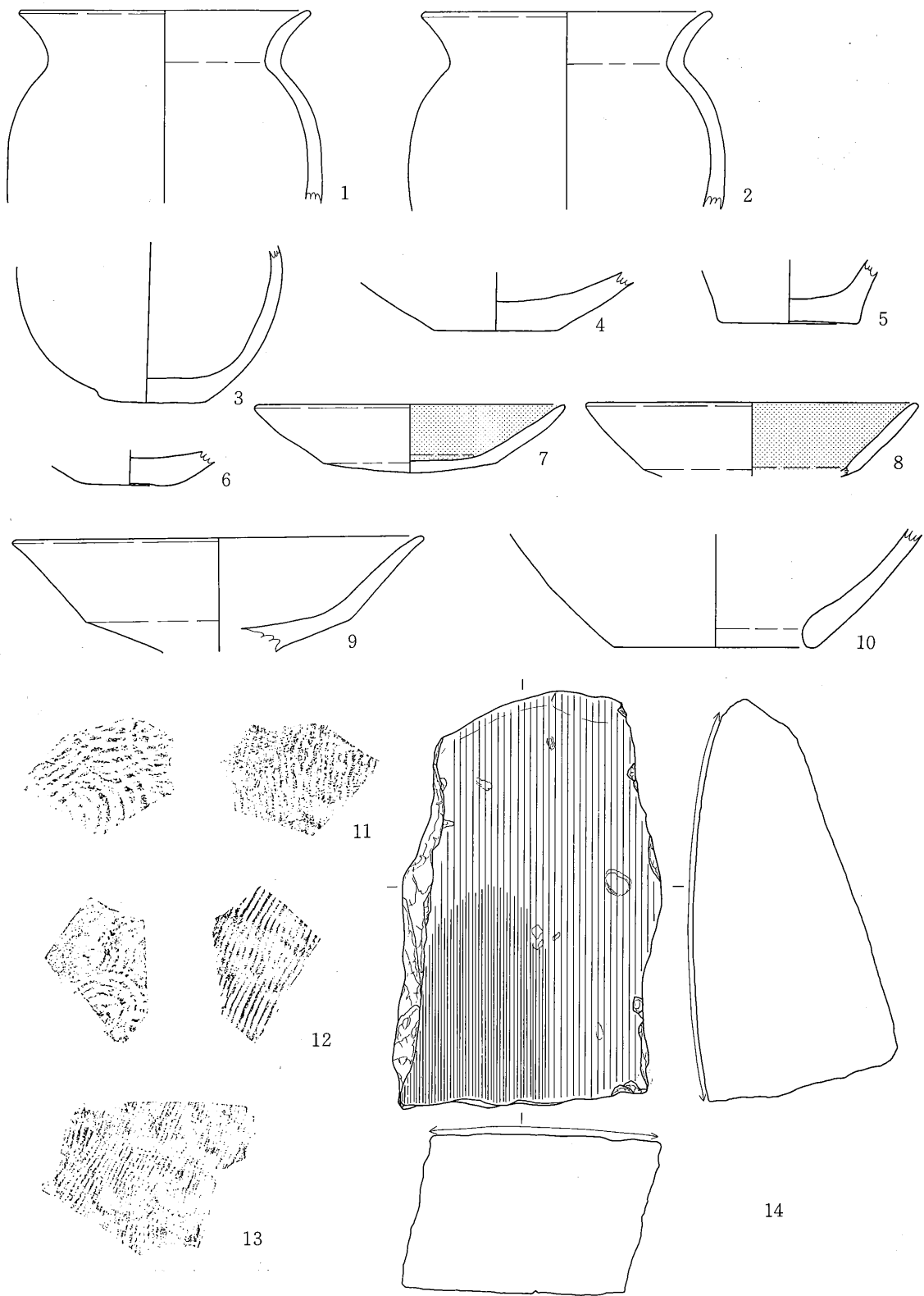
引用・参考文献

- 1955 市村威人編 『下伊那誌 第二巻』
- 1978～90 飯田市教育委員会 『恒川遺跡群 範囲確認調査概報』
- 1986 飯田市教育委員会 『恒川遺跡群』
- 1988 飯田市教育委員会 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』
- 1990 飯田市教育委員会 『恒川遺跡 平成元年度緊急調査概報』
- 1991 下伊那教育会編 『下伊那誌 第一巻』
- 1991 小平和夫 「第三編 第一章 農業社会の発展－古墳時代－」 『下伊那誌 第一巻』

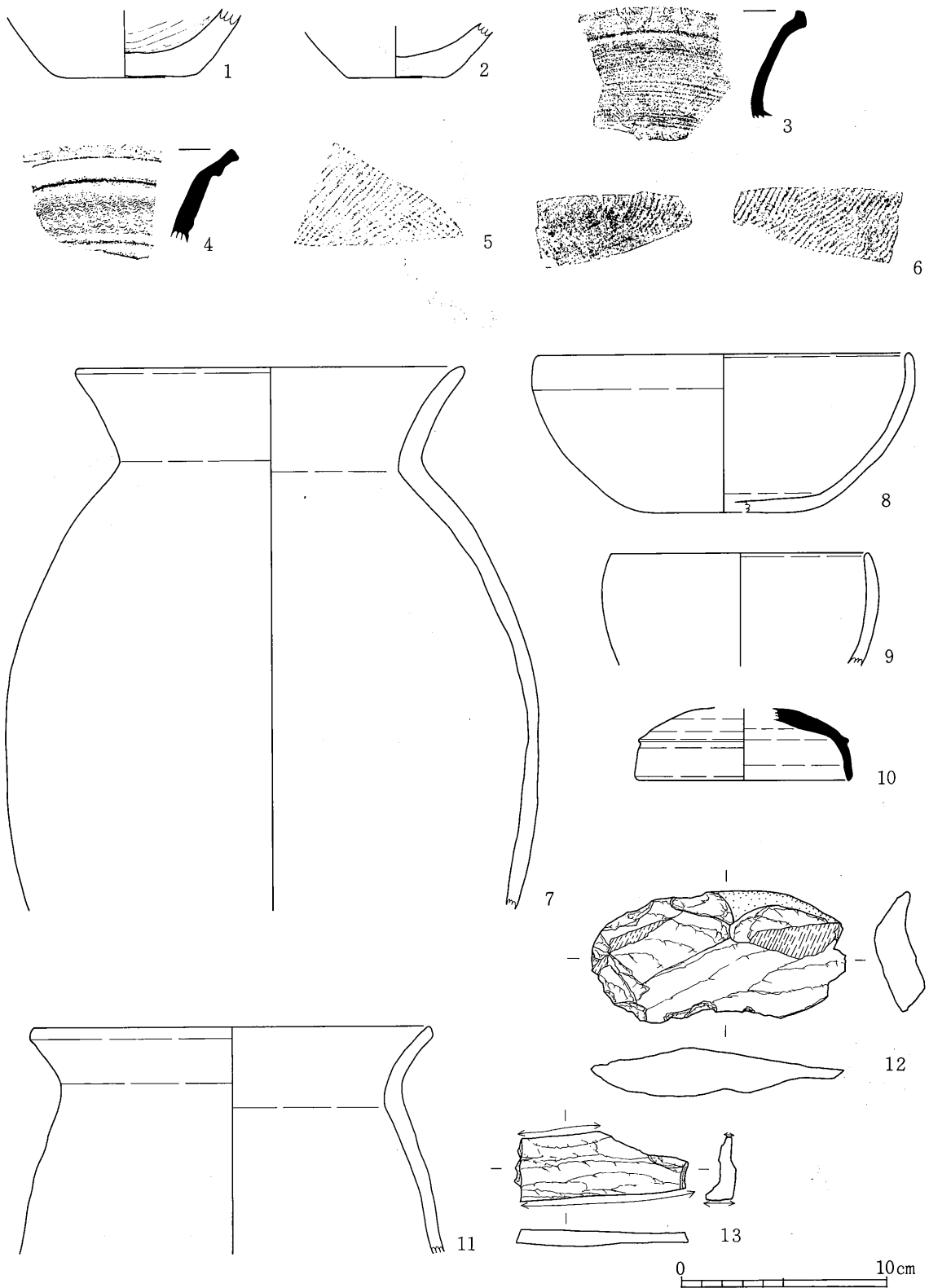
圖 版



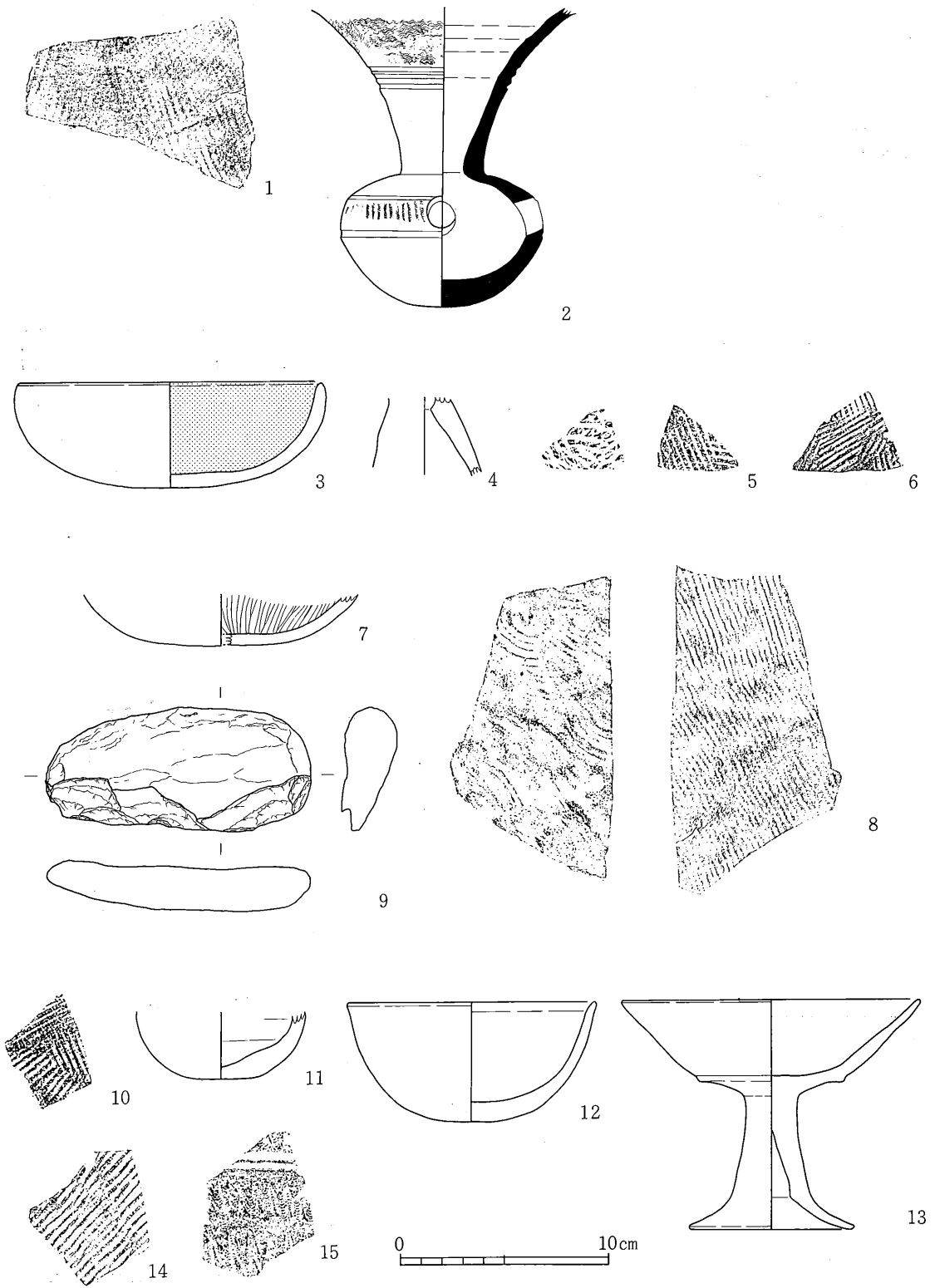
第1图 KUR4612 214・197・220・192・193号住居址出土遺物
 (1 214住、2~5 197住、6~13 220住、14~16 192住、17~19 193住)



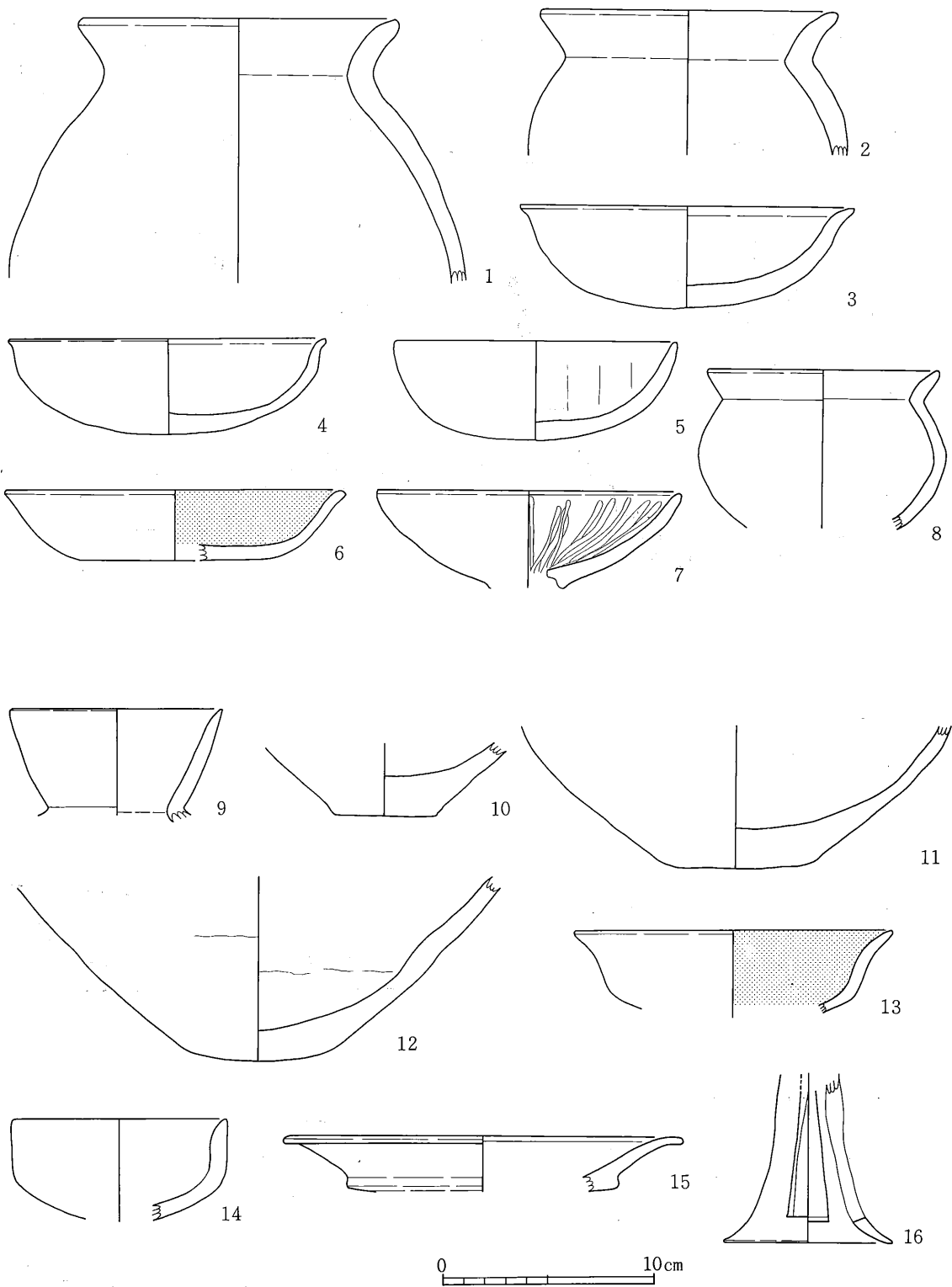
第2图 KUR4612 194号住居址出土遗物



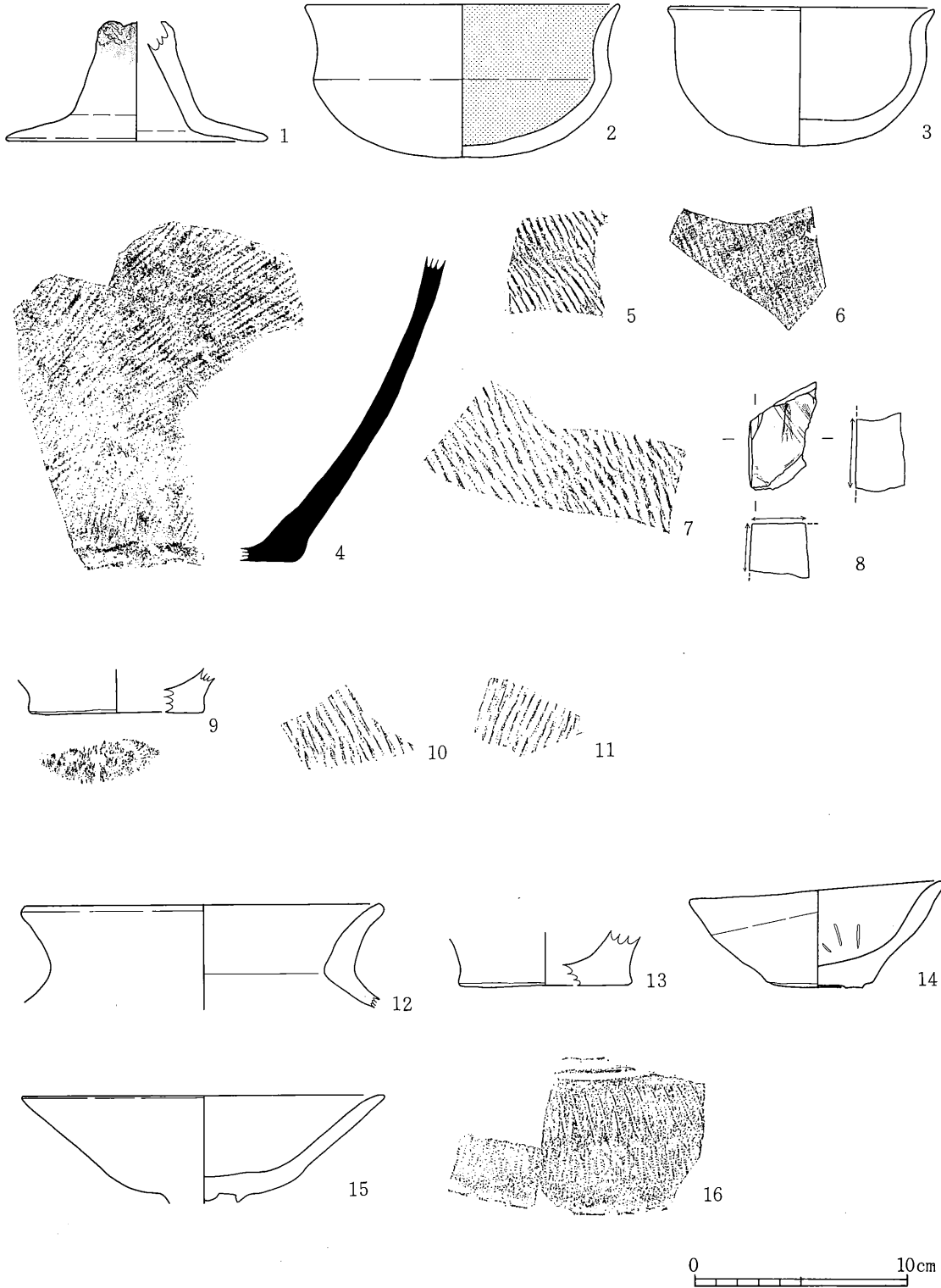
第3図 KUR4612 195・199・204号住居址出土遺物
 (1~6 195住、7~10 199住、11~13 204住)



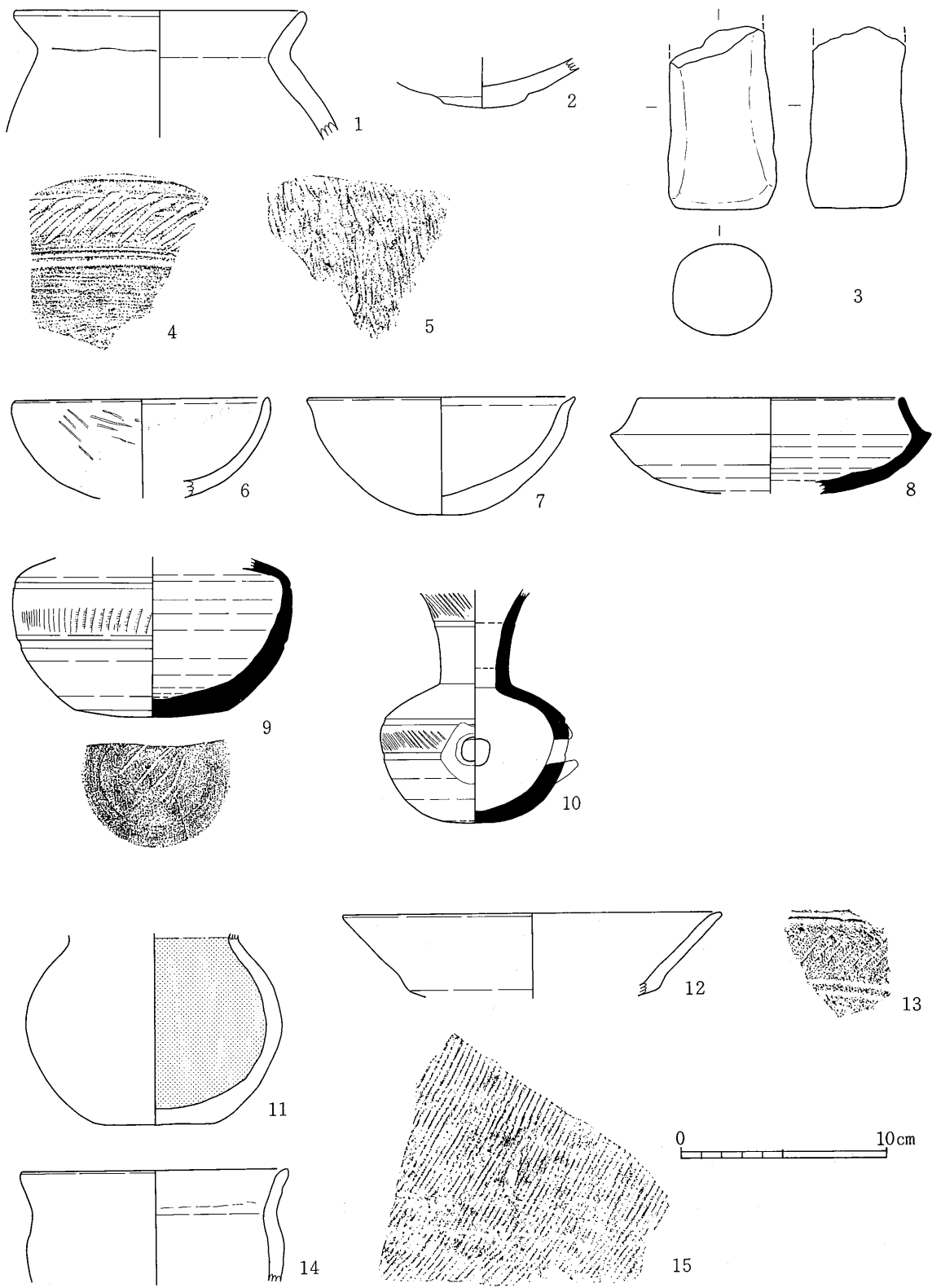
第4図 KUR4612 205・208・210・221号住居址出土遺物
 (1・2 205住、3～6 208住、7～9 210住、10～15 221住)



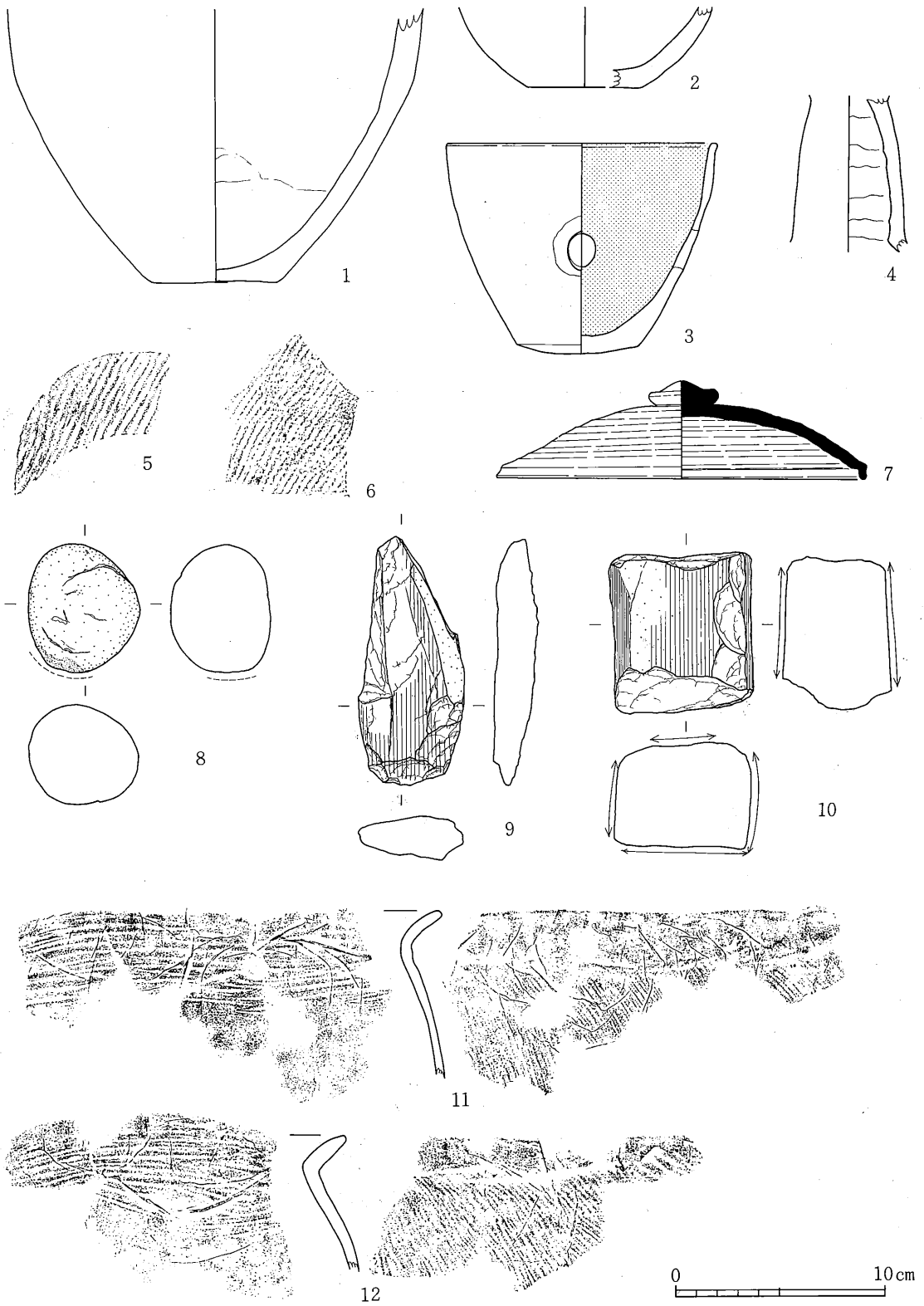
第5図 KUR4612 222・225号住居址出土遺物 (1~8 222住、9~16 225住)



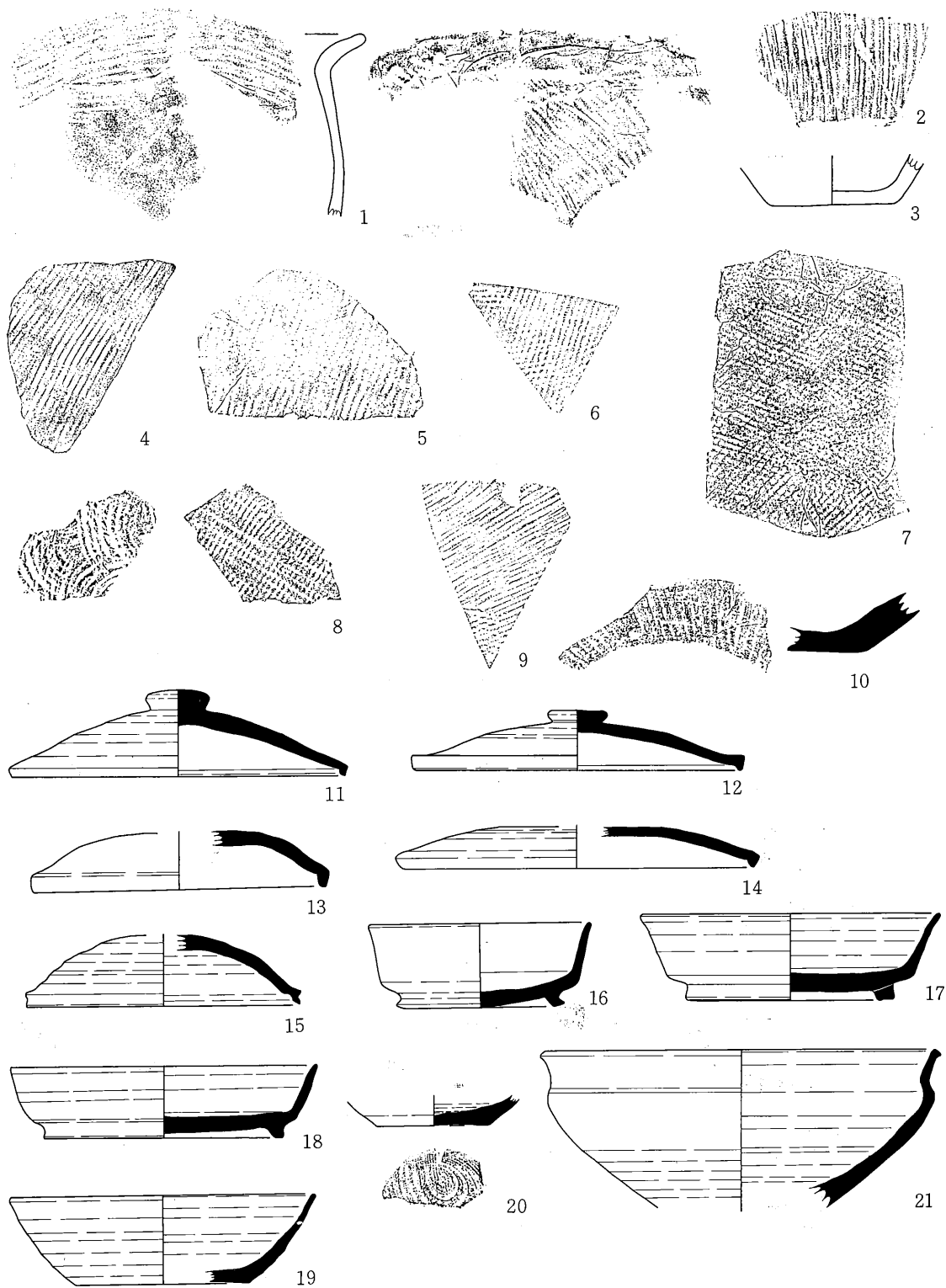
第6図 KUR4612 225・226・228号住居址出土遺物
 (1~8 225住、9~11 226住、12~16 228住)



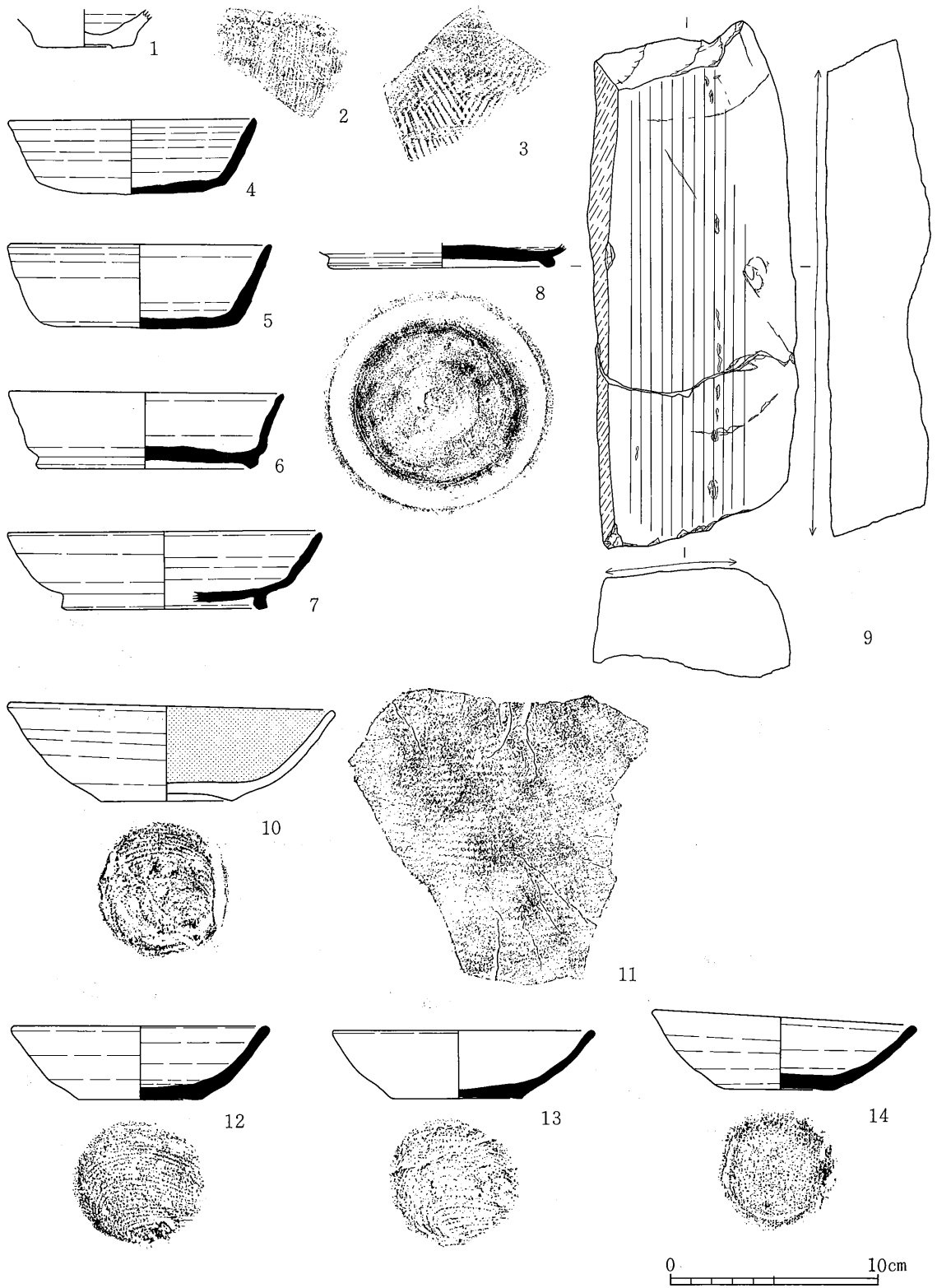
第7图 KUR4612 231·233·242·252号住居址出土遺物
 (1~5 231住、6~10 233住、11~13 242住、14~15 252住)



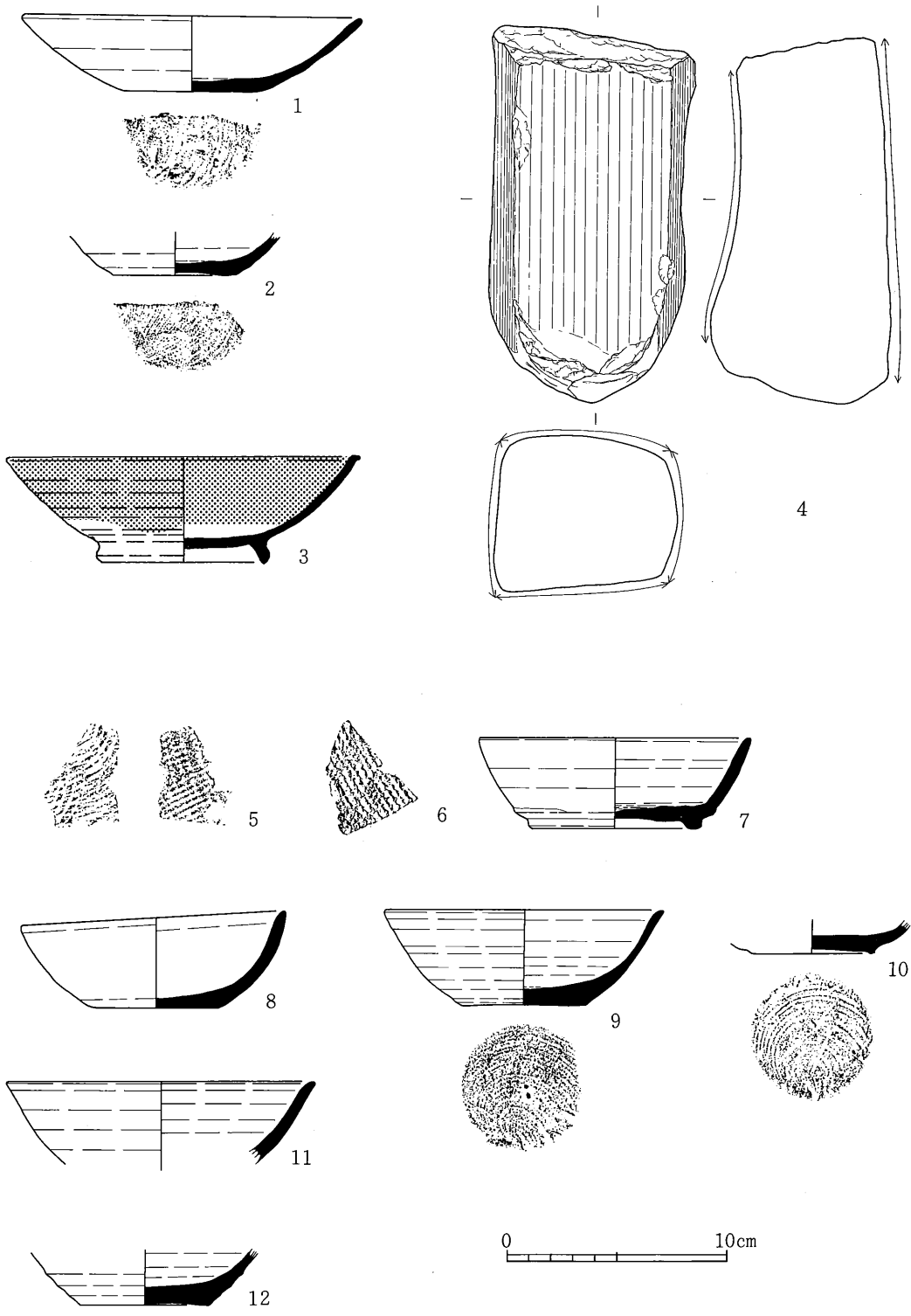
第8图 KUR 4612 207・240号住居址出土遺物 (1~10 207住、11・12 240住)



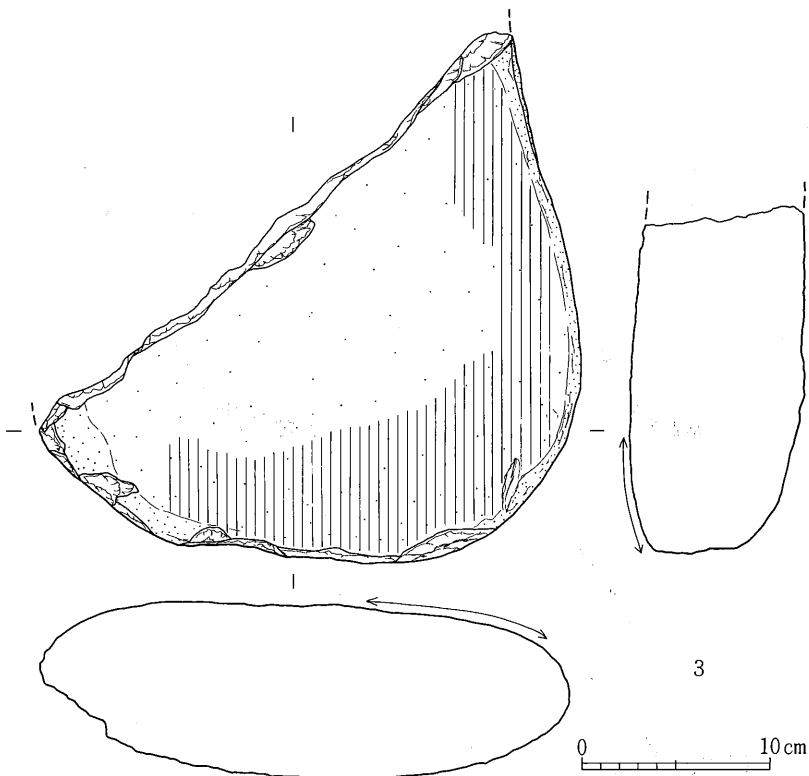
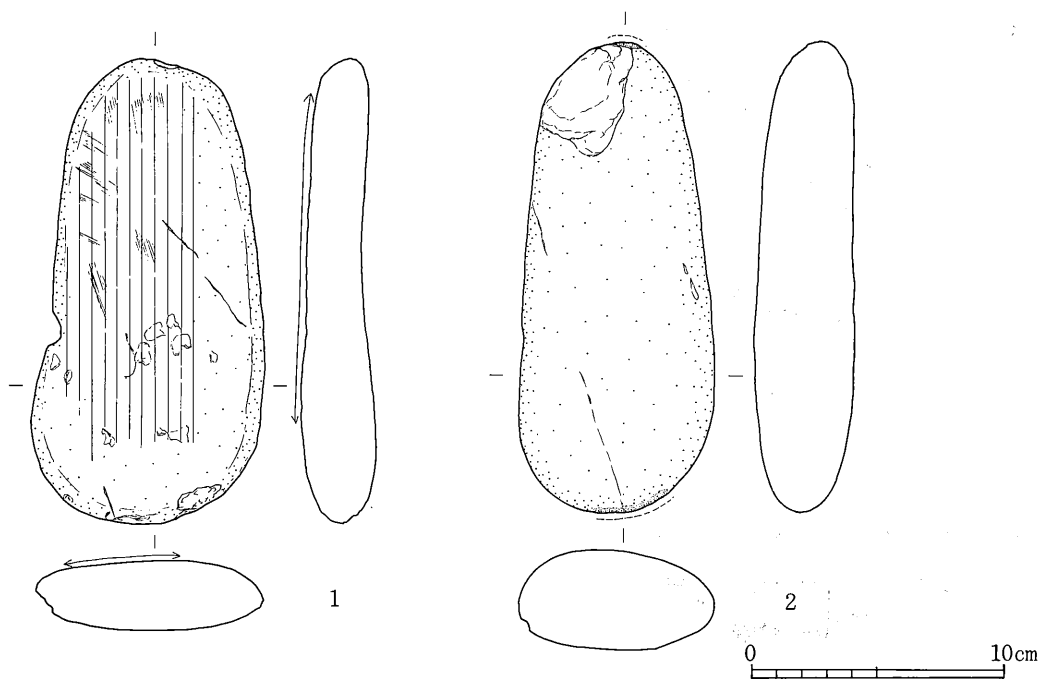
第9图 K U R 4612 240号住居址出土遺物



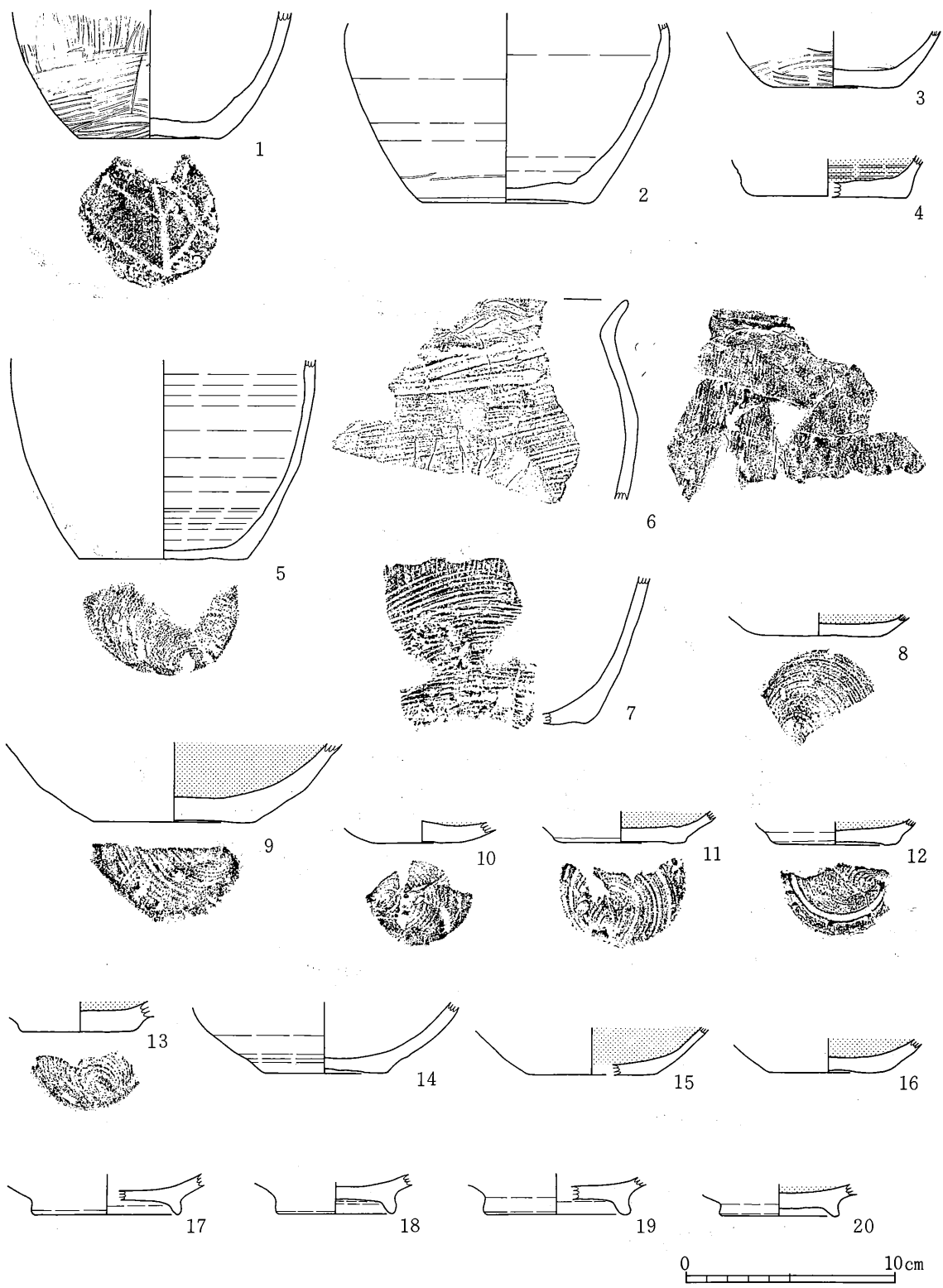
第10図 K U R 4612 241・196号住居址出土遺物 (1～9 241住、10～14 196住)



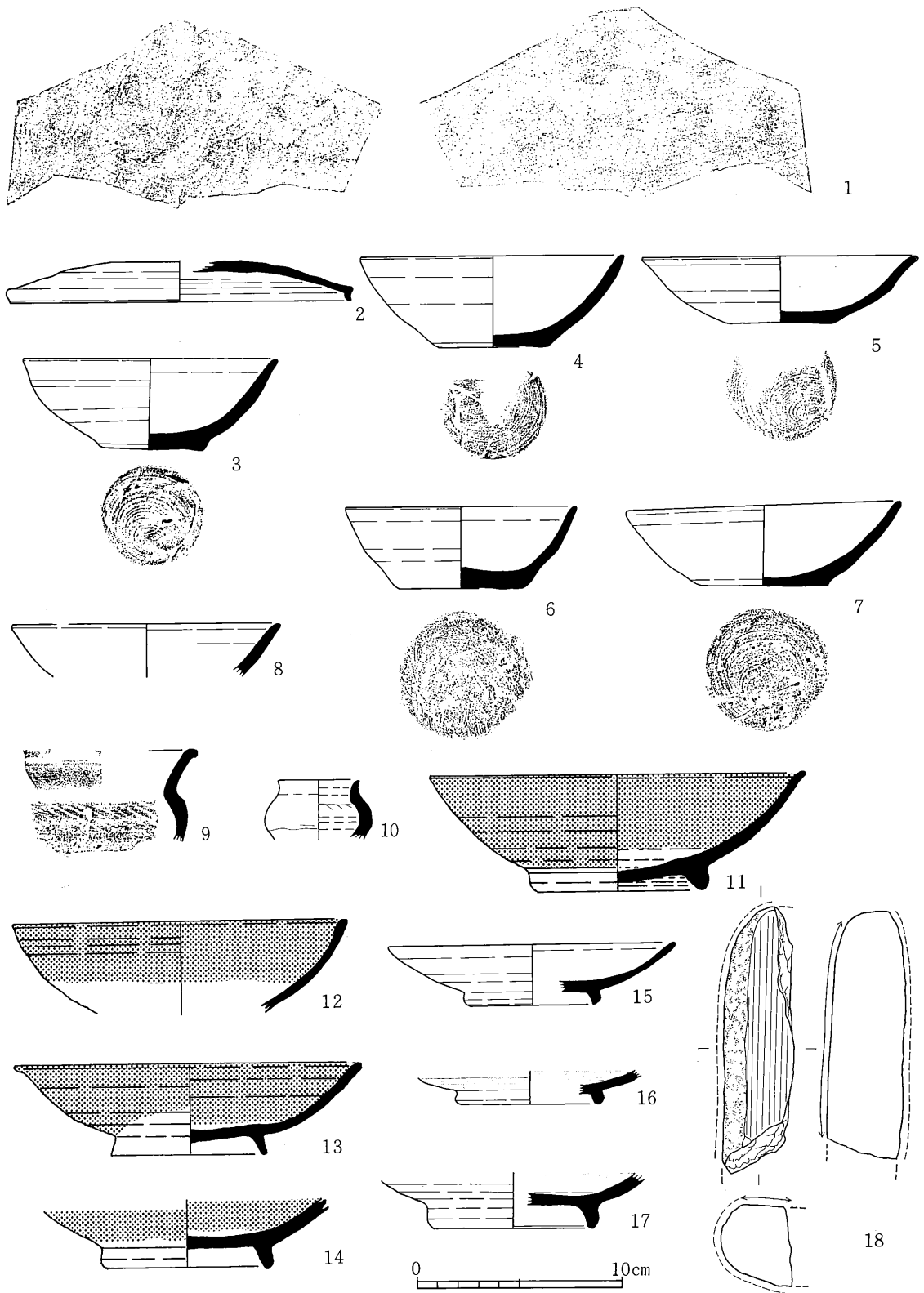
第11図 K U R 4612 196・211号住居址出土遺物 (1~4 196住、5~12 211住)



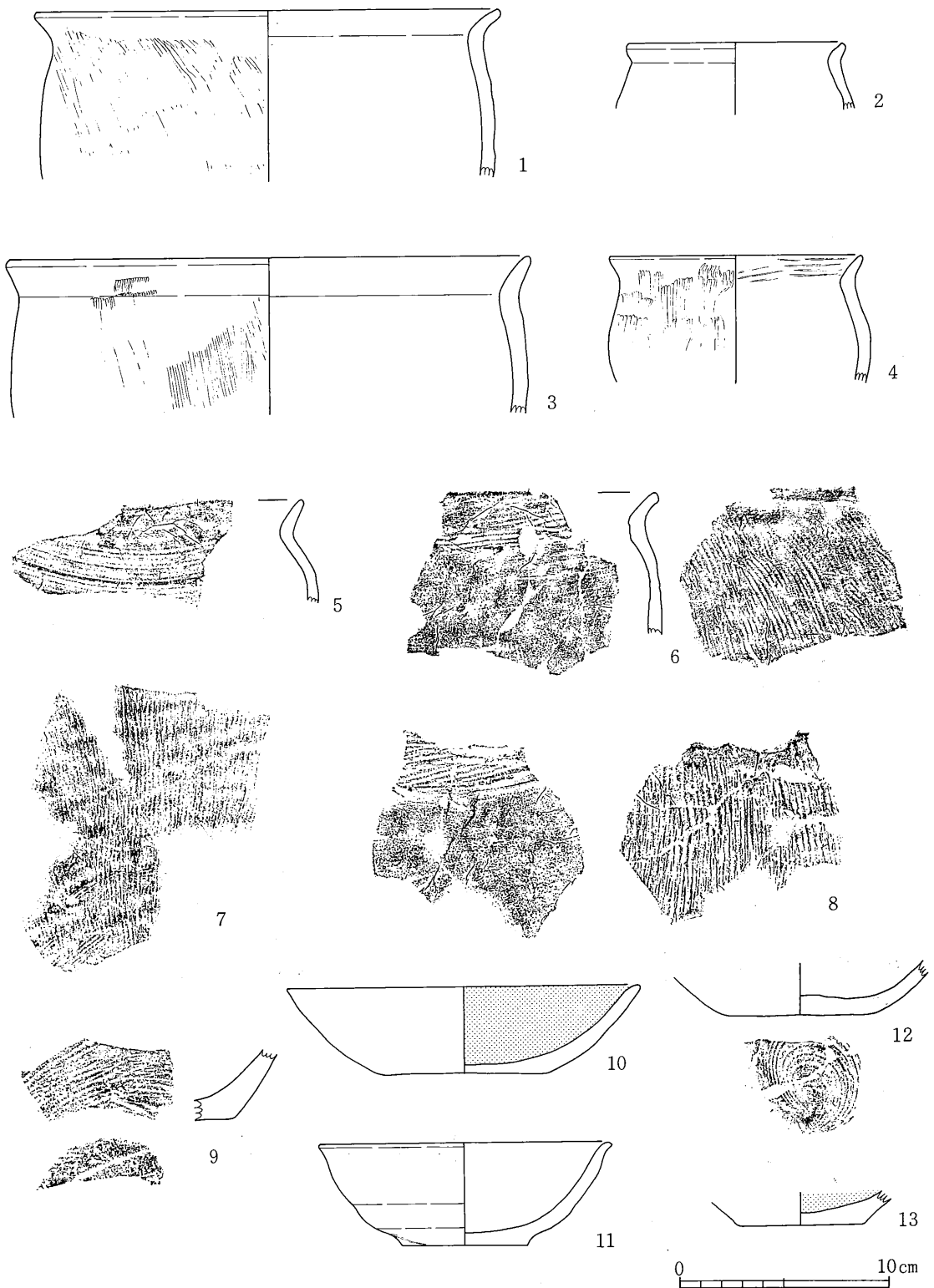
第12図 K U R 4612 211号住居址出土遺物



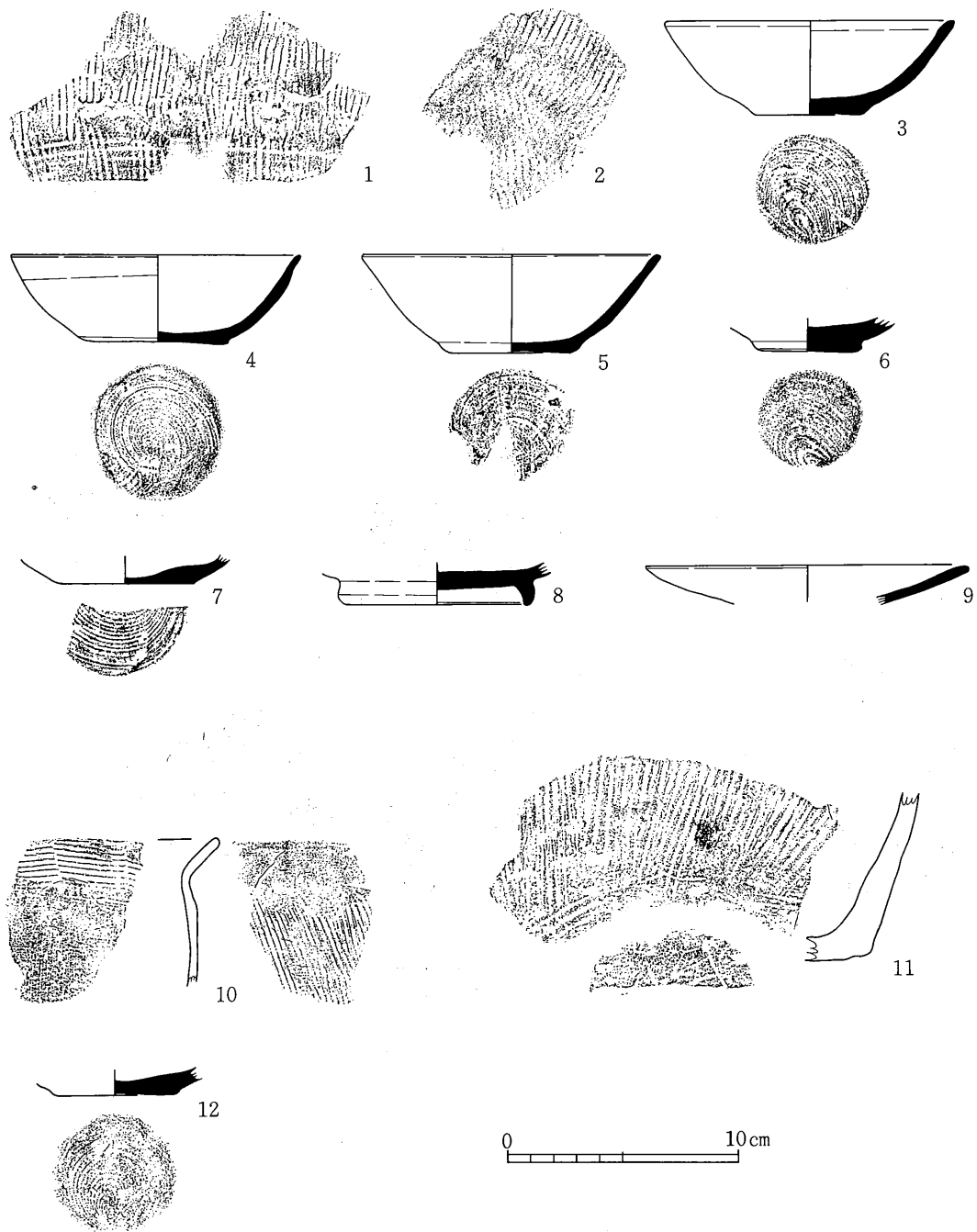
第13图 KUR4612 216号住居址出土遺物



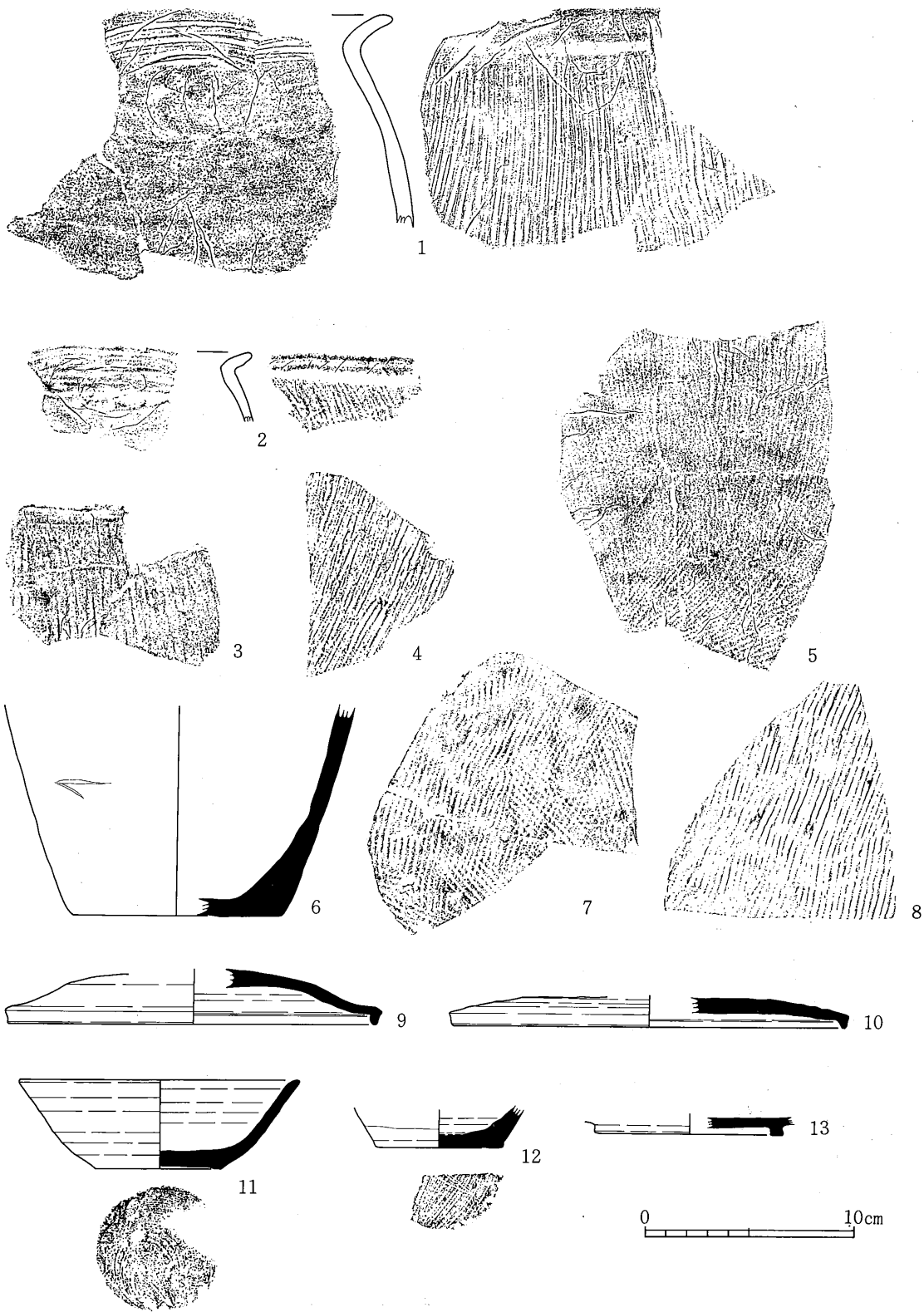
第14図 K U R 4612 216号住居址出土遺物



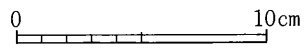
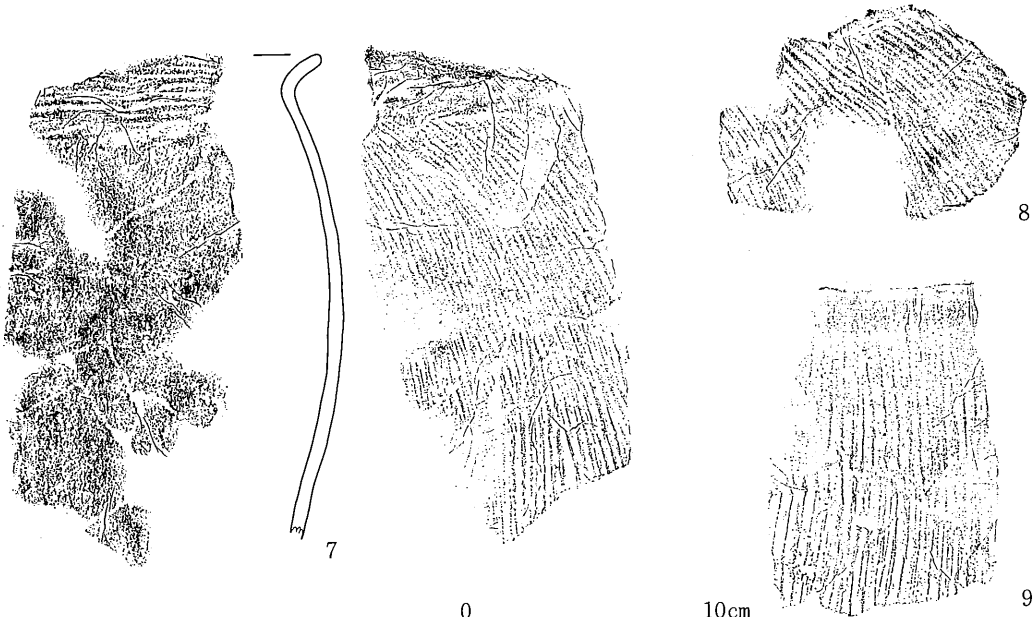
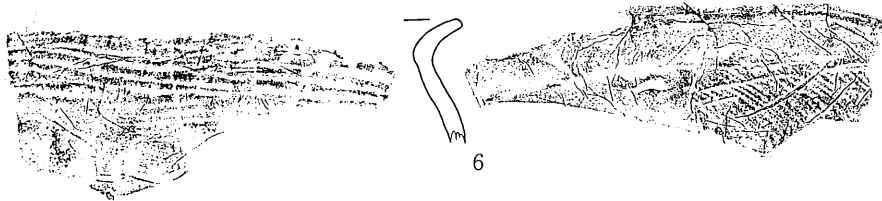
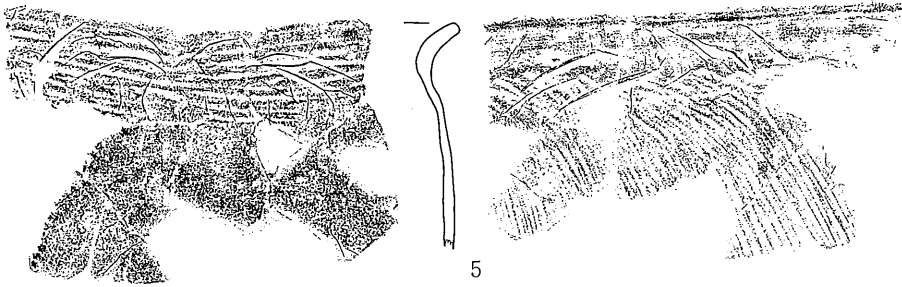
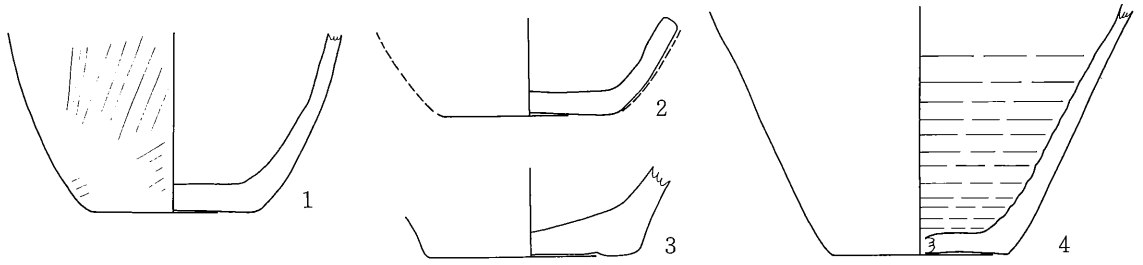
第15図 K U R 4612 218号住居址出土遺物



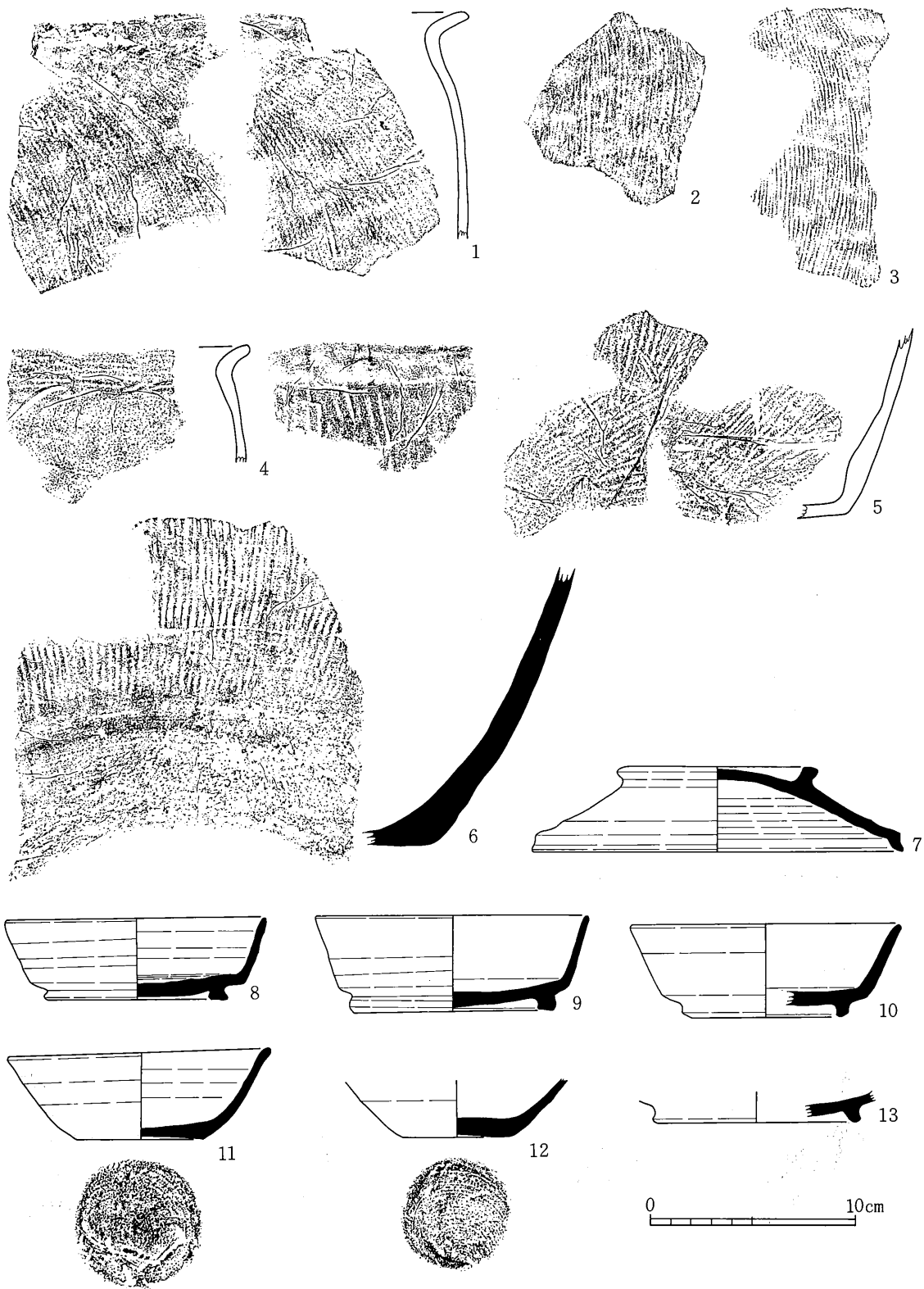
第16図 K U R 4612 218・230号住居址出土遺物 (1～9 218住、10～12 230住)



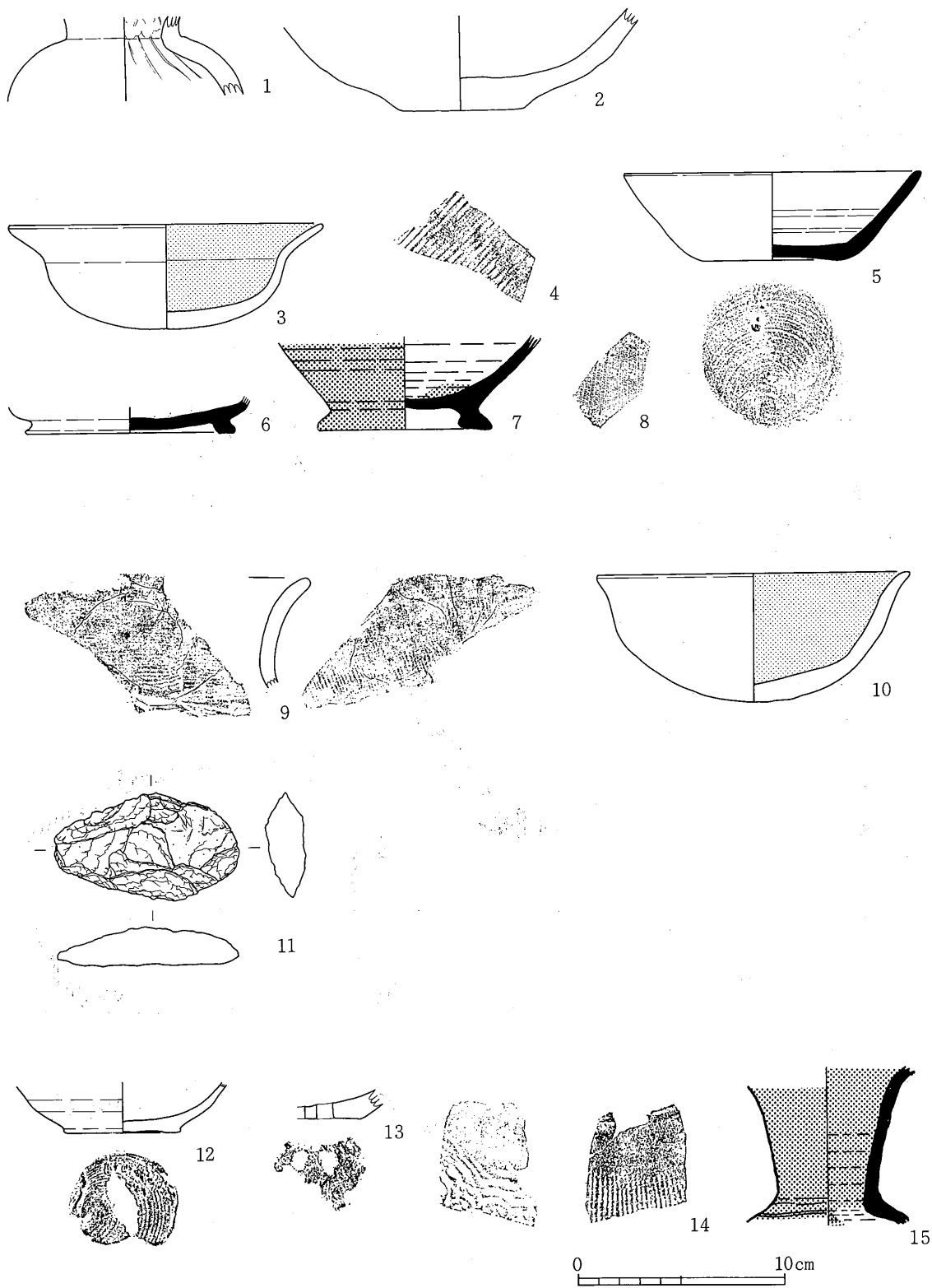
第17图 KUR 4612 235号住居址出土遺物



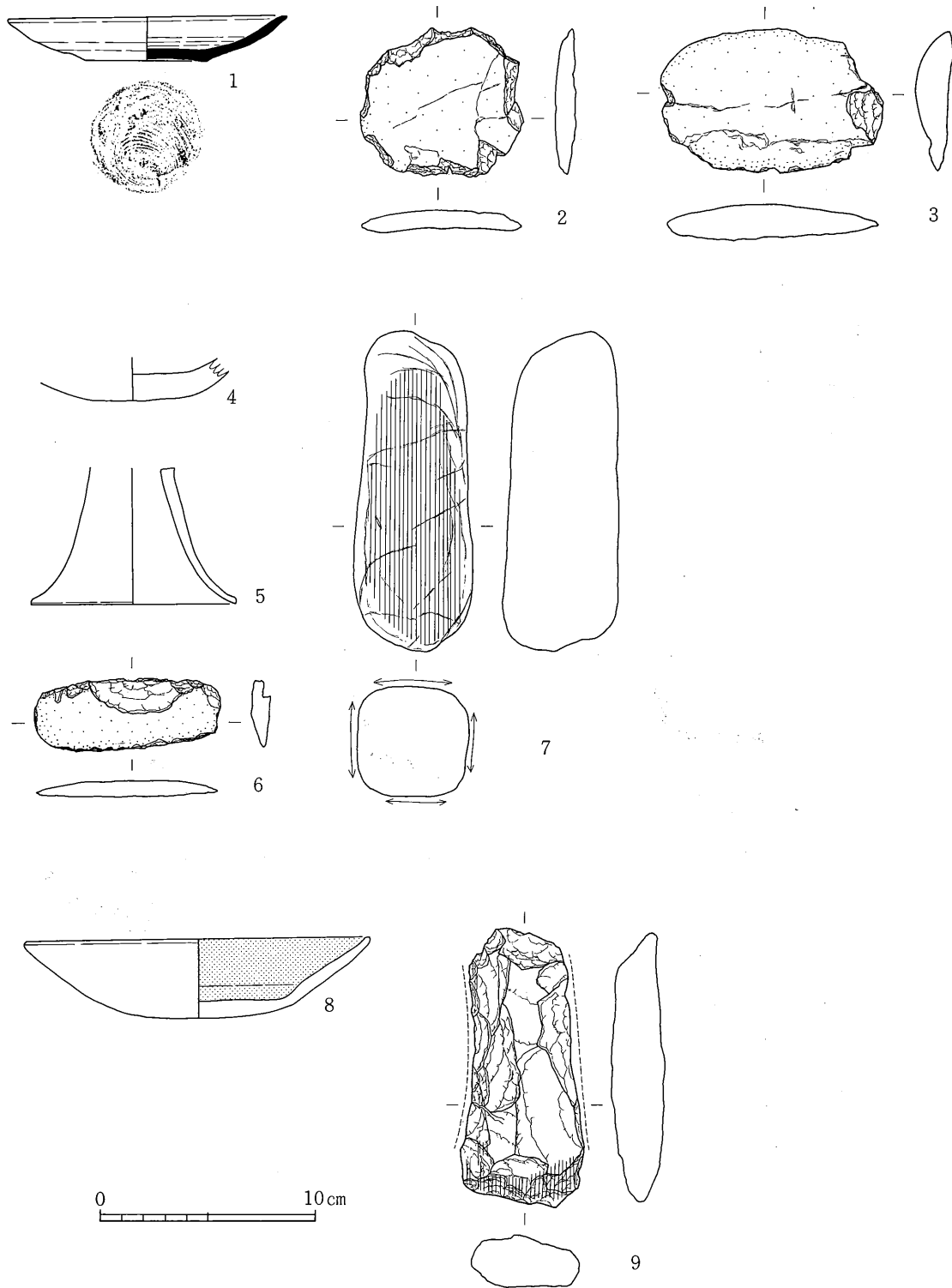
第18图 K U R 4612 262号住居址出土遺物



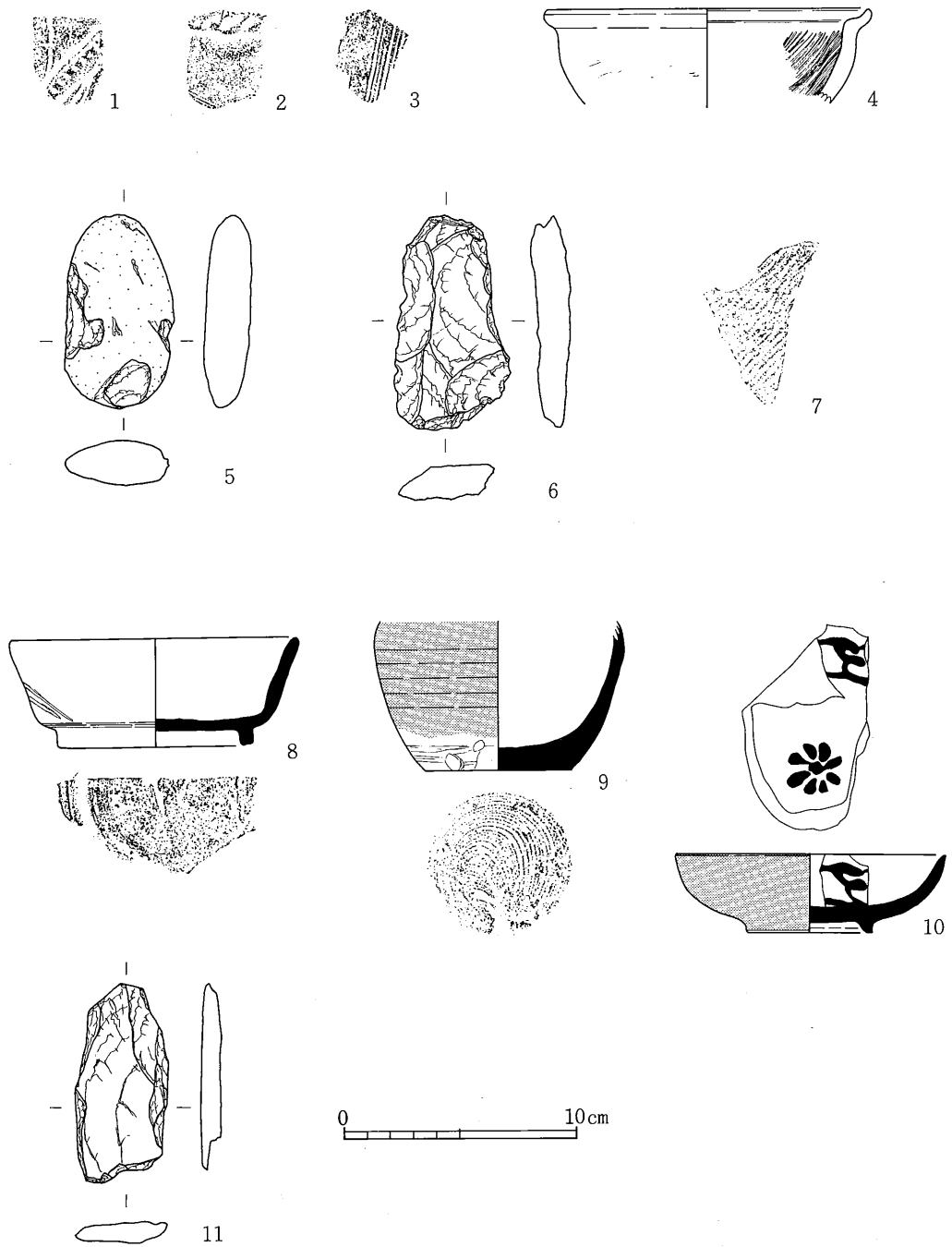
第19图 K U R 4612 262・206号住居址出土遺物 (1~12 262住、13 206住)



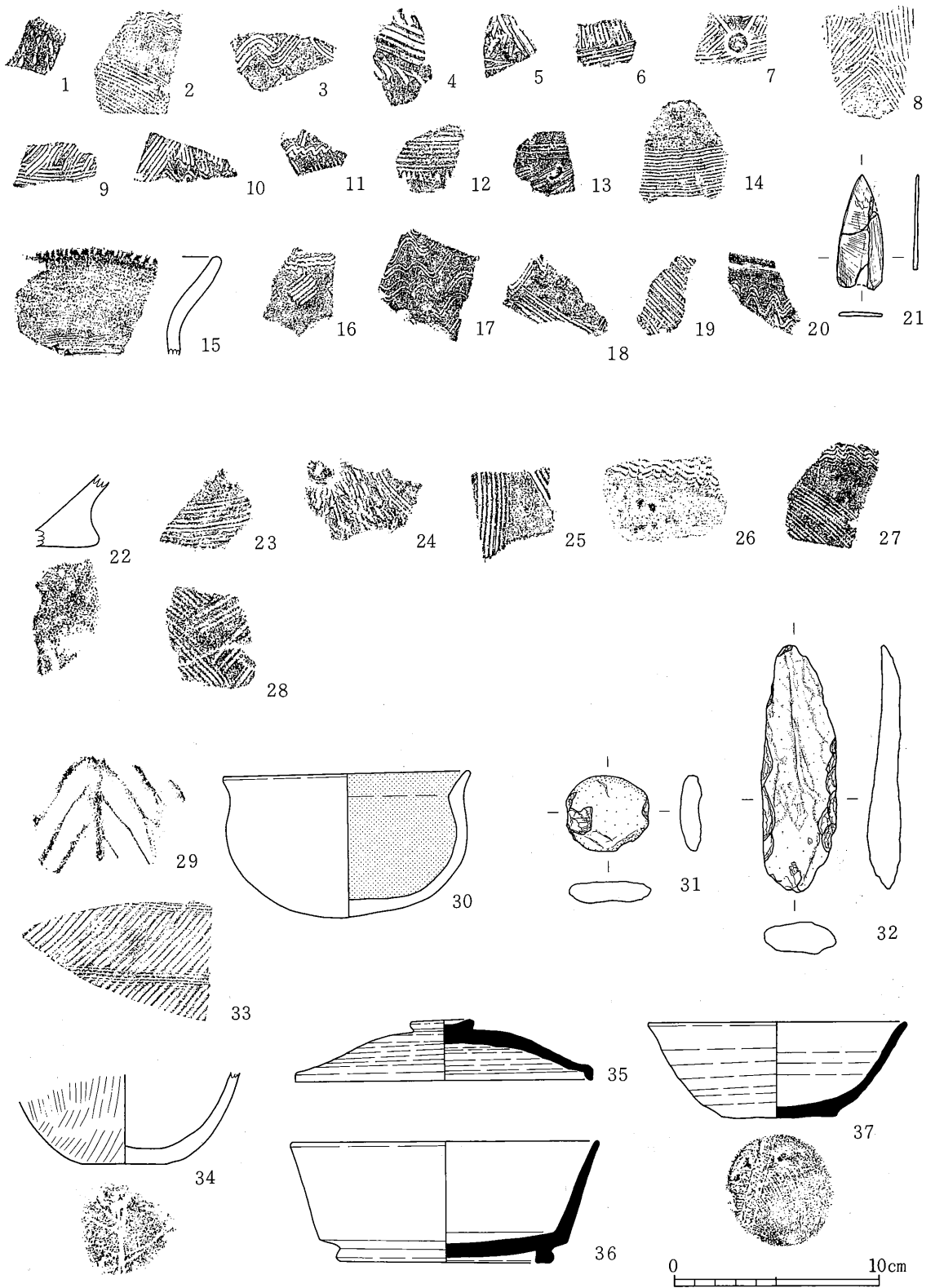
第20図 K U R 4612 219・223・227・229号住居址出土遺物
 (1・2 219住、3～8 223住、9～11 227住、12～15 229住)



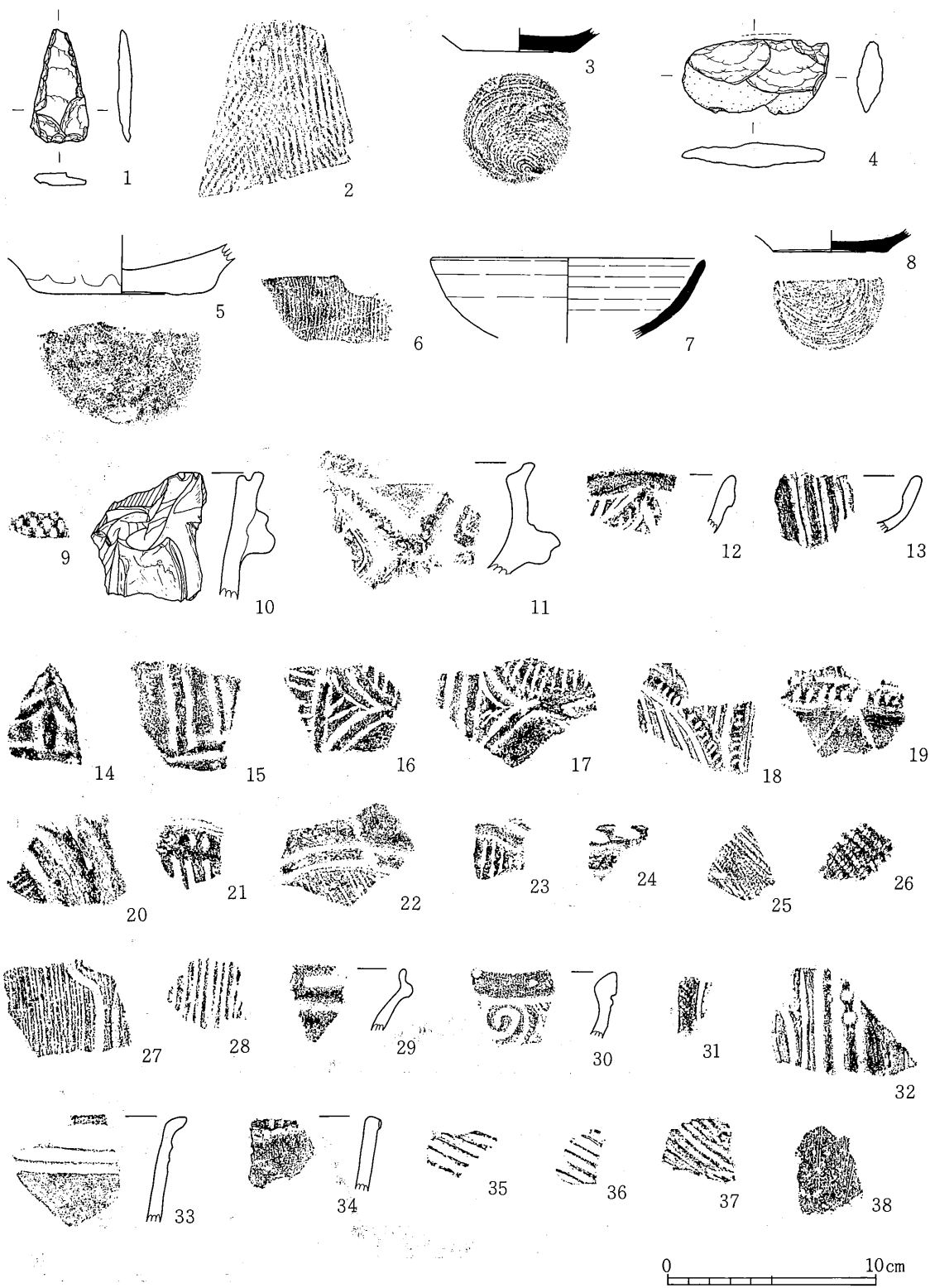
第21図 K U R 4612 229・238・249号住居址出土遺物 (1~3 229住、4~7 238住、8・9 249住)



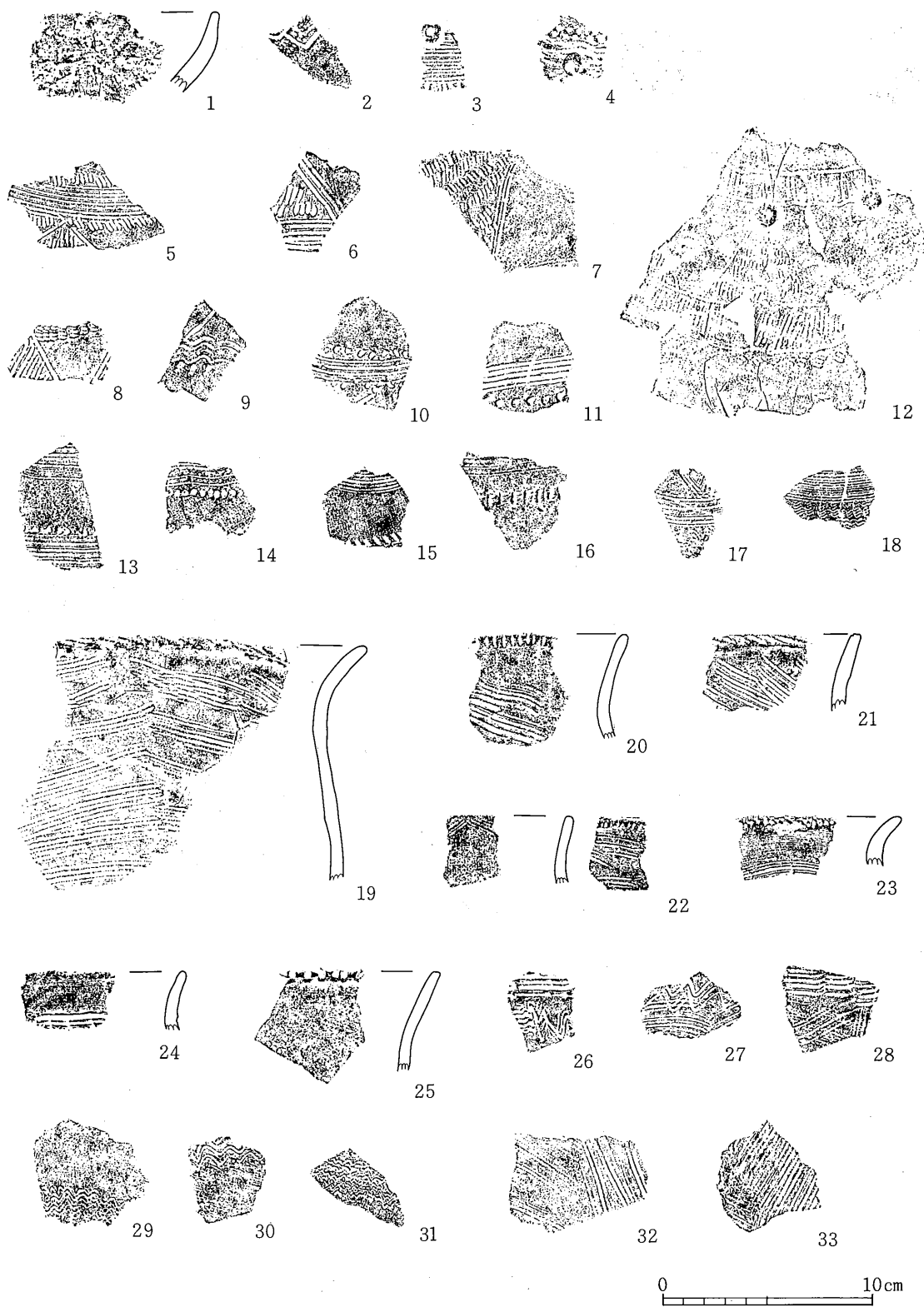
第22図 KUR4612 土坑58・61・63、小竪穴15出土遺物
(1～6 F61、7 F63、8～11 小竪15)



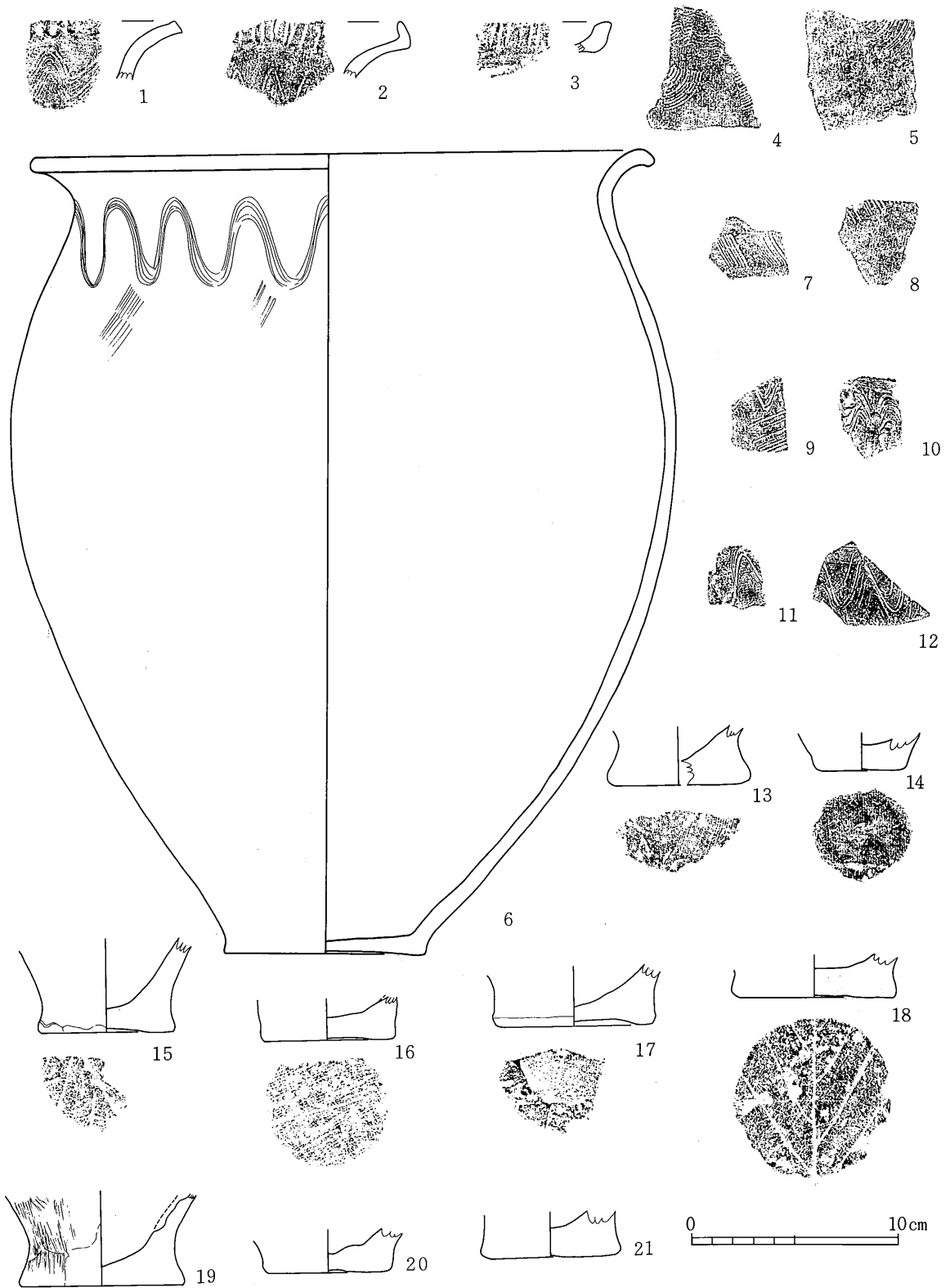
第23図 KUR4612 方形周溝墓6、溝址31、溝状址5・6、集石33・34出土遺物
 (1~21 方周6、22~28 溝31、29・30溝状5、31・32 溝状6、33集石33、34~37 集石34)



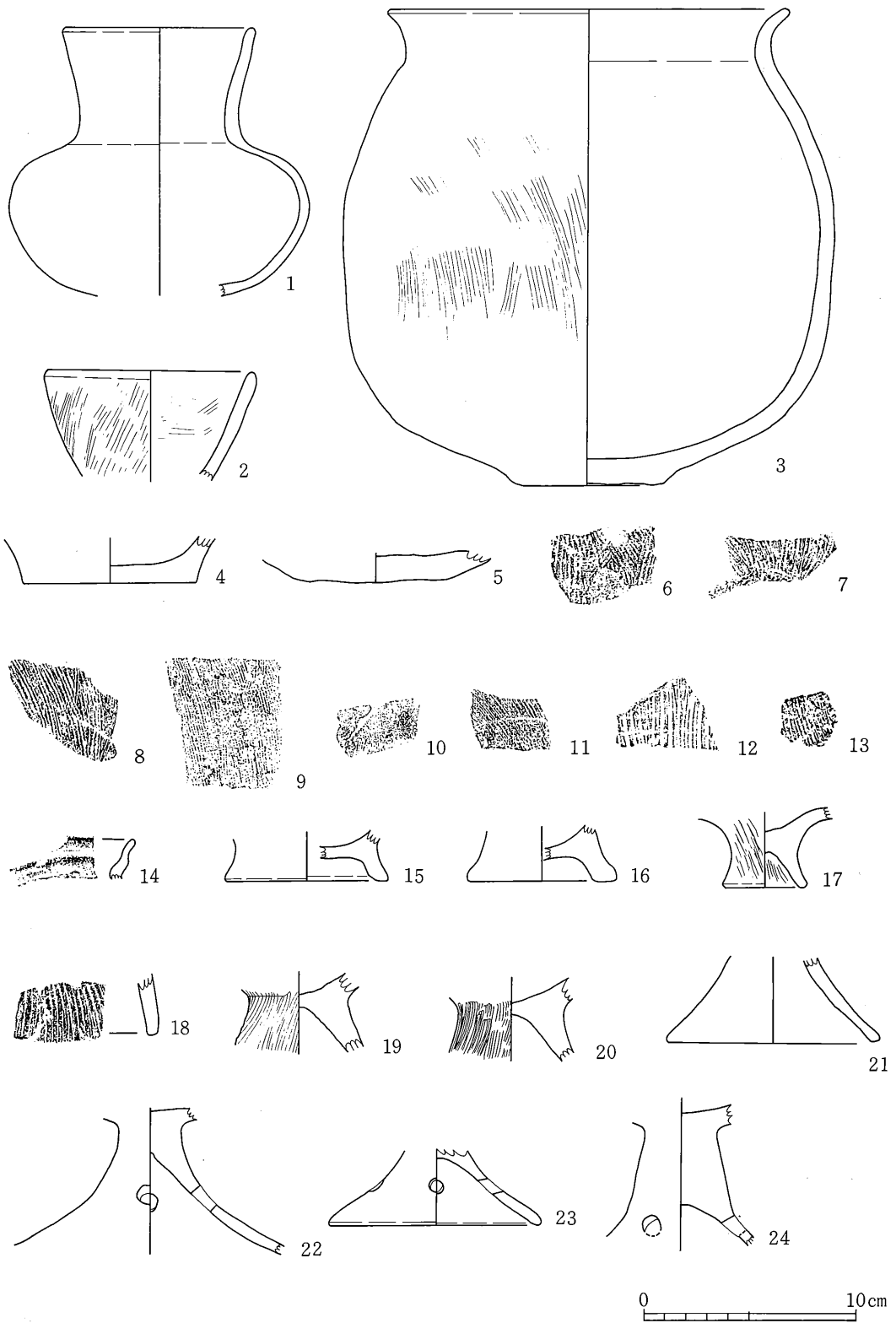
第24図 KUR4612 集石36・39、井戸1、遺構外出土遺物
 (1 集石36、2~4 集石39、5~82井戸1、9~38遺構外)



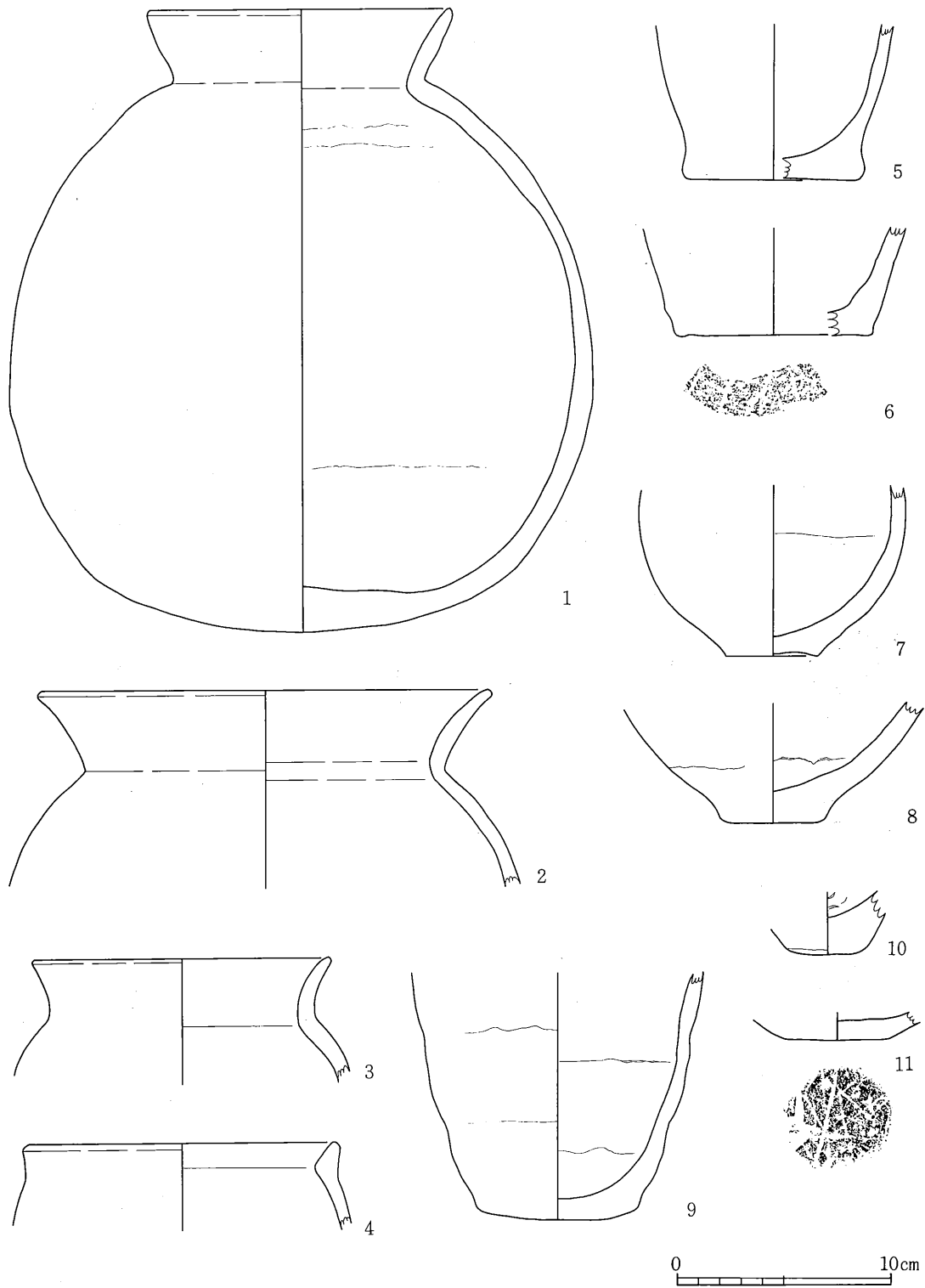
第25图 K U R 4612 遺構外出土土器 (1)



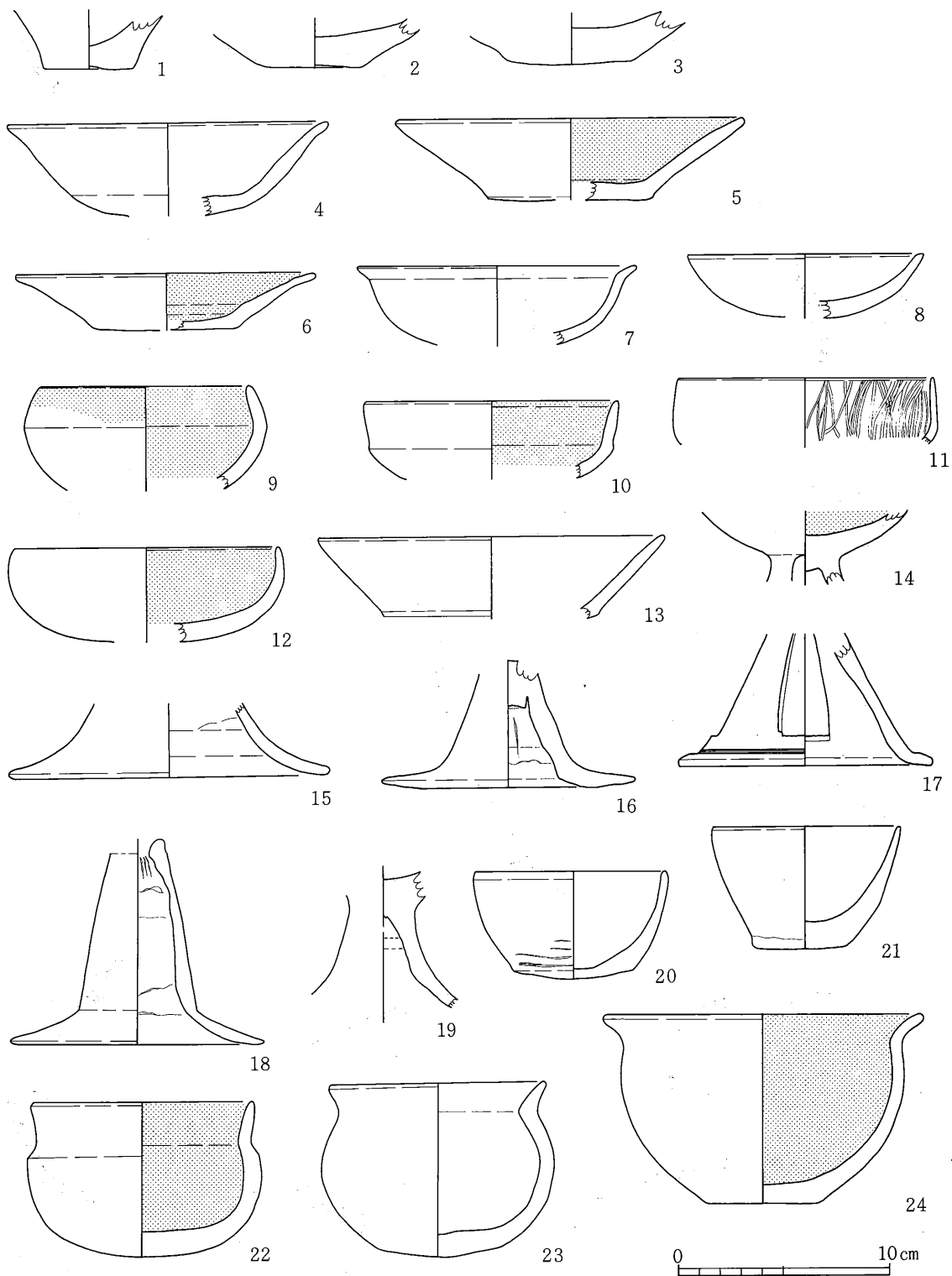
第26图 KUR 4612 遺構外出土器 (2)



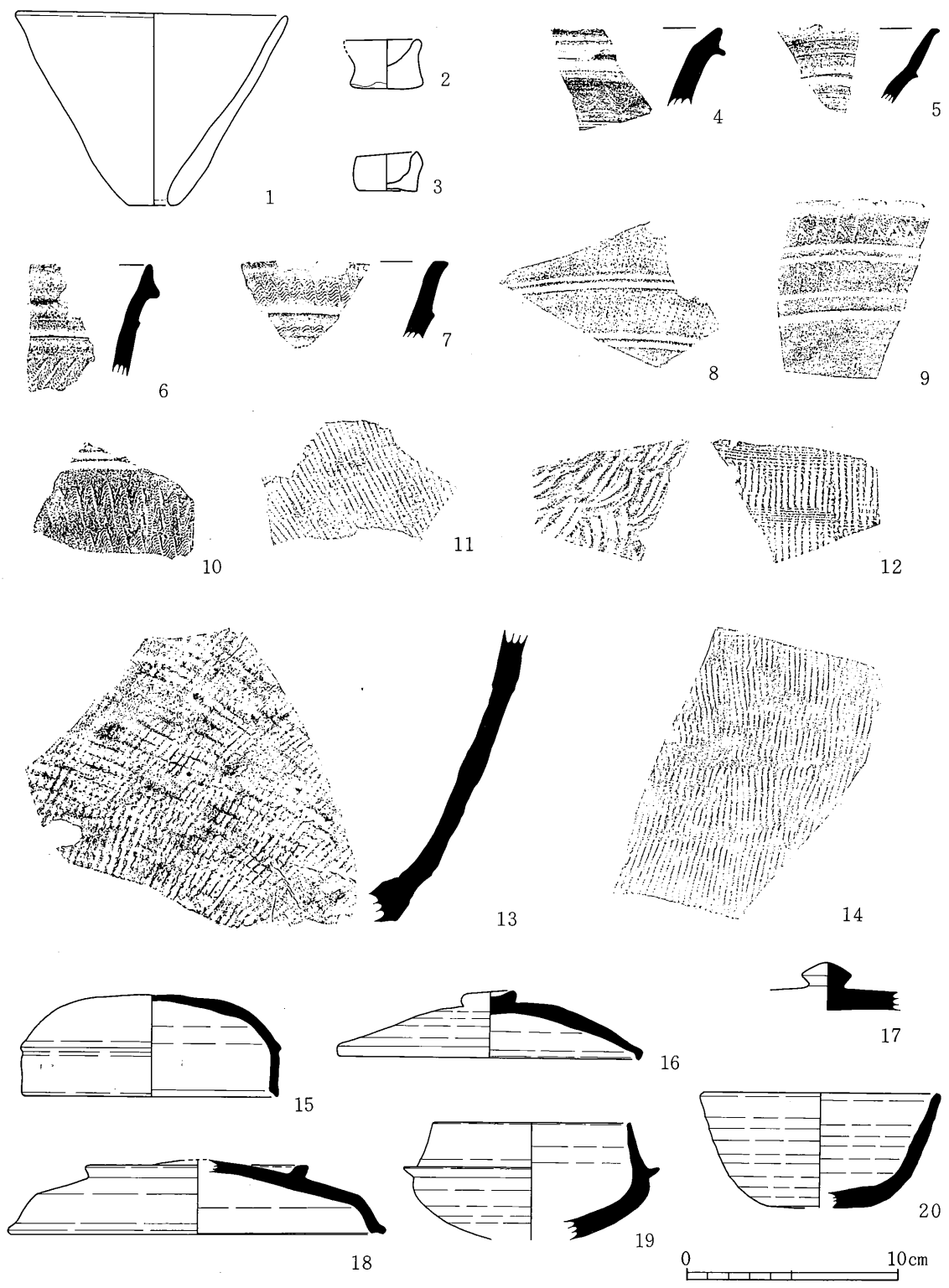
第27圖 KUR4612 遺構外出土土器 (3)



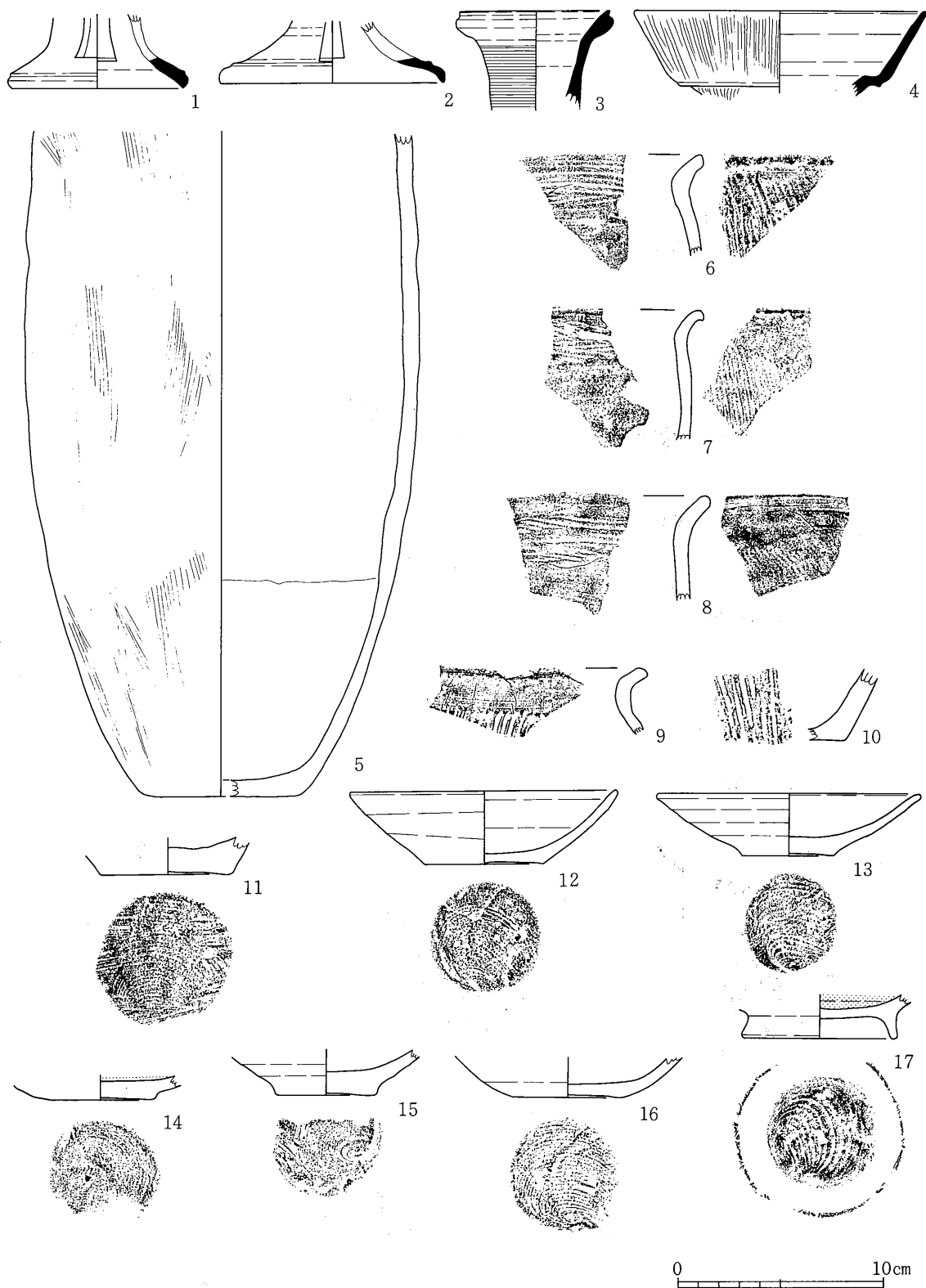
第28図 KUR4612 遺構外出土土器(4)



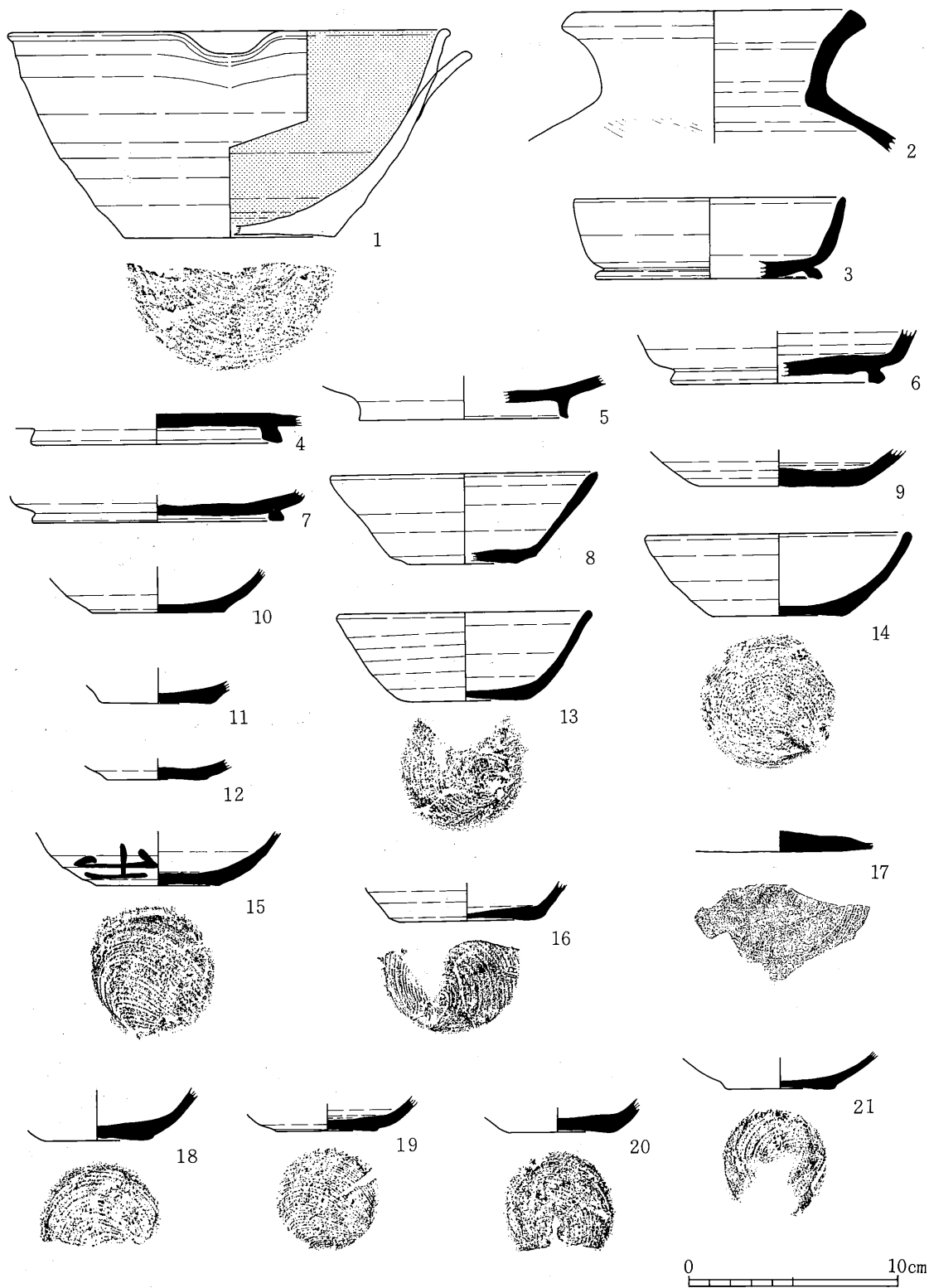
第29図 KUR4612 遺構外出土土器 (5)



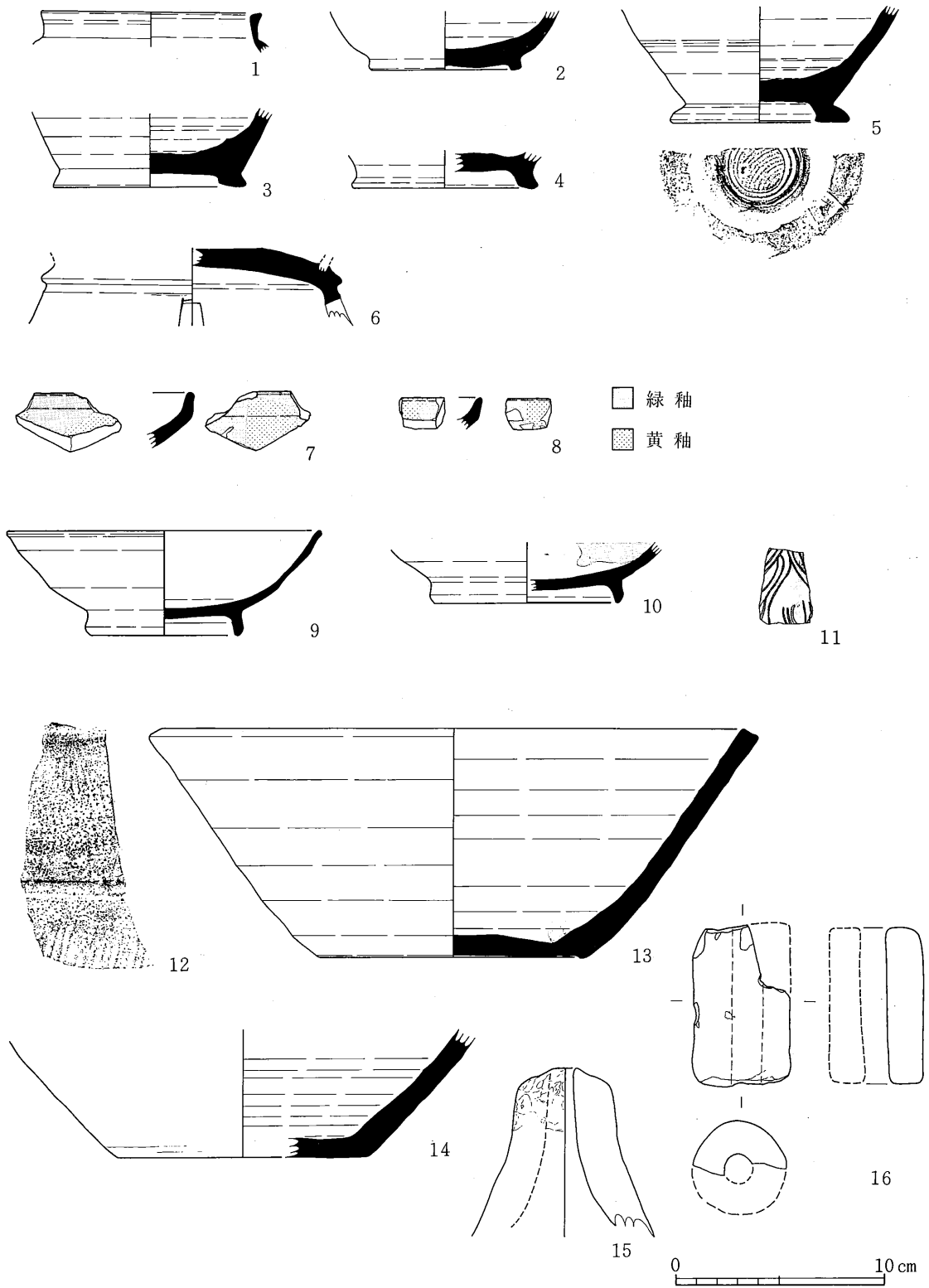
第30図 K U R 4612 遺構外出土土器 (6)



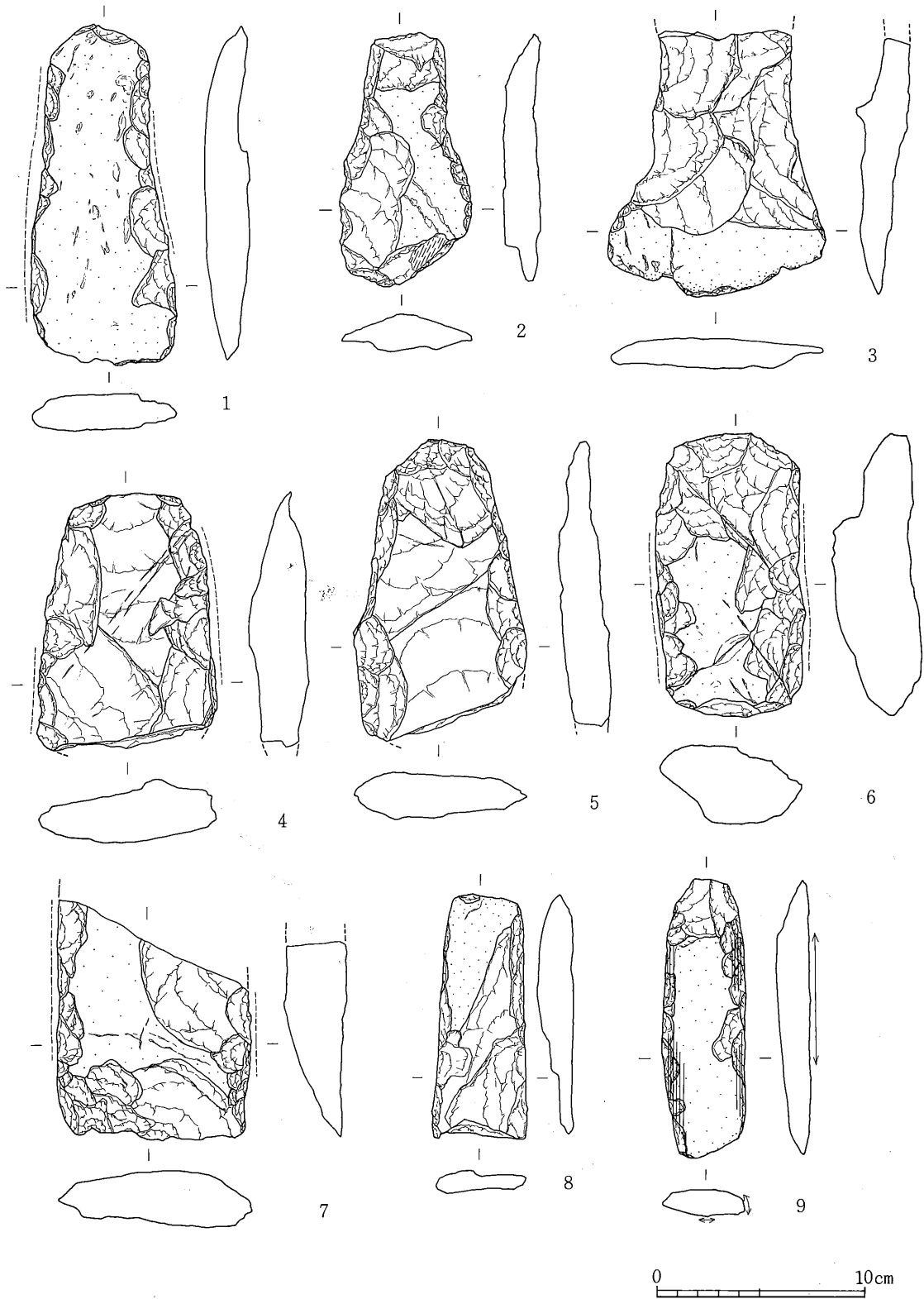
第31図 KUR4612 遺構外出土土器 (7)



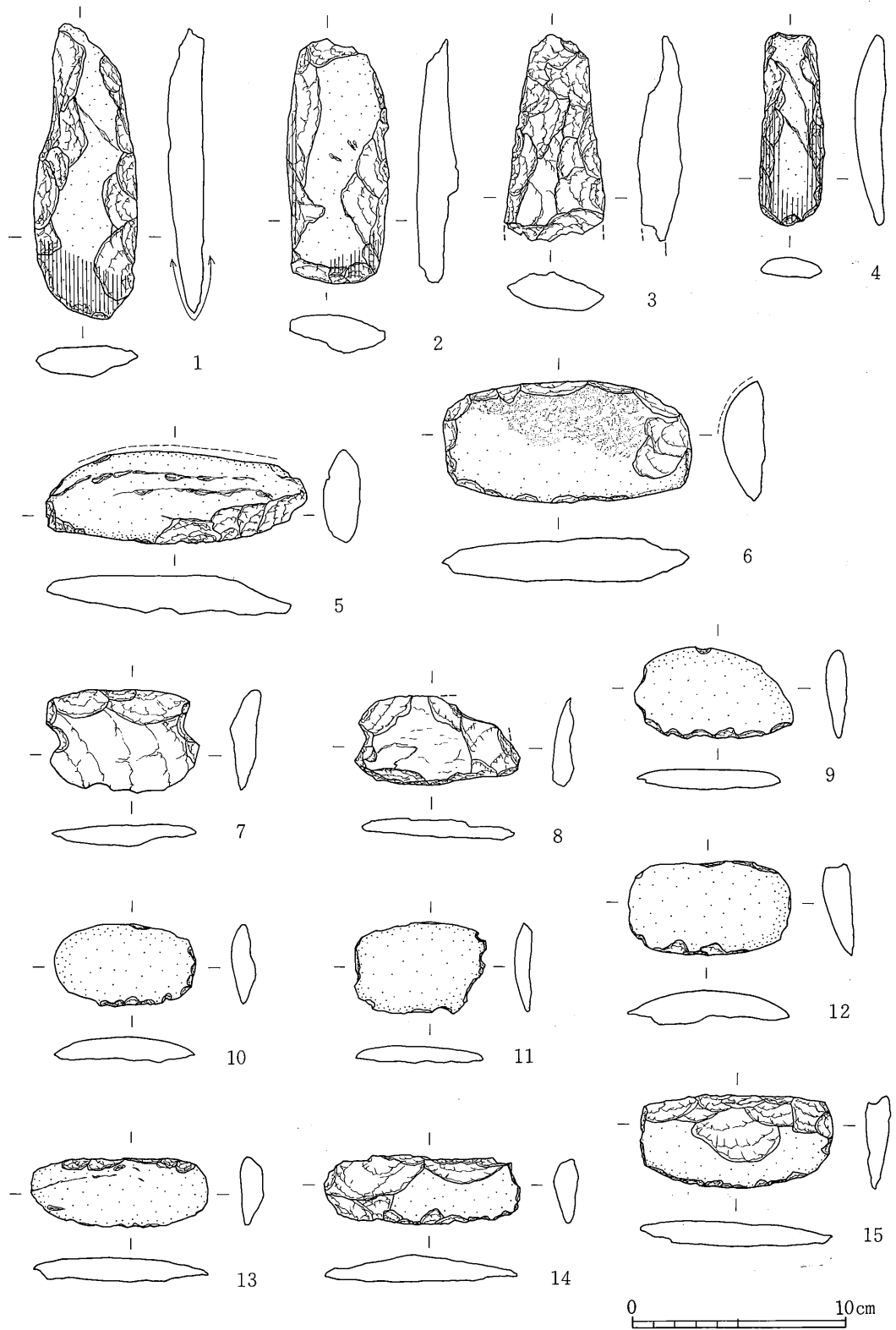
第32図 K U R 4612 遺構外出土土器 (8)



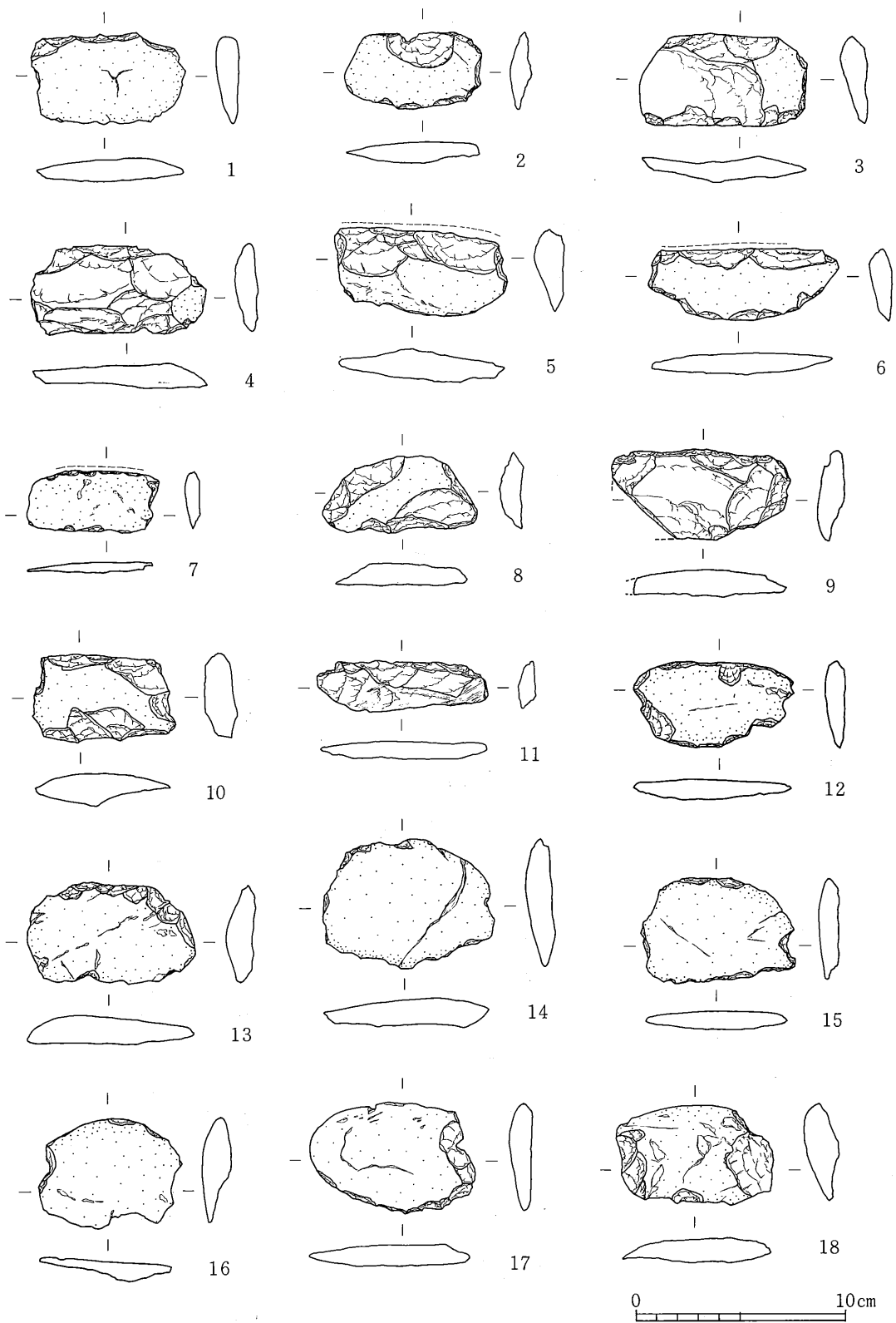
第33圖 KUR4612 遺構外出土土器・土製品



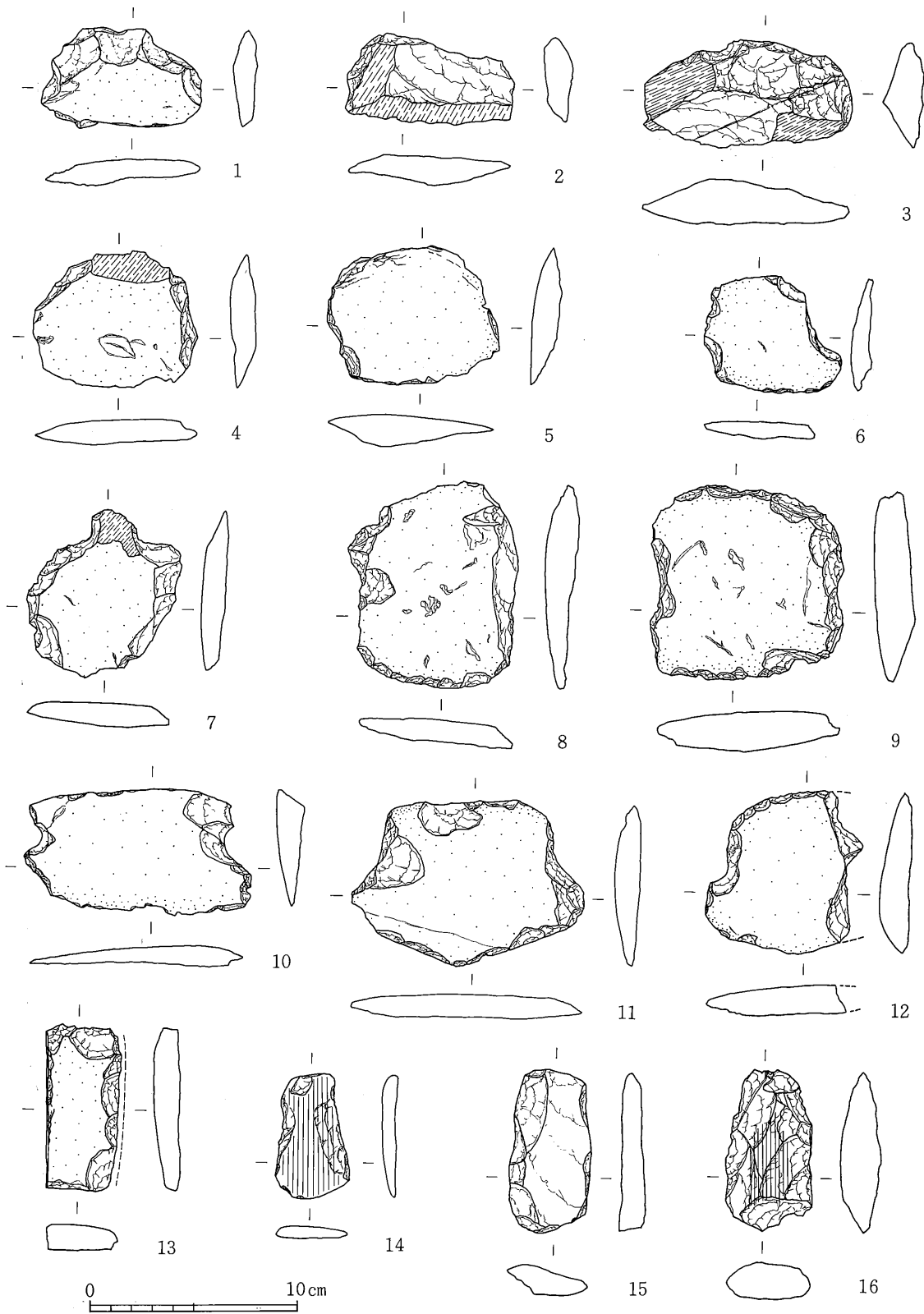
第34図 KUR4612 遺構外出土石器 (1)



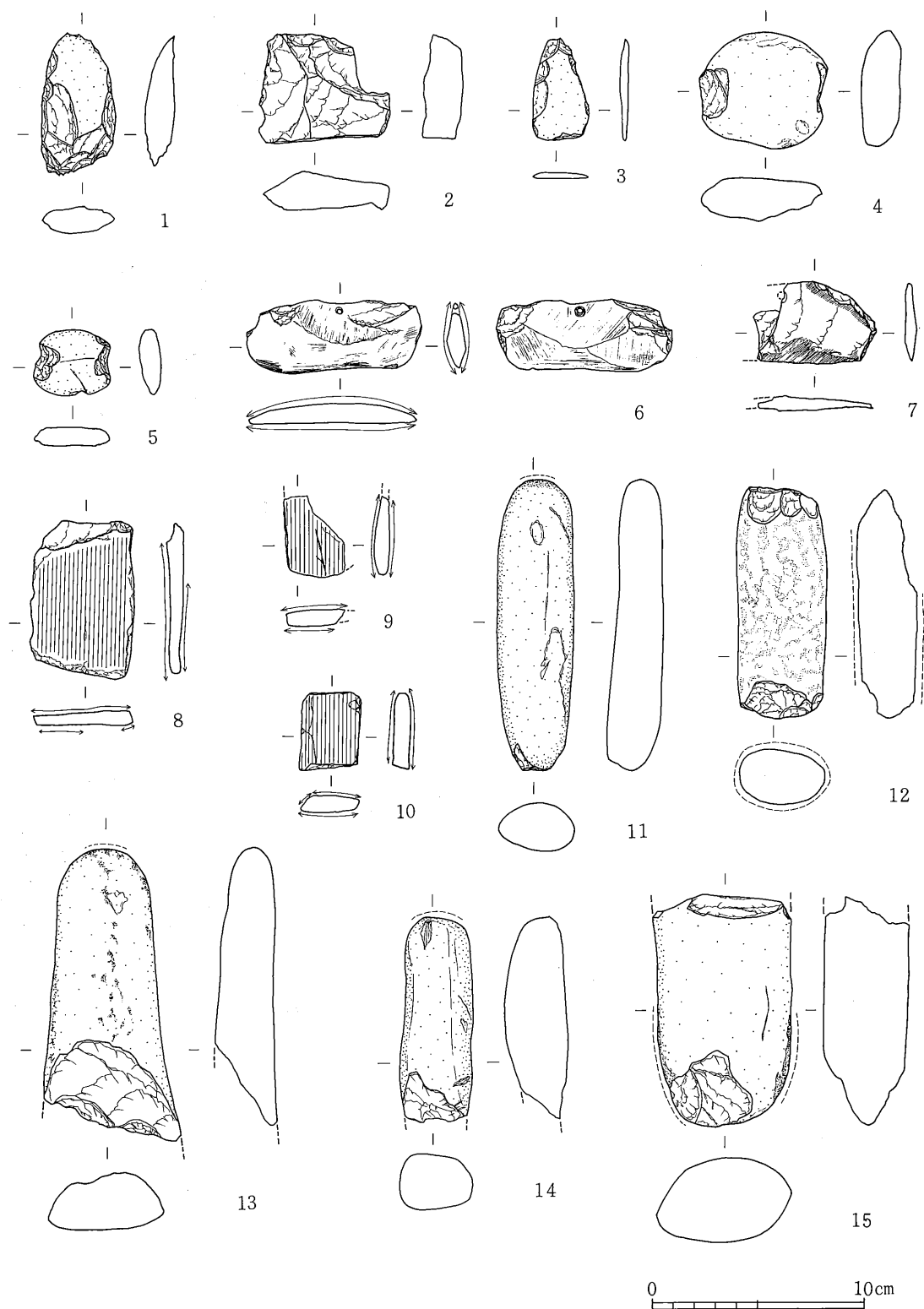
第35図 KUR4612 遺構外出土石器(2)



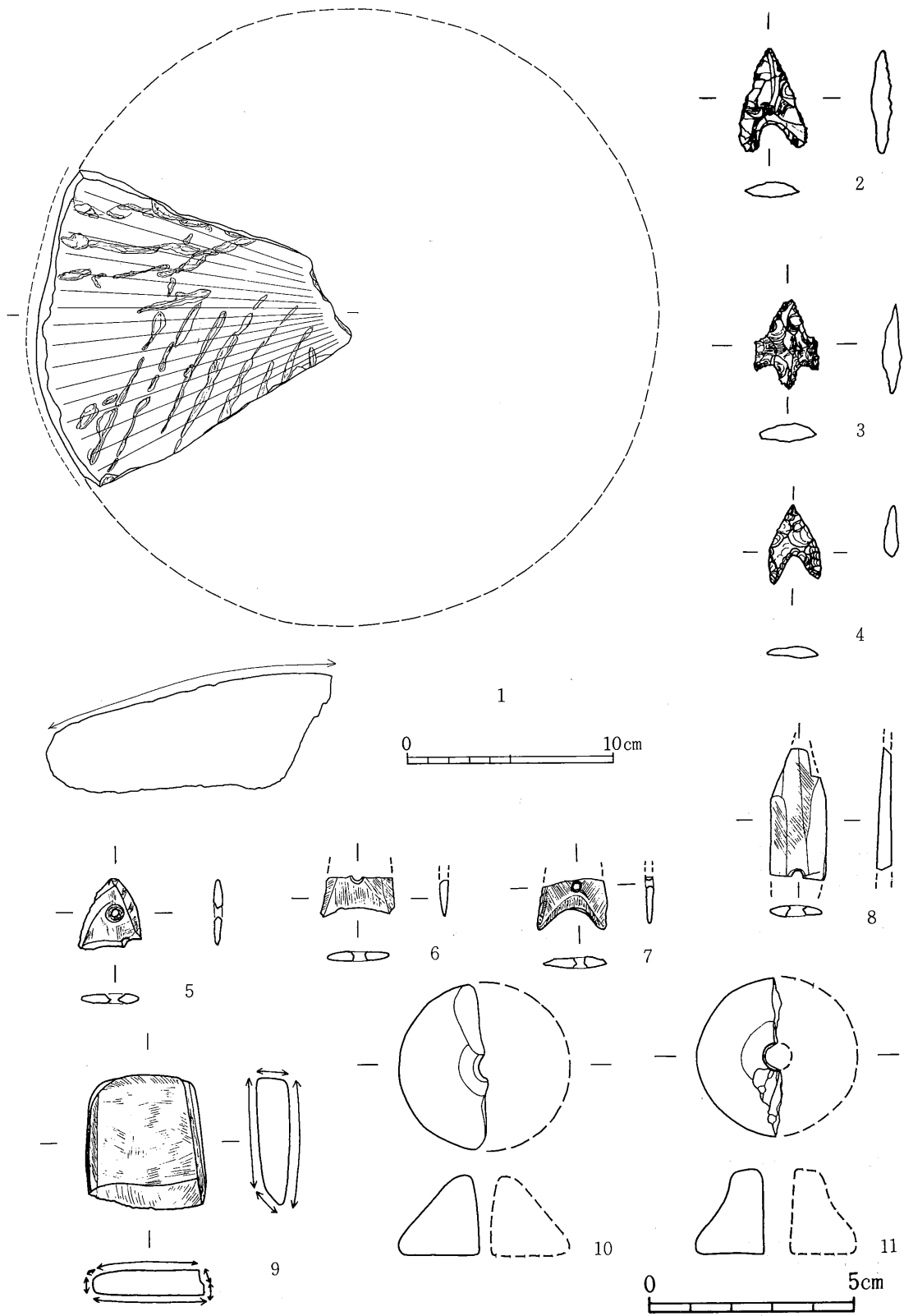
第36図 KUR4612 遺構外出土石器 (3)



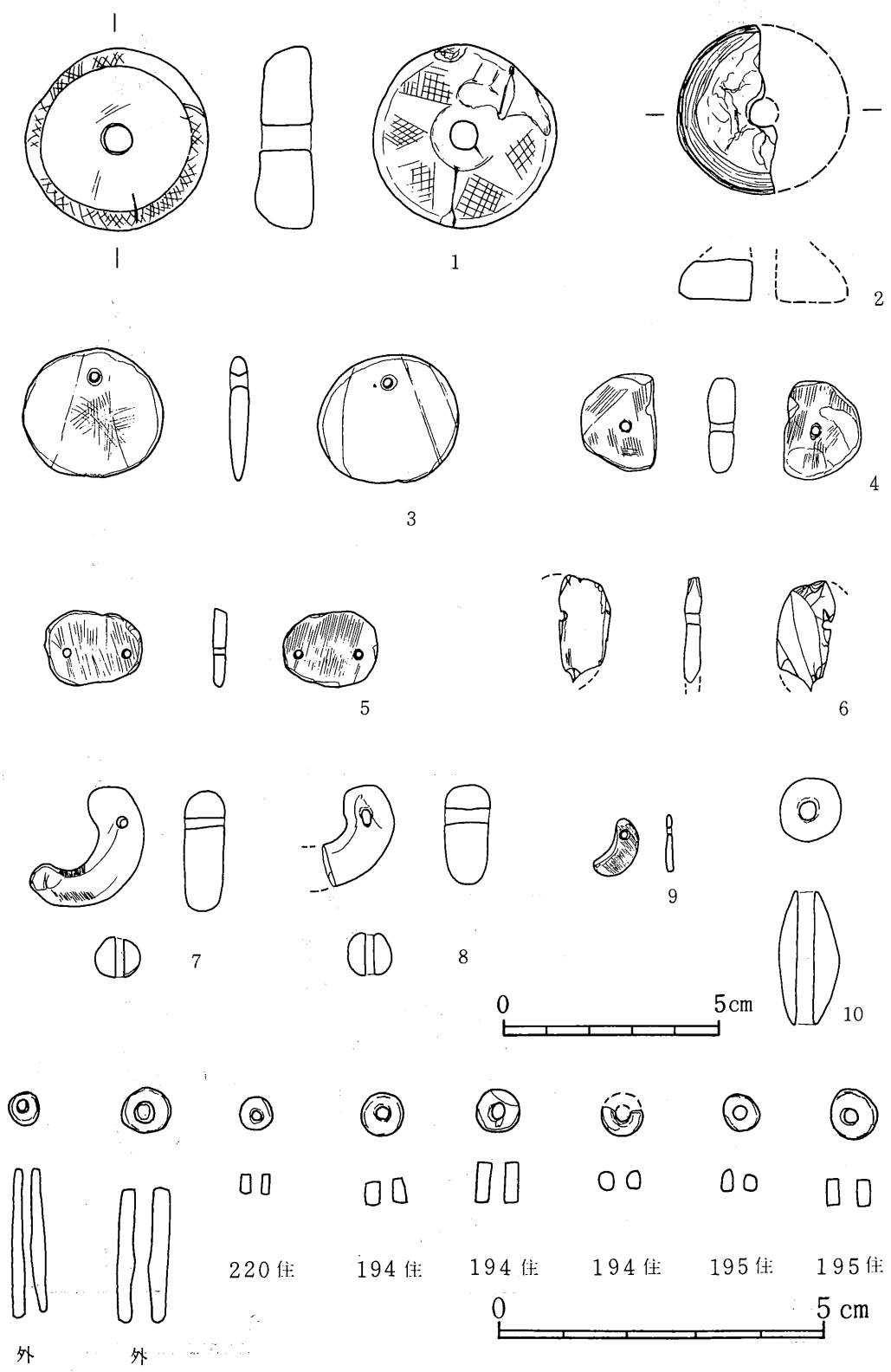
第37图 KUR4612 遺構外出土石器(4)



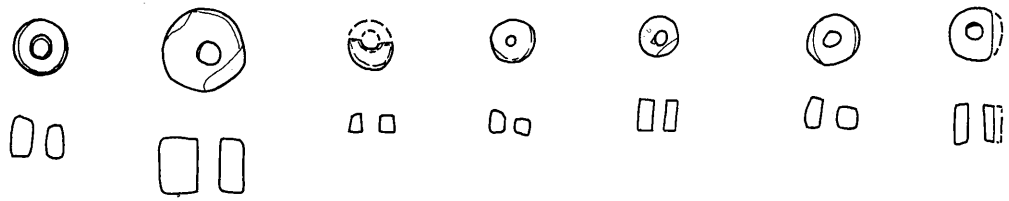
第38图 KUR4612 遺構外出土石器 (5)



第39图 KUR4612 遺構外・205号住居址出土遺物 (1~9 遺構外、10・11 205号)



第40图 KUR4612 土製品・石製品



198住

199住

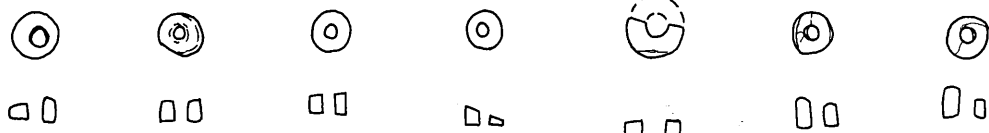
199住

205住

231住

223住

土坑 61



土坑 61

外

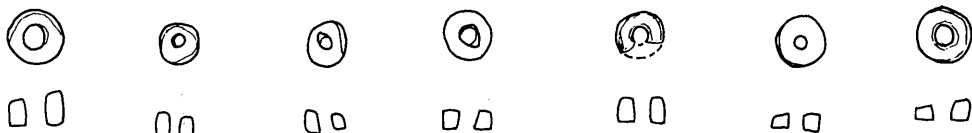
外

外

外

外

外



外

外

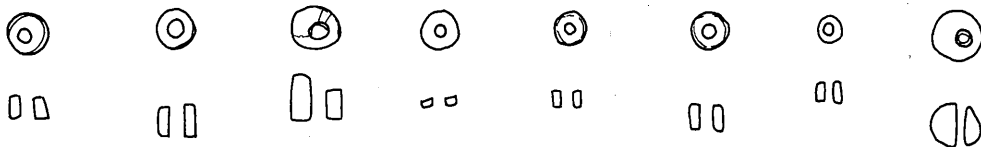
外

外

外

外

外



外

外

外

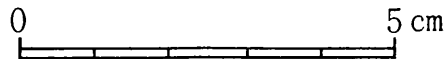
外

外

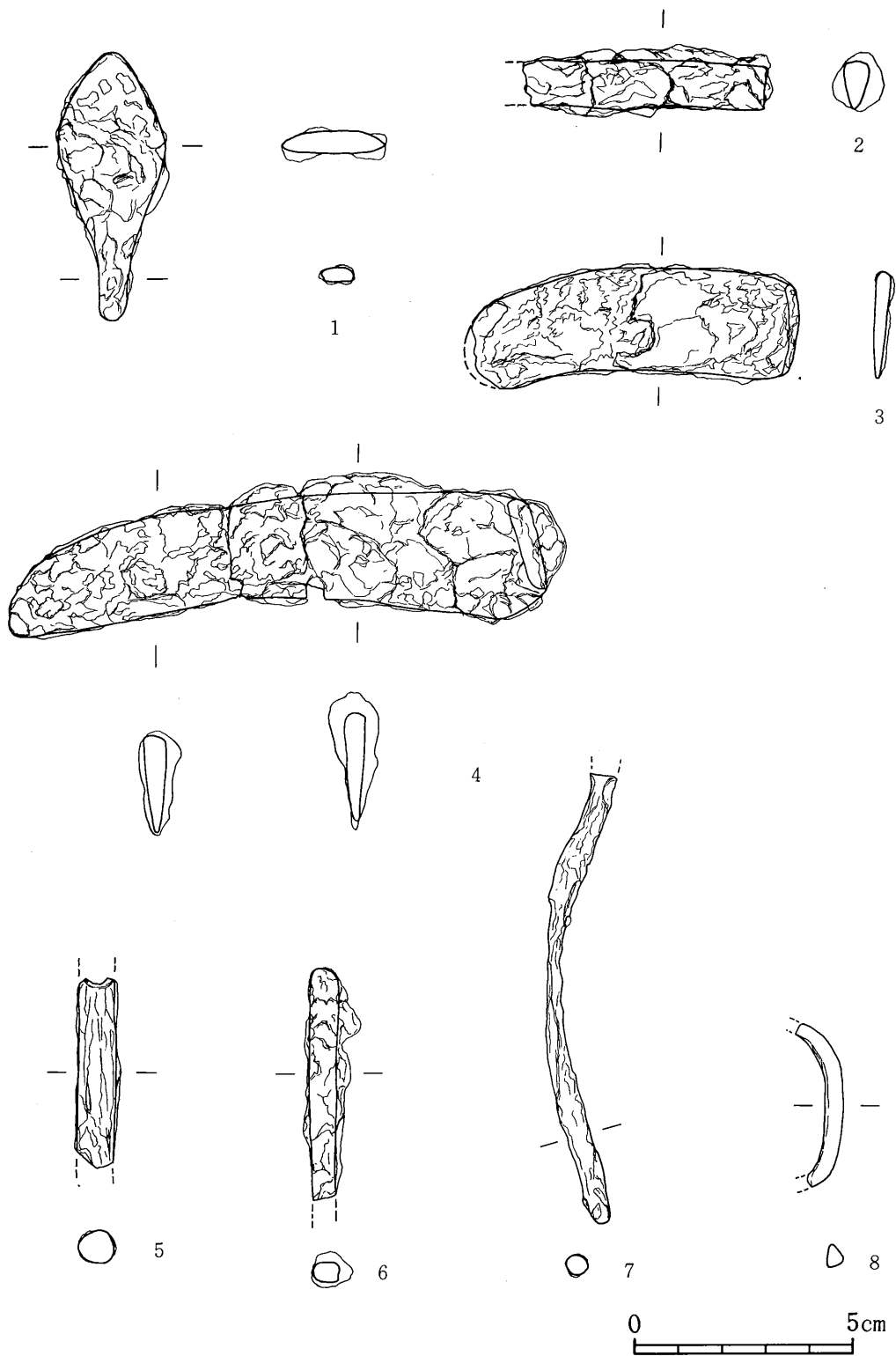
外

外

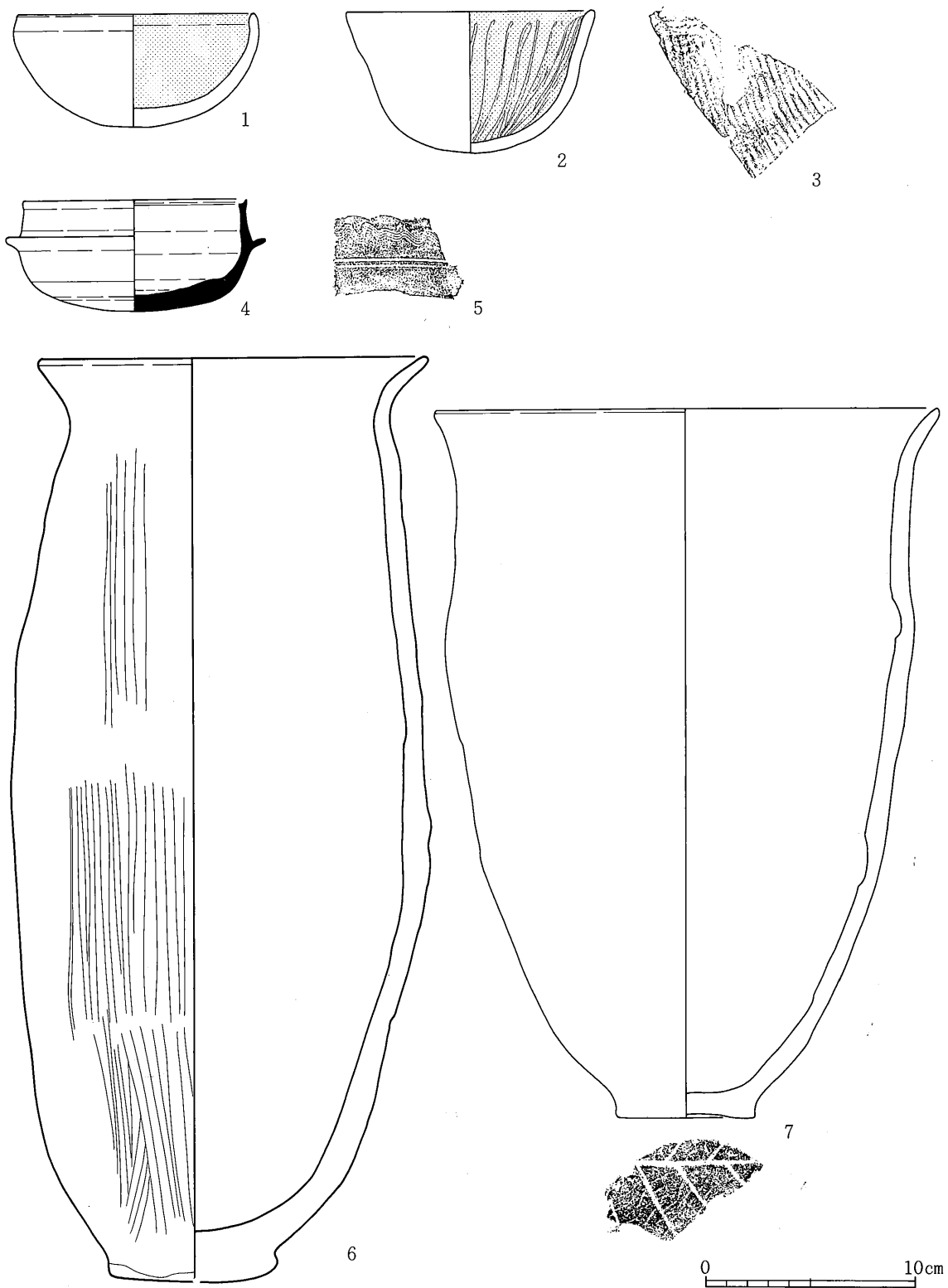
外



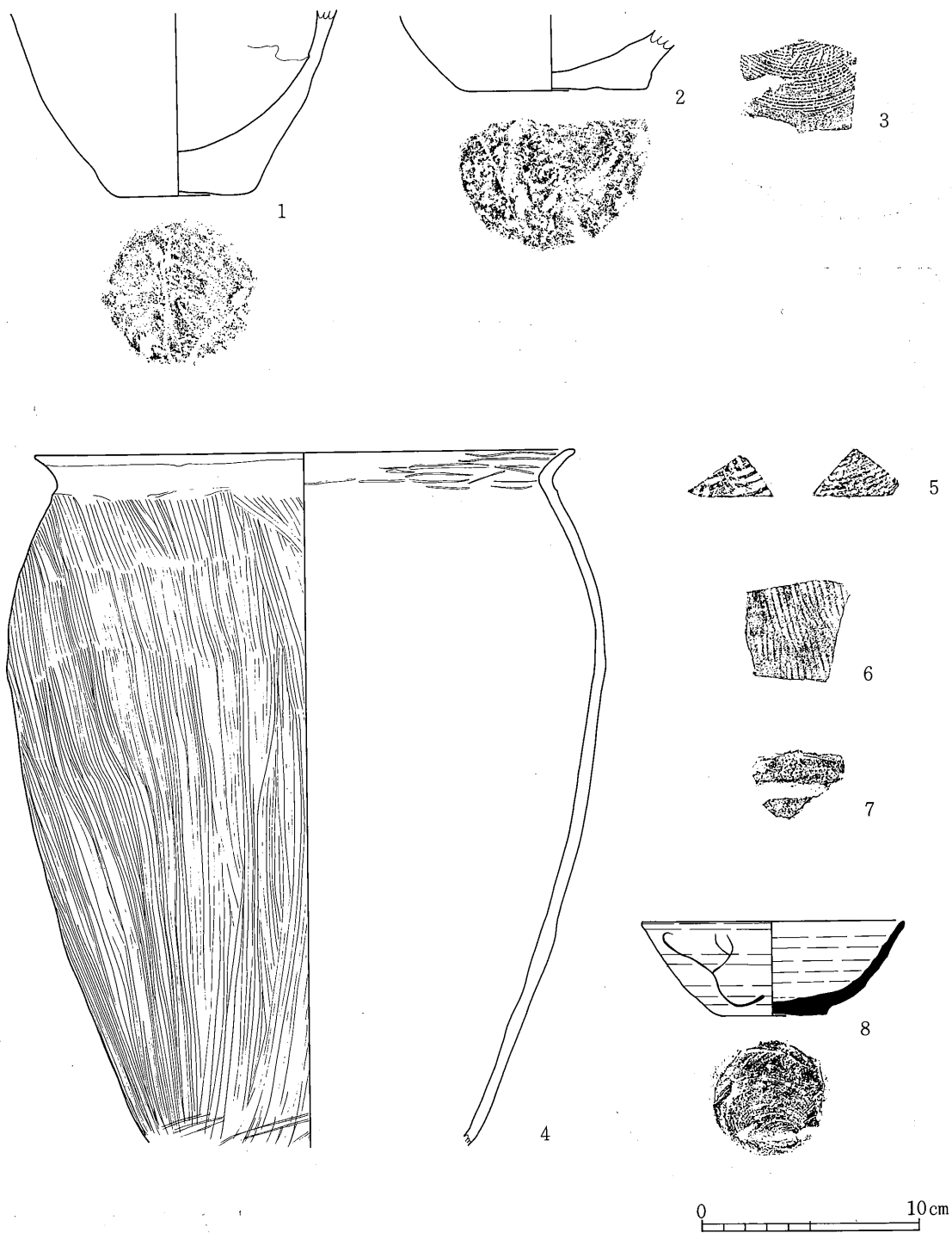
第41圖 KUR4612 石製品



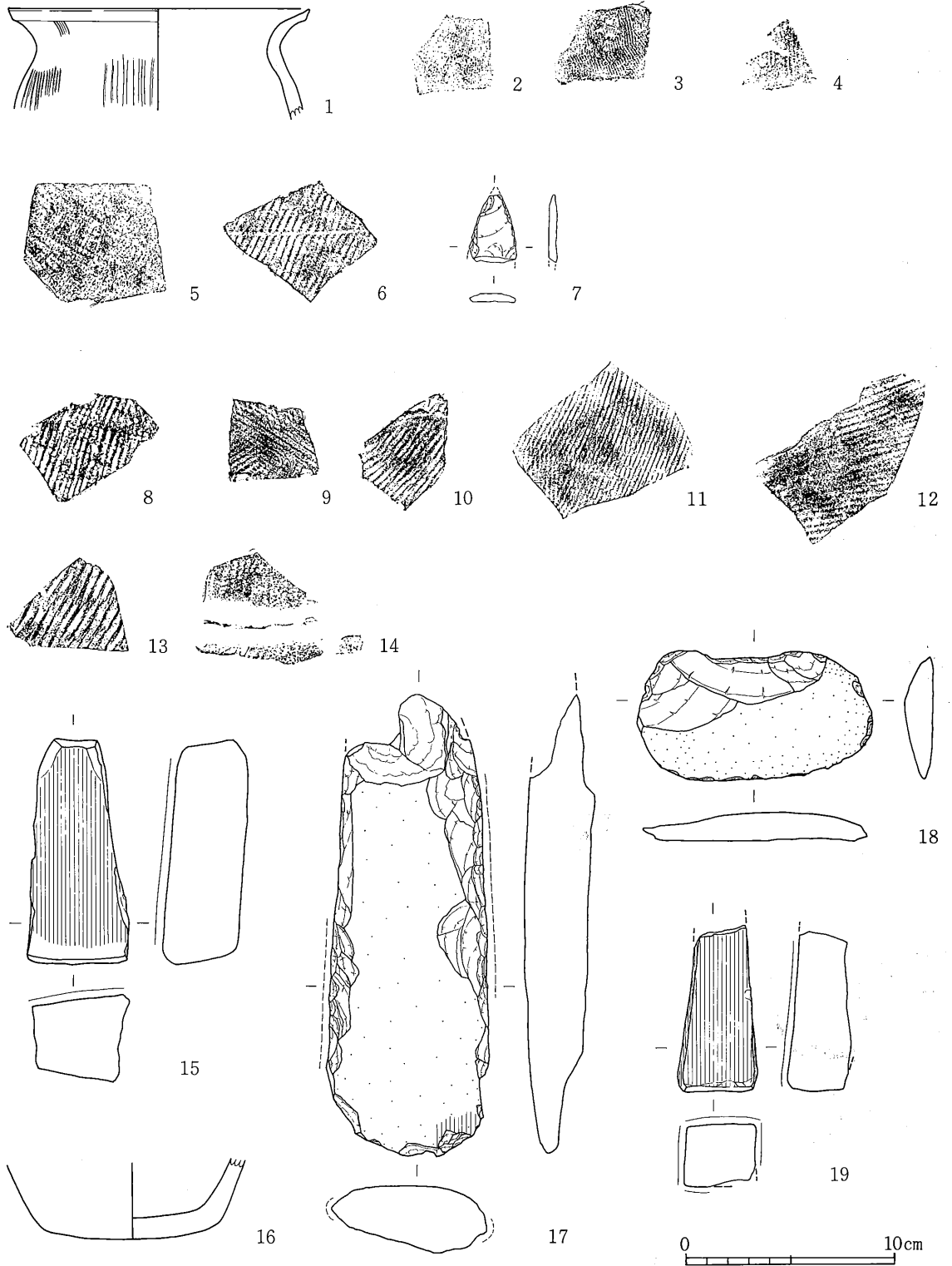
第42図 KUR4612 金属製品



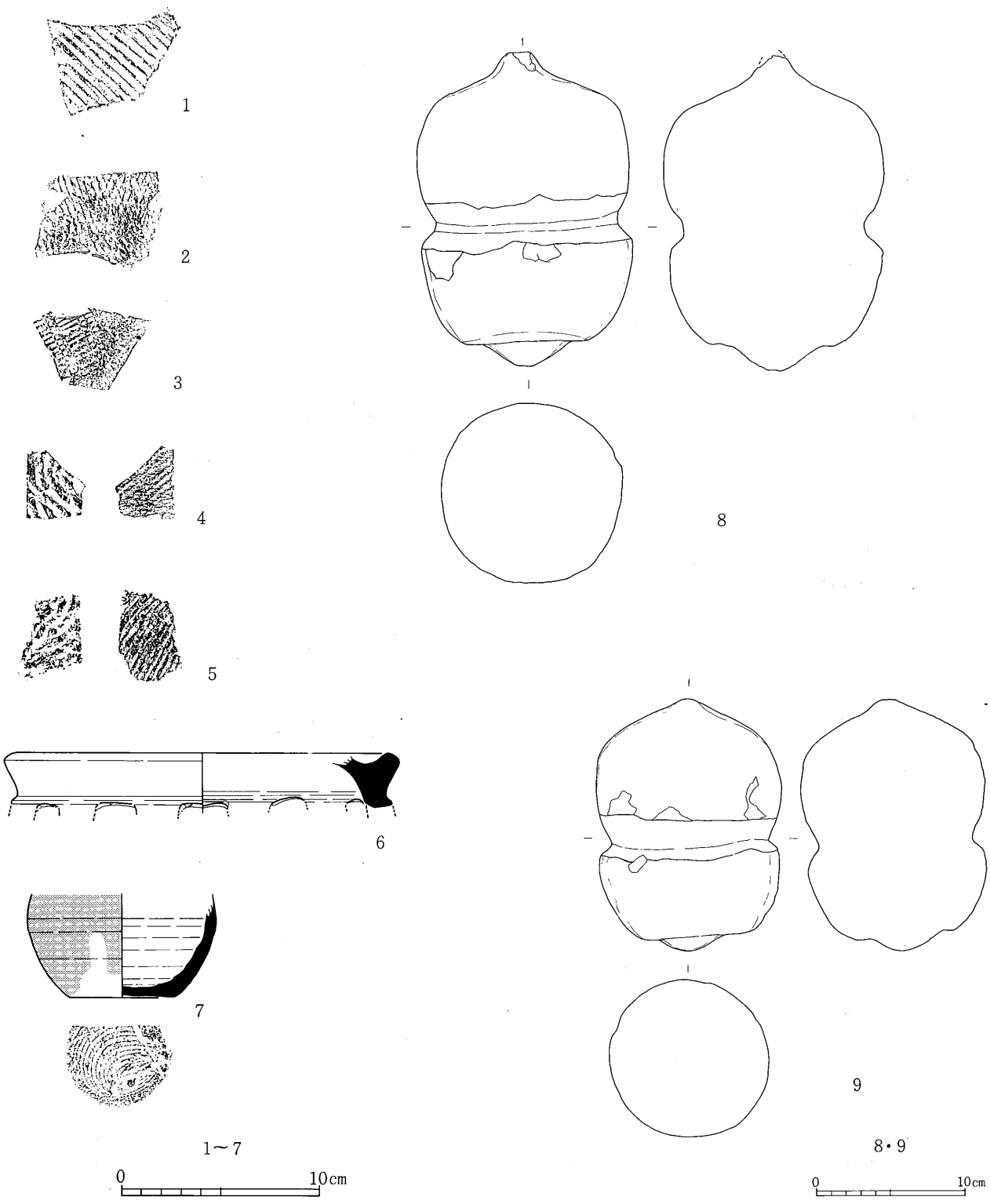
第43图 KUR4619-1 260・257号住居址出土土器 (1~5 260住、6・7 257住)



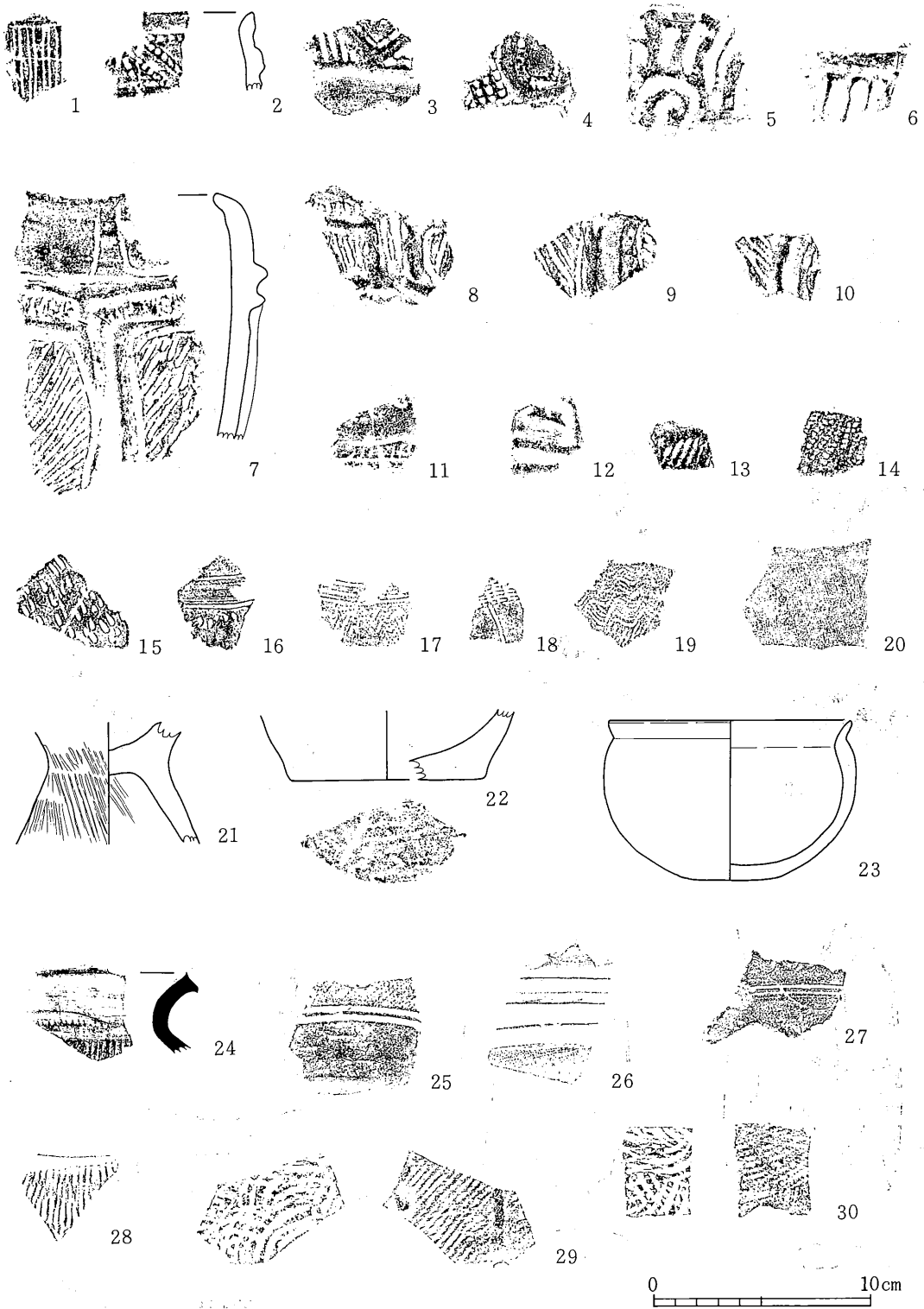
第44图 KUR4619-1 257・259号住居址出土土器 (1~3 257住、4~8 259住)



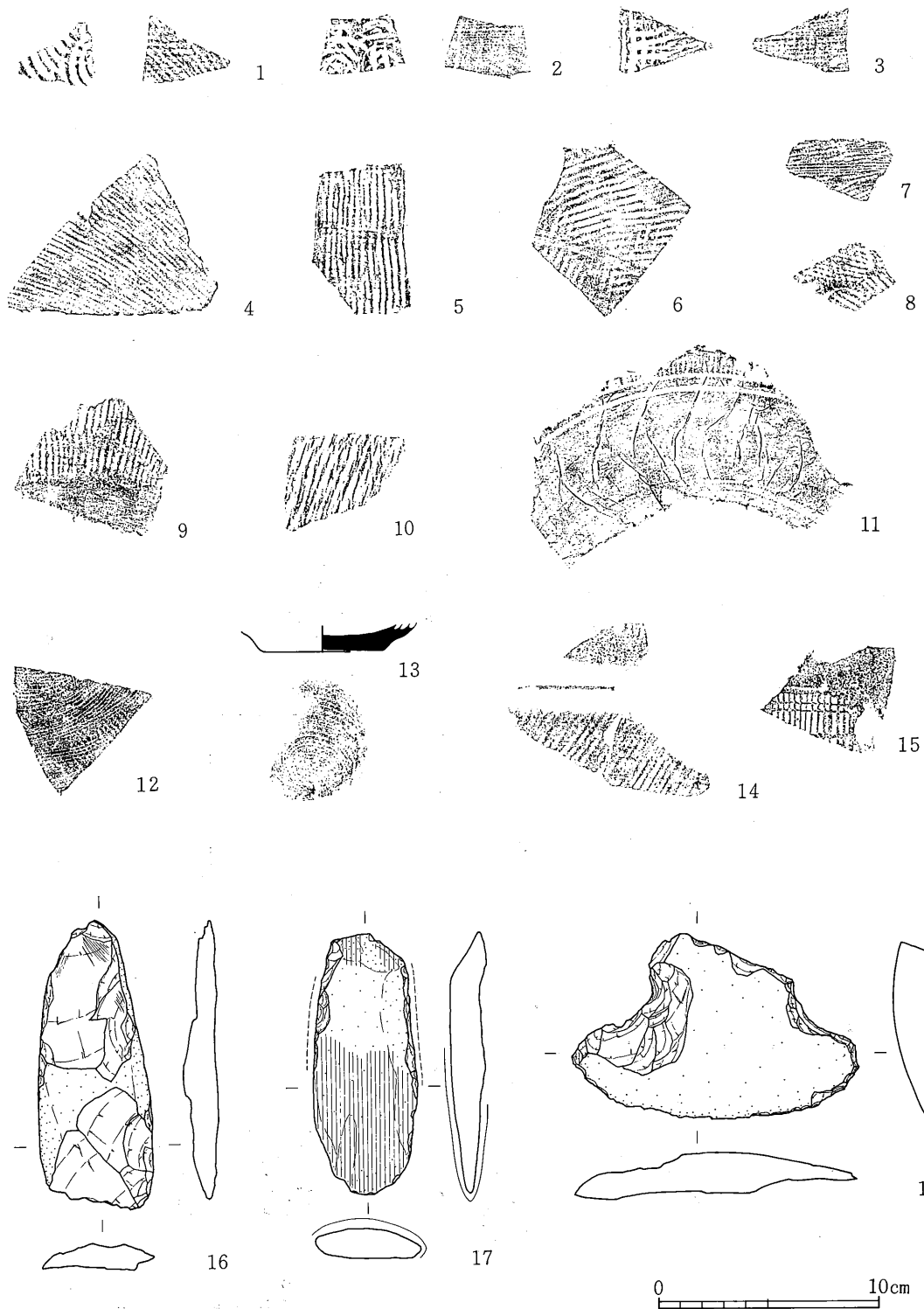
第45図 K U-R 4619-1 253~256号住居址、小竪穴17・18出土遺物
 (1~7 253住、8~14 254住、15 255住、16 256住、17 小竪17 18小竪18 19小竪)



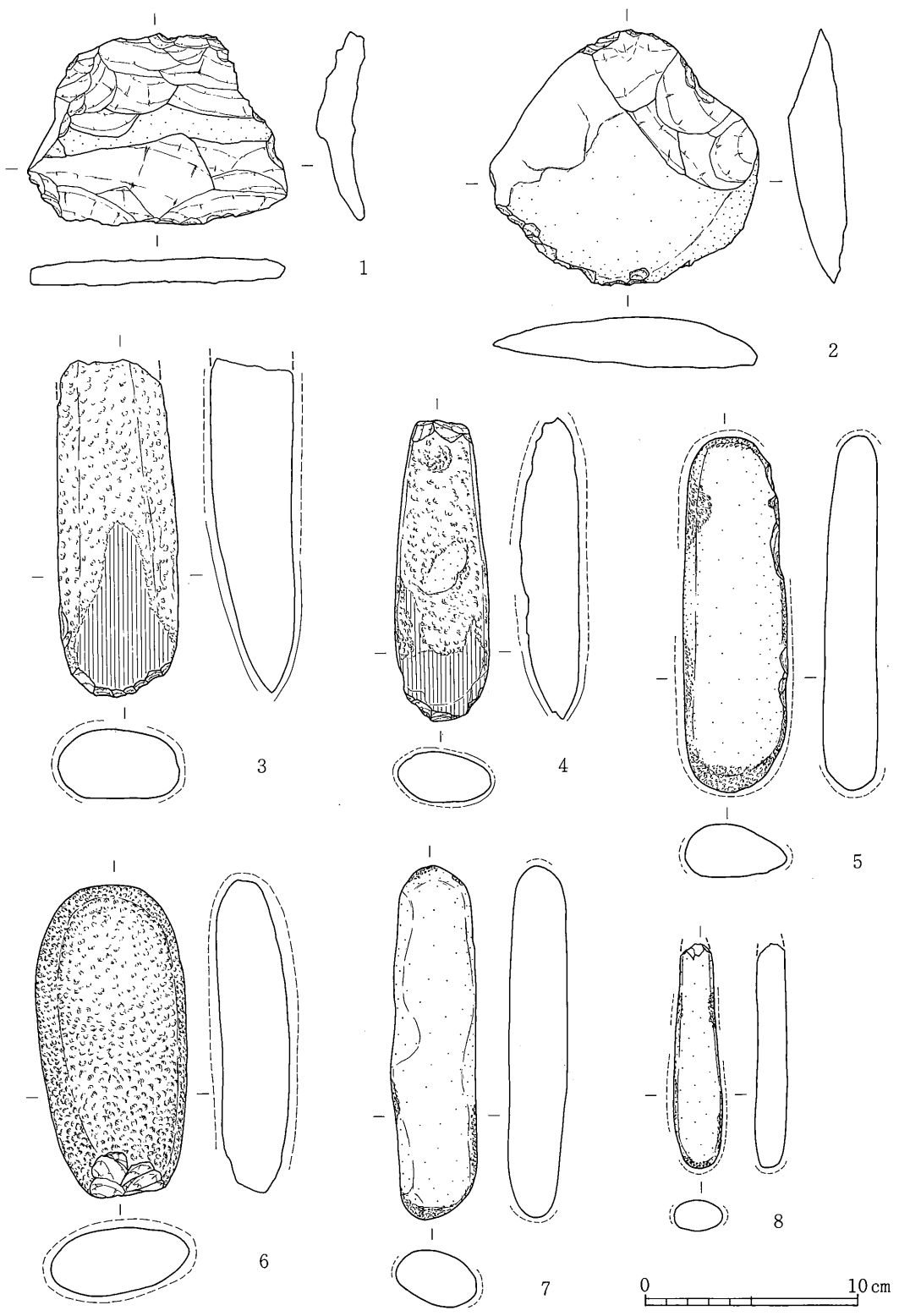
第46図 KUR4619-1 A トレンチ出土遺物



第47图 KUR4619-1 遺構外出土土器



第48図 KUR4619-1 遺構外出土土器・石器



第49图 KUR4619-1 遺構外出土石器

写真図版



遺構検出状況



遺構検出状況



遺構検出状況

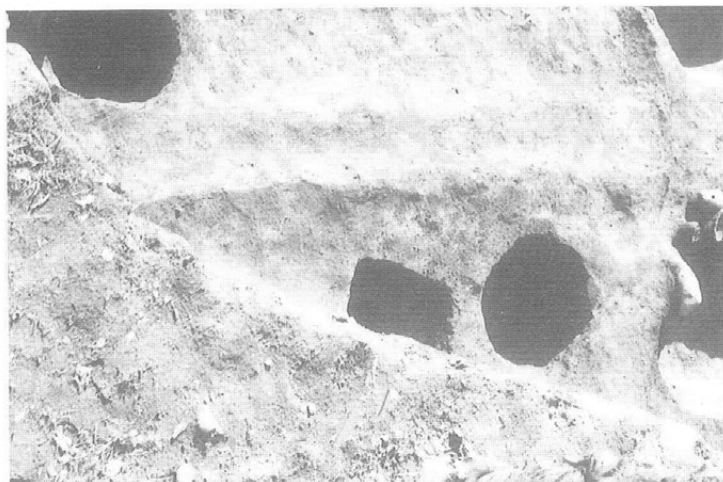
図版 2



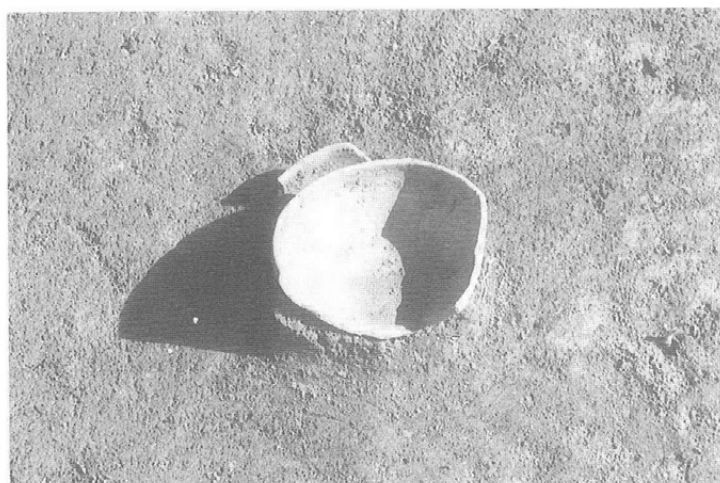
遺構検出状況



遺構検出状況



214号住居址



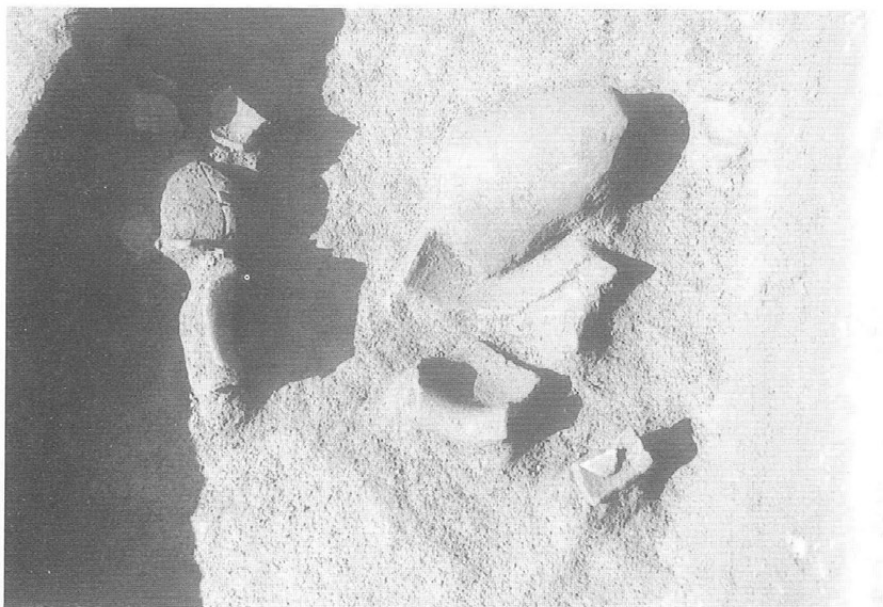
同遺物出土状態



197号住居址



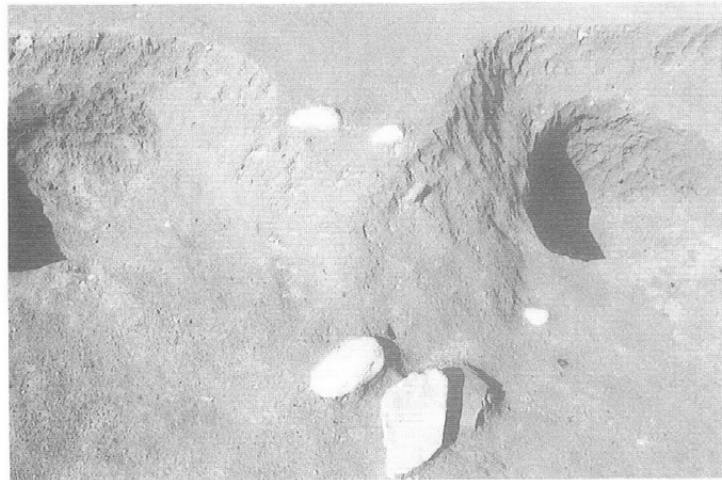
193号住居址



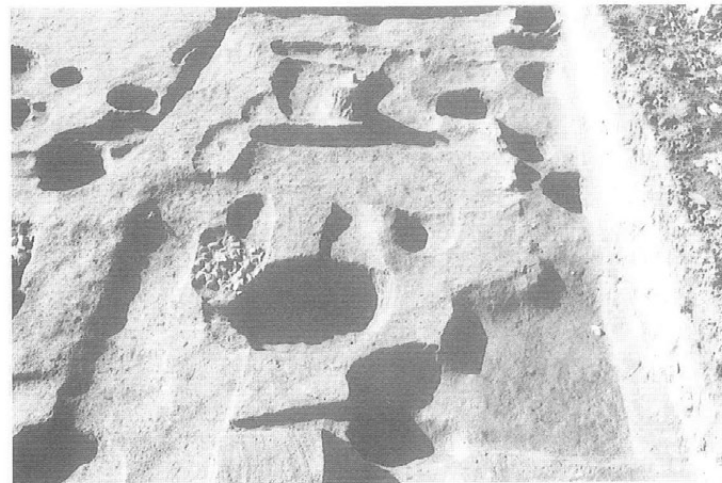
同遺物出土状態



194・195号住居址

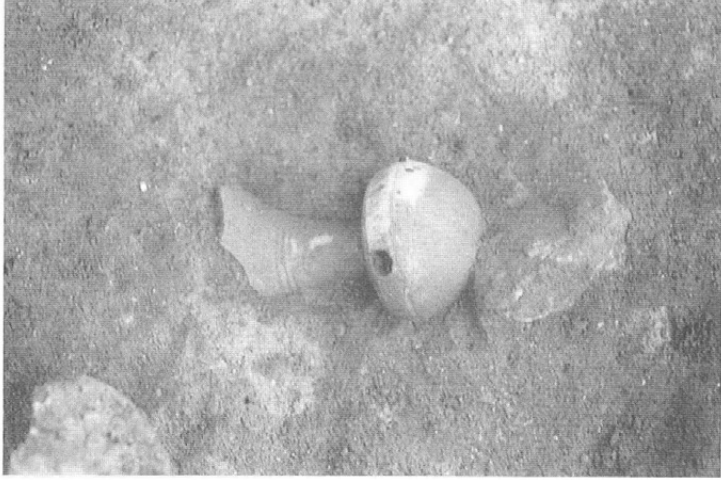


194号住居址カマド

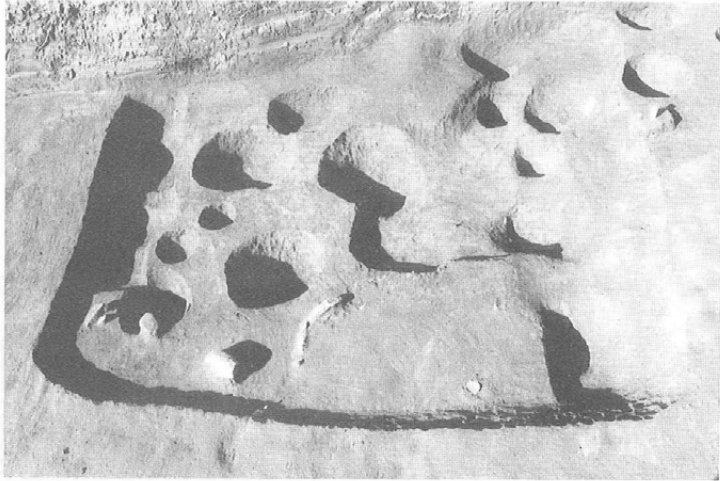


198号住居址

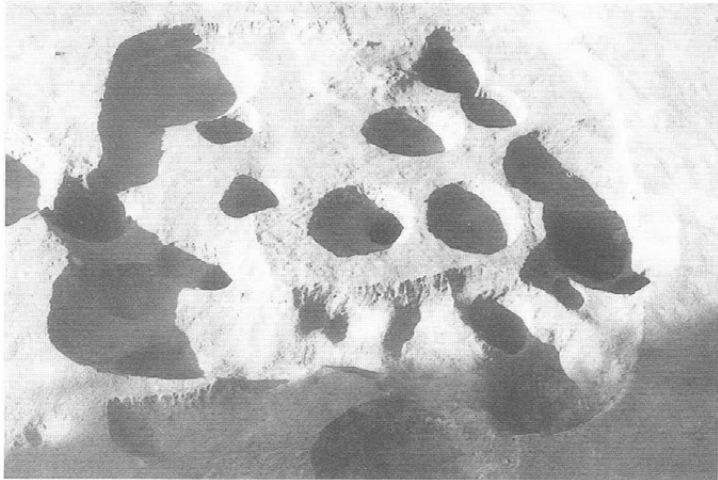
图版 6



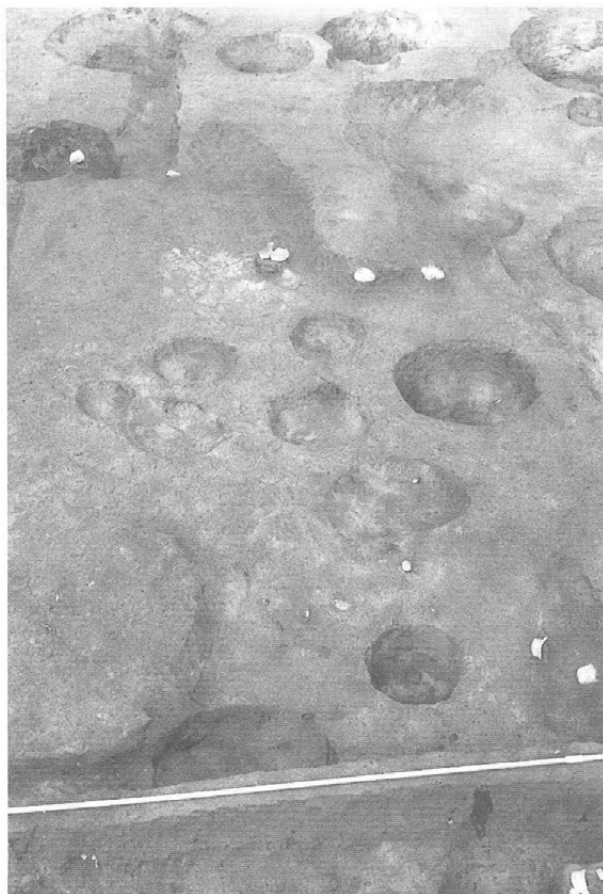
205号住居址遺物出土状態



221号住居址



222号住居址



225号住居址



226号住居址

図版 8



231号住居址



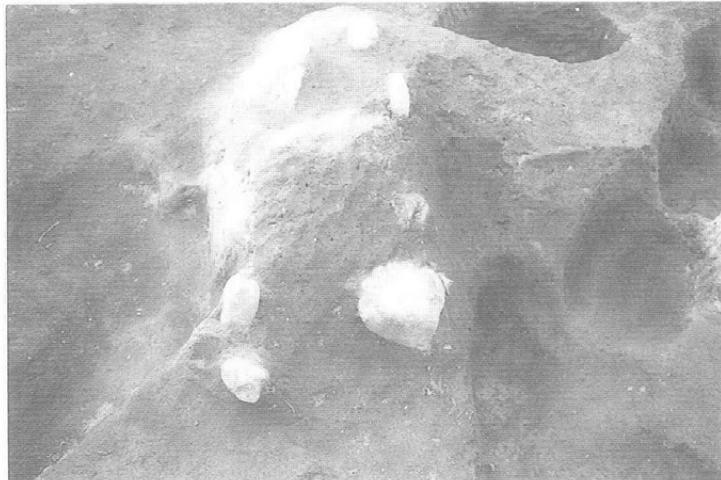
239号住居址カマド



242号住居址



241号住居址カマド

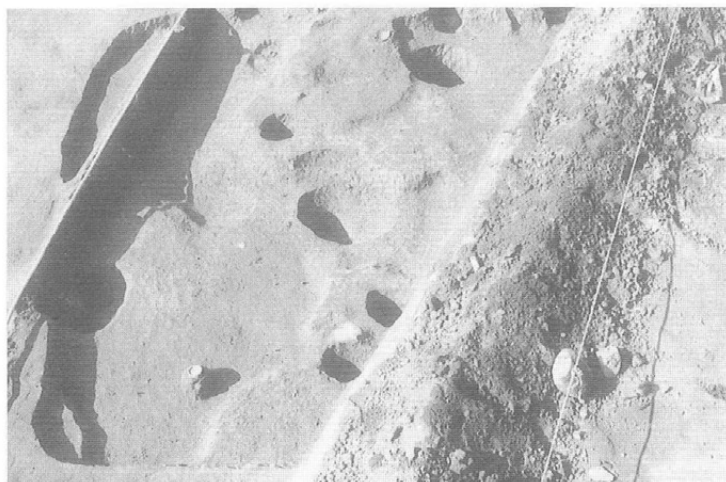


211号住居址カマド



216・229号住居址

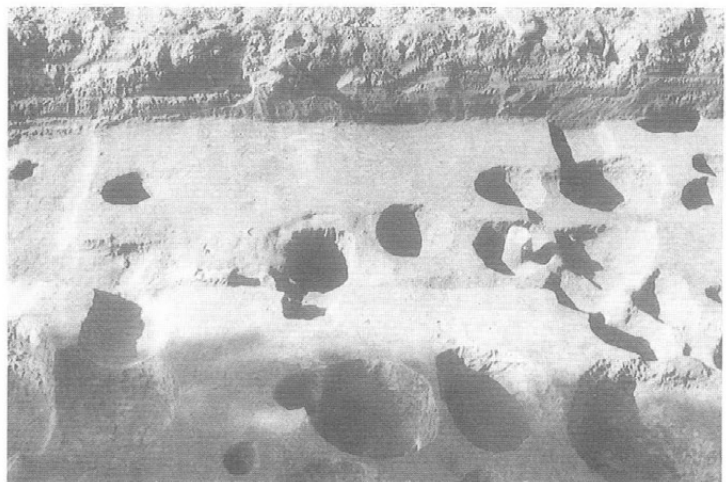
图版10



218号住居址



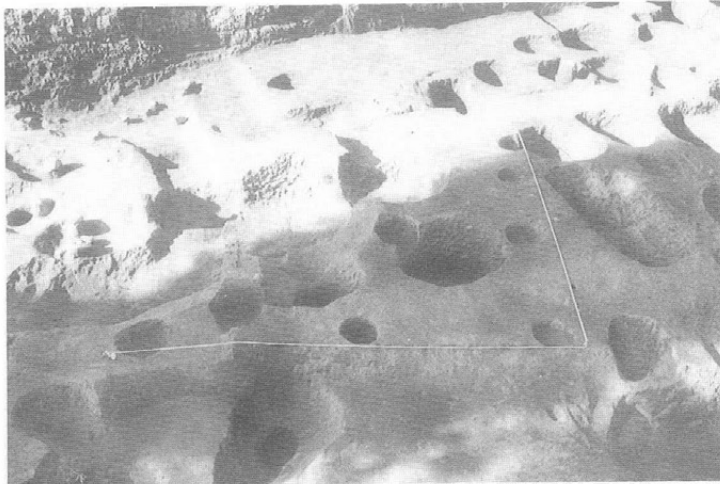
230号住居址・沟状址6



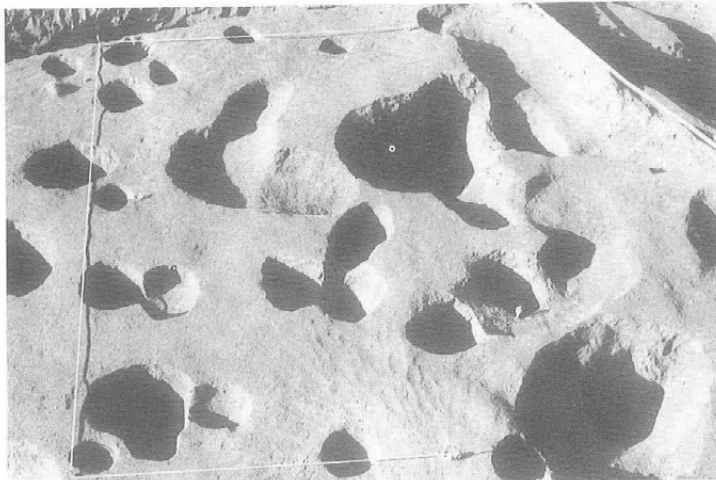
227号住居址



238号住居址

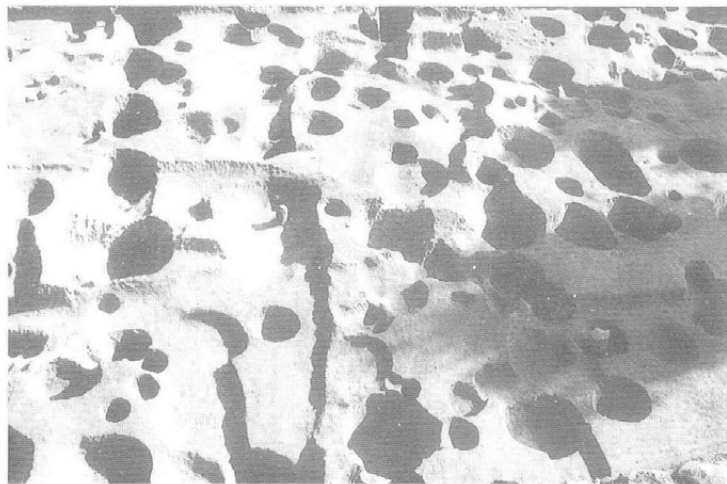


掘立柱建物址28

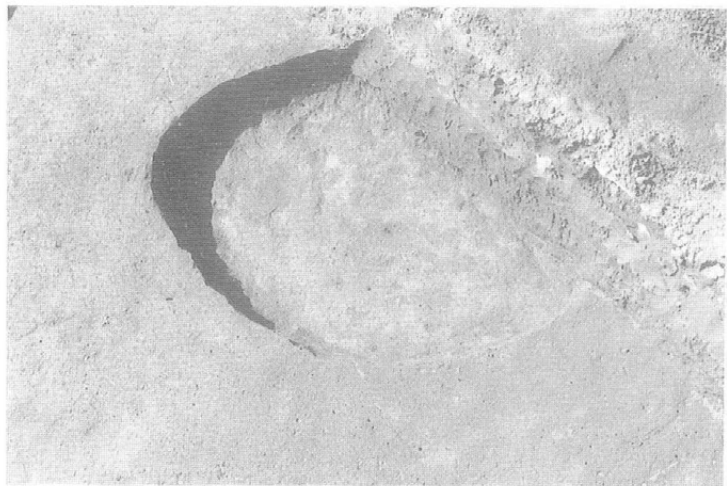


掘立柱建物址29

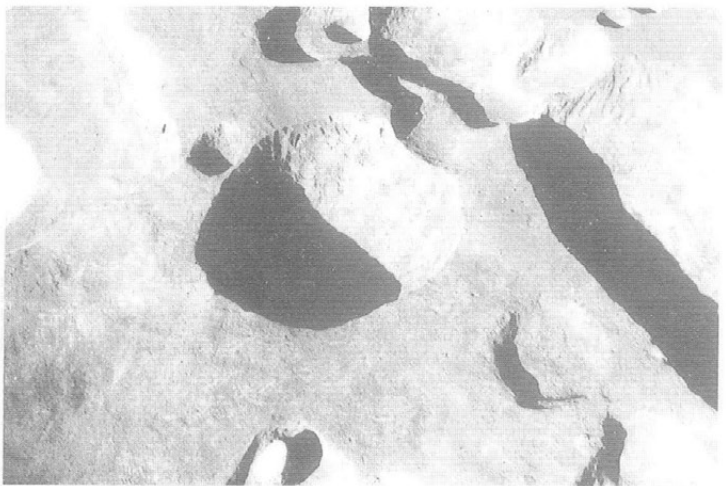
图版12



掘立柱建物址33



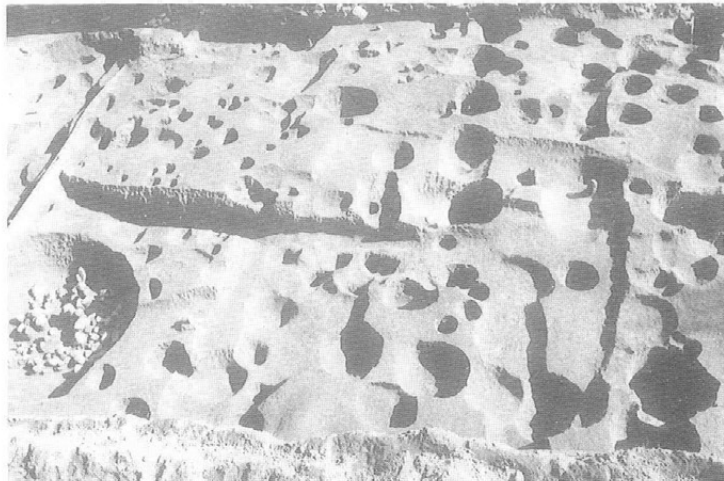
土坑59



土坑61



小竖穴15



方形周溝墓 6



溝状址 7

図版14



集石35



集石39

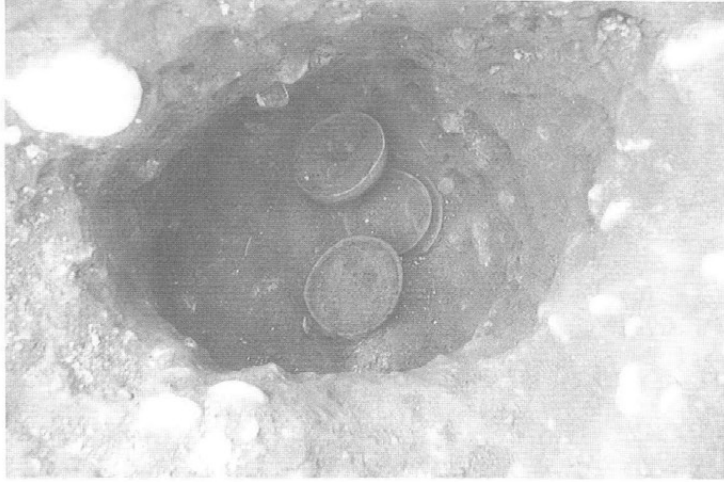


調査前風景



遺構検出状況

図版16



260号住居址遺物出土状態



257号住居址カマド



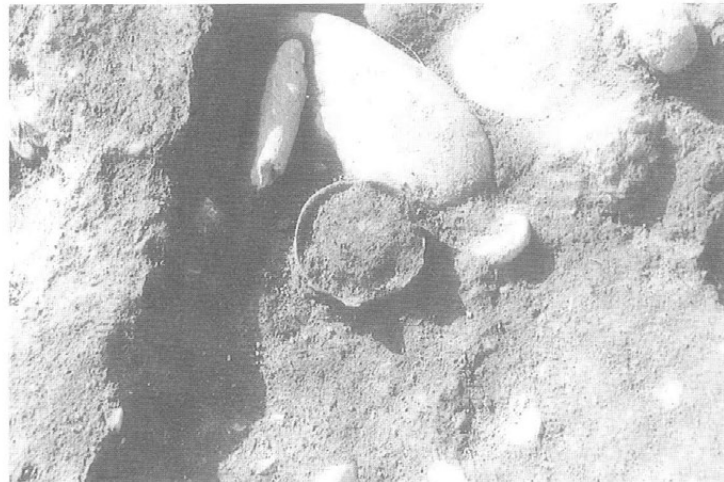
同遺物出土状態



259号住居址



同カマド



同遺物出土状態

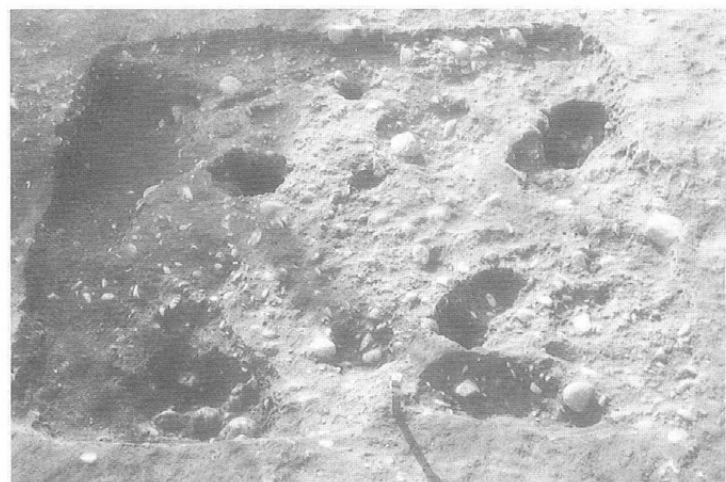
図版18



253号住居址・土坑64



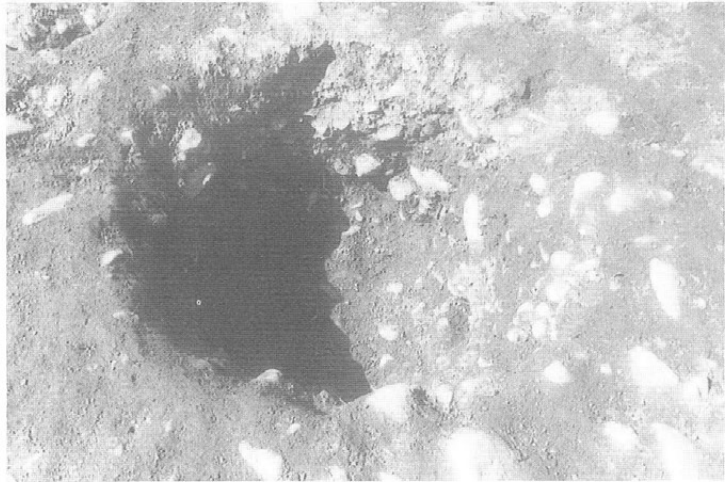
254号住居址



255号住居址



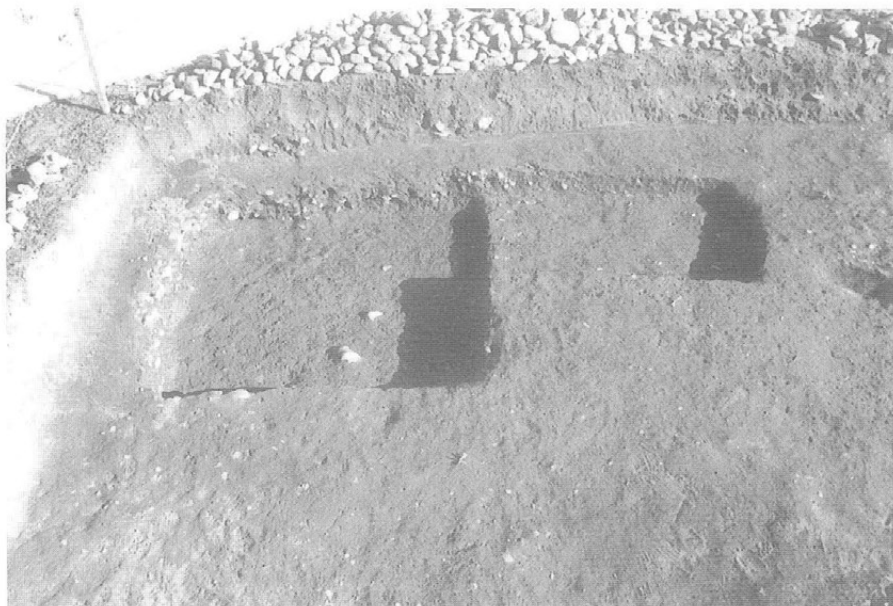
258号住居址



土坑68



土坑69



小豎穴17・18



小豎穴20



小竖穴21

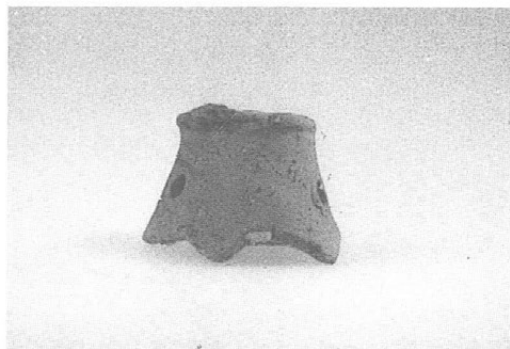


沟状址14・16・17

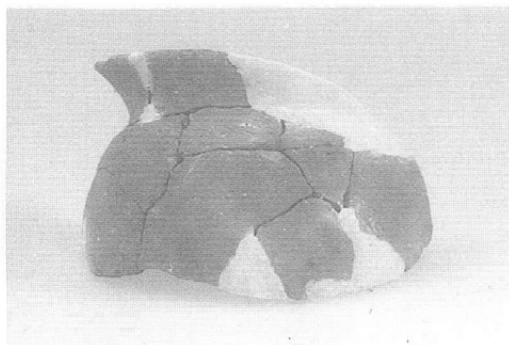
图版22



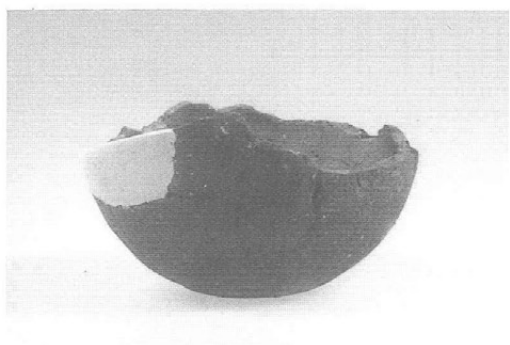
214号住居址



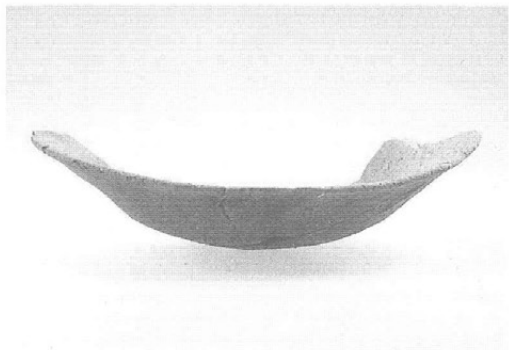
197号住居址



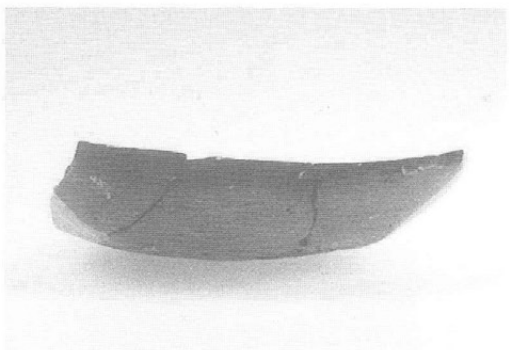
194号住居址



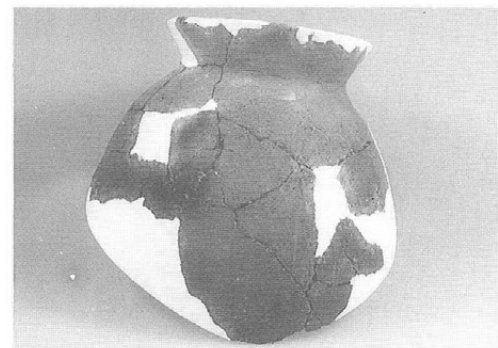
194号住居址



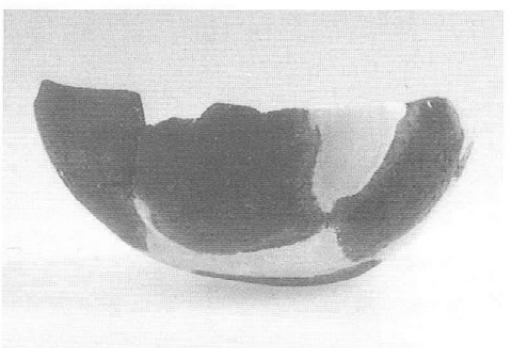
194号住居址



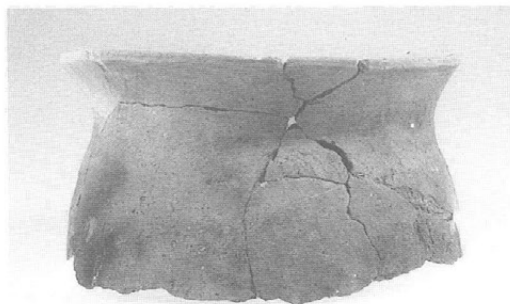
194号住居址



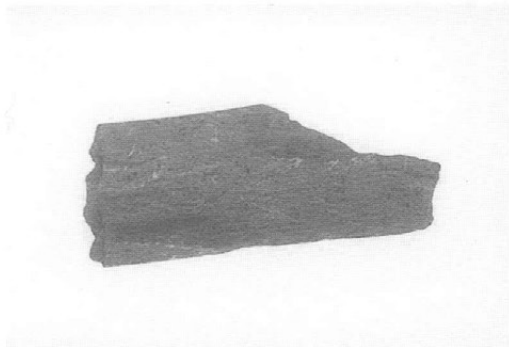
199号住居址



199号住居址



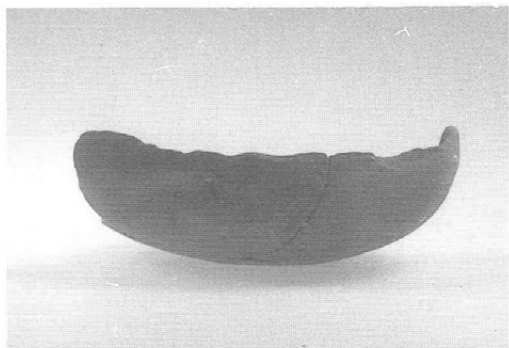
204号住居址



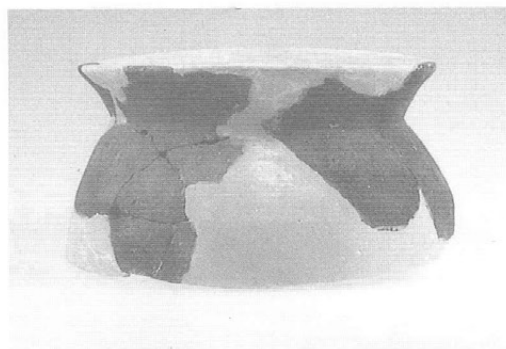
204号住居址



205号住居址



208号住居址



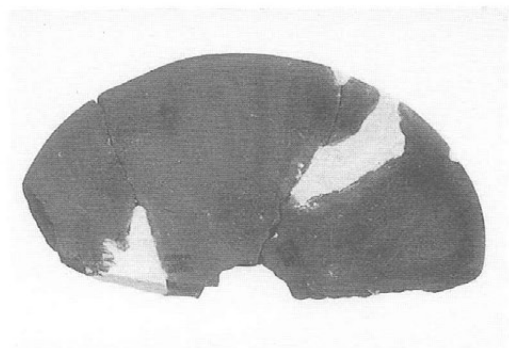
222号住居址



222号住居址

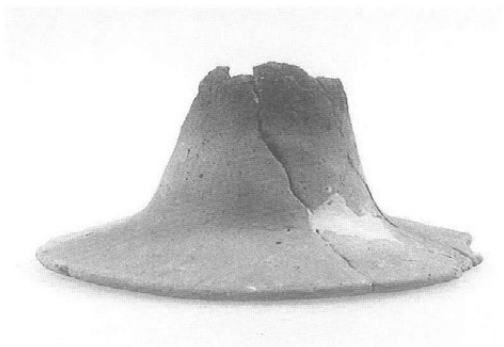


222号住居址

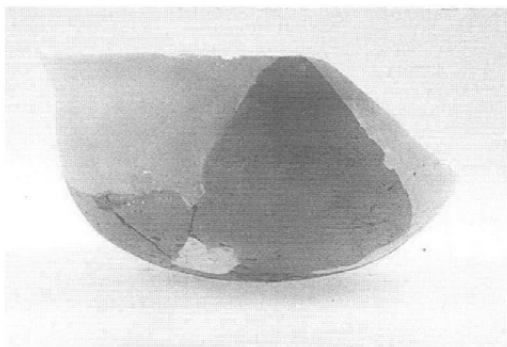


222号住居址

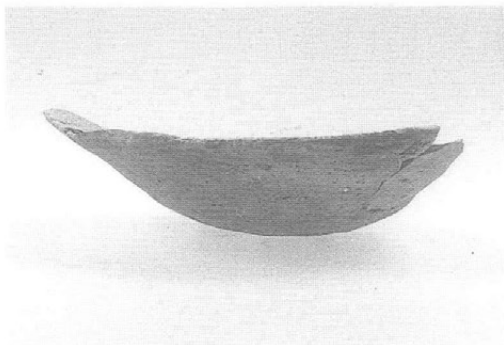
图版24



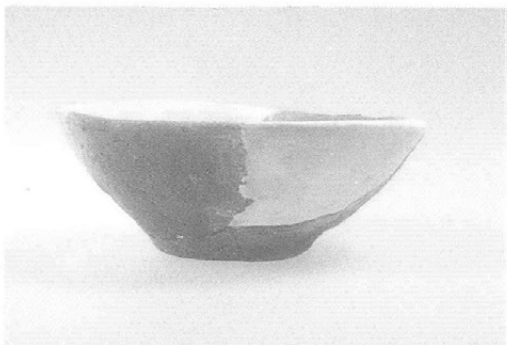
225号住居址



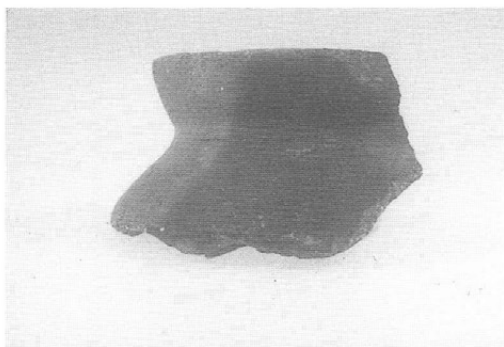
225号住居址



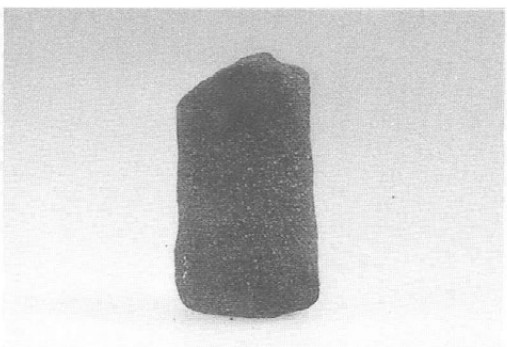
228号住居址



228号住居址



231号住居址



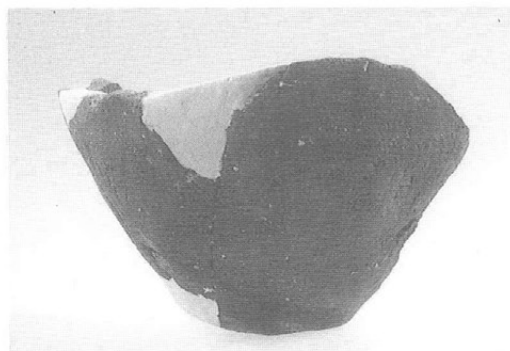
231号住居址



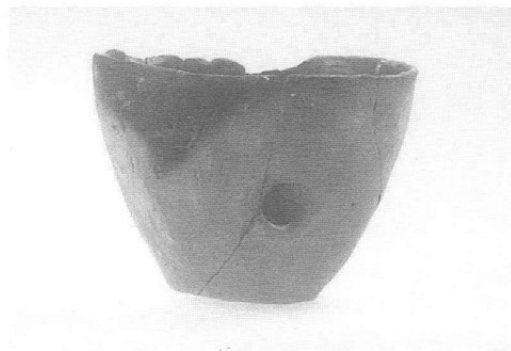
233号住居址



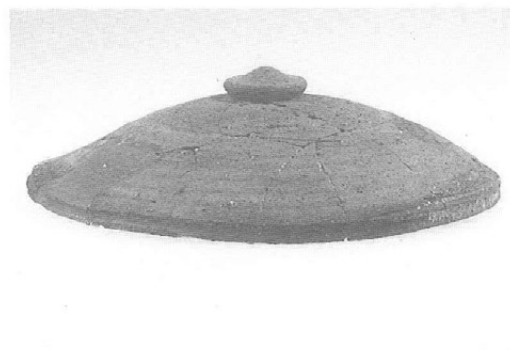
233号住居址



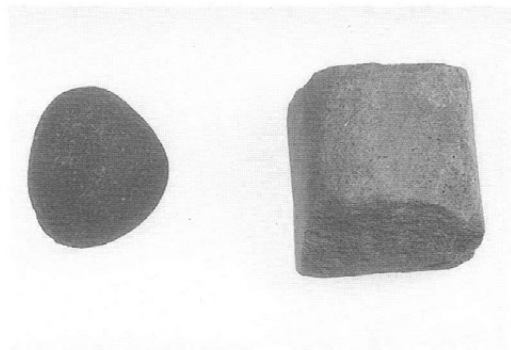
207号住居址



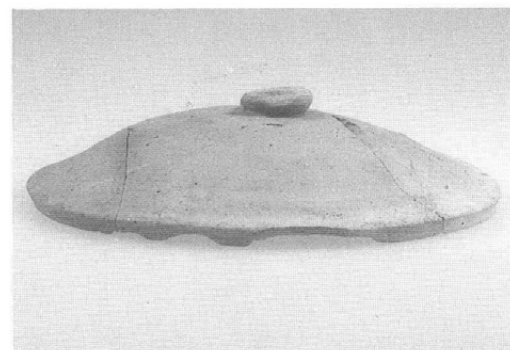
207号住居址



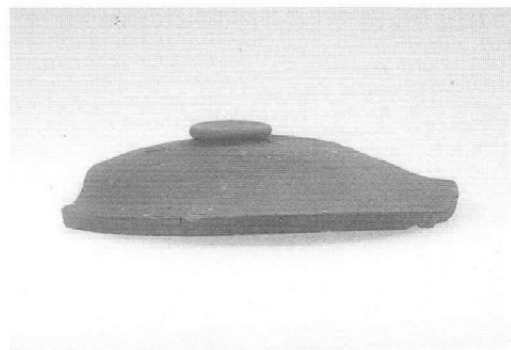
207号住居址



207号住居址



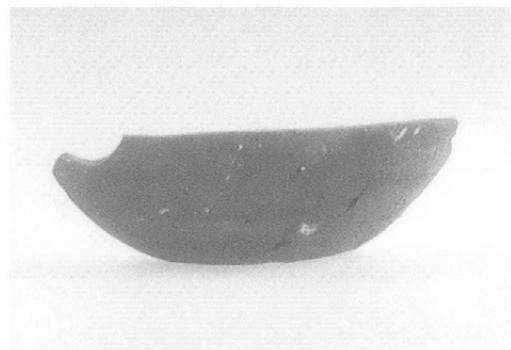
240号住居址



240号住居址

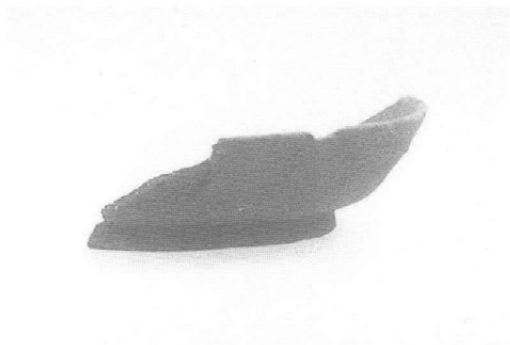


240号住居址



240号住居址

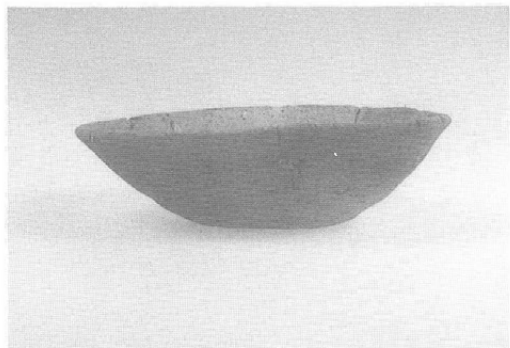
图版26



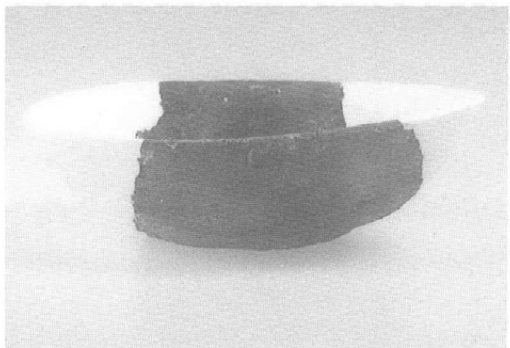
241号住居址



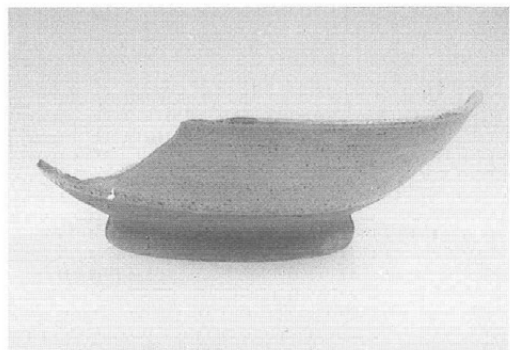
241号住居址



196号住居址



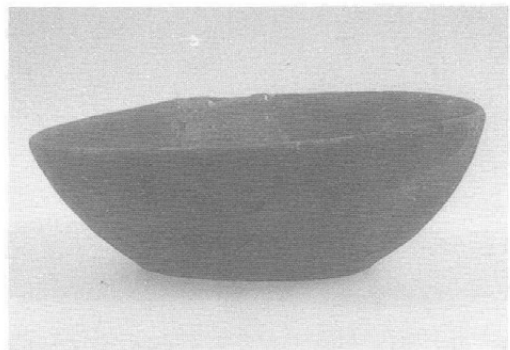
196号住居址



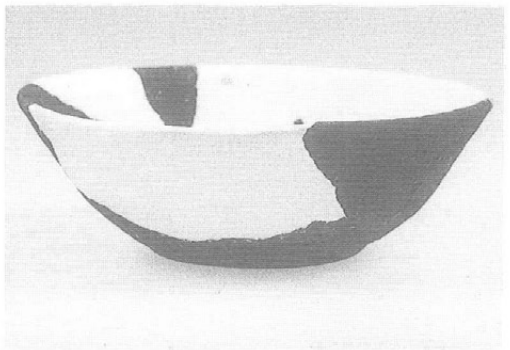
196号住居址



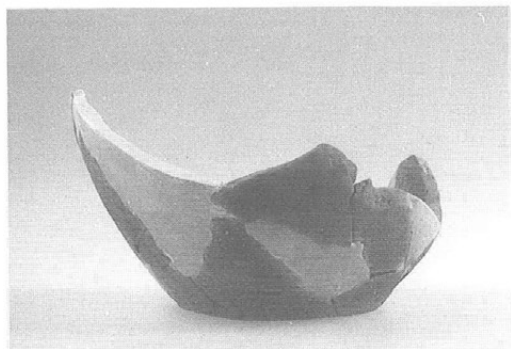
196号住居址



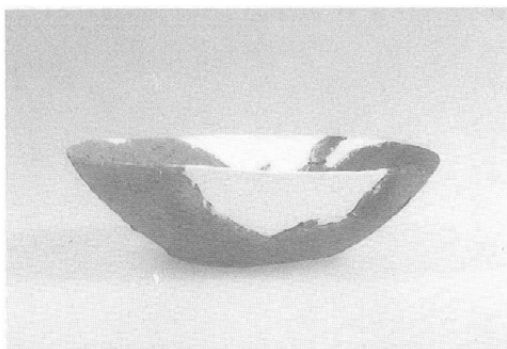
211号住居址



211号住居址



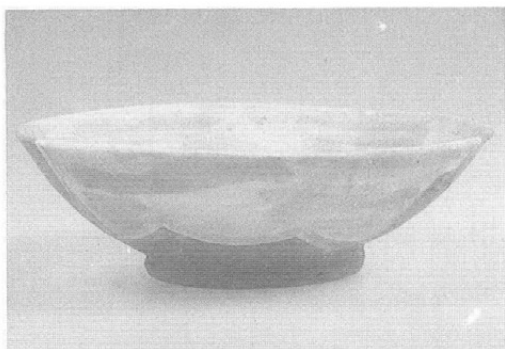
216号住居址



216号住居址



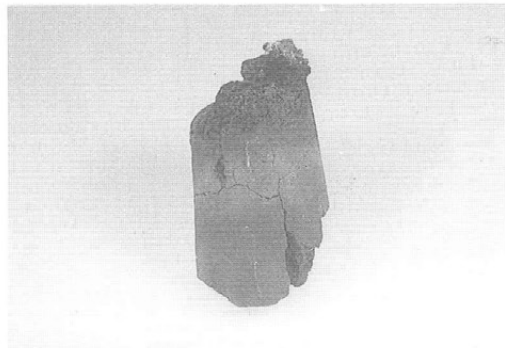
216号住居址



216号住居址



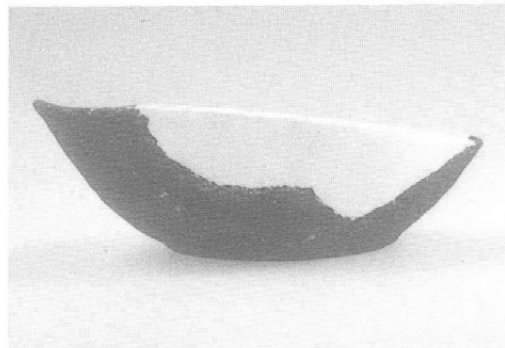
216号住居址



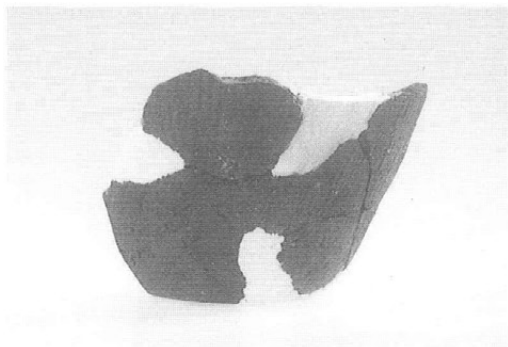
216号住居址



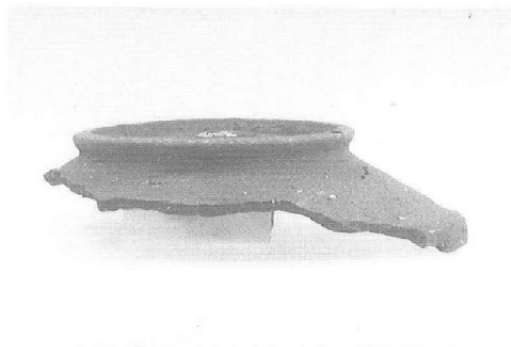
218号住居址



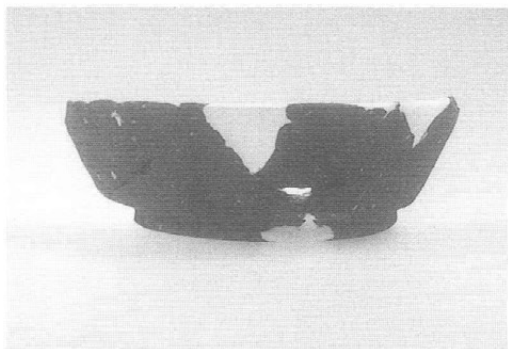
235号住居址



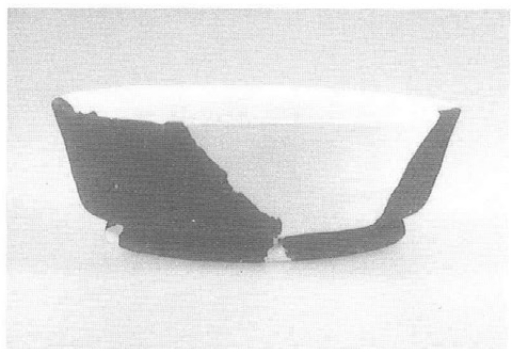
262号住居址



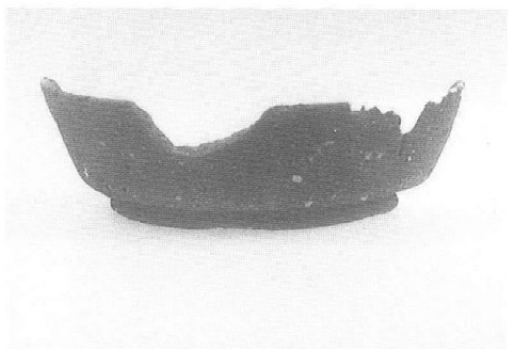
262号住居址



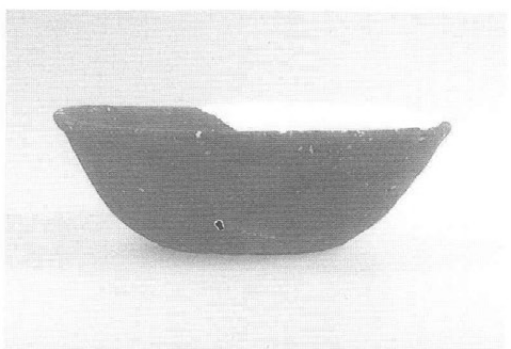
262号住居址



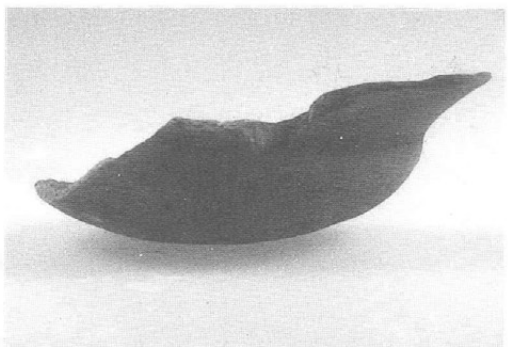
262号住居址



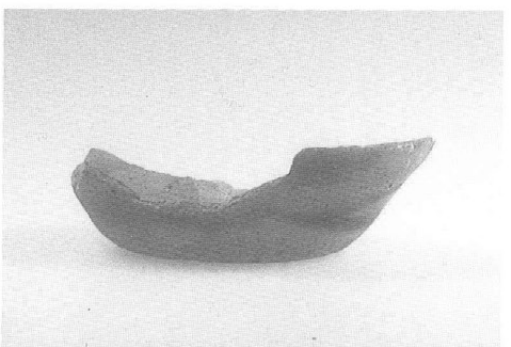
262号住居址



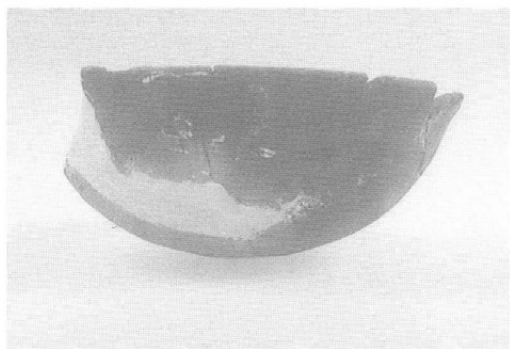
262号住居址



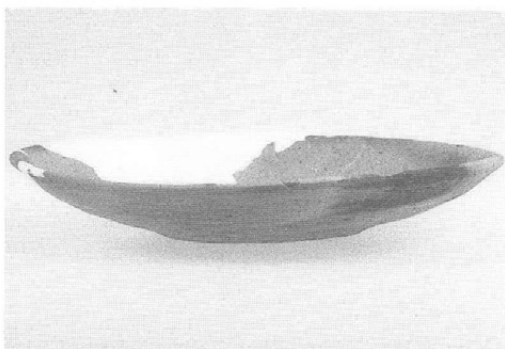
223号住居址



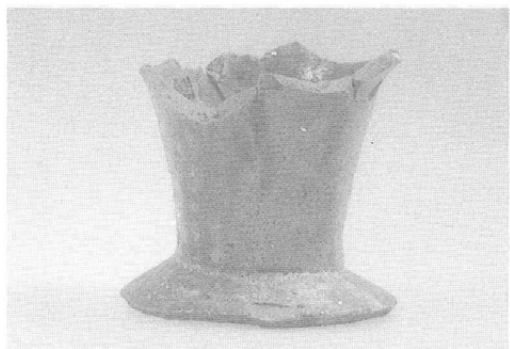
223号住居址



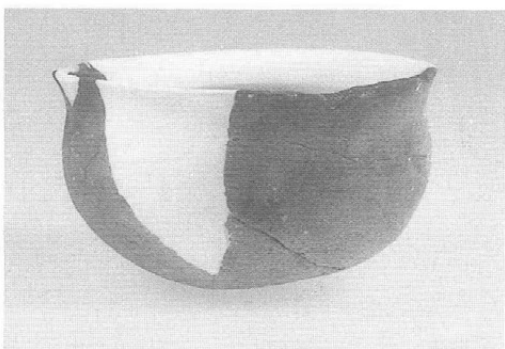
227号住居址



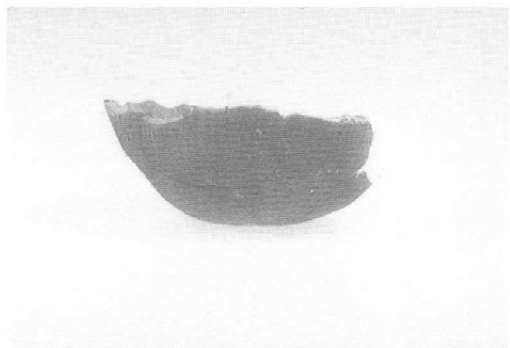
229号住居址



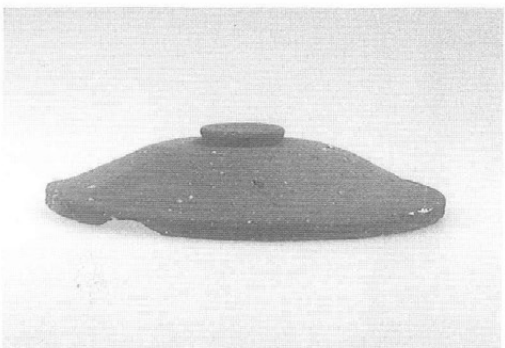
229号住居址



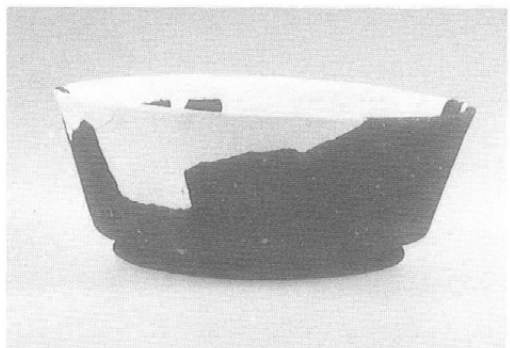
溝状址 5



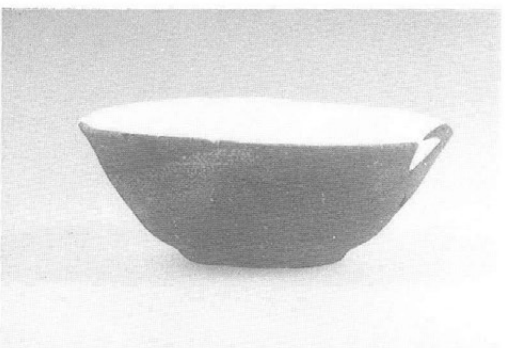
集石34



集石34



集石34



集石34



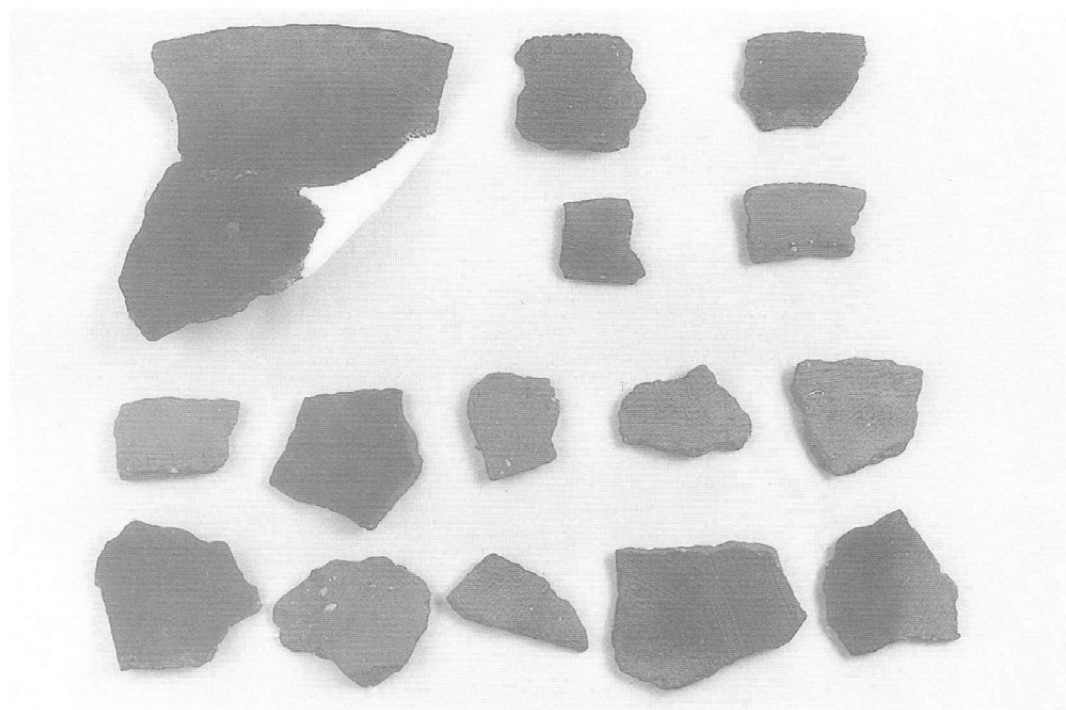
遺構外出土遺物



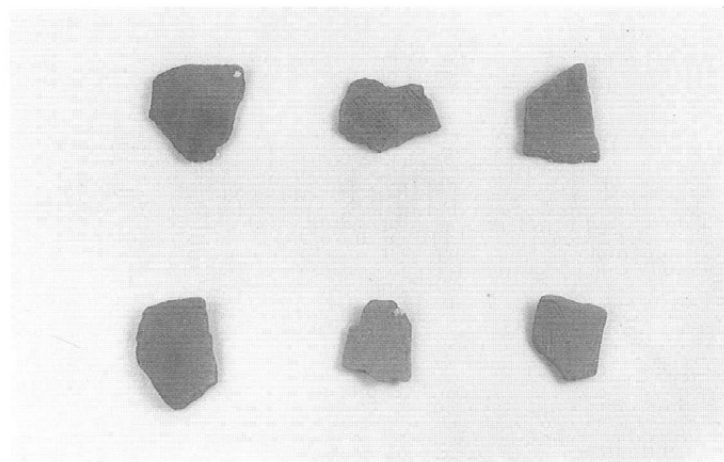
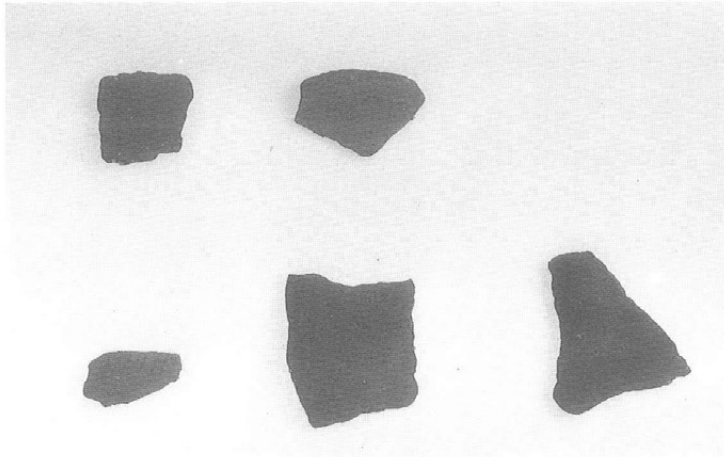
遺構外出土遺物



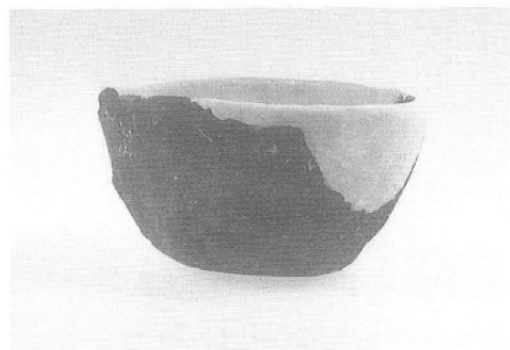
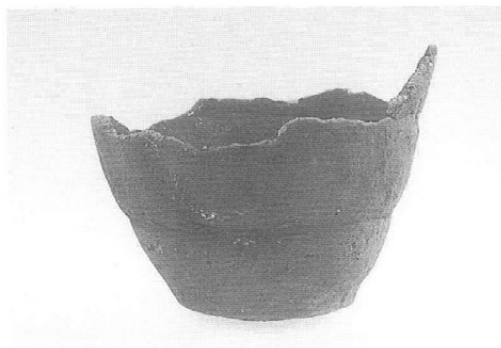
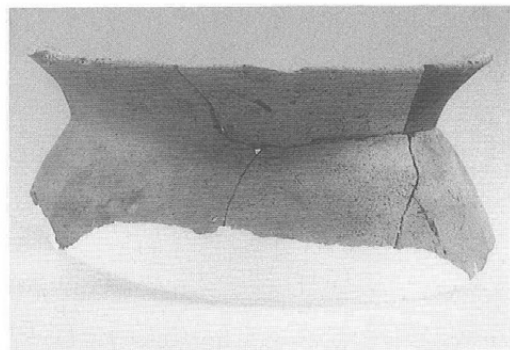
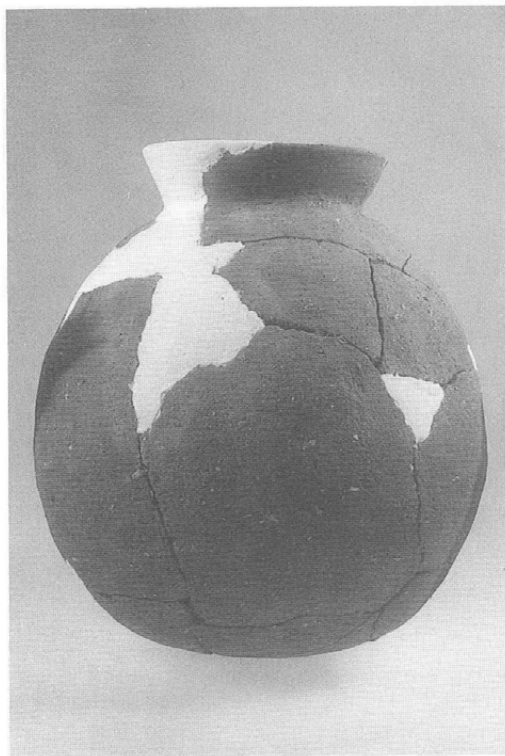
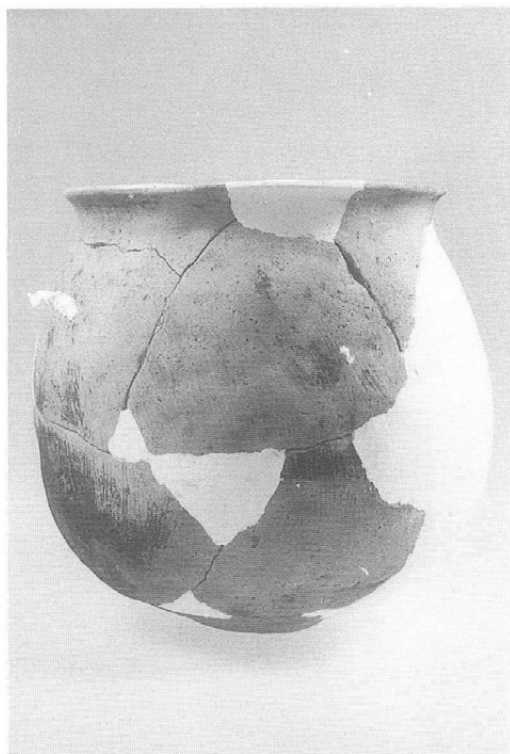
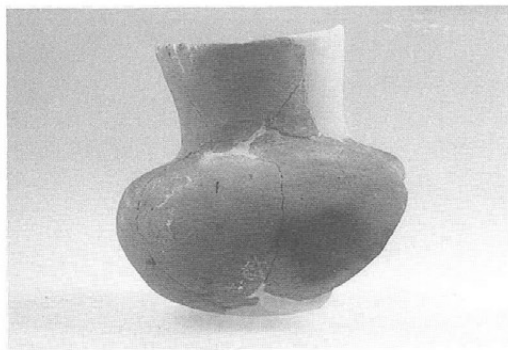
遺構外出土遺物



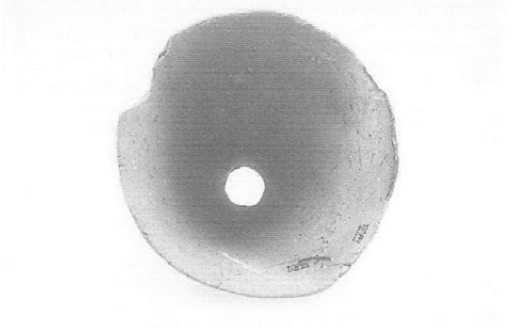
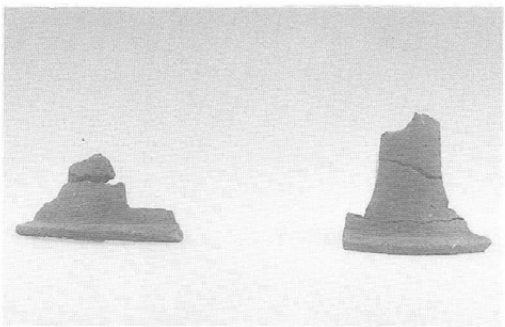
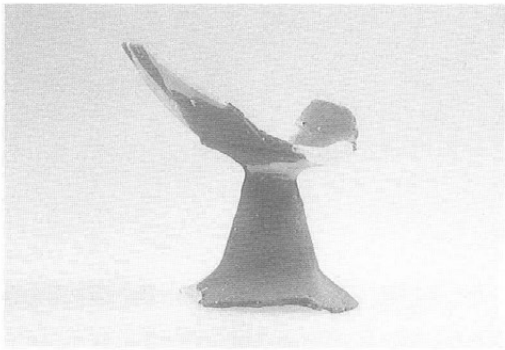
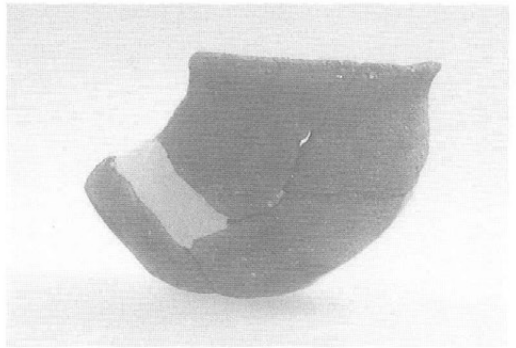
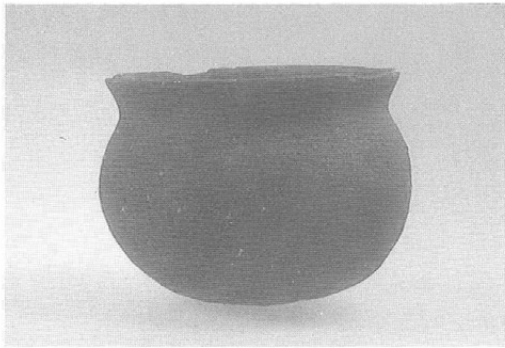
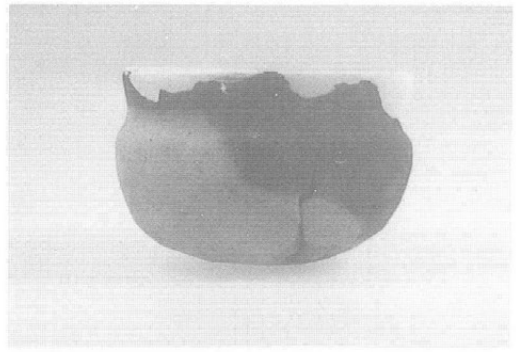
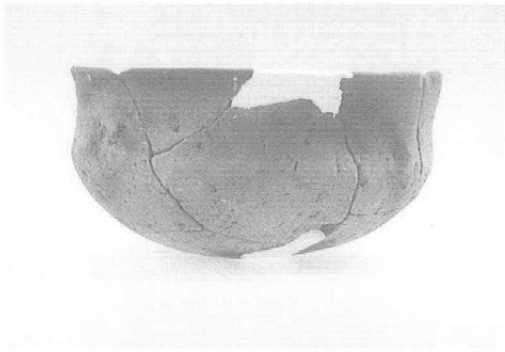
遺構外出土遺物



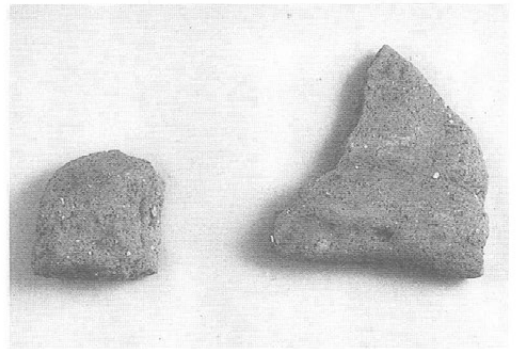
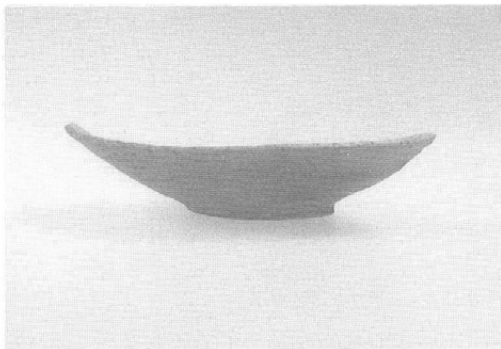
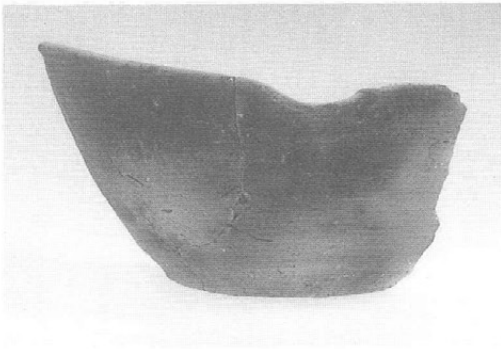
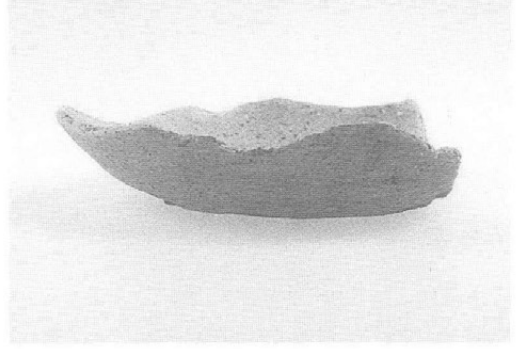
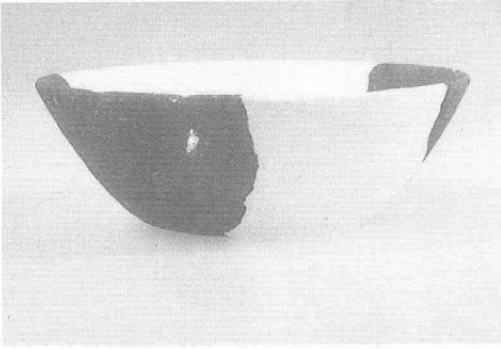
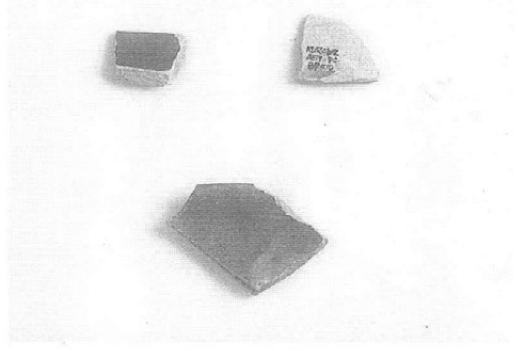
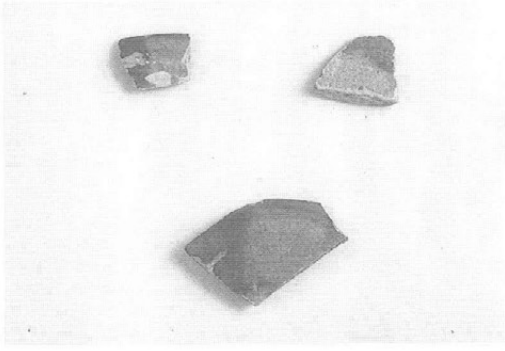
遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

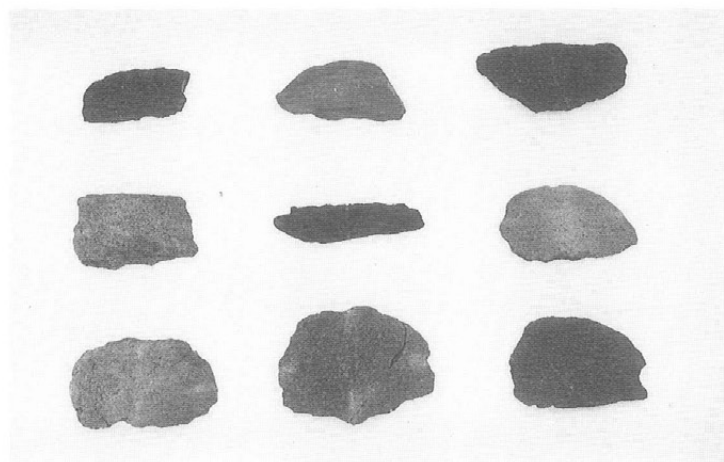
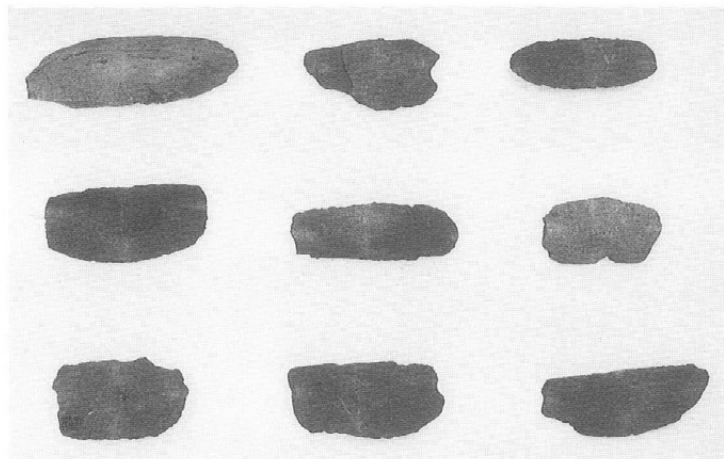
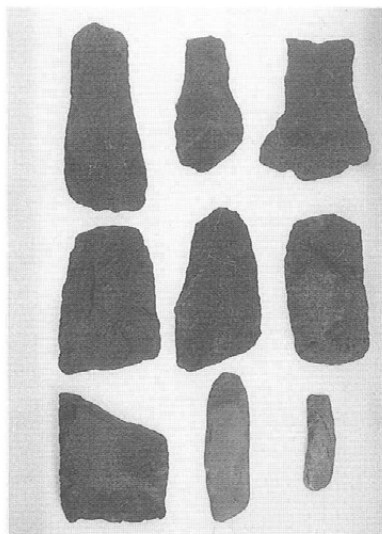


遺構外出土遺物

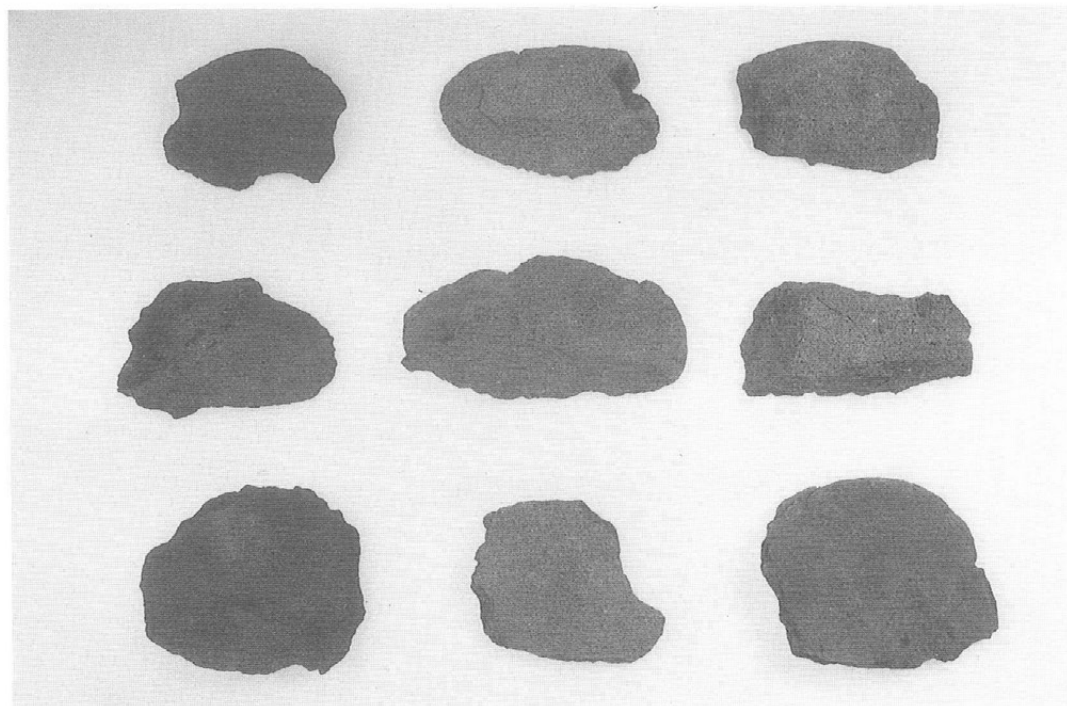


遺構外出土遺物

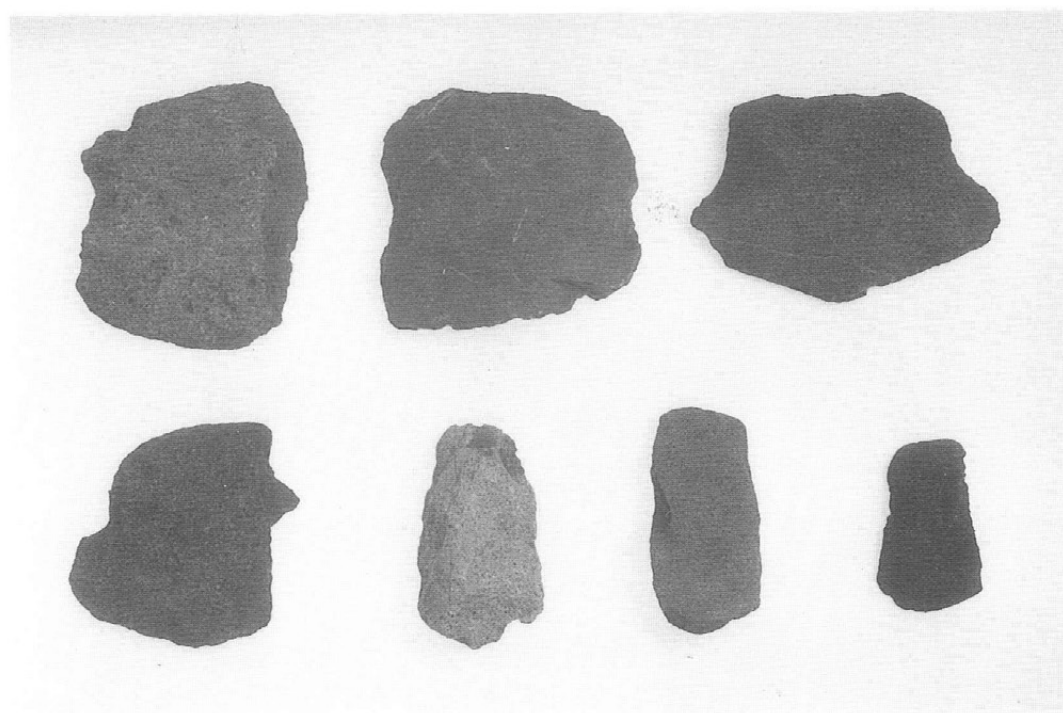
図版36



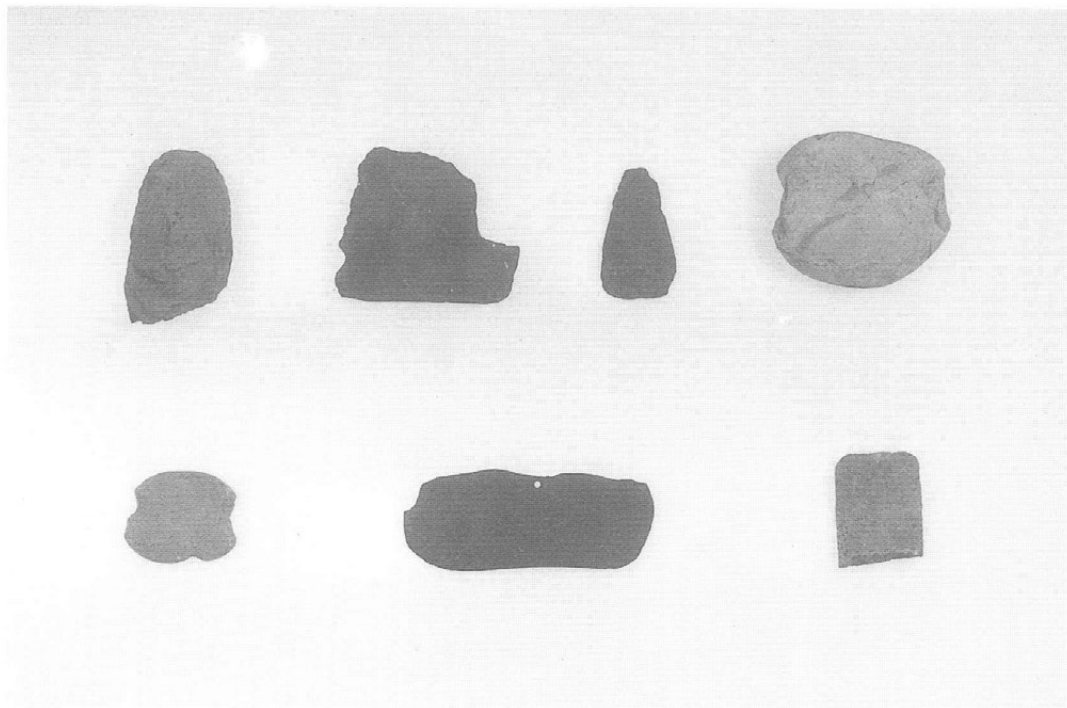
遺構外出土遺物



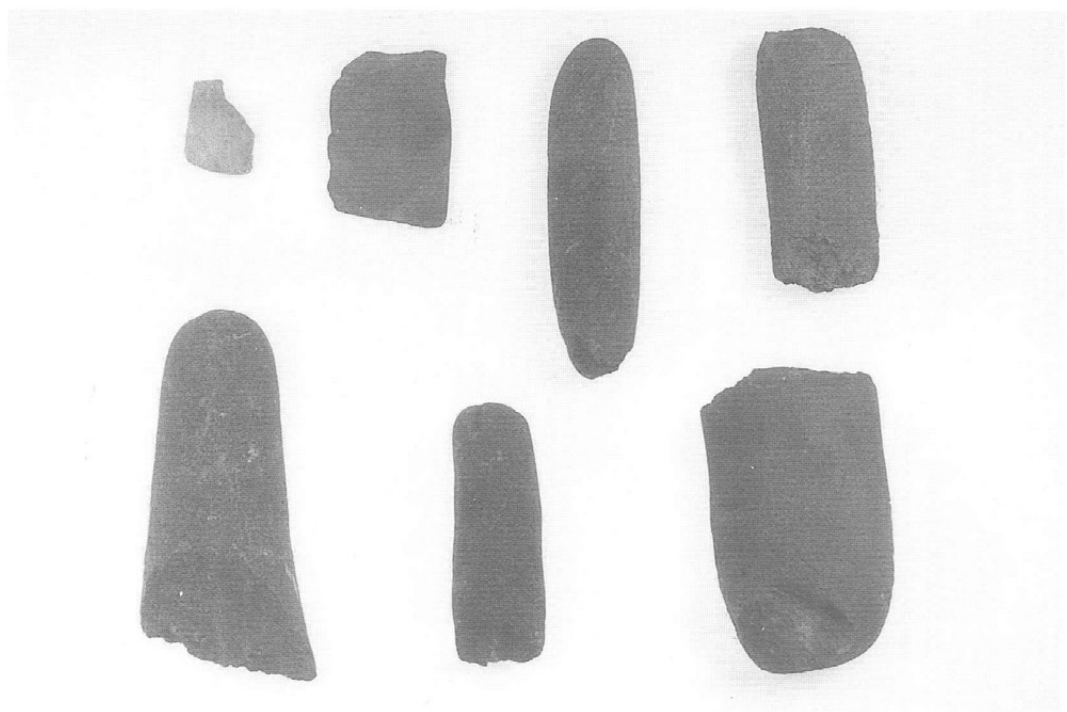
遺構外出土遺物



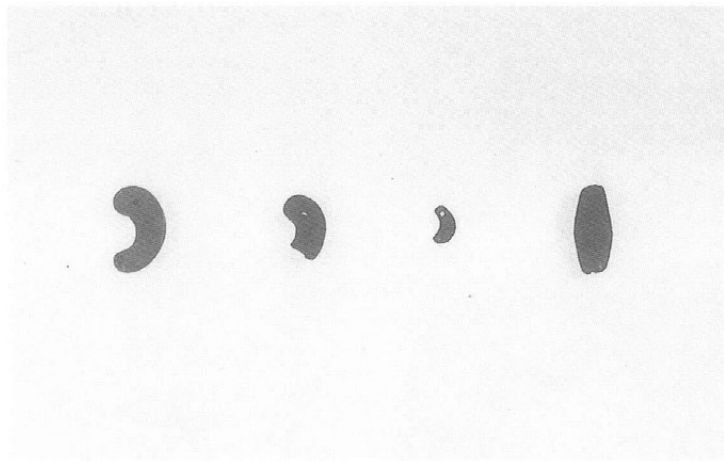
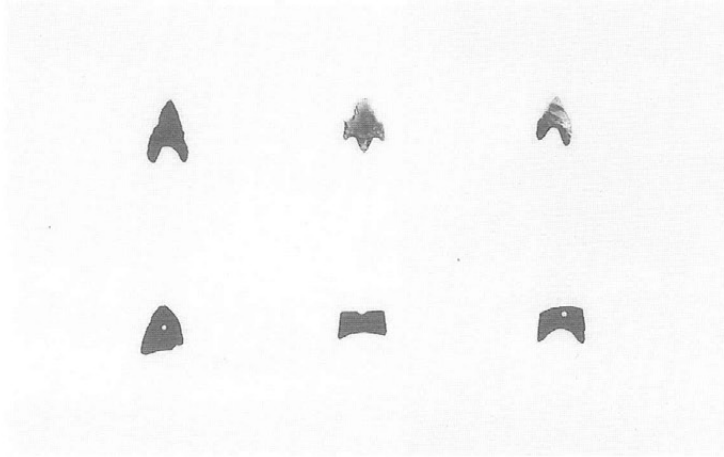
遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

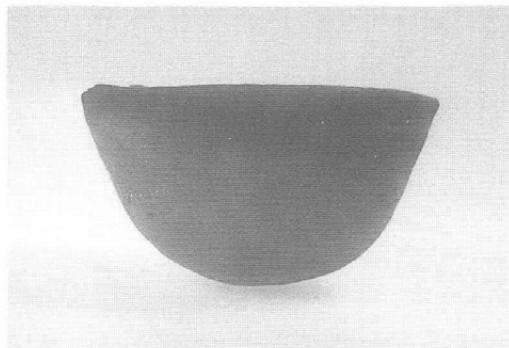


遺構外出土遺物

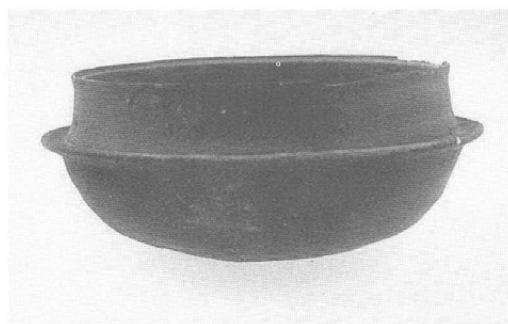
图版40



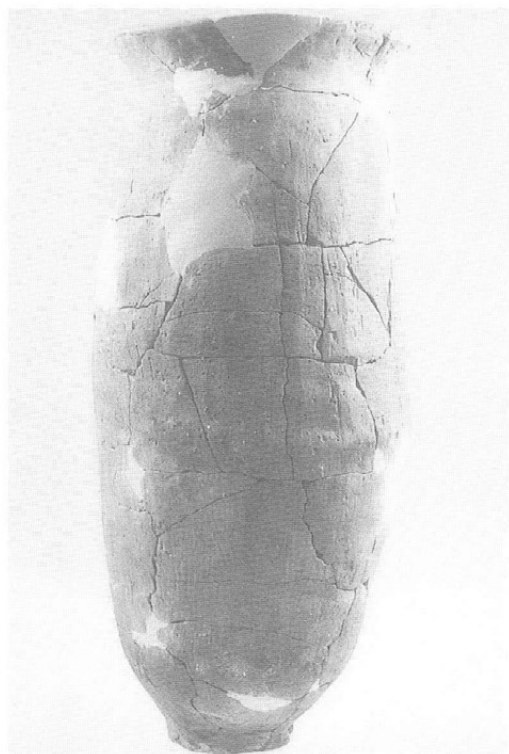
260号住居址



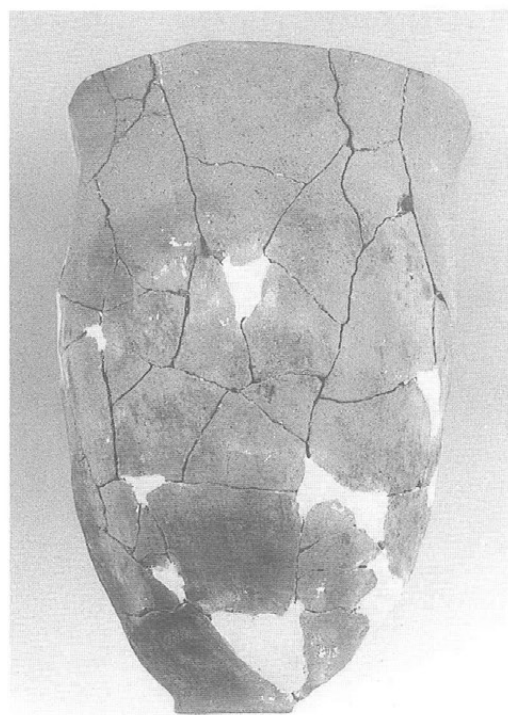
260号住居址



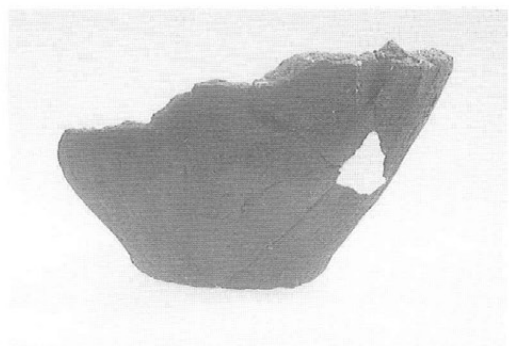
260号住居址



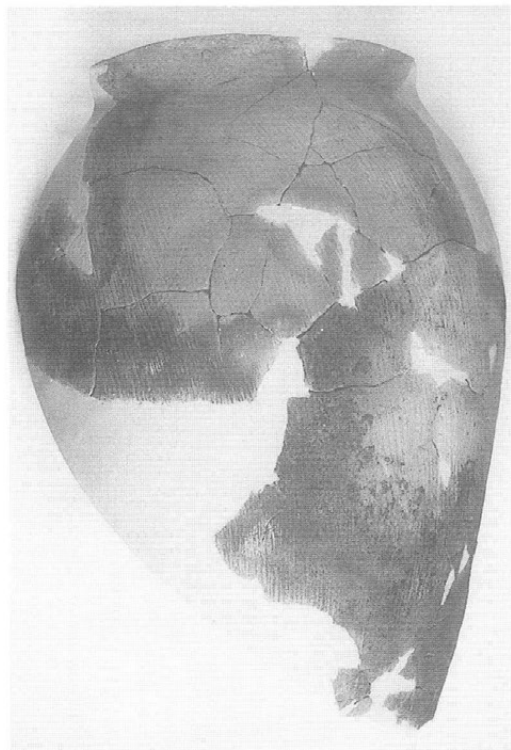
257号住居址



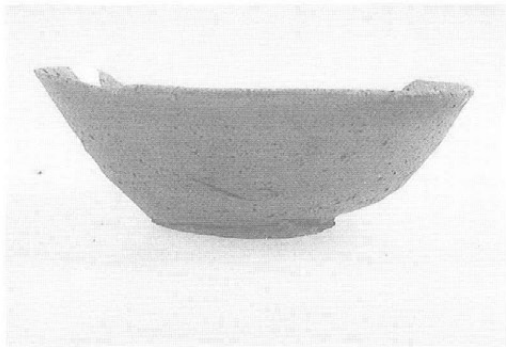
257号住居址



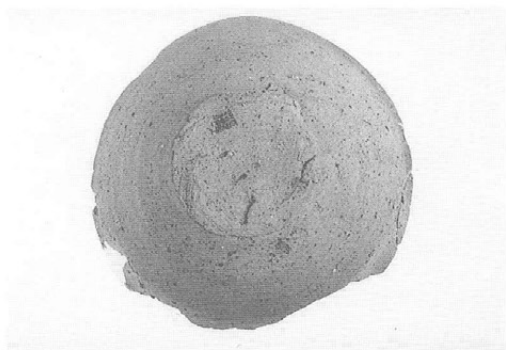
257号住居址



259号住居址



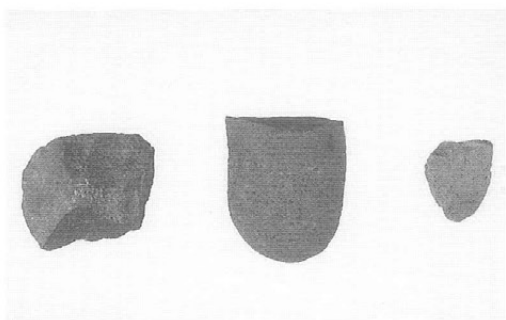
259号住居址



259号住居址



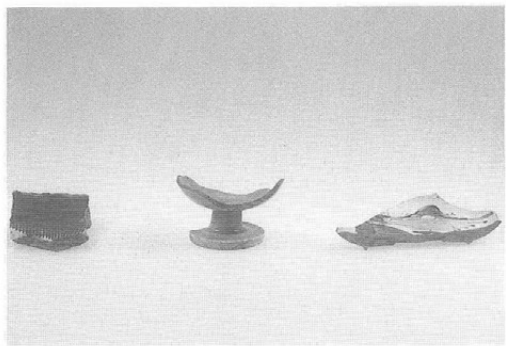
253号住居址



254号住居址

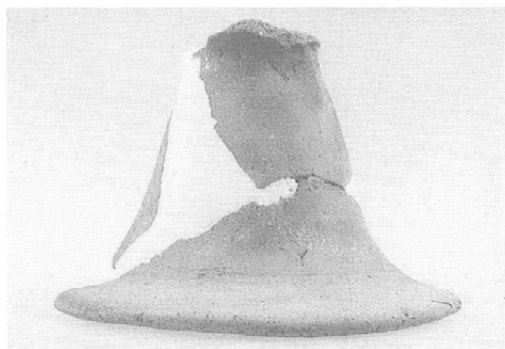


255号住居址

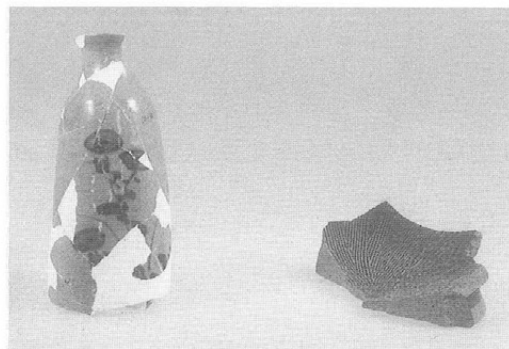


255号住居址

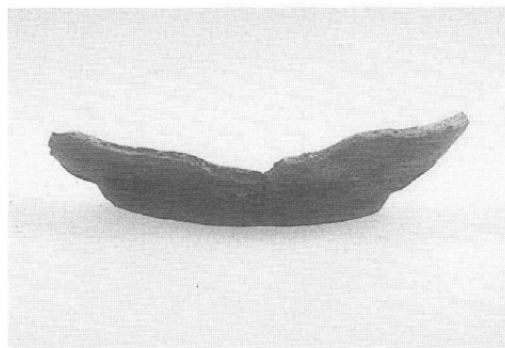
図版42



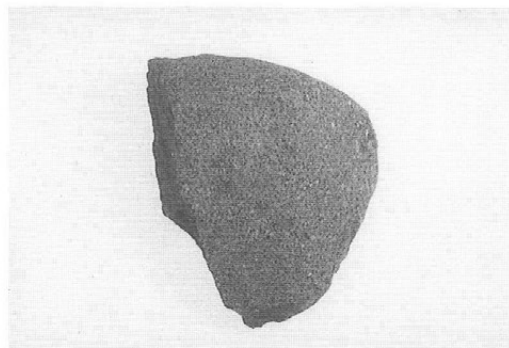
土坑66



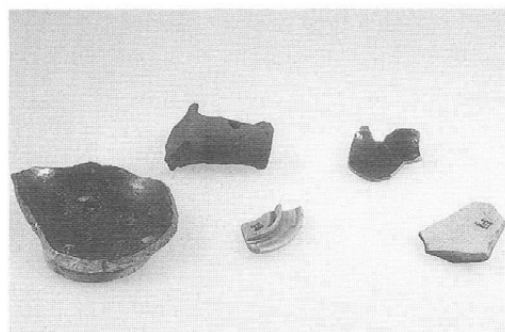
土坑68



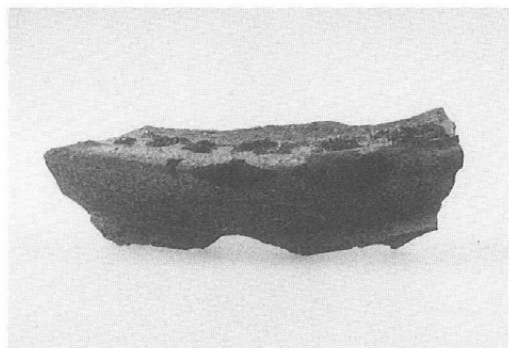
土坑69



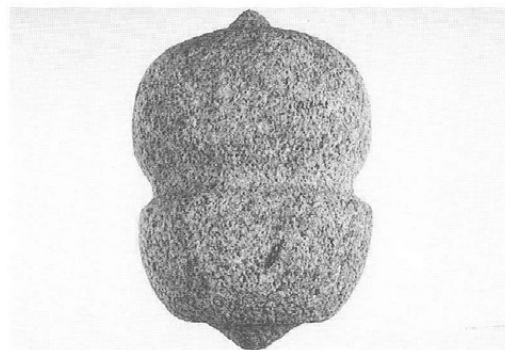
小壻穴21



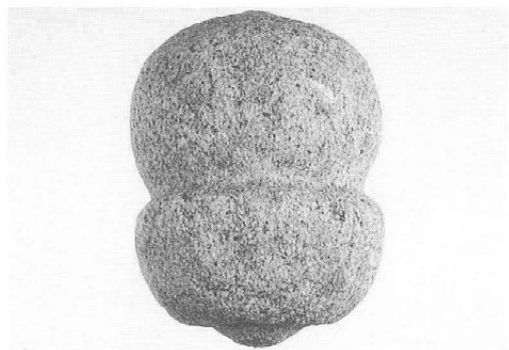
溝状址8



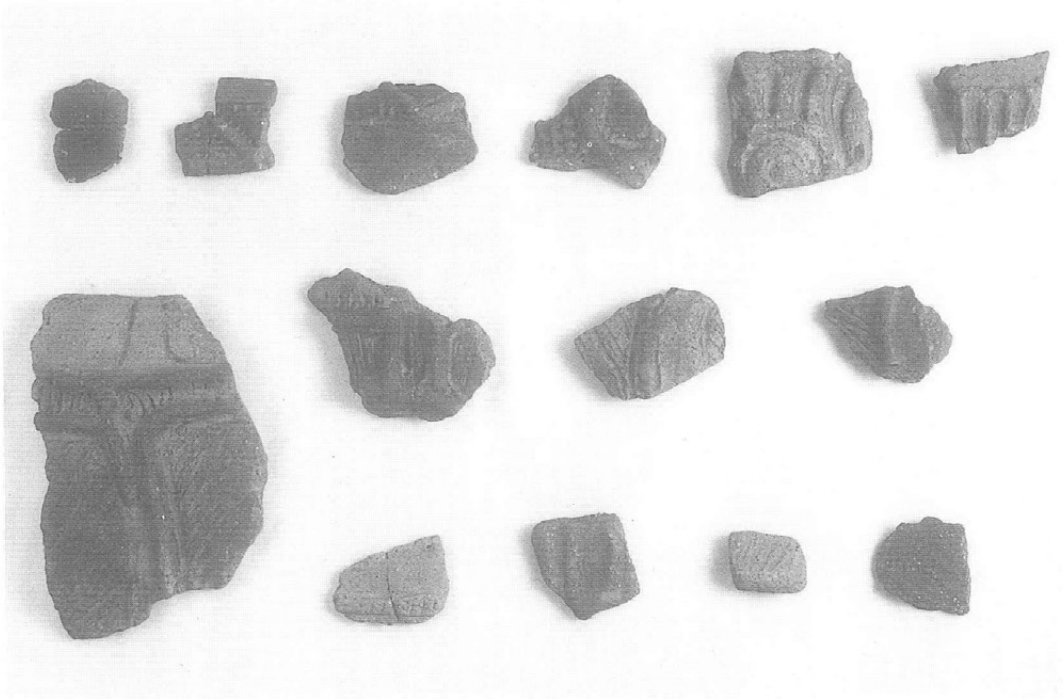
Aトレンチ



Aトレンチ



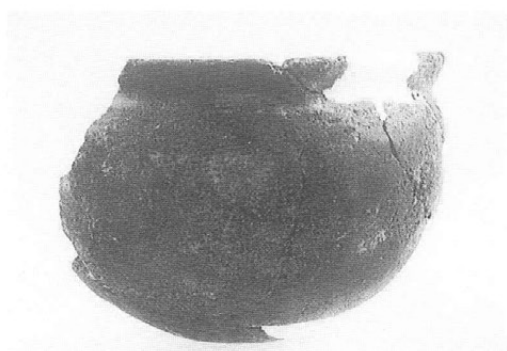
Aトレンチ



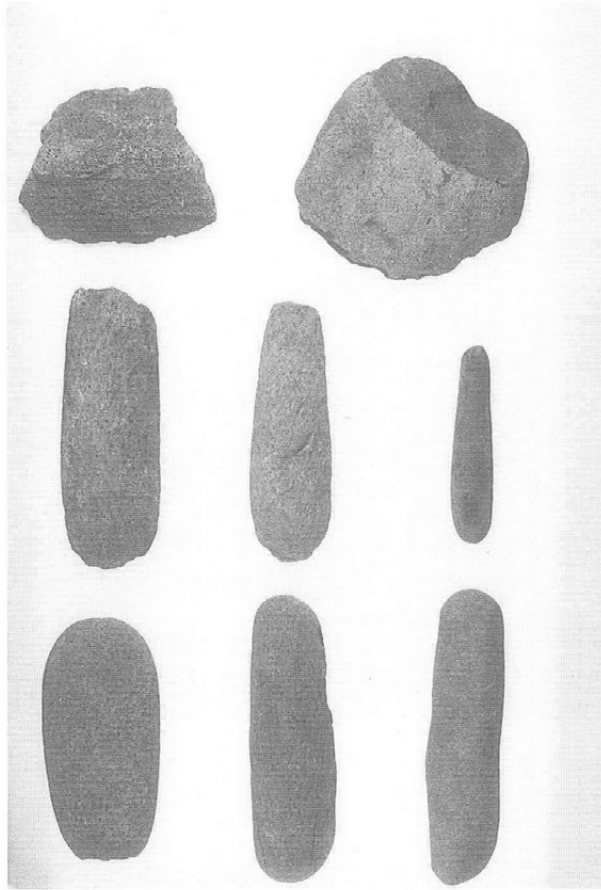
遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



重機作業風景



重機作業風景



調査風景



調査風景



調査風景

図版48



重機作業風景



調査風景



調査風景

恒川遺跡

(田中・倉垣外地籍)

店舗・住宅建設に先立つ
埋蔵文化財緊急調査報告書

平成3年3月30日 印刷

平成3年3月30日 発行

編集 長野県飯田市大久保町2534番地

発行 飯田市教育委員会

印刷 長野県下伊那郡上郷町黒田786番地

杉本印刷株式会社

